同志社歴史資料館調査研究報告第６集

岩倉忠在地遺跡

同志社小学校建設に伴う発掘調査報告書

２００６

同志社大学歴史資料館

序

学校法人同志社は、創立者新島襄の願いであった、幼稚園から大学までの一貫した教育をめざし、2006年に同志社小学校を設立しました。小学校は岩倉校地に建設する予定でしたが、校舎建設に先立って予定地を文化財調査したところ、古墳時代初頭の竪穴住居跡が見つかりました。岩倉校地北側にあった岩倉忠在地遺跡の集落範囲が、予定地にまで広がっていることがわかったのです。

歴史資料館では、従前より校内遺跡の調査に関わってまいりましたが、小学校予定地が遺跡内を避けることが難しい状況を受けて、本格的な発掘調査を行いました。結果として、複数の竪穴住居や柱穴群がみつかり、岩倉盆地で初めて古代以前の集落跡の内容を明らかにする調査となったのです。また、墓と思われる遺構も多数見つかりました。3世紀の人々の日々の生活や、近親者の他界に直面した様子を知る上で貴重な成果が得られました。

同志社大学としては、このような貴重な遺構の保存にも可能な限りの努力を行い、校舎の基礎工法の一部を変更しました。また、焼失住居の床面を剥ぎ取って復元し、小学校校舎床下に遺構の覗き込み展示施設を作りました。そこで学ぶ小学生の教材として利用することはもとより、多くの方に見学いただけることを願っています。

また、調査中行った現地説明会には地元住民を中心に、非常に多くの見学者のご参加を頂き、近隣住民の地域の文化・歴史への関心の高さを目の当たりとすることになりました。大学が、地域に対して教育だけでなく文化・学術上の貢献ができることを感じました。

社会貢献の基礎として、学術的な調査研究成果を公表することは、教育・研究機関の重要な責務だと考えております。そのため、遺構検出データのとりまとめや遺物整理作業を行った成果として本書を刊行いたしました。同志社大学歴史資料館では、このような貴重な文化遺産を調査し、教育や地域社会に還元する努力を続けていく所存です。今後とも当館の活動にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2006年9月

同志社大学歴史資料館
館長　工藤和男

例　言

1．本書は、同志社小学校建設に先立つ発掘調査に関する報告書である。
2．調査地点は、京都市左京区岩倉大鷺町89である。
3．調査期間は、試掘（１次）調査が2004年９月４日～22日、本調査（２次）が2004年12月13日～2005年２月22日であった。
4．この発掘調査は、同志社大学学長の依頼によって、本学歴史資料館が行い、調査にかかわる掘削・記録作業については、本学施設課から(株)アジア航測に業務委託を行った。現地では、歴史資料館職員とともに、その指示のもとに同社が作業して調査を行った。
5．発掘調査の必要性や、本学としての方針などの協議は、「大学会館・新町校地整備に関する発掘調査委員会」によって行われた。
6．現地調査の統括は、歴史資料館教授辰巳和弘・助教授鋤柄俊夫（現文化情報学部）の助言のもと専任講師若林邦彦が担当した。また、文学部松藤和人教授からも、調査に関わる技術指導を受けた。事務関連・各種調整業務に関しては、同館事務長渡辺孝義・係長堀川眞子・嘱託職員松本裕世が担当した。
7．報告書作成作業は、2005年度に本学京田辺キャンパスに所在する歴史資料館において行った。若林の指導のもと、学生諸氏・非常勤職員が遺物整理を行った。また、本館職員と調査・整理作業に参加した学生が共同で執筆にあたった。執筆担当は、目次に記している。また、これに関わる事務関連・各種調整業務は、同館事務長久山喜久雄・係長堀川眞子・嘱託職員浦壁万理子が担当した。
8．出土土器などの胎土分析については、(株)パリノサーヴェイに分析を委託するとともに、本学文化情報学部の高林弘実実習助手（現東京文化財研究所客員研究員）とも共同研究を行った。加えて、出土炭化材の分析には橿原考古学研究所の福田さよ子氏、炭化物の放射性炭素年代測定には国立歴史民俗博物館の小林謙一助手、地質学的分析には本学理工学研究所の中川要之助助教授に協力をいただいた。分析成果については、本書に掲載している。
9．本調査に関わる記録類・遺構図・遺物などすべての情報・資料は、歴史資料館において保管・管理している。
10. 現地調査と報告書作成作業に際して、以下の方々からご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。（五十音順・敬称略）

池田保信（天理教埋蔵文化財調査団）・伊藤淳史（京都大学）・小椋純一（京都精華大学）・梶川敏夫（京都市文化財保護課）・北野俊明（堺市教育委員会）・篠宮正（兵庫県教育委員会）・杉山拓己（京都大学大学院）・田崎博之（愛媛大学）・田中元浩（立命館大学大学院）・富井真（京都大学）・中村治（大阪府立大学）・信里芳紀（香川県埋蔵文化財センター）・濱田延充（寝屋川市教育委員会）・肥後俊幸（京都府教育委員会）・福島孝行（京都府教育委員会）・藤井整（京都府教育委員会）・別所秀高（東大阪市文化財協会）・森岡秀人（芦屋市教育委員会）

11. 現地調査および2005年度に行った報告書作成作業に参加した学生・非常勤職員は以下のとおりである。（五十音順・敬称略）

池田公徳・井上祐子・上峯篤史・小野原彩香・小森牧人・佐藤純一・澤田佳那・清水邦彦・鈴木康高・田口信子・谷真由美・谷本里美・反田美樹・中屋啓太・沼下友恵・町田有希・松田度・松山理恵・三阪一徳・三森文絵・宮城一木・和田さやか

第１章　調査にいたる経緯と経過

今回の調査は、同志社小学校建設に伴い行われた。同小学校が岩倉校地の同志社高校北グラウンドに建設される計画が決定されたのは2004年度であった。

この地点に北接する京都市の公園領域では、そこがまだ同志社大学の校地であった1970年代後半に、施設立替などに伴って発掘調査が行われ、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭のものと考えられる土器や縄文土器の破片などが出土していた。また、当地点から叡山電鉄岩倉駅周辺にかけて地点で、同様に縄文土器や弥生土器片が出土することが、京都市教育委員会によって確かめられていた。そこで、京都市教育委員会は京都市公園領域から岩倉駅を含む範囲を岩倉忠在地遺跡という名の周知の遺跡として登録していた。

このような状態に呼応して、行政的な周知遺跡の範囲外の地点ではあったが、同志社高校理科館建設に伴って同志社大学校地学術委員会が発掘調査を行い、沼状地形に古墳時代～古代の土器片が少数散布する状況を確認している。このことから、同志社高校敷地内の中心部については岩倉忠在地遺跡の弥生～古墳時代集落などの周辺領域に相当すると考えられていた。しかし、今回の小学校建設予定地は周知遺跡の指定範囲と集落非形成領域の中間に位置しており、場合によっては同遺跡の形成が連続してそこまで展開していた可能性も想定された。加えて、同志社高校から東に50m 程度の地点の同志社大学関連施設の建築に伴う2002年度の発掘調査では、古代の坪境施設と考えられる畦畔状遺構が検出されている。同志社小学校建設予定地では古代における条里関連遺構の残存も予測された。

図１.01　調査区の位置（左は1909年の陸測図）

このような弥生時代～古代にかけての何らかの遺構が残存している可能性のある地点で建設計画が持ち上がったことから、本学の「大学会館・新町校地再編に伴う発掘調査委員会」では、何らかの調査の必要性があると指摘された。これを受けて、本学歴史資料館では建設計画の詳細が決定する前の2004年9月6日～24日に建設予定地の周囲および北グラウンドの代替地として新たに同志社高校グラウンドとして整備される岩倉野球場地点の試掘調査を行った。試掘地点は図1.01に示すように合計8箇所であった。この調査の結果は第4章に詳述するが、いわゆる土壌化の進行した古代以前の遺物包含層つまり生活文化層を確認することはできなかった。しかし、北グラウンド北東地点の試掘区において、地表面から約20cm程度の深さの砂礫層の中から古墳時代初頭の庄内式期と考えられる土器片が出土した。生活層自体は近世以後と考えられる耕作や整地によって削平されているものの、遺構などが残存している可能性は否定できない状態であった。

2004年11月に建設計画の詳細が決定し、2005年2月から施工を行う方針も打ち出された。そこで、歴史資料館では、建設に先立つ12月中旬より校舎建設位置にあたる北グラウンド西半部の発掘調査を開始した。調査に際しては、㈱アジア航測に測量・掘削・図面作成業務を委託し、現地で歴史資料館専任講師若林邦彦の指揮のもとに本学学生を含む同館非常勤職員らとともに調査作業にあたることとなった。当初は遺構の有無自体も不明であったため、校舎部分の外縁および中央に南北・東西方向に十字に幅4m程度の調査区を設けて作業を開始した。機械掘削を行うと、南西部地点で地表下約15cmの深さで方形の竪穴住居の輪郭を確認することができた。形成時期は、出土土器から考えて弥生時代末～古墳時代前期と想定された。また、その他の地点でも調査区内に多数の柱穴痕跡が検出され、当該期の生活遺構群は建設予定領域の全域に及んでいることが判明した。

この状況を受けて、12月下旬に歴史資料館と建設の担当課である本学施設課および同志社小学校準備室は協議を行った。第1に、隣接する北グラウンド東半部に校舎位置を移動させても、そこには同様の遺構群が展開している可能性が高いために遺構破壊や事前の発掘調査が避けられないことは明らかだった。第2に、検出層位が地表面からきわめて浅い地点にあり、遺構も全面に展開していることから、建設設計を変更しても遺構破壊を免れることが不可能なことは明白であった。第3に、同志社小学校建設の代替地はほかにはない状態でもあった。以上3つの理由で、予定された校舎建設地点の全面を発掘調査して考古学的記録を残し、遺構の分布状態によっては可能な限り設計変更を試みて遺構破壊を抑制する方針をとることとなった。

こうして、2005年1月から全面調査が開始された。廃土の移動を敷地内にとどめるしか方法がなかったため、一度に全面を調査することは難しかった。このため、北半部を先に調査し、後で反転して南半部を調査することとした。予想に違わず、校舎予定地の前面にわたって、古墳時代初頭を中心とした時期の竪穴住居・柱孔・土坑・溝や土坑墓群などが検出された。中には、後述するように、焼失住居なども検出され、竪穴住居の上屋構造が類推できる好資料も検出された。このため、1月21日に現地にて、再び学内の発掘調査委員会を開催して遺跡の重要性やできるだけ遺構保存に留意する方針が示された。また、1月下旬からは、南半部の調査を行いさらに竪穴住居群や谷部に多量の土器が廃棄されている状況などが明らかとなった。また、土器作りに関わる作業の痕跡と考えられる、焼成されていない白色粘土塊が多数出土した。そこで、このような状況を一般に周知すべく、2月13日に現地説明会を開催して調査状況の公開を行った。地元住民や考古学関係者など総計約500人に及ぶ多数の参加があった。

その後、遺構の記録作業などを進め、2月22日に現地を撤収して調査を終えた。調査の終盤で、焼失

住居１棟と土坑墓群の一部について、建物設計の変更を行い、遺構破壊を免れた。また、この竪穴住居１に関しては、㈱京都科学に委託して表面の剥ぎ取り作業を行い、小学校床下に遺構復元を行い、床面から覗き込める展示施設を設けることとなった。この復元遺構は、実際に2005年度に施工されて同志社小学校内の展示施設として完成した。

また、2005年度には、京田辺市の同志社大学歴史資料館において遺物整理作業や報告書作成作業を行った。こうした作業を経て本書が完成して刊行にいたることとなった。報告書作成に関しては、若林の指示のもと歴史資料館の非常勤職員や本学学生らが作業を行った。また、上述の白色粘土塊や出土土器の胎土分析については、㈱パリノサーヴェイに分析を委託するとともに、本学文化情報学部の高林弘美実習助手とも共同研究を行った。加えて、出土炭化材の分析には橿原考古学研究所の福田さよ子氏、炭化物の放射性炭素年代測定には国立歴史民俗博物館の小林謙一助手、地質学的分析には本学理工学研究所の中川要之助教授に協力をいただいた。これらの分析成果については、本書に掲載している。

なお、上記の遺跡調査成果に基づいて、京都市教育委員会からは、岩倉忠在地遺跡の範囲を当調査区の範囲にまで広げる方針が示されている。そこで、本書では、発掘調査時には「岩倉忠在地遺跡隣接地」としていたものを「岩倉忠在地遺跡」と名称を変更して報告書を作成した。調査成果が盛り込まれた本書の発行を受けて、京都市・京都府によって協議がなされ、正式に遺跡範囲が南側へ広がるものと思われる。

第 2 章　位置と環境

(1) 調査地の位置と自然環境

今回の調査は、同志社小学校建設に伴って行われた。同志社小学校建設予定地は、京都市左京区大鷺町と忠在地町にまたがる地点に位置している。この地は、平安建都以後1200年以上にもわたって都市でとして継続してきた現在の京都市街地の北方約数 km に相当する。建設地は、市街地のある京都盆地とは低丘陵で隔てられた小盆地である岩倉地域の中央やや東寄りの地点であり、元々同志社高校北グラウンドとして利用されてきた場所である。調査地の真東には比叡山山頂を望むことができる。

調査地は、岩倉川に東接する地点にある。後述するように、遺構群が検出された基盤層にはシルト質の堆積物とともに多量の礫が含まれていた。これは、現在の岩倉川の前身となる流路帯の流水作用によって北方の丘陵部の土砂が再堆積して形成された層と考えられる。堆積した土砂の粒度には礫・粗粒砂などが多数含まれているため、旧岩倉川の流芯近くの河川内堆積領域とその脇に形成された自然堤防といった環境変異を繰り返していた地点に相当し、縄文時代末以後には旧岩倉川は当調査地の西側のいずれかへと移動したものと思われる。その詳細については、第 7 章の中川要之助氏による分析を参照されたい。つまり、古墳時代以後の当地点は、扇状地下部といった、比較的高燥な環境にあったと考えられる。ただし、調査地の南方約50ｍにある同志社高校理科館地点における1990年の発掘調査では、古墳時代以後の沼地と思しき窪地が検出されている。このことから、当調査区は、高燥な環境に位置するが、その近接領域には旧岩倉川流路帯近くの後背湿地が控えていたと考えるべきであろう。つまり、調査地点そのものは、安定的居住適地であるとともに、隣接して水田などへの利用が可能な湿地を眼前に控えた立地にあったということができる。この環境が、後述する古墳時代初頭を中心とした集落形成の一因となった可能性は高い。

(2) 歴史的環境

岩倉盆地では、古墳時代前期以前の遺跡は、遺物散布地がいくつか知られるだけで、今回のように集落遺跡が調査された例はほとんどない。

この地域では、5 ～ 6 世紀の古墳と古代の窯跡がよく知られている。「夫火竟」銘の神獣鏡や鉄刀・玉類が出土した幡枝古墳などが古墳時代中期に築かれた後、6 世紀には盆地南西部の丘陵斜面に群集墳が築かれている。6 世紀後半に形成されたといわれる本山古墳群はその中でも最大規模のもので、40基を越える円墳が築かれ、横穴式石室が確認されている本山神明古墳は有名である。また、松ヶ崎丘陵の東側に、6 世紀中ごろには西山古墳群が築かれていたと考えられている。

飛鳥時代には深泥ヶ池瓦窯跡・岩倉元稲荷窯跡・木野墓窯跡などで瓦・須恵器が生産されて京都盆地の古代寺院に供給されていた。奈良時代にも木野地区に数多くの須恵器窯がつくられて窯業生産地域として発達していた。平安時代造営以後は、栗栖野瓦窯などをはじめとする多くの窯跡があって、瓦・陶器類など多様な焼き物が平安京へと供給されていたことがわかっている。

このように、岩倉地域は、京都盆地の古墳時代有力氏族の墓域として機能していた。それが、古代以後に窯業生産拠点という性格を強め、平安京が造営されるとその生産拠点として益々窯業生産地としての重要性が高まったものと考えられる。

一方で、先述のように、集落遺跡の状況は各時代を通じて判然としなかった。今回の調査では、古墳時代初頭の集落遺跡を確認しており、岩倉盆地における人的活動を初めて明確に示したことになる。ま

た後述するように、当遺跡の範囲は、今回の調査地点にとどまらず北方約500ｍにある叡山電車岩倉駅付近まで想定されている。出土している土器は、弥生時代後期～古墳時代前期のものである。この範囲に弥生時代後期～古墳時代前期の集落が継続的に営まれていたことになると、この地が岩倉盆地の拠点的生活領域の一つであったこととも考えられる。

ただし、先述の古墳群の形成などは古墳時代後期を中心とした現象であり、今回検出した遺構群の主要な時期からは外れている。このため、この地が古代以前に継続的な集落形成地であったか否かは、いまだに判然としない。ただ、近接する大鷺町内での2001年の発掘調査では、古代の条里地割の相当する施設が検出されており、当地点とその近隣地域に古代の農業開発が行われていたことは確実である。

また、明治期における地形図には、その段階で現在の地割とまったく同じ水田区画が営まれていたことが明らかである。その時代には、当調査地点は水田として利用されていた。この状況がどの時期にまで遡るかについては、不明である。おそらく近世後半には確立していたと考えるのが自然であろう。

図２.01　岩倉盆地周辺の遺跡（『京都市遺跡地図台帳』に加筆）

第 3 章　発掘調査の方法

【掘削作業】

今回の調査は、同志社小学校校舎部分について行われた。第1章に述べたように、調査区は校舎部分の全面にわたった。約4800km² 程度の範囲にわたったが、地表面から約10〜20cm の部分については、機械掘削によって堆積土を除去した。遺構面は、近世以後の耕作やグランド整備によってすでに削平されており、いわゆる遺物包含層は確認できない状態であった。そのため、機械掘削後の掘削面からすでに遺構が確認できる状態であった。機会掘削後、人力で遺構面精査を行うと、住居・柱穴・土坑・溝などが多数検出され、遺構埋土を人力で掘削することとなった。廃土置場が広く確保できなかったため、南北に調査区を分割し、反転して掘削作業・記録作業を行った。

【測量基準・地区割】

調査に際しては、国土座標を用いた地区割り設定を行った。国土座標系については、2002年度以後、日本測地系から世界測地系へと移行が行われている。今回の調査は新基準である世界座標系に即してすべての測量作業を行っている。今回の調査地は、この座標体系上においては、第Ⅵ座標系上に位置している。また、水準については、東京湾平均海水準面を基準とする標高を採用している。

この座標系に基づけば、当調査区は、X=-103300〜-103380m、Y=-19450〜-19540m の範囲内に相当する。そこで、X=-103300m•-19540m を基点とした10m メッシュの地区割名称を設定して、調査を行った。同点を基準に、西側へ順に10m ごとに A・B・C・D 〜 I の 9 区画、南側へ順に 1・2・3・4 〜 8 の 8 区画の名称を与えた。各10m 区画については、その組み合わせで A-1区・B-2区という呼称を与えた。

表5.01にみえる各遺構リストにおける所在地情報は、この区画に基づいた表現である。また、調査に際して遺物取り上げを行った際には、各遺物ラベルにこの地区割り名称を記入し、遺物取上げ単位で行った出土遺物登録作業にもこの地区割り名称を用いた。したがって、本書に掲載されていない出土遺物についても、その資料に貼付された遺物ラベルや、収納データはこの地区割りを利用した記載がなされ、最低10m 区画単位での出土位置情報が復元可能となっている。

【記録作業】

遺構情報の記録は、実測図と写真の2種類の方法を用いた。実測図については、一部を座標軸などに沿った基準線から手実測する手法をとったが、大半は㈱アジア航測による写真測量によって作成した。個別遺構の平・断面図に関しては最低1/10縮尺での実測精度を確保するようにし、遺構全体の平面図作成については、1/50縮尺の精度を保つようにした。

また、これとは別に、作業風景や遺構・遺物の検出状況、土層断面の情報などについては、35　白黒およびカラーリバーサルフィルム、ブローニー版の白黒およびカラーリバーサルフィルムによって撮影を行い。部分的にはデジタルカメラによる記録撮影も行った。

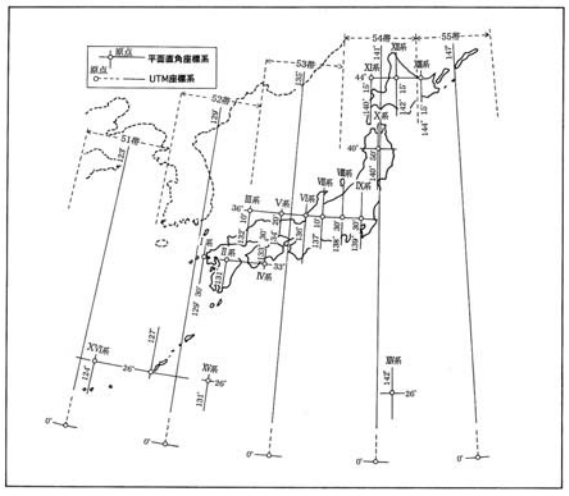


図 3.01　国土座標系

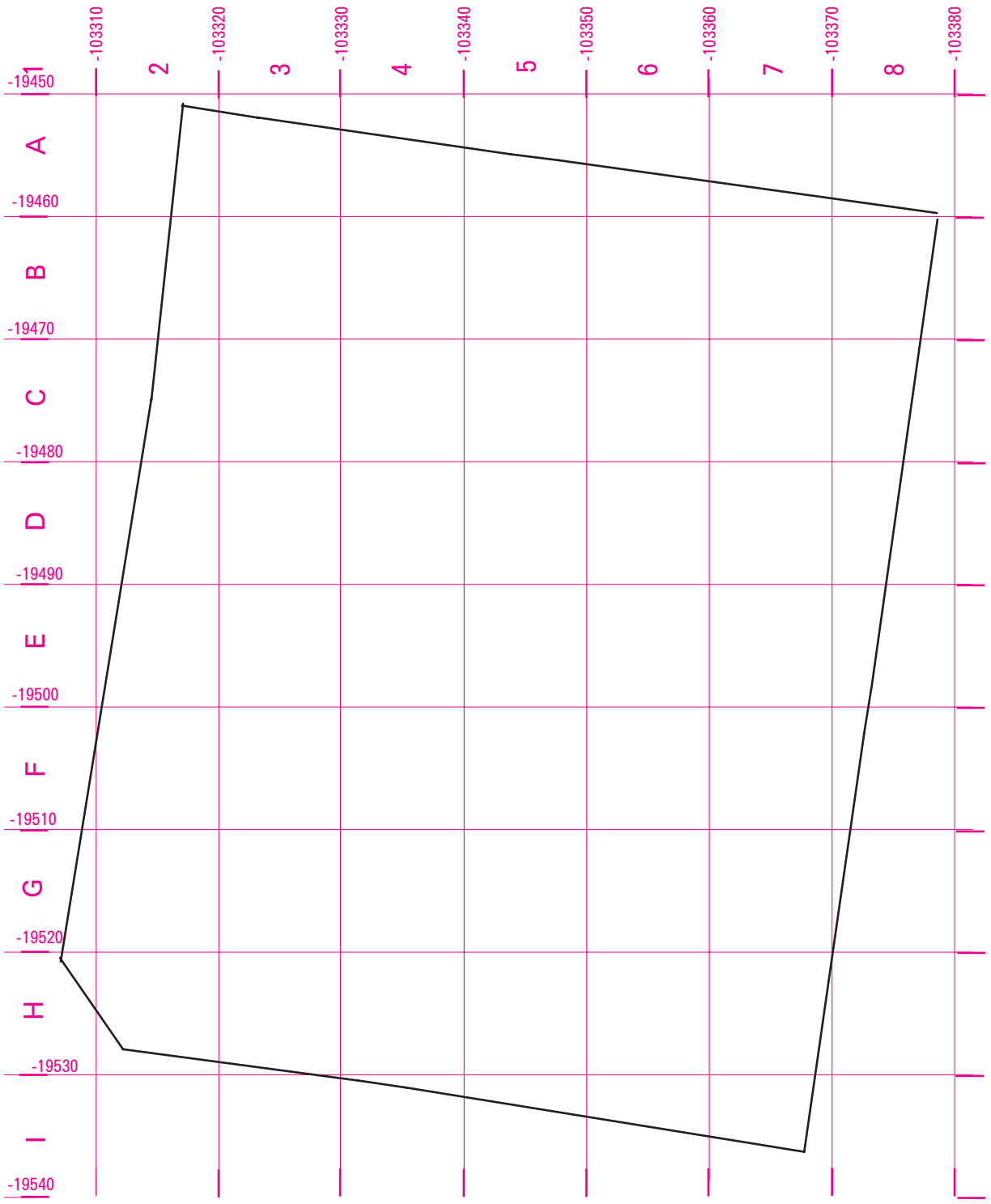


図 3.02　調査区の地区割

第４章　試掘の概要と基本層序

今回の調査は、同志社小学校建設に伴い行われた。先述のように、2004年９月に、本調査に先立って試掘調査を行った。小学校予定地および、同志社高校の新たなグラウンドとなる地点がその対象地である。その成果の概要について説明し、本調査での深堀部の層序を概説することによって、本遺跡の基本層序を説明する。

(1) 小学校予定地における試掘調査の成果

同志社大学歴史資料館では、2006年度開校予定の同志社小学校（仮称）建設予定に先立って、2004年９月６日～14日の期間に同志社高校の北グラウンドの試掘調査を行った。

この地点は、弥生時代後期・古墳時代初頭の土器が出土した「忠在地遺跡」に隣接している。さらに、同志社高校理科館建設時（1991年）の発掘調査時にも、古墳時代初頭の落ち込みや遺物、さらに古墳時代後期～古代の遺物が少量ながら検出された。また、同志社高校ができる以前の地図にみえる田畑の区画をみると、中世にまでさかのぼる条里地割が存在した可能性がある。実際に、条理地割を思しきラインに沿って現在でもグラウンドの北辺・東辺に直線的な土盛（土塁？）が残っている。近接する大成寮発掘調査時に古代の条里地割の痕跡を検出していることから、条里関連遺構に関しても小学校建設予定地に先立ち調査が必要と考えられた。

そこで、予定されている建設工事に先立って、１×５ｍ程度の規模のいくつか小さな発掘調査区を設けて調査を行うことになった。現在、同グラウンドは放課後のクラブ活動の使用中であり、小学校校舎建設地点そのものを調査することはできなかったが、同敷地の周縁を調査することにより状況把握をめざすこととした。調査区の概略位置はすでに先章の図１.01に掲載している。

①調査区

①調査区は、岩倉北グラウンドの南辺中央地点に位置する。表土から20センチ程度（１～２層）はグラウンド表土・整地層で、その直下から礫を多く含む層（３層）が確認された。その層の中からは摩滅した土師器や須恵器の破片が少量出土した。ただ、礫・砂が攪拌された状態で形成されているので、近・現代に周囲から持ち運ばれた整地層だった可能性もある。

さらに、下部には耕作土とも考えられる粘土層（４～６層）が30～40cm程度堆積している状況が確認できた。その下には、今度は確実な河川堆積と考えられる礫・砂層（８層）が確認できた。８層や、その上下層からは遺物は検出されず。当地点の基盤層と考えられる自然堆積層の形成時期については不詳である。

②調査区

当調査区は、グラウンドの南東角にあたる。地表面から20cmほどの深さまでは、グラウンドの表土（１層）、その下に暗灰色系のシルト～極細粒砂層（２層）が確認された。その直下には５～10cm大の礫を多量に含んだ層（３層）が確認された。２層からは、江戸時代以後のものと考えられる磁器の破片が出土している。２層は江戸時代の耕作土と考えられ、３層は流水作用で形成された河道内充填堆積物層と考えられるが、全く遺物は出土しなかった。３層は硬くしまった状態であり、形成時期は不詳であるが古く遡る可能性もある。

また、条里もしくは耕作区画に関係する溝・畦畔などは検出できなかった。

③調査区

当調査区は、②調査区の30m 程度北側に位置する。厚さ10センチ程度のグラウンド整地土（1層）を除去すると、褐色のシルト～極細粒砂層（ 2 層）があり、その下に②調査区の 3 層に類似した礫を多量に含んだ層（ 3 層）が確認された。 2 層には全く遺物が含まれなかったが、 3 層の凹み部に堆積・形成されていた。凹みは溝状なのか土坑状なのか判別がつかないが、主に東西方向に伸びるようにも見えたが、小調査区の端部で検出されたため形状は判然としない。2・3 層共に遺物は出土せず、形成時期は不詳である。条里地割に沿った溝の可能性もある。また、 3 層はその上部40cm 程度はしまりが悪く、流水堆積の互層単位も判然としない。上部40cm 程度の範囲については耕作土・再堆積土・整地層などの可能性もある。

④調査区

当調査区は、北グランドの中央北辺地点に相当する。表土から40cm くらいの深さまでは耕作土（ 1 ～ 2 層）と考えられるが、その直下から深さ1.5mまで礫と砂の互層（ 3 層）となっていた。これも、②③⑦調査区で確認された流水堆積層と考えられるが、③調査区の 3 層同様上部50cm 程度はしまりが悪く崩れやすい状態であった。きわめて新しい時期の堆積物の可能性がある。これらの礫層は、すぐ西側を流れる岩倉川の前身となる流路帯の痕跡と考えられる。遺物は、上部の耕土層から少量の土師器（古墳時代？）が出土した。古墳時代以前に、礫・砂層（ 3 層）が形成されていた可能性はあるが、2 層出土土器も二次的堆積による可能性がある。

⑤調査区

当調査区は、グラウンドの南西端という最も岩倉川に近接した地点に相当するが、予想通り、近世に機能したと推測される表土直下の耕作土層（ 4 層）を切る状態で河道の肩部を検出した。流水堆積したと考えられる礫・砂（ 1・2 層）で充填された河道は、現在の流路から 5 m程度東にずれた場所にやや異なる方向にのびる形状で検出された。現在の岩倉川は同志社高校の西側に南北方向に直線的に流れており、現在とおなじ川の形状が大正時代の地図にある。今回検出された河道痕跡は、このことから、近代に岩倉川の堤防が整備され現在のような形態に固定される直前の河道の一部が検出されたと考えられる。

上述のように河道の基盤となる粘土‐シルト層（ 4・5 層）は耕作土と考えられるが、地表下約120cm には硬くしまった砂層（ 6 層）が検出された。当地点からは、一切遺物しておらず各層位の時期決定は難しい。

⑥調査区

当調査区は、北グラウンドの南西隅の地点に相当する。

厚さ10センチ程度のグラウンド表土・整地土（ 1・2 層）の下には黒褐色の粘質土層（ 3 層）があり、ここには炭片や江戸時代の陶磁器片が多数含まれていた。今回の調査で初めて生活層とも思える土器包含層が確認できたことになる。

その下には耕土と考えられるシルト－粘土層と礫を多数含む層が互層（ 4 ～ 6 層）となっていて、最下層には流水作用によって形成されたと考えられる粗粒砂～中粒砂層（ 7 層）が確認された。近世の生活層が形成される以前には、この地点は水田もしくは畑だったと考えられる。

⑦調査区

当調査区は、グラウンドの北東端に相当する。③調査区と基本層序は類似するが、表土から30～40 程度下の礫層（ 3 層）中から、古墳時代初頭の土器片が出土した。出土したのは甕の破片で、球胴化頸

著で表面粗いタタキメの見える個体で、庄内式期の所産と考えられる。おそらく、３層は古墳時代初頭に形成されたか、もしくは周囲から流れ込んで再堆積したかのいずれかである。

ただし、当調査区では、古墳時代の生活層は確認できなかった。近接地点に古墳時代初頭の生活層からの流れ込みの可能性が高い。

(2) 岩倉野球場の試掘成果

同志社大学が保有していた岩倉地区の野球場に関しては、同志社大学付属小学校建設による、同志社高校期グランドの代替地として、グランド整備工事が行われることとなった。この敷地のうち、北辺部については、最大と表面から50cm 程度の削平を行い、現在の野球場敷地部分に関しては北辺部削平土を盛って整地して周囲に浅い排水溝をめぐらす造成工事が行われる予定である。その計画をうけて歴史資料館が北辺部の試掘を行った結果、この領域は地表から80cm 程度の深度までは、近・現代の盛土造成が及んでいることが判明した。造成工事では、想定される条里遺構が破壊される可能性はないことが判明したが、施設完成後は半永久的に調査が不可能となることも予想されたため、一部について条里遺構の探索調査を行うこととした。調査地点は図１.01のとおりである。

⑧調査区

この調査区の西端では大正期の地図にうかがえる状況から、当初南北方向の畦畔検出が予測された。しかし、該当箇所は近・現代の撹乱によって破壊されていた。そこで大正期の畦畔よりもやや東よりの地点を精査すると、近代に形成された沼状環境下の植物遺体集積層の直下から、東西方向に伸びる畦畔が検出された。畦畔耕土やその直上層からは古代の所産と思しき須恵器片が出土した。ただし、出土土器片の摩滅が顕著なことなどから考えて、この畦畔遺構の形成時期を古代にまで遡らせるには確証が乏しい。ただ、大正期の地図には掲載されていない区画なので、近世以前の耕地区画を反映している可能性は高い。近～中世・古代いずれに帰属するかが問題の遺構である。

写真４.01　③層上面東西方向畦畔

写真４.02　東壁土層断面

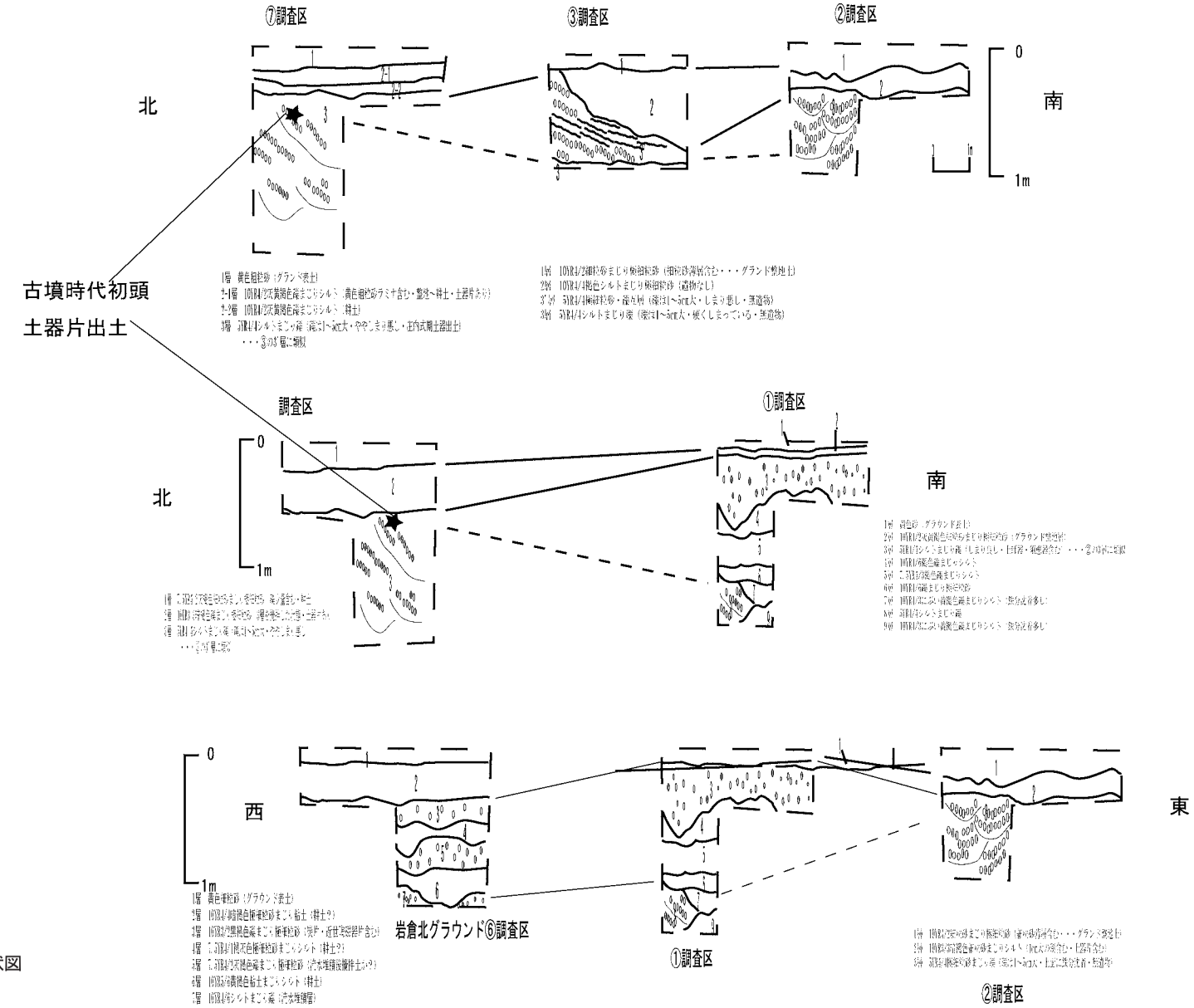


図４.01　試掘調査区土層柱状図

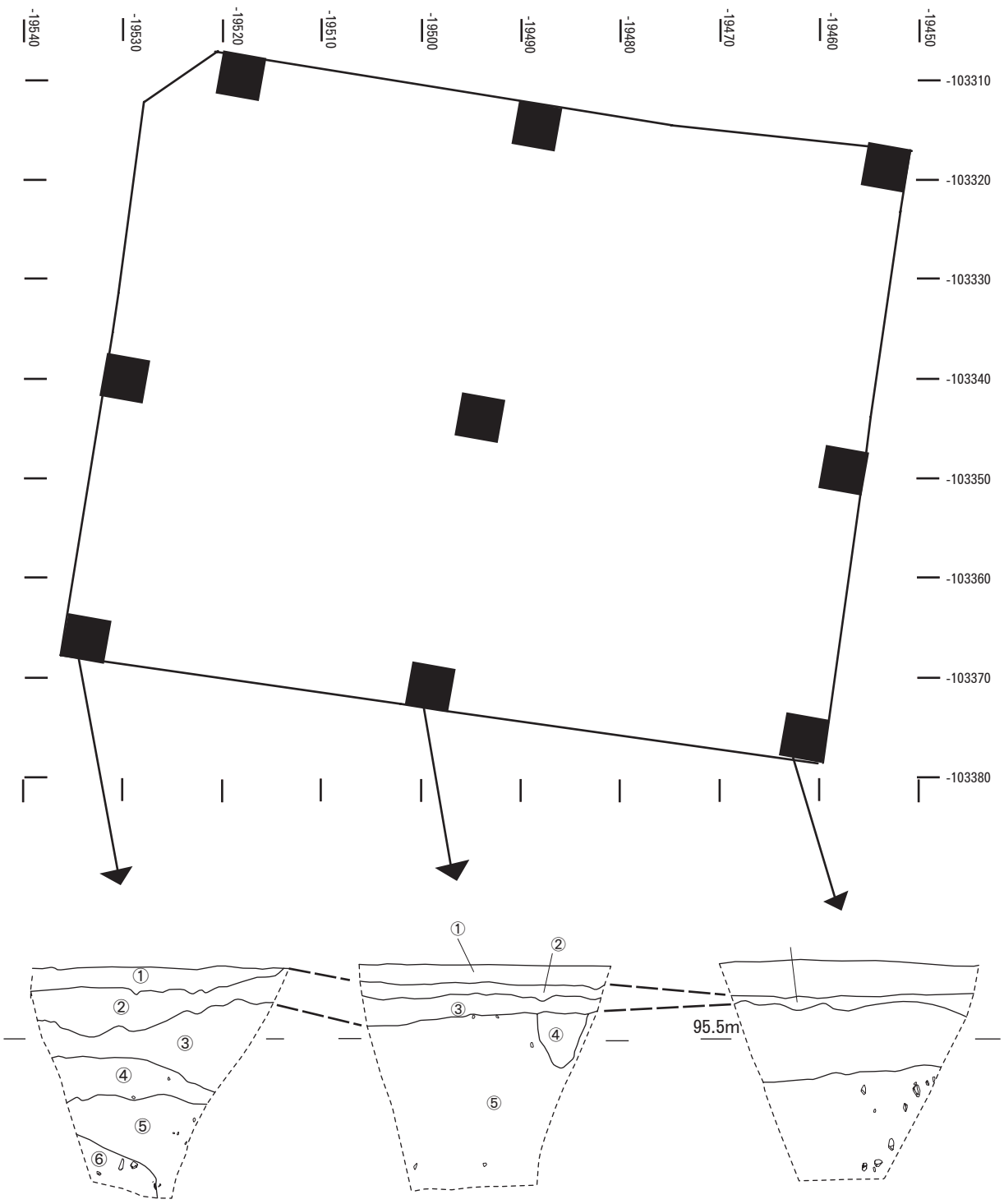
(3) 本調査区深掘部での層序と全体の遺構形成

同志社小学校校舎部にあたる本調査区では、当初東西南北各辺の端と中央に合計 8 箇所、さらに調査区の中央に 1 箇所の合計 9 箇所に深掘部を設けて下層の堆積状況を確認した。各深掘部の規模は 5 × 5 ×1.5mである。その配置は図 4 .02に示している。概ね、試掘調査の成果と同じような状態で、浅いところでは、地表下15cm 程度以下はすべて礫層となる状態であった。しかし、地点によっては、様相が異なっている。礫層の上部のシルト質層の厚さが50cm 程度ある地点や、礫層中に部分的にシルト・粘土質層が形成されている地点があった。代表的な地点による堆積状況の差を示すために、図 4 .03に本調査区南辺の東西方向の土層柱状図を示した。

これをみると、礫層の上面は著しかったことがわかる。また、礫層上面が凹んでいると考えられる地点には、黄褐色シルト層がその上面に堆積している。試掘部の土層断面状況からも確認できたが、これら礫層は河川内堆積物の可能性が高い。また、本調査区北東隅の深掘部の礫層上部からは、図 6 .08に掲載した縄文後期時が出土している。このことから、礫層は縄文時代に激しい河川流水作用によって形成され、礫層堆積後の凹凸の顕著な面に弱い流水作用などによってシルト層が形成されたと考えるべきであろう。これらの堆積作用は、現在の岩倉川の流路が固定する以前の流路帯内部に起こった現象と類推される。

今回この 2 つの土質があらわれる平坦な面が、地表下約10〜15cm の土層に相当し、そこで後述する遺構群が検出されている。つまり、礫層の堆積後にその凹み部にシルト質層が形成され、後述する古墳時代初頭を中心とした遺構群が形成され、その後近世以後に削平を受けて平坦面が形成されたと考えられる。古墳時代初頭などの遺物包含層はその削平の際に消失したものと考えられる。また、この遺構検出面の上でも、後述する検出された遺構群の多くはこのシルト質層が分布する領域から検出されている。このことから、遺構が掘削しにくい礫層を避けて形成されていたか、礫層部分は削平前に高まり部を形成していて、その上面に形成された遺構が完全に削平されて残存しなかった可能性もある。

また、第 5 章にも述べるように、縄文時代中期末に形成された炉跡が1基だけ検出されている。このことは、この領域に旧岩倉川流路帯による堆積作用の進行していた縄文時代に、川のほとりに一時的に居留地が形成されていたことを示している。流水堆積層の上面に形成されていた複数の遺構のうち、削平を免れた炉跡が残存して、古墳時代初頭遺構群と同一面で検出されたものと考えたい。



① 10YR3/4 暗褐色礫まじり粗粒砂（表土）
② 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂
③ 10YR3/4 暗褐色礫まじり粗粒砂
④ 10YR7/6 明黄褐色極細粒砂
⑤ 10YR3/3 暗褐色礫まじり粗砂

① 10YR3/4 暗褐色粗粒砂（表土）
② 10YR5/8 黄褐色極細粒砂
③ 10YR5/3 にぶい黄褐色礫まじり極細粒砂
④ 10YR5/6 黄褐色極細粒砂
⑤ 10YR3/4 暗褐色礫まじり粗粒砂

① 10YR3/4 暗褐色粗粒砂
② 10YR5/8 黄褐色極細粒砂
③ 10YR5/3 にぶい黄褐色礫まじり極細粒砂
④ 10YR3/4 暗褐色粗粒砂まじり礫

図 4.02　深掘部土層断面

第５章　検出された遺構

(1) 発掘調査区全体の遺構検出状況

発掘調査区のほぼ全面から、遺構が検出された。先章の基本層序の説明で述べたように、遺構検出面は、現地表面から約10～20cm 下ときわめて浅い位置にあった。おそらく、遺跡全体は江戸時代の耕作に伴う削平を受けていたものと考えられる。そのため、遺構の中には10cm 程度の深さしかない検出状態のものが多い。以下、その概略を説明する。

【住居関連の遺構】

直接的に居住の痕跡を示す遺構として竪穴住居が検出されている。古墳時代初頭（３世紀前半）に形成されたと考えられる、方形の竪穴住居８棟が検出された。竪穴住居１・323・317・349が調査区に西半部で、竪穴住居250・251・230・501・367が東半部で検出されている。遺跡全体は耕作に伴う削平を受けていて、柱穴が300を超えて多数検出されているものの竪穴住居の平面構造が残存しているものはわずかしかない。検出された竪穴住居はすべて、深さ約10センチ程度しか残存しておらず、削平され残った床面近くの部分だけがわかる状態であった。調査区北半部では、明確な竪穴住居の形態をとる遺構は検出できなかったものの、柱穴が多数検出されていることから、実際には住居が存在したものの削平により、その平面プランが不明となってしまったと考えられる。これら住居を構成していたと考えられる柱穴群は、調査区の広い範囲から検出されている。そのため、集落の範囲は今回の発掘調査区域の全域にわたり、さらにそれを超えて広がっていたと考えられる。

８つの竪穴住居のうち多くのものでは、中央に小規模な土坑が確認され、その周囲には炭片を多く含む土壌が分布・堆積していた。竪穴住居１・323・317・349・250・501・367については、中央土坑の側壁部の土壌が赤色を呈していた。これは、焼成によって赤化したものと考えられ、これら住居内中央土坑が炉跡であったと考えられる。いずれの住居跡も周壁溝を有するものの、そこから住居外への排水施設が付帯したものはない。周壁溝は排水溝ではなく壁部の土留施設の設置痕跡だったとも考えられる。

【焼失住居の検出】

検出された竪穴住居のうち１棟（竪穴住居１）の内側からは、炭化した建築部材や焼土が多数検出された。おそらく、火災にあったかあるいは廃絶後に焼き払われた竪穴住居と考えられる。炭化材は、住居の中央に向かって放射状に並んだ状態で検出されており、屋根を構成する建築材だったと考えられる。

また、その炭化材と焼土が重なって検出されている部分では、焼土が炭化材の上に貼りついた状態も観察できた。このことから、屋根材の上に粘土が塗りつけられていた「土葺屋根」だった可能性が高い。

【粘土塊が埋置された遺構】

竪穴住居230床面の北東隅からは、白色粘土塊が検出された。おそらく土器・土製品の製作などの目的で住居内に粘土を蓄えていた痕跡と考えられる。粘土は住居床面を数 cm 程度浅く掘りくぼめた中に平たく固めておかれていた。また、床面では、ほかにも粘土の小片が検出されている。このことから、竪穴住居230では土器製作にかかわる作業が行われていたと考えられる。さらにこれに近い調査区東半部では、土坑509・471・落込み490など複数の以降の底面から同様の白色粘土塊が出土している。この竪穴住居230付近では盛んに土器・土製品の製作にかかわる作業が行われていたと推定される。また、竪穴住居323・501では埋土層中から土器片とともに、床面に接さない状態で同様な粘土塊が出土している。これらは粘土片が住居廃棄時にその他の生活残滓とともに廃棄されたものと考えられる。この想定が正し

表5.01検出遺構一覧（1）

遺構種類	遺構番号	地区	短軸長/幅(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)	埋土・備考	形成時期
竪穴住居	1	G-7,H-7	530	600	27	10YR3/3暗褐色礫混じり極細粒砂(焼土、炭化物(材)、土器片多量に含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	5	H-7	180	530	26	10YR4/6褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	6	H-7	200	400	21	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	7	H-7	50	90	18	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	8	H-7	30	440	21	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	10	G-6,H-6	90	260	37	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	12	F-7,G-7	60	570	26	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
谷	16	D-6,C,D,E-7,D,E-8	1470～	2260～	143	2.5Y5/3黄褐色礫混じり極細粒砂(近世？)	弥生時代末・古墳時代初頭
落込み	17	B-8	730～	960～	53	2.5Y5/3黄褐色礫混じり極細粒砂(近世？)	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	19	B-6	200～	500	14	10YR3/4暗褐色細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	20	A-6	60	70	26	10YR3/3暗褐色礫混じり細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	22	A-6	50	330	11	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂(炭化物、焼土含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	23	A-5	150～	150～	20	10YR5/2灰黄褐色礫混じり極細粒	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	24	A-4	150	280	9	10YR3/4暗褐色礫混じり粗粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	25	H-7	50	60	12	10YR4/4褐色粗粒砂混じり極細粒砂(炭化物含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	26	A-7	80～	500	42	2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂層	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	27	C-3	20	20	10	10YR4/3にぶい黄褐色シルト層(炭化物少量含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	28	C-3	70	130	36	10YR4/3にぶい黄褐色礫混じり粗粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	29	C-3	20	20	7	10YR4/3にぶい黄褐色シルト(炭化物少量含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	30	C-3	40	60	28	10YR4/3にぶい黄褐色礫混じり極粗粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	32	C-2,D-2	240	850～	51	10YR4/6褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	33	E-2	200	340	39	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	35	E-2	10	10	11	10YR3/4暗褐色シルト(炭化物少量含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	36	E-2	10	10	11	10YR3/4暗褐色シルト(炭化物少量含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	37	E-2	20	30	16	10YR3/4暗褐色シルト(炭化物少量含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	38	F-2	10	20	12	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	39	F-2	50	50	30	10YR3/4暗褐色シルト(炭化物、土器片含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	42	F-2	110	190	26	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	43	F-2	30	70	16	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	44	F-2	20	20	13	10YR4/6褐色極細粒砂(土器片含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	45	F-2	20	30	11	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	46	F-2	70	120	40	10YR3/4暗褐色極細粒砂(炭化物含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	50	F-4	10	10	6	10YR3/4暗褐色極細粒砂(炭化物含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	51	F-4	20	20	11	10YR5/6褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	52	F-4	20	20	7	10YR5/6褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	54	F-4	80	90	37	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	55	F-4	30	40	10	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	59	E-5	140	180	33	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	60	E-5	40	60	8	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	61	E-5	30	30	9	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	62	E-5	20	20	5	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	63	D-5	20	20	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	67	D-5	10	10	4	10YR3/3暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	68	D-5	20	20	8	10YR3/3暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	69	D-5	20	20	6	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	70	D-5	30	40	13	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	71	D-5	30	30	8	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	72	D-5	160	230	6	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	73	D-5	80	190	6	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	78	E-3	70	150	31	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	79	E-3	80	170	31	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	80	E-3	100	150	38	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	82	E-3	30	30	12	10YR3/3暗褐色シルト(炭化物含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	83	E-3	350	370	22	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	96	E-3	20	30	13	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	97	E-3	20	20	13	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	98	B-5	50	50	22	10YR4/6褐色極細粒砂(土器片含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	99	B-5	30	30	7	10YR4/6褐色極細粒砂(土器片含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	101	F-2	40	40	19	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	102	F-2	30	30	13	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	103	F-2	30	40	20	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	104	F-2	30	30	20	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	105	F-2	20	30	11	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	106	G-2	20	30	16	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	107	G-2	20	30	14	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	108	G-2	50	80	28	10YR3/4暗褐色極細粒砂(土器片含む)	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	109	G-2	20	30	13	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	110	G-2	50	70	16	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	111	G-2	20	20	17	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	112	G-2	30	30	17	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	113	E-2	10	10	12	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	114	F-2	50	50	26	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	115	G-2	20	20	?	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	116	F-2	20	20	10	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	117	F-2	20	20	12	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	118	F-2	20	20	15	10YR4/6暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	119	F-2	30	30	17	10YR4/6暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	120	F-2	30	30	14	10YR4/6暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	121	F-2	30	30	16	10YR4/6暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	122	F-2	20	20	13	10YR4/6暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	123	F-2	50	60	33	10YR4/6暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	124	E-2	30	30	18	10YR4/6暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	125	E-2	30	40	17	10YR4/6暗褐色極細粒砂（土器片含）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	126	C-2	20	20	9	10YR4/3にぶい黄褐色シルト　炭混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	127	B-2	80	150	48	10YR4/6褐色礫混じり極細砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	128	B-2	20	20	4	10YR4/3にぶい黄褐色シルト　炭混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	129	A-2	40	40	10	10YR4/3にぶい黄褐色シルト　炭混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	130	E-3	120	190	17	10YR3/4暗褐色礫混じり極細砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	131	D-3	100	130	22	10YR3/4暗褐色礫混じり極細砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	132	D-3	120	150	11	10YR3/4暗褐色礫混じり極細砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	133	D-3	60	60	9	10YR3/4暗褐色礫混じり極細砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	134	D-3	60	100	26	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	135	D-3	20	30	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	136	D-3	20	20	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	137	D-3	30	30	17	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	138	D-3	30	40	11	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	139	D-3	30	30	16	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	140	D-4	40	60	23	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	141	D-4	20	20	9	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	142	E-4	30	30	12	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	143	E-4	60	60	29	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	144	E-4	70	110	44	10YR3/3暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	145	D-4	20	20	8	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	146	D-4	20	20	11	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	147	C-3	20	20	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	148	C-3	20	20	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴？	150	C-4	20	20	10	10YR5/6黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴？	151	C-3	10	10	7	10YR5/6黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	152	C-3	20	20	10	10YR4/6褐色極細粒砂　炭混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	153	C-3	20	20	9	10YR3/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	154	C-4	20	20	9	10YR4/6褐色極細粒砂 炭・焼土混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	155	C-4	10	10	8	10YR4/6褐色極細粒砂 炭・焼土混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	156	C-4	20	20	11	10YR4/6褐色極細粒砂 炭・焼土混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	157	F-2	20	20	12	10YR3/3暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	158	B-3	150	200	13	10YR3/4暗褐色シルト(土器片多量）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	159	B-3	50	60	10	10YR3/4暗褐色シルト(土器片多量）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	160	B-3	20	20	7	10YR3/4暗褐色シルト	古墳時代後期？
柱穴	161	B-3	10	10	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	162	B-4	30	40	7	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	163	B-4	20	40	10	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	164	A-3	50	50	12	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	165	A-3	80	100	35	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂	古墳時代後期
柱穴	167	G-3	30	30	13	10YR3/2黒褐色シルト(土器片、炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	169	G-3	90	100	21	10YR3/2黒褐色シルト(土器片、炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	170	G-3	20	20	5	10YR3/2黒褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	171	G-2	10	20	8	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	172	G-2	10	20	6	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	173	F-3	30	40	20	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	174	F-2	20	30	13	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	175	F-3	90	140	45	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	176	F-3	50	70	36	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	177	F-3	20	30	16	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	178	F-3	30	30	13	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	179	F-3	30	30	14	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	180	F-3	20	30	14	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	181	F-3	30	30	16	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	182	F-3	10	20	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	183	F-3	30	50	25	2.5Y5/3黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	184	F-3	20	20	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	185	F-3	20	20	11	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	186	F-3	20	20	36	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	187	F-3	10	20	4	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭

表5.02検出遺構一覧（2）

遺構種類	遺構番号	地区	短軸長/幅(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)	埋土・備考	形成時期
柱穴	188	F-3	10	20	6	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	189	F-3	10	20	6	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	190	F-3	20	20	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	191	F-3	10	10	8	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	192	F-3	20	20	11	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	193	F-3	20	20	10	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	194	F-3	20	20	6	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	195	F-3	20	20	15	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	196	F-3	20	20	11	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	197	F-3	20	20	12	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	198	F-3	20	20	10	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	199	F-3	20	20	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	200	F-3	40	40	9	10YR3/2黒褐色シルト(炭、土器混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	201	F-4	20	30	11	10YR3/2黒褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	202	F-4	30	40	12	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	203	F-4	20	20	10	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	204	F-4	20	20	8	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂(炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	205	F-4	20	30	11	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	206	F-4	40	60	17	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂(炭、焼土混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	207	F-3	110	130	30	10YR3/4暗褐色極細粒砂(土器混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	208	E-4	20	20	8	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	209	E-3	70	160	16	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
?	210	F-3,4	400	1170	17	10YR3/4暗褐色極細粒砂(撹乱？）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	211	F-4	20	20	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	212	F-4	10	10	3	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	213	F-5	10	10	7	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂(炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	214	F-4	20	20	6	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	215	F-4	30	30	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	216	F-4	30	40	16	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	217	F-4	30	30	11	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	218	F-4	30	40	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	219	F-4	10	10	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	220	F-4	10	10	4	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	221	E-3	8 0～	180～	33	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	222	E-4	10	20	6	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	223	E-4	20	20	12	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	224	E-4	50	70	8	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	225	B-3,4,5	150	1400	37	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂(土器混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	226	B-4	140	240	19	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	227	B-4	40	80	7	10YR3/4暗褐色シルト焼土混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	228	B-4	40	40	12	10YR3/2黒褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	229	B-4	120	180	20	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
竪穴住居	230	B-4、C-4	650	650	15	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂(土器混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	231	A-4	220～	570	28	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂(土器混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	232	B-4	20	30	6	10YR3/4黒褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	233	B-4	40	50	9	10YR3/4黒褐色シルト（炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	234	C-5	20	20	3	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	235	C-5	20	30	3	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	236	C-5	30	50	4	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	237	C-5	30	30	6	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	238	C-5	80	160	4	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	239	F-3	30	30	13	10YR3/2黒褐色シルト(炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	244	B-5	20	30	7	10YR3/2黒褐色シルト（礫混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	245	B-5	20	30	12	10YR3/2黒褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	246	C-4	40	40	11	10YR3/2黒褐色シルト（小礫混じり、土器混じり）（柱穴か）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	247	C-4	10	30	5	10YR3/2黒褐色シルト(小礫混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	248	C-4	30	40	4	10YR3/2黒褐色シルト(小礫混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	249	C-4	20	30	4	10YR3/2黒褐色シルト(小礫混じり）・竪穴住居230柱穴	弥生時代末・古墳時代初頭
竪穴住居	250	C-4	150～	250～	8	10YR3/2黒褐色シルト(土器、炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
竪穴住居	251	C-4	200～	500	9	10YR4/6褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	253	C-4	20	30	20	10YR3/4暗褐色シルト(土器混じり）・竪穴住居250内	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	254	C-4	30	30	17	10YR3/4暗褐色シルト・竪穴住居250内	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	255	C-5	20	20	5	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	256	D-5	20	30	11	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	257	C-4	40	40	25	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	258	D-4	20	20	13	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	259	D-4	60	70	28	10YR3/2黒褐色シルト(炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	260	C-4	10	10	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	261	D-4	20	30	12	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	262	D-4	80	130	8	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	263	D-4	40	40	11	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	264	D-4	20	20	8	10YR3/2黒褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	265	D-4	20	30	8	10YR3/2黒褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	266	D-4	70	70	9	10YR5/1黒褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	267	E-3	20	30	11	10YR5/1黒褐色シルト（焼土・炭混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	268	E-3,4	280	300	41	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂(83と同じ）	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	269	E-4	50	60	23	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	270	E-4	60	100	21	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	271	E-4	20	30	11	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	272	E-4	40	70	16	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	273	E-4	50	60	19	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	274	E-4	20	20	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	275	E-4	30	30	13	2.5Y5/3黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	276	E-4	30	40	12	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	277	E-4	20	20	6	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	278	E-4	20	30	8	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	279	E-4	20	30	8	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	280	E-4	20	30	9	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	281	E-4	30	30	10	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	283	F-2	110	160	45	10YR3/4黄褐色シルト(礫混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	287	E-4	30	30	8	7.5YR3/3暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	288	E-3	20	20	13	7.5YR3/4暗褐色シルト　焼土・炭・泥混じり	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	289	E-3	20	20	13	7.5YR4/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	290	B-3	30	30	10	10YR4/6褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	292	C-4	10	20	7	10YR3/4暗褐色極細粒砂・竪穴住居230柱穴	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	293	C-4	30	30	13	10YR3/4暗褐色シルト（土器混じり）・竪穴住居230柱穴	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	294	C-4	30	30	6	10YR4/6褐色シルト（土器混じり）・竪穴住居230柱穴	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	295	C-4	20	20	?	10YR3/2黒褐色シルト（竪穴住居230床面直上）	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	296	D-2	60	100	40	10YR3/4暗褐色シルト（小礫混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	297	D-2	20	30	9	10YR3/4暗褐色シルト（小礫混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	298	B-3	20	20	8	10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	299	B-3	30	40	6	不明	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	300	B-3	40	50	7	不明	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	302	G-2	40	50	7	不明	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	303	G-2	50	70	15	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	305	G-5,6	60	350	17	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	306	G-5	30	30	13	10YR5/4にぶい黄褐色シルト(炭、焼土混じる）	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	308	G-5	70	120	20	2.5YR5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	309	G-6	40	110	19	2.5YR5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	310	G-6	80	280	19	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	311	G-6	50	480	13	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	312	G-7	60	70	24	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	313	F-6	60	80	21	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	314	F-6	70	110	18	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
竪穴住居	317	F-6•7、G-6•7	640	700	12	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	318	F-7,G-7	90	90	2	10YR4/6褐色細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	319	G-7	50	210	12	不明	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	320	G-7	110	180	32	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	321	G-6	260	270	34	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	322	G-6	50	370	25	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
竪穴住居	323	F-6、G-6	510	600	16	10YR4/4褐色シルト(土器多い）	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	324	G-7	70	80	7	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	325	F-6	80	150	19	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	326	H-6	120	200	18	10YR3/4暗褐色礫混じり細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	327	G-5	30	90	13	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	328	G-5	40	50	13	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	329	G-7	30	30	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	335	G-7	30	60	20	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	336	F-6	30	40	7	10YR3/4暗褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
溝	338	F-6	70	260	18	10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	340	F-5	120	210	14	2.5YR5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	341	E-5	80	150	46	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑墓	342	E-5	80	150	44	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	343	E-5	30	40	11	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	344	E-5	30	40	10	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	345	E-5	60	130	31	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	346	E-5	20	20	8	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	347	E-6	300	460	19	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
土坑	348	E-6,7、F-6,7	510	900	13	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代初頭
竪穴住居	349	E-7,8、F-7,8	520～	620	15	10YR4/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	350	F-7	40	50	5	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代初頭
柱穴	351	F-7	40	40	2	10YR3/4暗褐色シルト(土器混じり）	弥生時代末・古墳時代初頭

表5.03検出遺構一覧（3）

遺構種別	遺構番号	地区	短軸長/幅(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)	堆土・備考	形成時期
柱穴	352	E-6	50	50	8	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	353	E-6	50	70	21	2.5Y5/3黄褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
溝	354	E-5	70	180	10	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂(土器混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	355	E-5	80	130	6	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂(土器混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	356	D-8	150	250	45	110YR5/4に.ぶい黄褐色シルト~10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	357	D-8	60～	100	6	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	358	D-7	80	120	33	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	359	D-7	50	110	6	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	360	D-7	130	130	53	2.5Y5/3黄褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	361	D-7	30	30	7	10YR4/4褐色極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	362	C-7	30	40	8	2.5Y5/3黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	363	C-7	30	30	12	2.5Y5/3黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	364	C-7	40	50	22	2.5Y5/3黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	365	C-7	40	50	7	2.5Y5/3黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	366	B-7	110～	180～	11	10YR3/4暗褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
竪穴住居	367	B-7,8	240～	700	21	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂(土器含む)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	368	B-7	90	200	14	10YR5/4に.ぶい黄褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	369	B-7	30	40	7	10YR4/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	370	B-7	40	40	25	5Y4/3暗オリーブ色粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	371	B-7	40	50	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	372	B-7	30	40	5	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	373	B-7	50	100	3	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	374	B-7	40	40	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	375	B-8	40	50	6	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	376	B-8	30	40	7	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	377	B-8	40	50	12	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	378	B-8	30	40	15	10YR3/4暗褐色シルト・竪穴住居367内P跡	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	379	B-8	40	60	7	10YR3/4暗褐色シルト・竪穴住居367内P跡	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	380	B-8	20	20	6	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	381	B-7	20	20	3	10YR3/4暗褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	382	C-7	120	210	15	10YR4/4褐色礫混じり極細粒砂	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	383	C-7	70	210	12	10YR3/4暗褐色シルト(焼土・炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	384	C-7	20	20	13	10YR3/4暗褐色シルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	385	C-7	30	40	4	10YR3/4暗褐色シルト(焼土・炭混じり)	縄文時代中期
土坑	386	B-7	70	70	34	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	388	B-7	30	30	8	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	390	B-6,7	450～	550～	19	2.5Y4/4オリーブ褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	391	B-6	40	80	16	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	392	B-6	70	120	26	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	393	B-6	40	50	11	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	394	B-6	30	30	10	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	395	B-6	40	40	14	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	396	B-6	40	50	14	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	397	B-6	50	90	17	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	398	B-6	50	90	17	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	399	B-6	30	60	12	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	400	B-6	30	50	9	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	401	B-6	30	30	1	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	402	B-6	40	40	10	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	403	B-6	30	50	8	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	404	B-6	30	40	8	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	405	B-6	30	30	2	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	406	B-6	40	50	12	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	407	B-6	40	50	10	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	408	B-6	30	40	7	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	409	G-7	20	20	3	10YR4/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	410	B-7	30	30	10	10YR4/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	411	B-7	30	40	15	10YR4/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	412	B-7	40	40	11	10YR4/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	413	B-7	70	100	24	10YR4/4褐色シルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	414	B-6	30	50	9	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	415	B-6	20	20	11	10YR4/4褐色細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	416	B-6	20	30	7	10YR4/4褐色細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	417	B-6	30	50	15	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	418	B-6	30	40	9	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	419	B-6	20	20	6	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	420	B-6	20	20	5	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	421	B-6	30	30	12	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	422	B-6	40	40	27	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	423	B-6	40	40	6	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	424	B-6	30	30	15	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	425	B-6	30	30	8	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	426	B-6	30	40	16	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	427	B-6	30	50	15	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	428	B-6	30	30	10	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	429	B-6	20	30	9	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	430	B-6	20	40	8	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	431	B-6	30	50	21	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	432	B-6	30	50	12	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	433	B-6	20	30	7	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	434	B-6	20	40	10	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	435	B-6	80	200	25	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	436	B-6	20	20	12	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	437	B-6	30	40	14	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	438	B-6	20	20	11	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	439	B-6	20	20	3	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	440	B-6	10	30	5	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	441	B-6	20	20	3	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	442	B-6	20	20	13	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	443	B-6	30	30	14	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	444	B-6	20	20	3	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	445	B-6	50	100	16	10YR3/4暗褐色礫混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	446	B-5	100	120	27	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	447	B-6	50	90	31	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	448	B-6	50	90	19	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	449	B-6	140	180	7	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	450	B-6	60	70	17	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	451	B-6	30	50	19	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	452	B-6	40	50	11	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	453	B-6	40	50	15	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	454	B-6	30	60	5	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	455	B-6	30	40	9	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	456	B-6	90	160	33	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	457	B-6	30	40	9	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	458	B-6	20	20	11	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	459	B-6	20	30	9	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	460	B-6	400	1450	43	10YR4/4褐色礫混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	461	B-6	30	30	9	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	462	B-6	50	80	37	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	463	B-6	30	40	1	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	464	B-6	40	50	5	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	465	B-6	50	80	6	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	466	B-6	20	30	6	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	467	B-6	30	40	9	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	468	B-6	30	30	8	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	470	B-6	50	90	28	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	471	B-6	240	300	13	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	472	B-6	30	40	11	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	473	B-6	20	20	2	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	474	B-6	40	50	23	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	475	B-6	30	30	8	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	476	B-6	20	30	4	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	477	B-6	50	60	15	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	478	B-6	50	80	27	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	479	B-6	60	110	6	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	480	C-5,6	120	280	75	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	483	B-5	20	30	13	10YR3/4暗褐色極細粒砂シルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	484	C-5	20	160	21	10YR4/6褐色極細粒砂混じり(焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	485	C-5	40	230	5	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じり(焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	486	C-5	20	30	4	10YR4/4褐色極細粒砂混じり(焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	487	C-5	20	30	5	10YR4/4褐色極細粒砂混じり(焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	488	C-5	30	50	5	10YR4/4褐色極細粒砂混じり(焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	489	C-5	20	20	8	10YR4/4褐色極細粒砂混じり(焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	490	C-5	20	30	3	10YR4/4褐色極細粒砂混じり(焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	491	C-5	90	200	7	10YR4/4褐色礫混じりシルト(炭、焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	492	C-6	20	30	15	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じり	弥生時代末・古墳時代前期
落込み	494	C-6	260	520	8	10YR4/4褐色礫混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	495	C-6	150	150	14	10YR4/4褐色礫混じりシルト(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	496	C-6	50	60	12	10YR4/4褐色極細粒砂混じり(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
竪穴住居	501	C-5,6、D-5,6	680	730	25	10YR4/4褐色礫混じり(炭混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	502	C-5	20	30	3	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	503	H-7	60	110	29	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期

表5.04検出遺構一覧（4）

遺構種別	遺構番号	地区	短軸長/幅(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)	堆土・備考	形成時期
竪穴住居	504	H-7	240～	640	16	10YR4/4褐色礫混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	505	G-7	30	40	12	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
溝	506	G-7	80	230	28	10YR4/4褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	507	D-5	20	20	7	10YR3/4暗褐色極細粒混じり砂シルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	508	D-5	20	20	8	10YR4/4褐色極細粒砂シルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	509	D-5	40	60	4	10YR4/4褐色礫混じりシルト・白色粘土塊	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	511	H-7、G-7	30	40	18	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)・竪穴住居1柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	512	H-7、G-7	20	20	13	10YR3/4暗褐色シルト(焼土混じり)・竪穴住居1柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	513	H-7、G-7	20	20	6	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	514	H-7、G-7	50	90	11	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	515	H-7、G-7	20	20	15	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)・竪穴住居1柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	516	H-7、G-7	30	30	20	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)・竪穴住居1柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	517	H-7、G-7	30	40	3	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	518	H-7、G-7	90	100	29	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)・竪穴住居1整層土坑	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	519	H-7、G-7	30	30	25	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)・竪穴住居1柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	520	H-7、G-7	30	40	11	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)・竪穴住居1P跡	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	521	E-6	60	90	15	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	523	F-7	20	30	14	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	524	F-6	20	20	18	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	525	F-6	20	20	17	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居317P跡	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	526	B-6	40	50	14	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	527	C-6	20	20	11	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	528	G-6	20	20	18	10YR3/4黒褐色シルト・竪穴住居323柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	529	G-6	20	20	15	10YR3/4黒褐色シルト・竪穴住居323柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	530	F-6	20	20	20	10YR3/4黒褐色シルト・竪穴住居323柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	531	G-6	30	30	27	10YR3/4黒褐色シルト・竪穴住居323柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	532	G-6	70	80	8	10YR3/4暗褐色シルト(焼土・炭・土器)・竪穴住居323P跡	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	533	G-6	50	70	15	10YR3/3暗褐色シルト礫混じり	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	534	G-6	90	90	38	10YR3/3暗褐色シルト礫混じり	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	538	B-6	30	30	7	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	539	B-6	30	30	24	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	540	B-6	30	40	8	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	541	B-6	30	50	15	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	542	B-6	20	30	13	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	543	G-7、H-7	20	20	13	竪穴住居1内(P跡)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	544	F-7	30	40	12	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	545	F-7	20	20	9	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居317P跡炭灰掻き出し層	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	546	F-7	30	30	12	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	547	C-4	70	120	20	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居230P跡	弥生時代末・古墳時代前期
落込み	548	C-4	200	220	17	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居230P跡炭灰掻きだし層	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	549	F-7	30	30	10	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	551	B-6	20	30	13	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	553	F-7	50	60	4	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト（焼土混じり）・竪穴住居349P跡	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	554	C-4、C-5	130	140	12	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居251整層土坑	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	556	B-6	220	390	76	不明	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	557	C-5	30	40	25	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居501柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	558	C-6	30	40	14	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居501柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	559	C-6	40	40	26	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居501柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	560	D-5	40	40	39	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居501柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	561	C-5	30	30	7	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居501柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	562	C-5	30	40	26	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居501柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	563	C-6	60	80	20	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居501P跡	弥生時代末・古墳時代前期
土坑	564	C-6	130	230	41	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト・竪穴住居501柱穴	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	569	H-7、G-7	30	30	13	10YR3/4暗褐色シルト(炭・焼土混じり)	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	570	C-6	10	10	6	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	571	C-6	20	20	6	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期
柱穴	572	B-5	30	40	11	10YR3/4暗褐色極細粒砂混じりシルト	弥生時代末・古墳時代前期

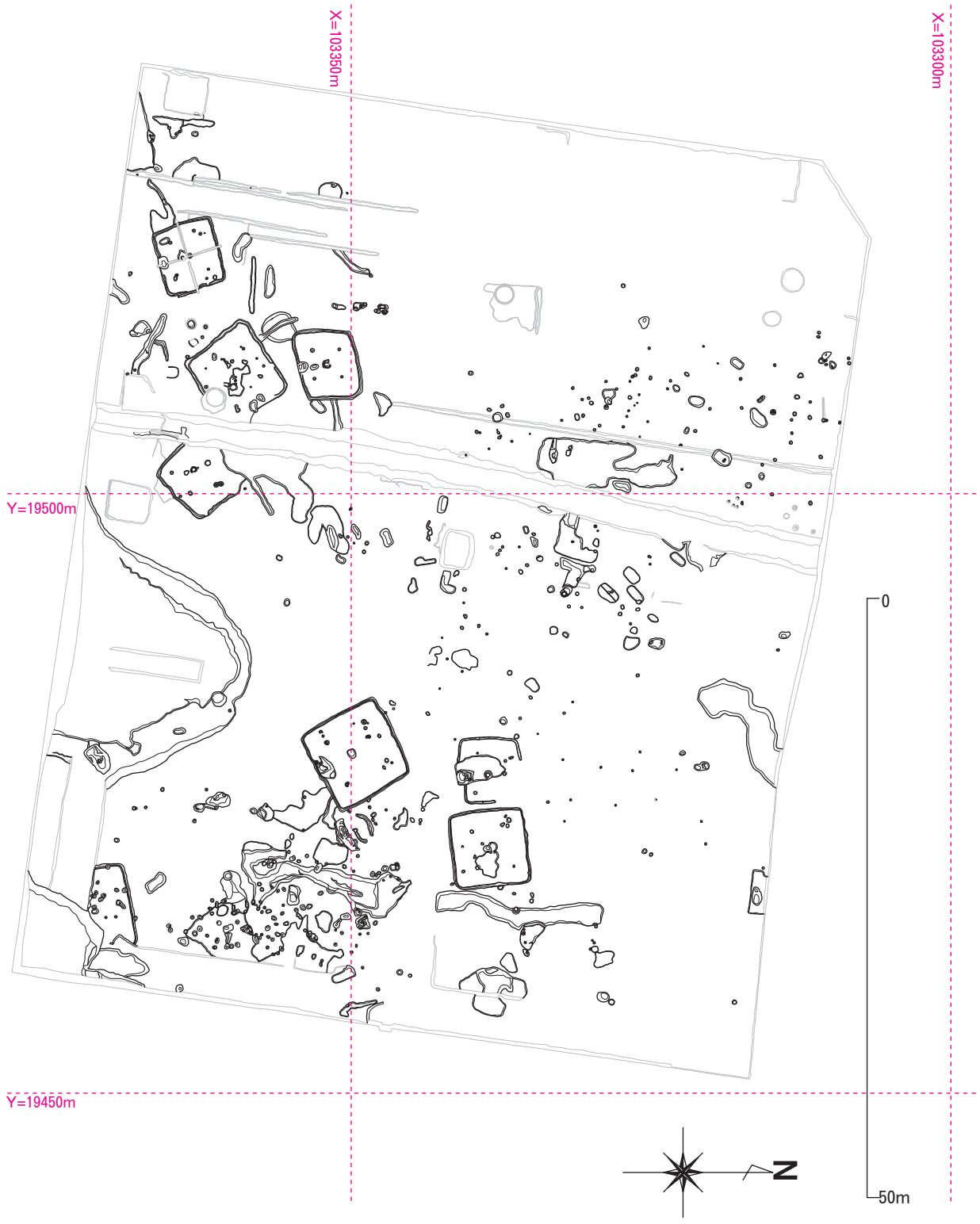


図 5 . 01　検出された遺構（全体図）

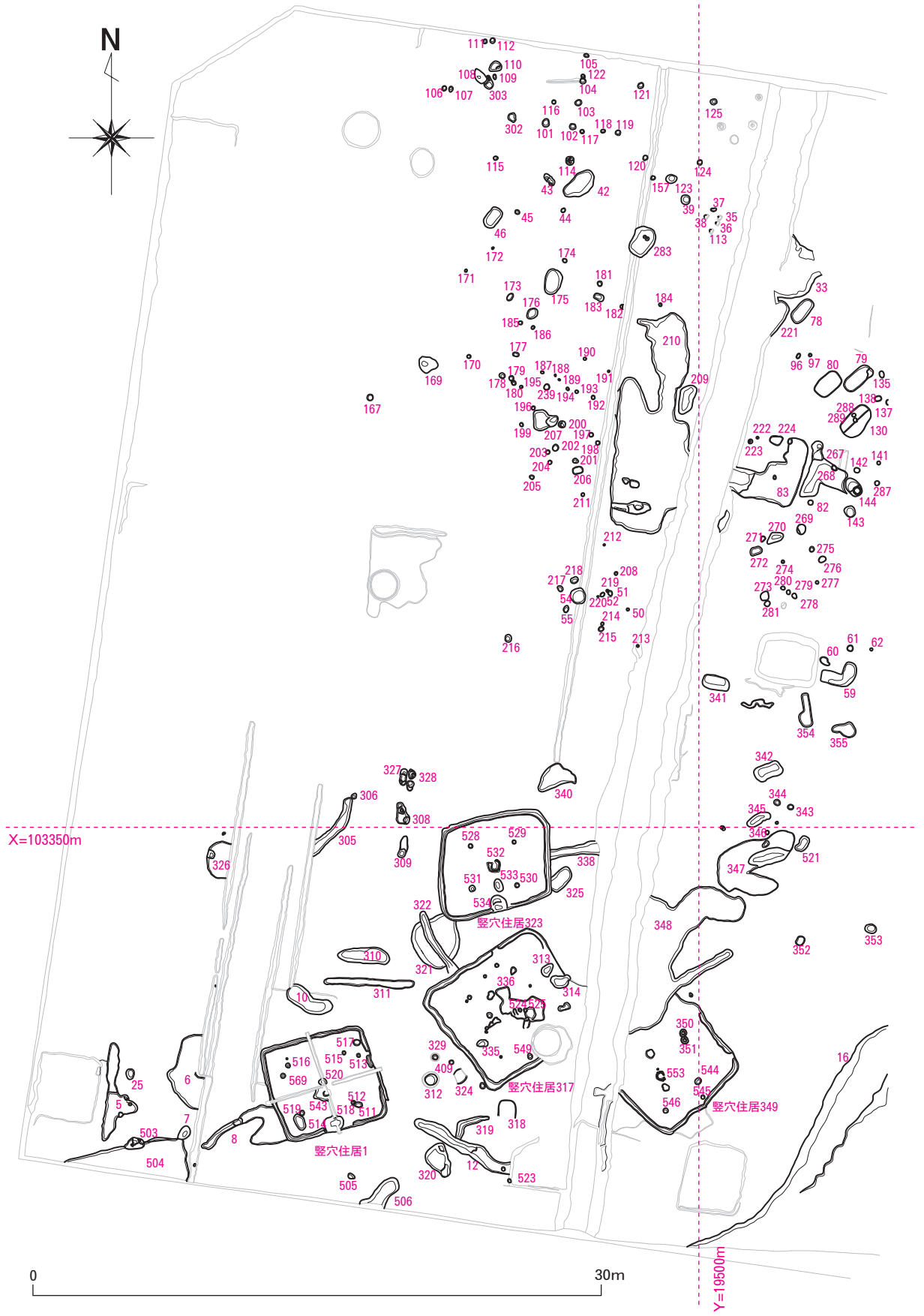


図５.02　検出された遺構（西半図）〔1/300〕

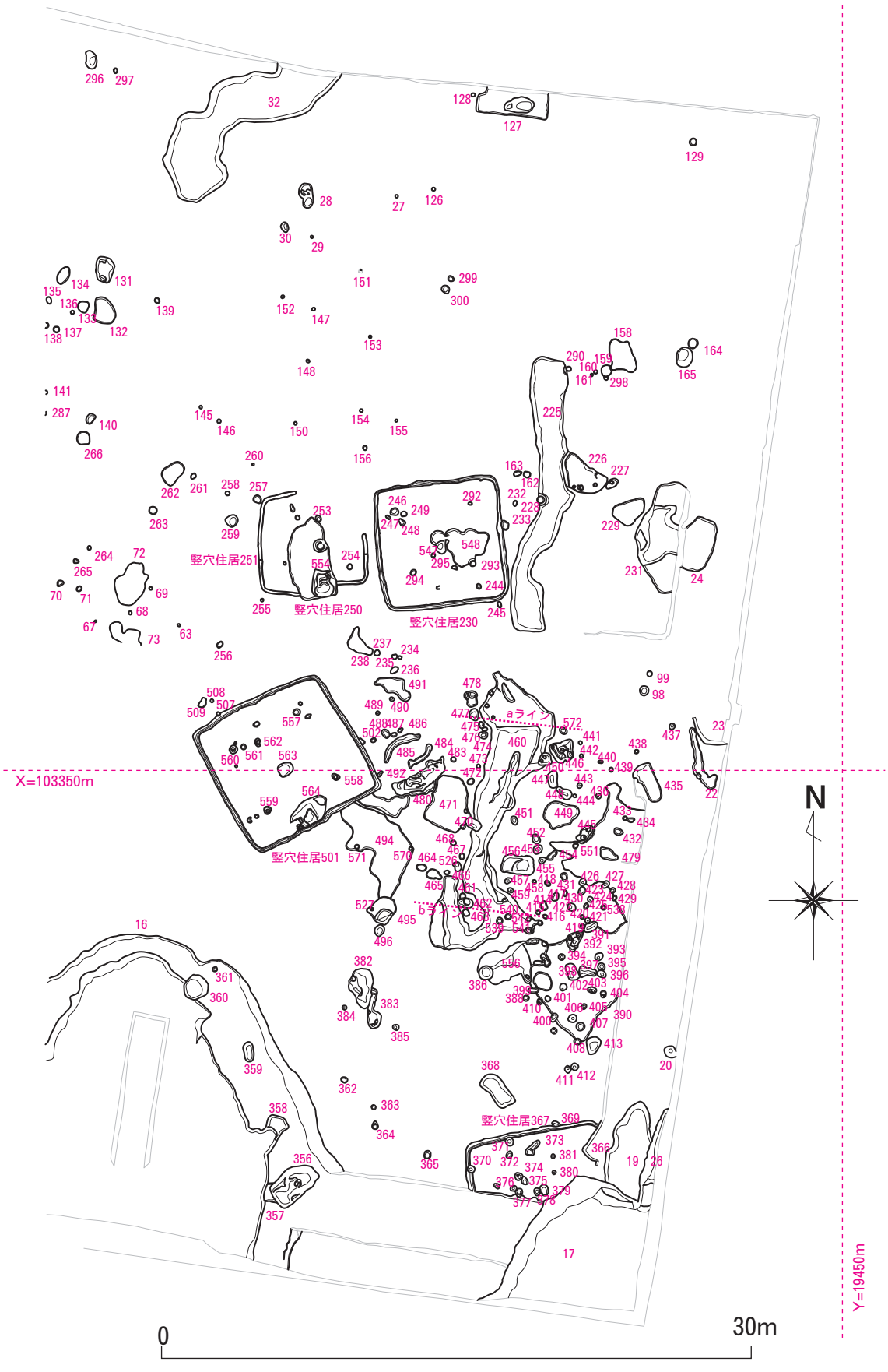


図 5 . 03　検出された遺構（東半部）〔1/300〕

ければ、粘土を用いた作業がこれらの遺構の周囲で行われていた可能性がある。土器・土製品用の素材粘土の貯蔵あるいはそれを用いた作業が行われていた範囲はこれにより今回の調査区全域にわたるとも考えられる。

【土坑墓と思われる遺構】

調査区北部を中心として、長軸1.2～1.5m• 短軸0.7～0.8m 規模の平面長楕円形、深さ約0.4～0.6m の土坑が11基検出された。出土遺物は土器砕片が少量出土するのみであるが、竪穴住居群と同時期に形成されたと考えられる。形態・埋積状況から土坑墓の可能性が高い。土坑墓46・78・79・80・130・175・209・221・283・341・342がそれに相当する。調査後に、持ち帰った遺構内部の土壌を洗浄し、埋葬に関連する遺物（歯や装飾品の残片）の有無を検討したが、副葬品・人骨片などを検出することはできなかった。しかし、その多くが類似した主軸方向をとることや形態などからは土坑墓以外の機能はかんがえにくい。この想定が正しければ、住居域に接する領域に、墓地が形成されていたものと考えられる。

なお、上記の遺構を中心に、その詳細を次に述べる。それ以外の遺構については、表1・2にデータを掲載し、個々の説明に代えた。

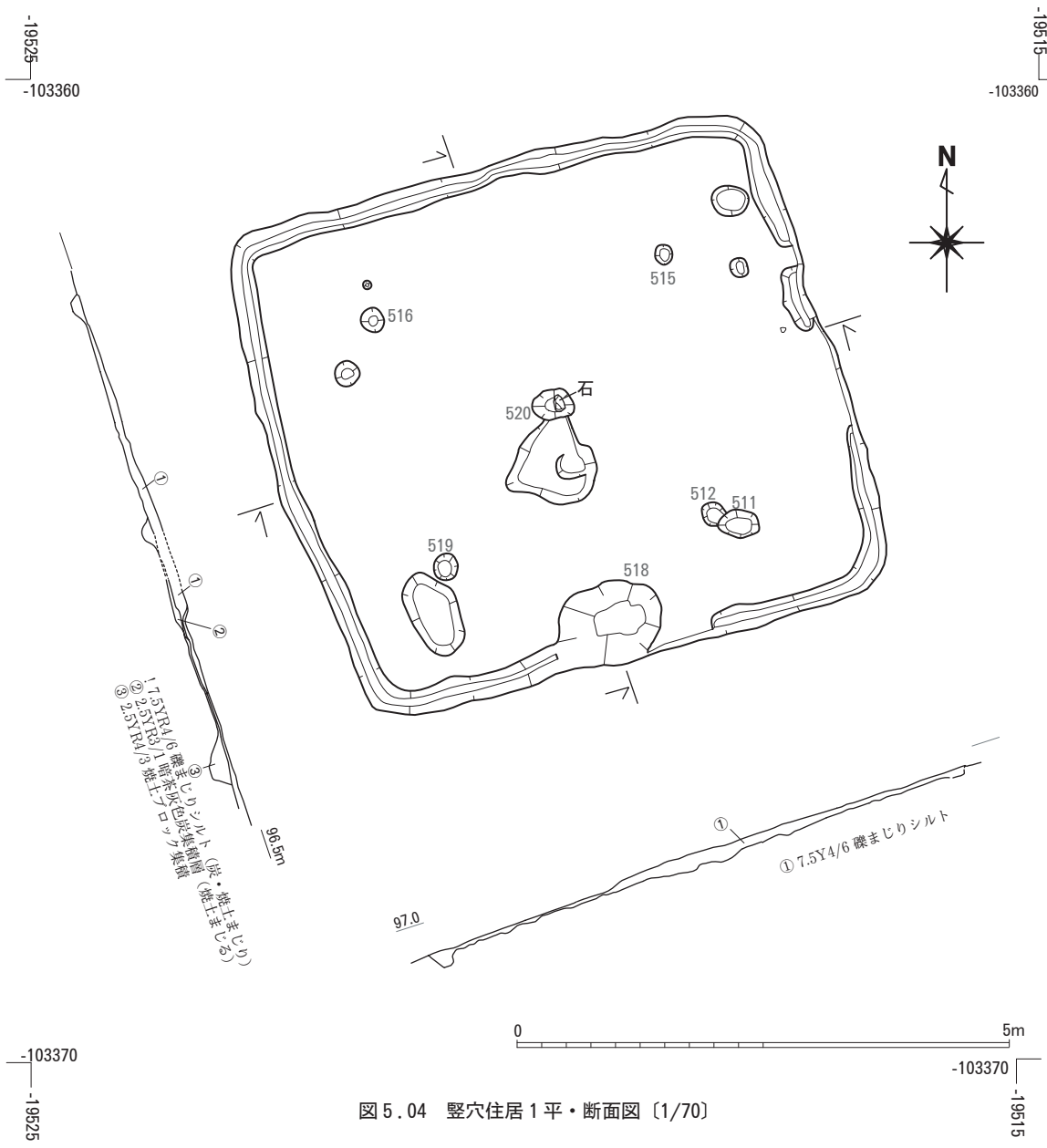


図5.04　竪穴住居1平・断面図〔1/70〕

(2) 主要な遺構の状況

【竪穴住居 1 】（図 5 . 04 • 5 . 05）

当遺構は、調査区の南西部、X=-103360〜-103370m、Y=-19525〜-19515m 附近で検出された。長辺約5.8m、短辺5.3m の規模の平面方形の竪穴住居跡である。検出面から床面までの深さが約0.2m 程度しかなく、きわめて浅い遺構であった。これは、前章の基本層序の概略でふれたように、当調査区が近世以後の削平を受けていたことによるもので、実際には数十 cm 以上の深さのある遺構だったと考えるべきであろう。

図 5 . 05　竪穴住居 1 床面直上遺物出土状況図〔1/50〕

住居跡の壁面に接して周壁溝が1条検出されているが、西辺の中央付近で一部途切れている。幅約0.2m、床面からの深さ約0.1m の規模であった。住居外部へは周壁溝は延びておらず、排水溝としての機能を果たしていた可能性は低い。また、柱穴515・516・519と柱穴512・511は当竪穴住居の上屋を支える主柱痕跡と考えられる。柱穴512・511はいずれが真の主柱穴でもう一方がその補助材の役割を果たしていたと考えたい。いずれも深さ約0.2m 程度であった。

住居南辺中央には、長軸長約1.4m・短軸長約0.8m 規模の平面不整楕円形の土坑が、深さ約0.2m 程度床面から掘り込まれた状態で検出された。住居中央には床面で、長軸長約0.4m・短軸長約0.3m・深さ約0.2m 規模の土坑520が検出され、その底面に接した状態で拳大の礫が出土した。この中央土坑の南側には約0.1m 程度の厚さで床面に炭・灰の細片を含んだ土壌が広がり、それを除去すると底面が不整形な浅い凹みとなった。この土坑520および周囲の炭片分布域は、当住居跡の炉跡およびそこから炭・灰をかき出した範囲に相当すると考えられる。

当遺構の検出状況で注目されるのは、その埋土の状態である。土層断面図と注記にみるように、埋土層中にはいずれも多量の炭もしくは焼土が含まれていた。その埋土中の検出面から5cm 程度埋土を掘り下げた面、つまり床面直上層中からは、図5.05に示したように壁際附近には住居中央を向いて放射状に並んだ状態で炭化木材が検出された。これら炭化材は上屋を構成する垂木が崩落して堆積したものと考えられ、当遺構が上屋構造を維持した状態で焼失したことを示している。また、それら炭化材と混合した状態で多量の焼土が検出され、図5.05に赤色で示した範囲にはそれらが面を形成して堆積していた。

つまり、上屋が焼けた際に垂木並列面に付着していた粘土質素材が焼けて、ともに崩落したと考えるのが自然である。このことから、当住居跡の上屋には粘土が面を成して付帯していたと考えられる。そのことから、上屋施設の構造が草本材などとともに粘土を屋根に塗布した「土葺屋根」であったことが類推される。また、これら上屋材の焼失崩落堆積物とともに、住居南西部には多くの土器片が出土した。焼失時に住居内に置かれていた土器群と考えられる。もちろん、これらの検出状態からは、この焼失が偶発的火災によるものか、住居廃棄後の意図的着火によるものかは判断できない。福田さよ子氏の分析によると炭化材は広葉樹であった。先述の南辺に接する土坑518の埋土中には、多量の焼土片がみられ、その焼土片は土坑の底面に接して堆積していた。これは、上屋焼失時に当土坑が完全に開口した状態にあったことを示している。住居辺中央にみられる土坑の機能については諸説あるが、当遺構の状態からは、住居使用もしくは廃棄時には開口した状態で使用されていたことは確実である。

出土した土器群には、丸底と考えられる広口壺や太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片などの破片がみられる。このことから、当住居跡焼失時期は庄内式期に相当すると考えられる。

【竪穴住居230】（図 5 . 06・5 . 07）

当遺構は、調査区の北東部、X=-103333～-103343m、Y=-19474～-19466m 附近で検出された。一辺約6.4m 規模の平面方形の竪穴住居跡である。検出面から床面までの深さが約0.2m 程度しかなく、きわめて浅い遺構であった。これは、前章の基本層序の概略でふれたように、当調査区が近世以後の削平を受けていたことによるもので、実際には数十 cm 以上の深さのある遺構だったと考えるべきであろう。

住居跡の壁面に接して周壁溝が 1 条検出されている。溝は幅約0.2m、床面からの深さ約0.1m の規模であった。住居外部へは周壁溝は延びておらず、排水溝としての機能を果たしていた可能性は低い。また、柱穴292・293・294・249は当竪穴住居の上屋を支える主柱痕跡と考えられる。これら主柱穴は、いずれも平面径約0.3m・深さ約0.2m 程度の規模であった。

住居南辺中央には、長軸長約1.4m・短軸長約0.8m 規模の平面不整楕円形の土坑が、深さ約0.2m 程度床面から掘り込まれた状態で検出された。住居中央には床面で、径約0.5m・深さ約0.2m 規模の土坑547が検出された。この中央土坑の西側には約0.1m程度の厚さで床面に炭•灰の細片を含んだ土壌が広がり、それを除去すると底面が不整形な浅い凹み（落込み548）となった。この土坑547および周囲の炭片分布

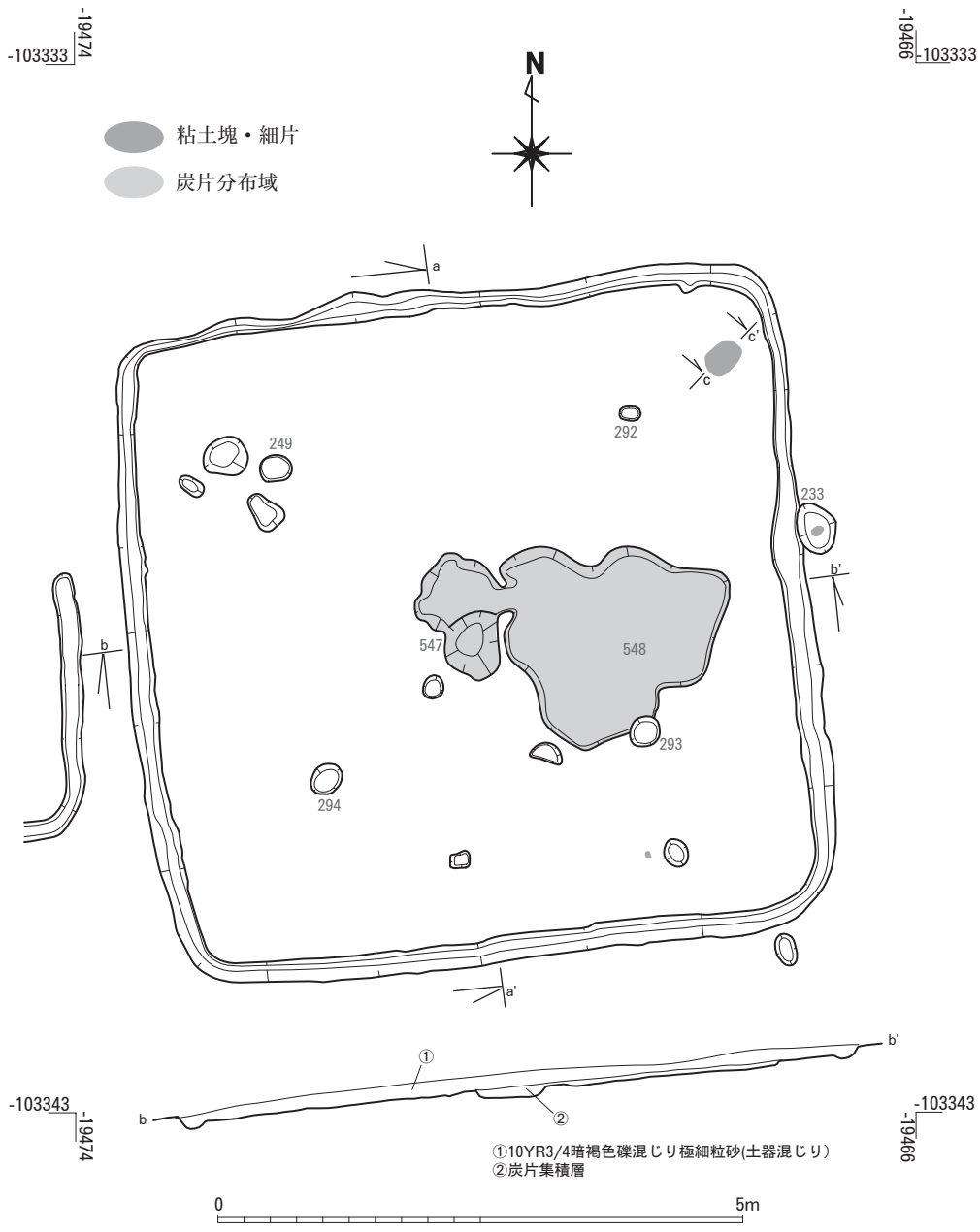


図 5 . 06　竪穴住居230平・断面図〔1/70〕

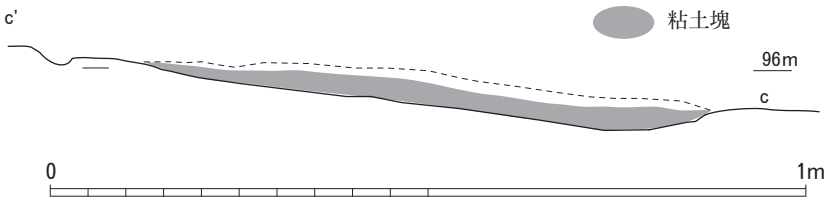


図 5 . 07　竪穴住居230粘土塊断面図〔1/10〕

域は、当住居跡の炉跡およびそこから炭・灰をかき出した範囲に相当すると考えられる。

また、当遺構で注目すべきは、床面北東隅で検出された白色粘土塊である。図５.07は、その粘土塊出土状態の断面図である。粘土は住居床面を数 cm 程度の厚さがあり、浅い凹みの中に平たく固めておかれていた。意図的に住居床面を掘りくぼめていたのか、床面に置いた粘土部分が土圧でややへこむ結果となったかの判断は難しい。ただ、検出時には床面より上位に膨らんだ状態で検出されている。このことから、住居機能には、白色粘土の表面が見えている状態だったと考えられる。また、住居南東部の床面では、同質の粘土の小片が検出されている（図５.06）。このことから、竪穴住居230内では白色粘土を用いた作業が行われていたと考えられる。おそらく土器・土製品の製作などの目的で住居内に粘土を置いて作業も行っていた可能性が高いが、出土した白色粘土の用途の判別には別途分析が必要である。後章にて分析結果を提示し、そこで詳論したい。さらに、住居跡西辺に接して柱穴状遺構233が検出されたがその埋土中からも小粘土塊が出土した。この部分も住居の上屋内とも考えられることから、一連の作業痕跡と考えることが可能である。

出土した土器群には、尖底形態の小型鉢や太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片などの破片がみられる。このことから、当住居跡が機能した時期は庄内式期に相当すると考えられる。

【竪穴住居250・251】（図５.08）

この２つの遺構は、調査区の北東部、X=-103336～-103342m、Y=-19480～-19474m 附近で検出された。いずれも平面方形の竪穴住居跡であるが竪穴住居250は東半部の周壁溝のみ、竪穴住居251は西半部の周壁溝のみの検出である。発掘調査の際、遺構検出当初は一つの住居跡と考えていたが、西半部と東半部の周壁溝の位置が、南半において接する箇所で直線的に連続しないため、単一遺構ではなく、２つの遺

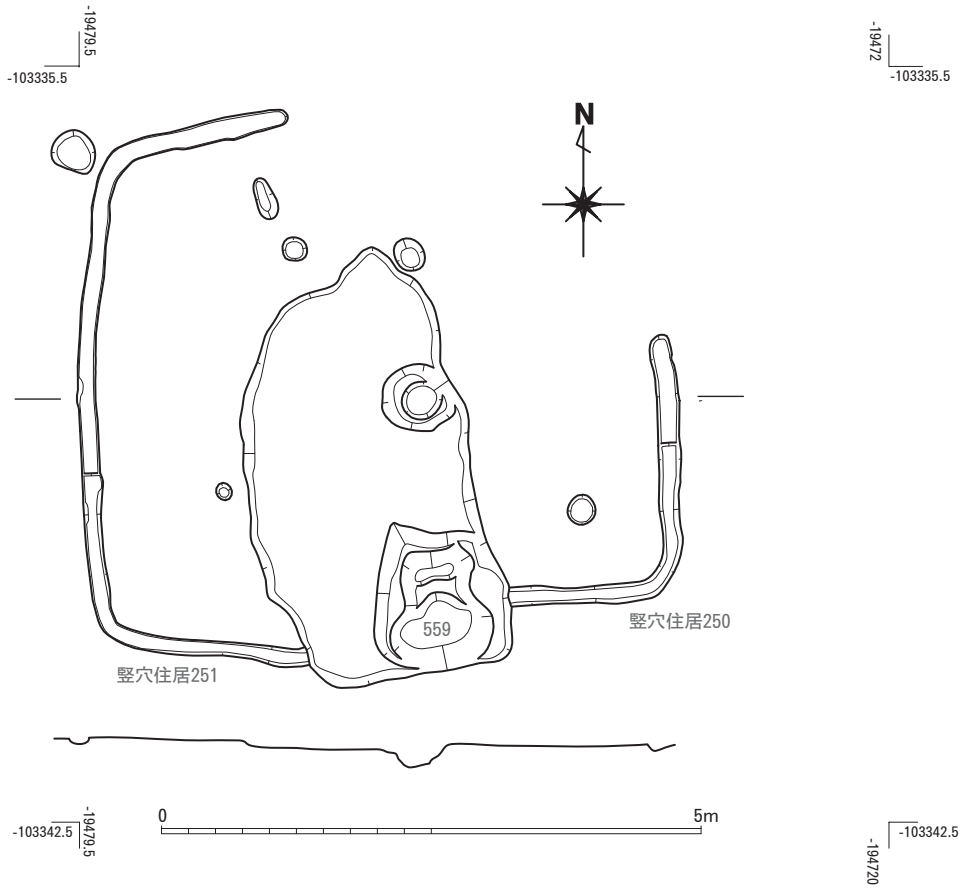


図５.08　竪穴住居250・251平面図〔1/70〕

構が近接・重複している状態にあったと判断し、別の遺構名を付した。両遺構の周壁溝とも、検出面から床面までの深さが約0.2m 程度しかなく、きわめて浅い遺構であった。これは、前章の基本層序の概略でふれたように、当調査区が近世以後の削平を受けていたことによるもので、実際には数十㎝以上の深さのある遺構だったと考えるべきであろう。竪穴住居250の周壁溝は東辺・南辺の一部だけの検出で残存状態はよくない。竪穴住居251は西辺の周壁溝が完存、南・北辺がほぼ半分残存している状態であった。竪穴住居251南辺周壁溝に接して、長軸長約1.4m・短軸長約0.8m 規模の平面不整楕円形の土坑（土坑554）が、深さ約0.2m 程度床面から掘り込まれた状態で検出された。その周囲は深さ0.03m程度の浅い落ち込み状の凹みとなっていた。これは、竪穴住居１南辺で検出された土坑518ときわめて類似した位置・形態にあり、竪穴住居251内部に付帯する施設の痕跡と考えられる。また、竪穴住居251の中央と考えられる位置には長軸長約0.4m・短軸長約0.3m・深さ約0.2m 規模の土坑が検出され、内底面には炭を含む堆積層がみられた。炉址と考えられる。

竪穴住居250・251周壁溝内部にはいくつかの柱穴状遺構が検出されたが、いずれが住居上屋を支える柱痕かを判断するのは難しい。周壁溝は残存していたものの、この２つの住居跡は床面そのものまで削平をうけていた可能性があり、住居の構造全体を判断することは難しい。

出土した土器群には、太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片などの破片がみられる。このことから、当住居跡が機能した時期は弥生後期後葉～庄内式期に相当すると考えられる。

【竪穴住居317】（図５.09）

当遺構は、調査区の南西部、X=-103355～-103363m、Y=-19515～-19507m 附近で検出された。長辺約７m、短辺約6.4m規模の平面方形の竪穴住居跡である。検出面から床面までの深さが約0.2m 程度しかなく、きわめて浅い遺構であった。これは、前章の基本層序の概略でふれたように、当調査区が近世以後の削平を受けていたことによるもので、実際には数十 cm 以上の深さのある遺構だったと考えるべきであろう。

住居跡の壁面に接して周壁溝が1条検出されている。溝は幅約0.2m、床面からの深さ約0.1m の規模であった。また、先述の削平によって住居東部の周壁溝は検出できなかった。検出されている範囲では住居外部へは周壁溝は延びておらず、それが排水溝としての機能を果たしていた可能性は低い。竪穴住居317周壁溝内部にはいくつかの柱穴状遺構が検出されたが、いずれが住居上屋を支える柱痕かを判断するのは難しい。周壁溝は残存していたものの、この住居跡は部分的には床面そのものまで削平をうけていた可能性があり、住居の構造全体を判断することは難しい。

住居中央には床面で、径約0.5m・深さ約0.2m 規模の土坑525が検出された。この中央土坑の西側には約0.1m 程度の厚さで床面に炭・灰の細片を含んだ土壌が広がり、それを除去すると底面が不整形な浅い凹み（落込み545）となった。この土坑525および周囲の炭片分布域は、当住居跡の炉跡およびそこから炭・灰をかき出した範囲に相当すると考えられる。ただ、土坑525は当竪穴住居の中央からやや西に寄った位置にある。この点は炉壁面が赤く焼土化し、完全に住居の中央に位置する炉跡の状況が判明している竪穴住居323などとは異なっている。炭辺分布域は炉跡に伴う堆積と考えられるが、実際の炉部分の確定することは難しい。

また、住居西部で周壁溝に接して、長軸長約0.95m・短軸長約0.70m・深さ約0.40m の不整楕円形を呈する土坑314が検出されている。竪穴住居１・251・323・501などでは、壁面に接する土坑が検出されているが、土坑314も同様な住居内施設だった可能性がある。

出土した土器群には、太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片などの破片がみられる。このことから、当住居跡が機能した時期は弥生後期後葉～庄内式期に相当すると考えられる。

【竪穴住居323】（図 5 . 10 • 5 . 11）

当遺構は、調査区の南西部、X=-103349～-103355m、Y=-19514～-19507m 附近で検出された。長軸長約6.1m•短軸長約5.2m 規模の平面方形の竪穴住居跡である。厳密には、長方形を呈さず、東西に長い平行四辺形のような平面形態である。検出面から床面までの深さが約0.2m 程度しかなく、きわめて浅い遺構であった。これは、前章の基本層序の概略でふれたように、当調査区が近世以後の削平を受けていたことによるもので、実際には数十 cm 以上の深さのある遺構だったと考えるべきであろう。

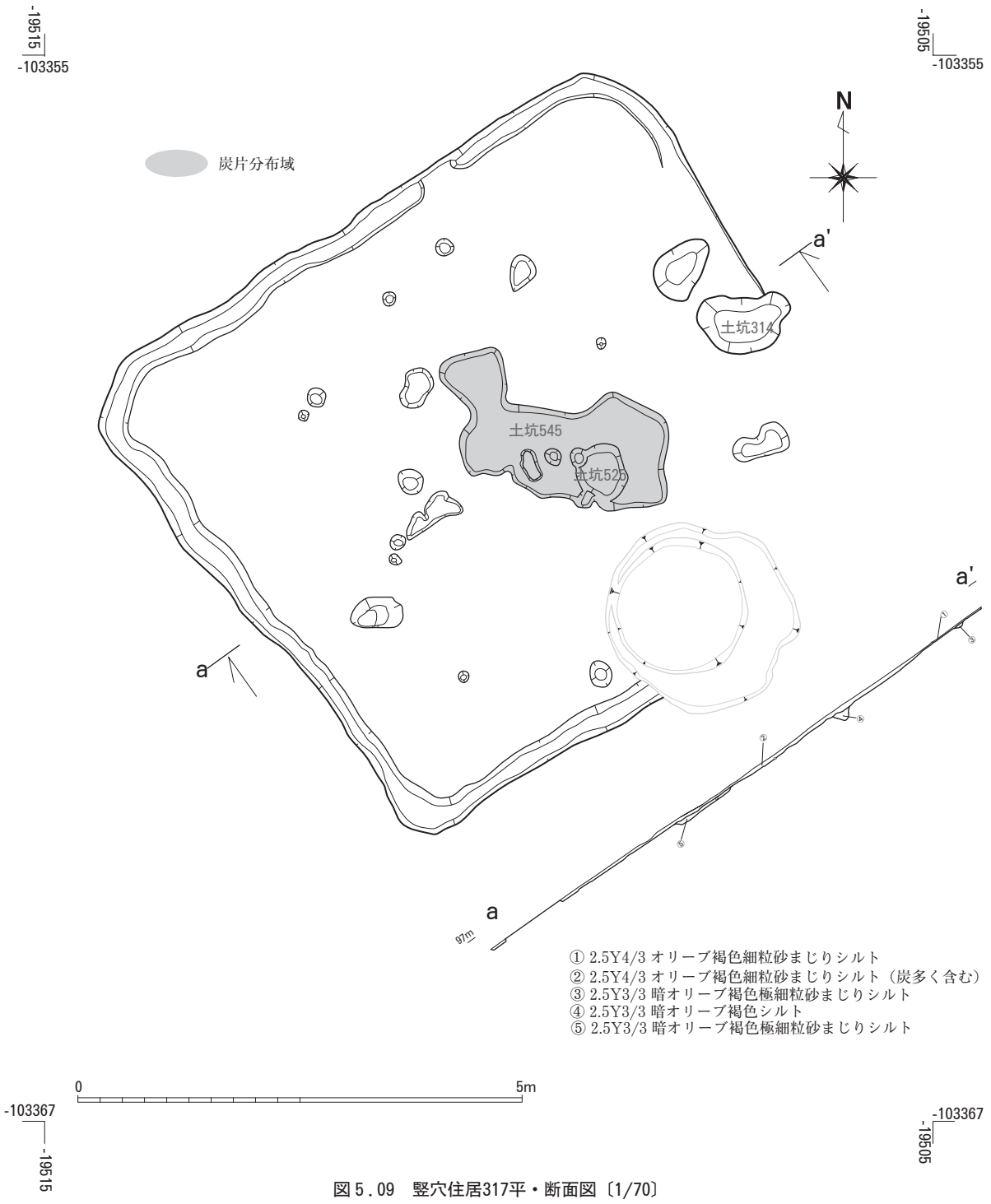


図 5 . 09　竪穴住居317平・断面図〔1/70〕

住居跡の壁面に接して周壁溝が1条検出されているが、西辺の中央付近で一部途切れている。幅約0.2m、床面からの深さ約0.1m の規模であった。住居外部へは周壁溝は延びておらず、排水溝としての機能を果たしていた可能性は低い。また、柱穴528・529・530・531は当竪穴住居の上屋を支える主柱痕跡と考えられる。いずれも深さ約0.2m 程度であった。

住居南辺中央には、長軸長約0.9m・短軸長約0.8m 規模の平面不整楕円形の土坑534が、深さ約0.2m 程度床面から掘り込まれた状態で検出された。住居中央には床面で、長軸長約0.5m・短軸長約0.4m・深さ約0.2m 規模の土坑532が検出された。壁面が0.1m程度隆起して堤状を呈し、その部分が焼成により赤化していた。長期間にわたり、被熱した遺構と考えられ、住居内中央に位置することから炉跡と考えられる。炉跡と考えられる土坑532と壁面に接する土坑534の間には、土坑533が検出された。長軸0.7m、短軸約0.4mの平面長楕円形を呈し、深さ約0.1m 程度床面から掘り込まれた遺構である。機能は不明であるが、両側の土坑・炉跡を組み合わせで使われた施設の一部とも類推できる。

図５.11にみるように、当住居跡からは、床面直上の薄い堆積層から土器片が多数出土している。しかし、これらは床面にはりつく状態ではなく、2 〜 3 cm 程度浮いた状態で検出されている。また、土器片も集中して出土することなく、砕片が住居全体に散布している状態で、床面に置かれた土器がそのままで出土したような状態ではなかった。おそらく住居が廃絶後の埋土中に混じって問う住居内に堆積した土器片と考えられる。また、これら土器片に混じって、住居西辺中央近くに未焼成の白色粘土塊が出土した。長軸長約15cm 厚さ約７cm 程度の大きさの不整楕円球体を呈していた。色調・質とも竪穴住居

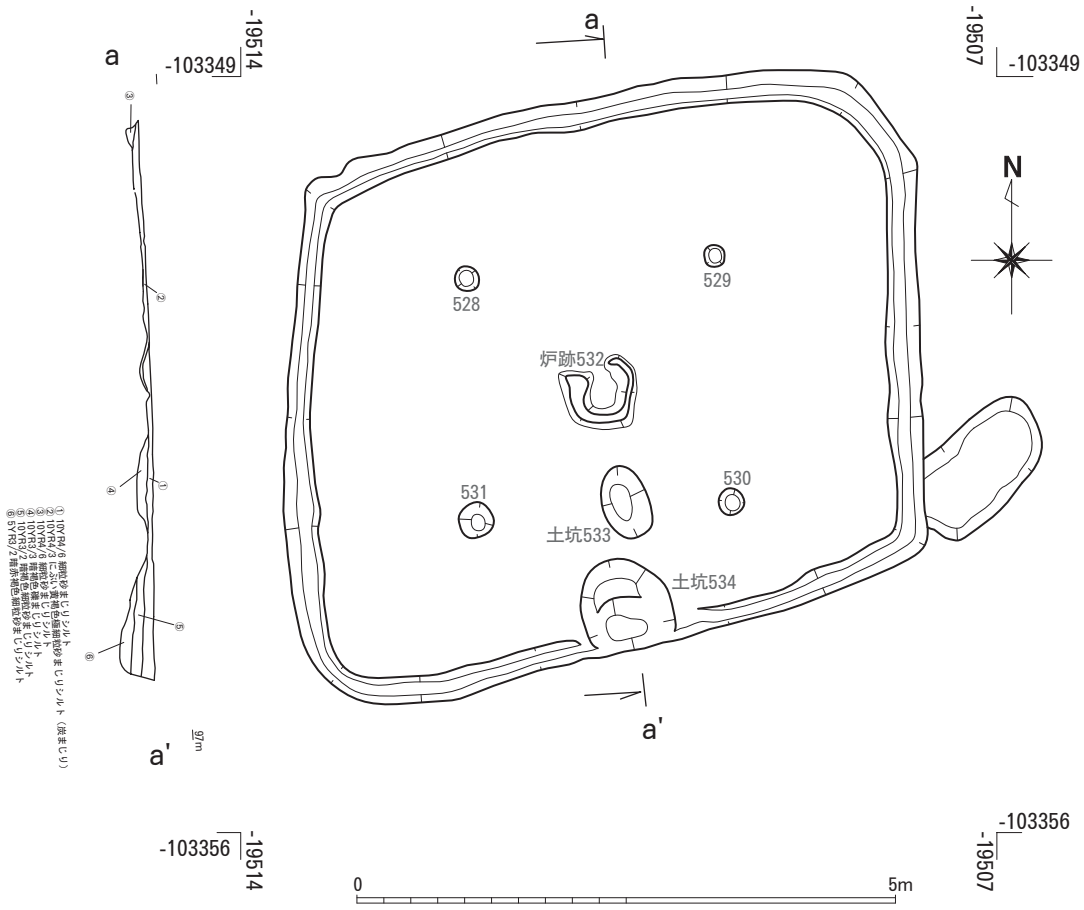


図５.10　竪穴住居323平・断面図〔1/70〕

230床面出土白色粘土と酷似している。ただ、先述のように、床面に埋置された状態ではなく埋土とともに廃棄された状態の出土状態という点は、竪穴住居230とは大きく異なっている。

出土した土器群には、太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片などの破片がみられる。また、手焙形土器もしくは琵琶湖沿岸部に通有な櫛描文を施す受け口状口縁鉢の破片も出土している。このことから、当住居跡が機能した時期は弥生後期後葉～庄内式期に相当すると考えられる。

【竪穴住居349】（図 5 . 12）

当遺構は、調査区の南部中央付近、X=-103355～-103365m、Y=-19505～-19499m 附近で検出された。一辺約5.3m 規模の平面方形の竪穴住居跡である。検出面から床面までの深さが約0.2m 程度しかなく、きわめて浅い遺構であった。これは、前章の基本層序の概略でふれたように、当調査区が近世以後の削平を受けていたことによるもので、実際には数十 cm 以上の深さのある遺構だったと考えるべきであろう。

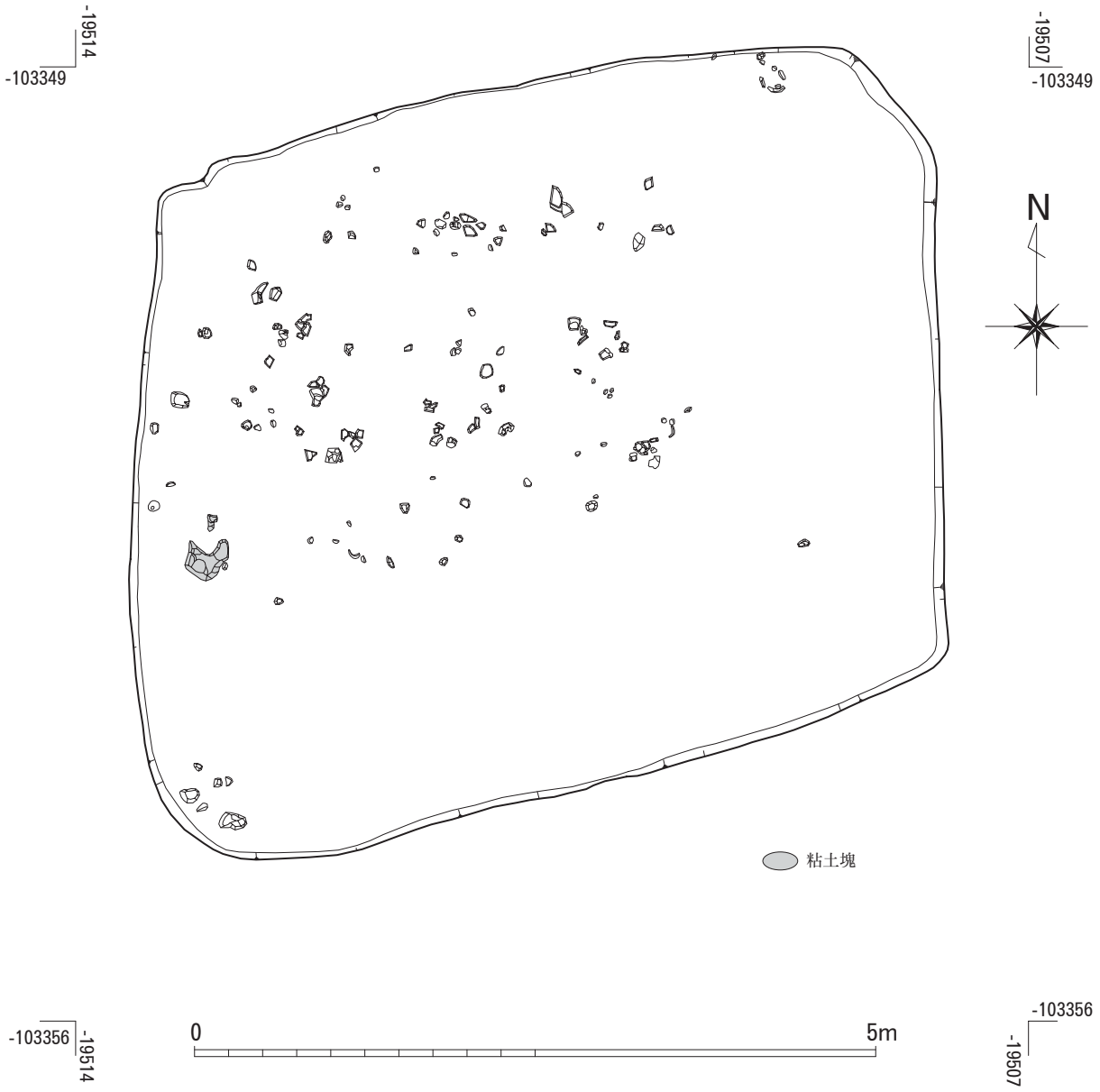


図 5 . 11　竪穴住居323遺物出土状況図〔1/50〕

住居跡の壁面に接して周壁溝が 1 条検出されている。溝は幅約0.2m、床面からの深さ約0.1m の規模であった。また、先述の削平によって住居北西部の周壁溝は検出できなかった。したがって、全体形態は不明である。検出されている範囲では住居外部へは周壁溝は延びておらず、それが排水溝としての機能を果たしていた可能性は低い。竪穴住居349周壁溝の内側にはいくつかの柱穴状遺構が検出されたが、いずれが住居上屋を支える柱痕かを判断するのは難しい。周壁溝は残存していたものの、この住居跡は部分的には床面そのものまで削平をうけていた可能性があり、住居の構造全体を判断することは難しい。

また、住居中央やや西寄りには、床面で、長軸長約0.5m・短軸長約0.4m・深さ約0.2m 規模の土坑532が検出された。壁面が0.1m程度隆起して堤状を呈し、その部分が焼成により赤化していた。長期間にわたり、被熱した遺構と考えられ、住居内中央に位置することから炉跡と考えられる。東端部においてこの堤状の隆起部がみられないのは、この部分が炭・灰の掻き出し部となっていたためと考えられる。炉跡の形態としては、竪穴住居323と酷似している。

出土した土器群には、太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片などの破片がみられる。このことから、当住居跡が機能した時期は弥生後期後葉～庄内式期に相当すると考えられる。

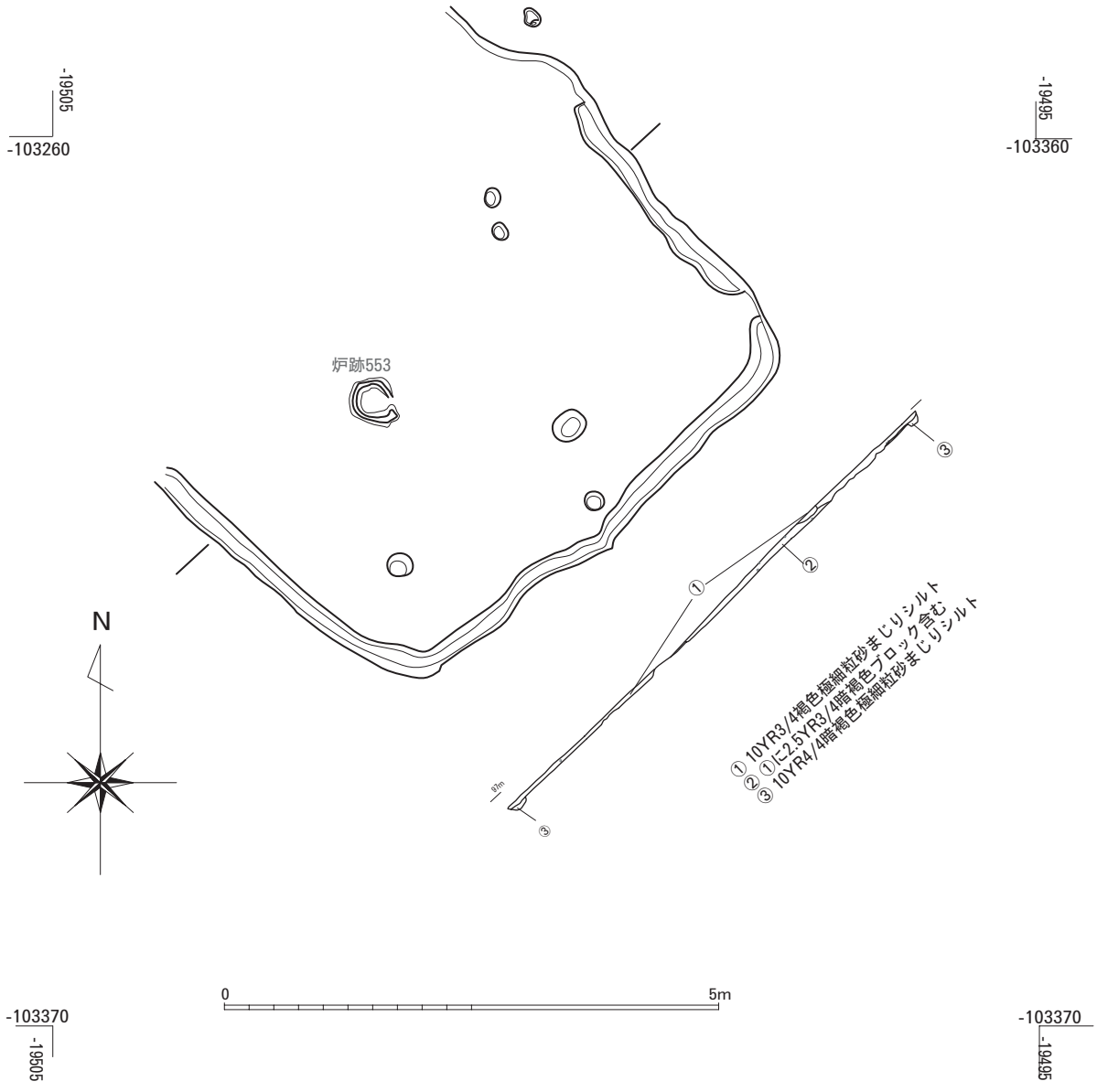


図 5 . 12　竪穴住居349平・断面図〔1/70〕

【竪穴住居367】（図５.13）

当遺構は、調査区の南東部付近、X=-103367～-103371m、Y=-19470～-19460m 附近で検出された。一辺約7.0m 規模の平面方形の竪穴住居跡である。検出面から床面までの深さが約0.2m 程度しかなく、きわめて浅い遺構であった。これは、前章の基本層序の概略でふれたように、当調査区が近世以後の削平を受けていたことによるもので、実際には数十 cm 以上の深さのある遺構だったと考えるべきであろう。

住居跡の壁面に接して周壁溝が1条検出されている。溝は幅約0.2m、床面からの深さ約0.1m の規模であった。また、先述の削平によって住居南部の周壁溝は検出できなかった。したがって、全体形態は不明である。検出されている範囲では住居外部へは周壁溝は延びておらず、それが排水溝としての機能を果たしていた可能性は低い。竪穴住居367周壁溝の内側にはいくつかの柱穴状遺構が検出されたが、いずれが住居上屋を支える柱痕かを判断するのは難しい。周壁溝は残存していたものの、この住居跡は部分的には床面そのものまで削平をうけていた可能性があり、住居の構造全体を判断することは難しい。

また、住居中央やや西寄りには、床面で、長軸長約1.0m・短軸長約0.4m・深さ約0.2m 規模の不整楕円形の土坑379が検出された。不整形であるが、北端部が大きく凹んでいてその部分が遺構の中心とがんが得られる。その凹み部の壁面は焼成により赤化していた。長期間にわたり、被熱した遺構と考えられ、住居内中央付近に位置することから炉跡と考えられる。この炉跡中心と考えられる北端の凹み部分の底面には、径10cm 程度の礫が複数置かれていた。南側には浅く0.1m 程度の不整形な凹みが検出されたが、その部分には炭片が多く堆積していたため、炉からの炭・灰掻き出し部と考えられる。また隣接して西側に土坑378が検出された。焼成による赤化土壌は検出できなかったものの、形態・規模は土坑379に類似している。土坑378は土坑379をきる状態で検出されている。これらが炉跡であれば、当住居跡には時期の異なる炉跡が検出されたことになり、同一位置での住居の建替えがあったと考えられる。ただし、今回検出した周壁溝といずれの炉跡が対応関係にあるのかは判然としない、場合によっては壁構造を変化させずに上屋や住居内施設だけの変更が行われたとも考えられる。

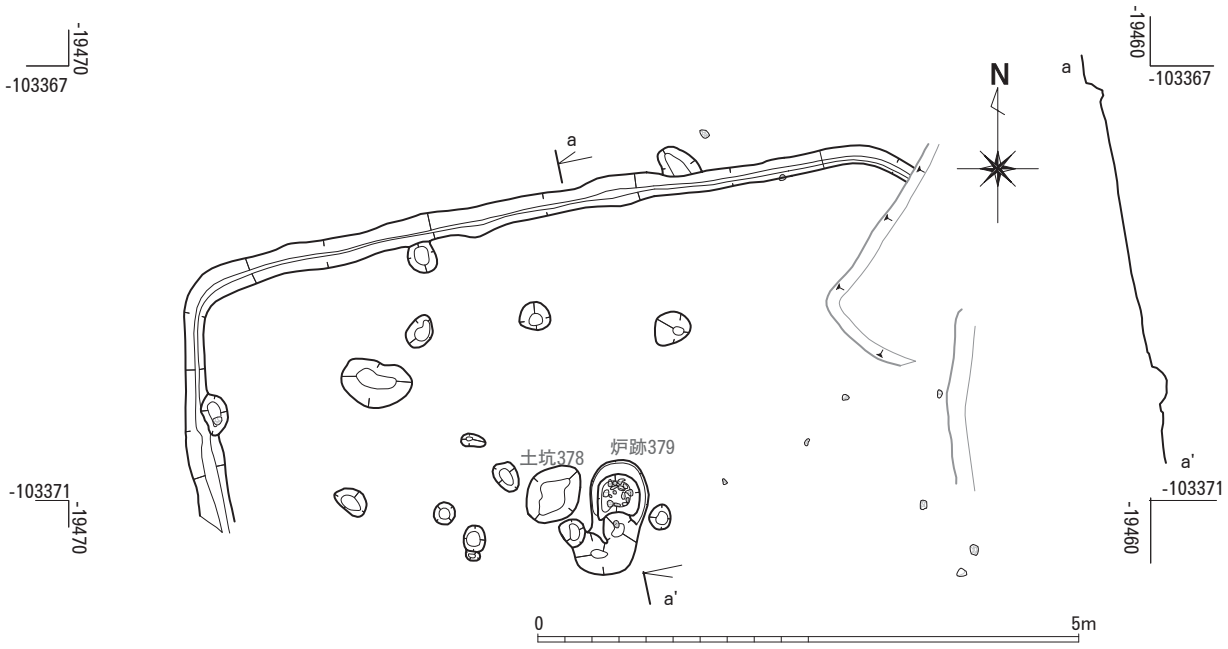


図５.13　竪穴住居367平・断面図〔1/70〕

出土した土器群には、太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片などの破片がみられる。このことから、当住居跡が機能した時期は弥生後期後葉～庄内式期に相当すると考えられる。

【竪穴住居501】（図 5 . 14）

当遺構は、調査区の北東部、X=-103345～-103355m、Y=-19480～-19475m 附近で検出された。長辺約7.1m・短辺約7.0m 規模の平面方形の竪穴住居跡である。検出面から床面までの深さが約0.2m 程度しかなく、きわめて浅い遺構であった。これは、前章の基本層序の概略でふれたように、当調査区が近世以

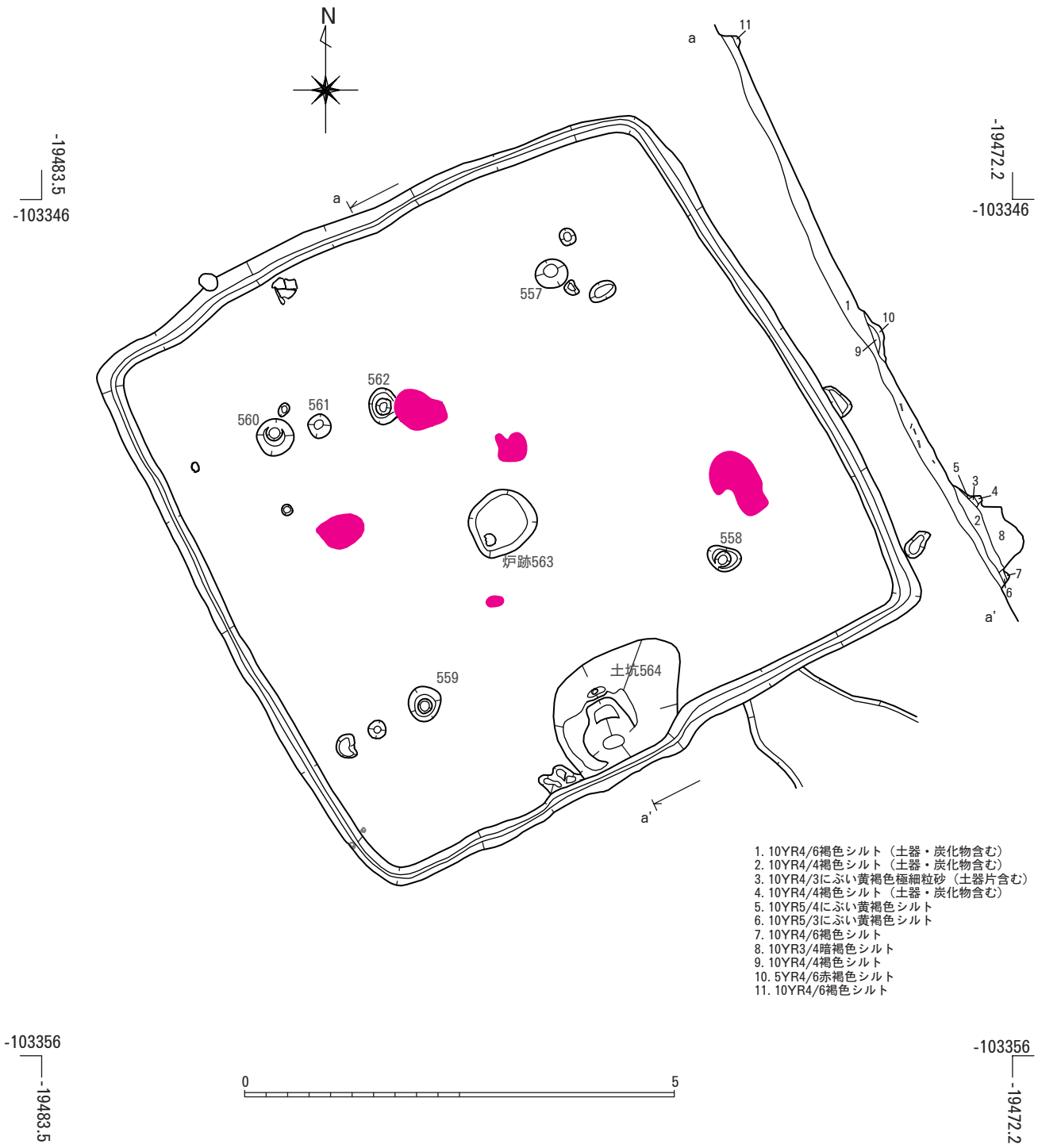


図 5 . 14　竪穴住居501平・断面図〔1/70〕

後の削平を受けていたことによるもので、実際には数十 cm 以上の深さのある遺構だったと考えるべきであろう。

住居跡の壁面に接して完周する状態で周壁溝が 1 条検出されている。幅約0.2m、床面からの深さ約0.1m の規模であった。住居外部へは周壁溝は延びておらず、排水溝としての機能を果たしていた可能性は低い。また、柱穴560・557・558・559は当竪穴住居の上屋を支える主柱痕跡と考えられる。柱穴561・562も主柱穴に類似した規模の柱穴で、上屋を支えるなんらの役割を果たしていた可能性がある。いずれも深さ約0.2m 程度であった。

住居南辺中央には、長軸長約1.75m・短軸長約1.3m 規模の平面不整楕円形の土坑564が、深さ約0.4m 程度床面から掘り込まれた状態で検出された。壁面に平坦部を持ち、 2 段になって落ち込む形態の土坑である。この平坦面の北部には、径0.05m・深さ約0.05m 規模の小さな凹みが検出された。杭状の材を打ち込んだ痕跡とも考えられる。住居中央には床面で、長軸長約0.4m・短軸長約0.3m・深さ約0.2m 規模の土坑563が検出され、底面と壁面には赤色の焼土層が約2〜3cm の厚さで形成されていた。炉跡と考えられる。

また、注目されるのは、当住居跡の床面には、柱穴558の北側、炉跡である土坑563の南北両側、柱穴562の東側、柱穴560の南側にそれぞれ焼土面が確認された。これは、調査時の所見では、床面上に堆積しているのではなく、床面そのものが赤化している状態であった。床面そのものが焼けたか、住居掘削時の凹みを赤色焼土で埋めて平坦面を作り出したかのいずれかと考えられる。いずれも赤色焼土の厚さは 3 cm 程度であった。

出土した土器群には、太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片や凹面をもつ尖底状の底部の壺破片などがみられる。また、床面に貼りつく状態で、台杯鉢片が出土している。このことから、当住居跡が機能し埋積した時期は庄内式期に相当すると考えられる。また、土器片に混じって、住居西部では埋土中から径20cm 程度の不整形な白色粘土塊が出土した。これは、竪穴住居230のように床面に埋置された状態ではなく、埋土中に土器細片とともに廃棄されたものと考えられる。後述するように、周囲の土坑や落込みからは、白色粘土塊が複数出土しており、それらを用いた作業に伴って住居廃絶後に埋土中に混入した可能性が高い。

その他の居住関連遺構

その他、調査区域のほぼ全域から、柱穴が検出されており、それらの多くは、竪穴住居などの建物を構成していたと考えられる。以下は、そのうち、特徴的な検出状況や遺物出土状況を示す遺構に関して詳述する。

【柱穴287】（図 5 . 15）

調査区のほぼ中央、X=-103332m、Y=-19490m 附近で検出された。平面形態は径約0.3m の不整円形、深さ約0.25m の規模であった。底面に近い場所に、長軸長約0.3m、短軸約0.15m 程度の大きさの礫が埋置され、その上面に土器片が貼り付いた状態で出土している。礫は柱の根石・礎石として利用されたもので土器は掘方に含まれていたものと考えられるが、柱の抜き取り後に、柱穴に遺物が投棄された可能性もある。

出土した土器片には、広口壺の胴上部〜頸部片と思しきものがあった。器形からは、弥生後期後葉〜庄内式期に相当すると考えられる。柱穴の掘方内の土器片の場合は柱設置時、柱抜き取り後の投棄であれば遺構廃絶時が弥生後期後葉〜庄内式期だったと考えられる。

【柱穴99】（図５.16）

調査区の東辺の中央部附近、X=-103344～45m、Y=-19459～60mで検出された。平面形態は径約0.3mの不整円形、深さ約0.25mの規模であった。埋土は褐色極細粒砂であった。検出面で、幅約0.15m程度の大きさの土器片が検出され、その下位にも土器片が多数出土した。下位の土器片を接合すると、小型の高杯が完形に近い状態で復元できた。このことから、後世の土圧などによって破壊されたものの、完形に近い高杯がそのまま柱穴内に埋置され、その上に大型の土器片がかぶせられた状態だったと推測できる。もちろん、先述のように、検出遺構面は、旧地表面から削平を受けており、実際にはこれら土器片群が、遺構上面に露出していた状態だったとは考えられない。当遺構が柱穴として機能していたのであれば柱の抜き取り後に、柱穴にこれらの土器が投棄された可能性が高い。また、柱穴ではなく、もともと儀礼的意味合いから、完形高杯を埋置した可能性もある。

その他の出土した土器片には、タタキメの残る甕・鉢片と思しきものがあった。後の出土遺物の説明にも見えるように、上記の高杯は、庄内式期に帰属する可能性が高い。したがって、柱抜き取り後の投棄であれば遺構廃絶時が弥生後期後葉～庄内式期だったと考えられる。当初から土器埋納を目的とした遺構であった場合には、そ

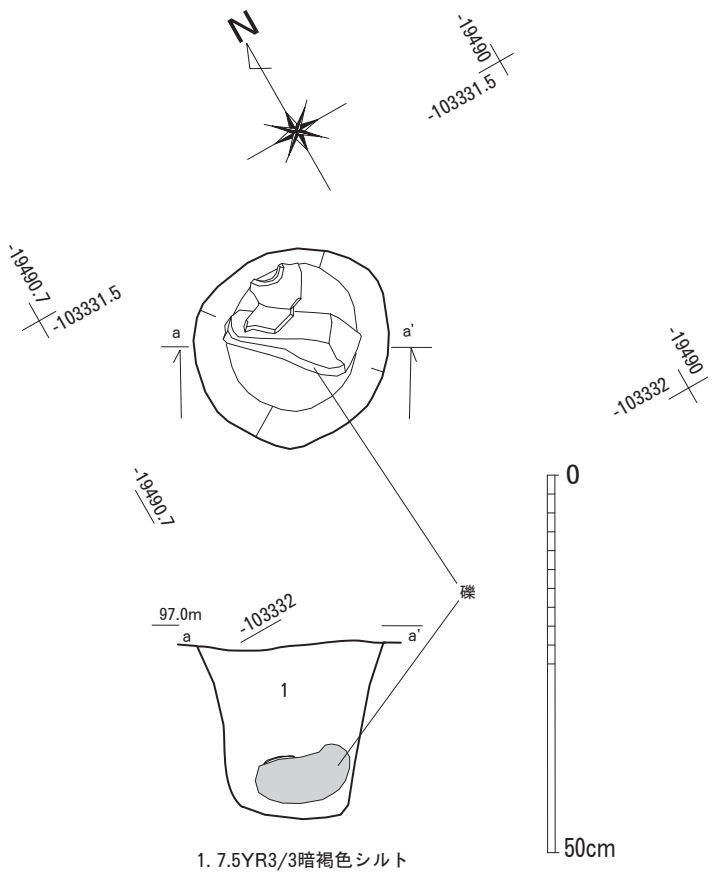


図５.15　柱穴287遺物出土状況図〔1/10〕

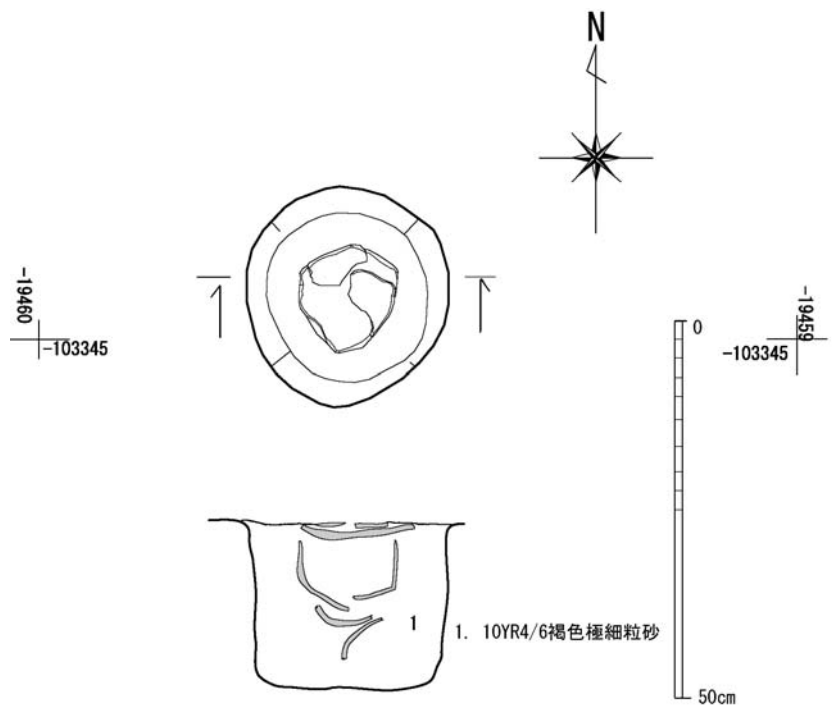


図５.16　柱穴99遺物出土状況図〔1/10〕

の形成期は庄内式期と考えられる。

粘土塊が出土した遺構

【土坑471】（図５.17）

当遺構は、調査区の東半部、X= -103350～-103353m、Y=-19469～-19471m で検出された。平面形態は検出面では、長軸長約2.68m・短軸長約1.80m の不整方形で深さ約0.35m の規模であった。ただし、北西端と南東端が他の遺構によって削平されており、正確な形状は不明である。また、中央やや南東より

図５.17　土坑471遺物出土状況図〔1/20〕

の部分がさらに凹んでいる。凹み部は平面が長軸長約約1.8m・短軸長約0.7m の不整円形で深さ約0.25m の規模であった。この凹み部の底面～肩部には2個の白色粘土塊が東西に並んだ状態で底面に埋置されていた。西側の粘土塊 1 の規模は長軸長約0.7m・短軸長約0.5m・厚さ約0.1m で南北に長い不整形体を呈していた。東側の粘土塊 2 は径約0.4m の規模の不整円形で、厚さは約0.1m であった。また、遺構底面では、その白色粘土塊の南部に大型土器片が、さらにその南部に台石状の礫が 1 点と礫砕片があった。凹み部の南側にも礫が検出された。

また、底面で検出されたこれらの遺物を覆う状態で、遺構の最下層に厚さ0.1m 程度の炭片集積層が堆積していた。その上面には褐色極細粒砂が堆積していた。つまり、落込み底面に上記の遺物を置いた上に人為的に炭を大量にかけ、それをさらに埋めたと考えられる。後章で詳述するように、理化学的分析や考察の結果、この 2 つの粘土塊の成分は当遺跡出土土器の胎土に類似している。これら粘土塊は土器・土製品の素材であった可能性が高いとすれば、当遺構は素材粘土を落込み内に保存していた施設であったとも考えられる。

出土した土器群には、太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片の細片が多数見られる。また、凹み部底面から出土した土器は、尖底状の底部の壺と考えられる。これらの特徴から、当遺構出土土器群は、庄内式期に帰属する可能性が高い。遺構形成や粘土塊の埋納も当該期と考えられる。

【土坑509】（図 5 . 18）

当遺構は、調査区の東半部、X= -103346～-103346.5m、Y=-19482～-19482.5m で検出された。平面形態は検出面では、長軸長約0.5m・短軸長約0.31m の不整方形で深さ約0.07m の規模であった。底面は中央付近がやや高まり、南部・北部がそれぞれ 2 ～ 3 cm 凹む形状であった。そして、それぞれの凹みの上には白色粘土塊が底面に接する状態で置かれていた。

北半部の粘土塊 1 の規模は長軸長約0.2 m・短軸長約0.15m・厚さ約0.05m で不整形体を呈していた。南半部の粘土塊 2 は長軸長約0.25m・短軸長約0.17m・厚さ約0.05 m で不整形体であった。この 2 点は、他の遺構から出土した粘土塊同様に白色を呈するのだが、その内部には一部が赤色を呈する部分が斑にみられた。埋土は褐色礫まじりシルトであった。後章で詳述するように、理化学的分析や考察の結果、この 2 つの粘土塊の成分は当遺跡出土土器の胎土に類似している。これら粘土塊は土器・土製品の素材であった可能性が高いとすれば、

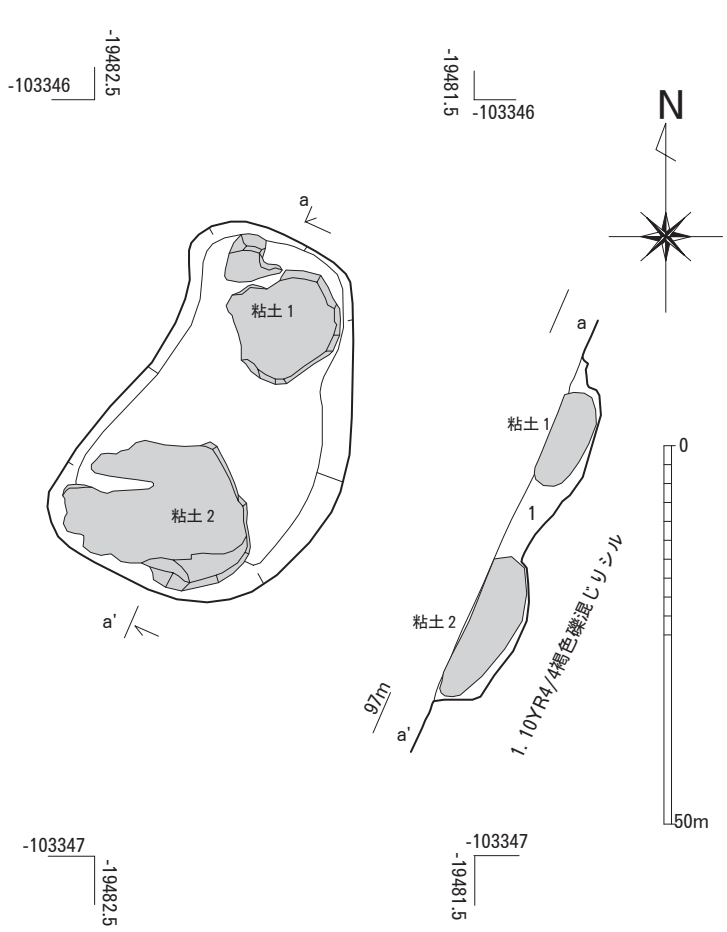


図 5 . 18　土坑509粘土塊出土状況図〔1/10〕

当遺構は素材粘土を落込み内に保存していた施設であったとも考えられる。当遺構では、これら素材粘土を小規模な土坑に2個体おいて、それを埋めたものと考えられる。

また、注目されるのは、当遺構に接して竪穴住居501が検出されていることである。2つの遺構の距離は50cm程度であり、同時存在していたとすると。竪穴住居501の上屋端の内側にあった施設とも考えられる。独立した遺構ではなく、竪穴住居501に付帯する施設であった可能性がある。

出土した土器片には、太いタタキメが器面にみられる甕・鉢片の細片が多数見られる。器形などからは、弥生後期後葉～庄内式期に相当すると考えられる。白色粘土塊埋納もこの時期に相当すると考えられる。ちなみに、竪穴住居501の機能時期は庄内式期と推定され、両遺構が同時存在していた可能性はある。

土器の出土した遺構

【落込み494】（図5.18）

当遺構は、調査区の東半部、X= -103354～-103356m、Y=-19472～-19474mで検出された。幅約1.8m深さ約0.15mの規模で、東西方向に溝状に展開する不整形な落込み状遺構である。北端は竪穴住居501、南端は土坑527に切られている。埋土は、炭混じりの10YR4/4褐色礫混じりシルトであった。

遺構の中央からは、底面に接する状態で、2個体の土器が検出された。底部・口縁部ともに欠損しているために両個体の実測図を後章に掲載できなかったが、両個体とも球胴化の著しい形態の壺あるいは

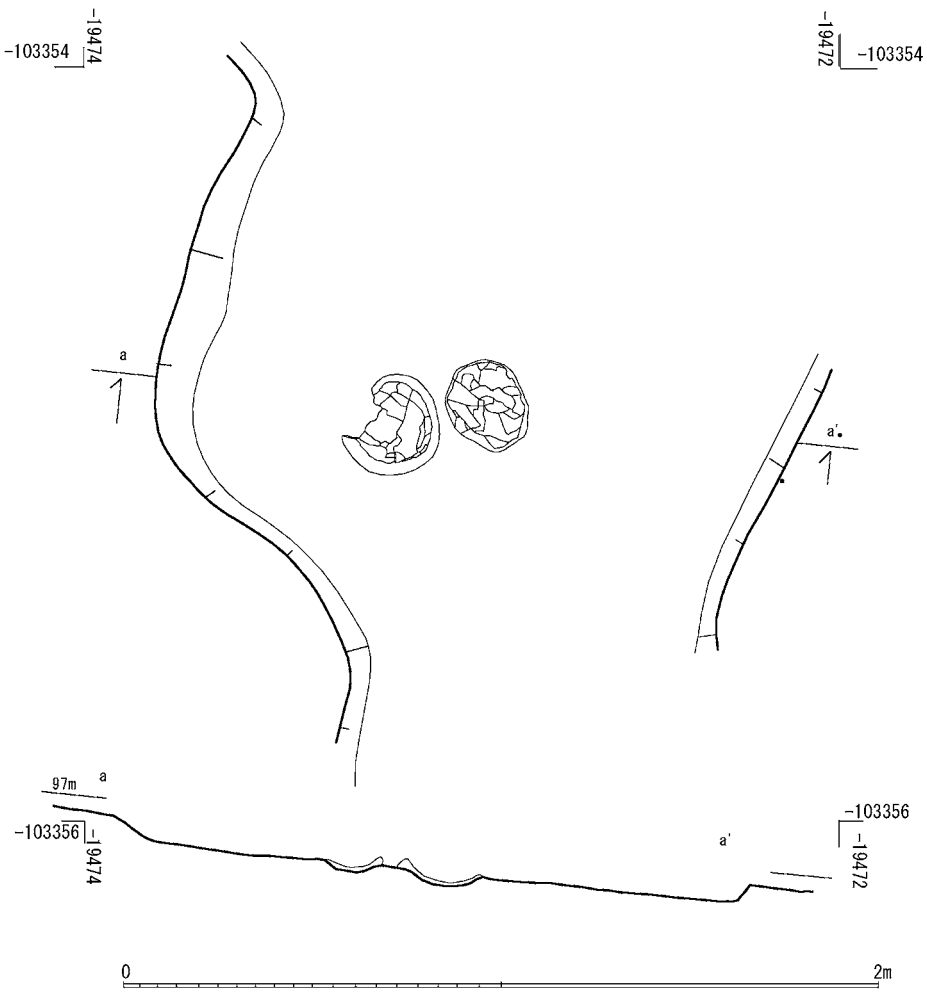


図5.19　落込み494土器出土状況図〔1/20〕

甕と考えられる。土器形態から庄内式～布留式初頭の土器と考えられる。埋土が庄内式期に埋積した竪穴住居501に切られていることから、遺構埋没時期は庄内式以前と考えるべきである。遺構形成・埋没期は庄内式前半と考えるのが自然と思われる。

土坑墓と考えられる遺構

【土坑墓46】（図５.20）

当遺構は、調査区の北西部、X= -103316～-103317m、Y=-19509～-19511m 附近で検出された。長軸長約1.2m、短軸長約0.6m、深さ約0.35mの規模で、平面が長楕円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR3/4暗褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。検出深長が40cm 近くあるにもかかわらず埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を推薦したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。

【土坑墓78】（図５.21）

当遺構は、調査区の北部中央、X= -103324～-103326m、Y=-19494～-19496m 附近で検出された。長軸長約1.4m、短軸長約0.6m、深さ約0.35mの規模で、平面が長楕円形を呈する遺構である。調査区全

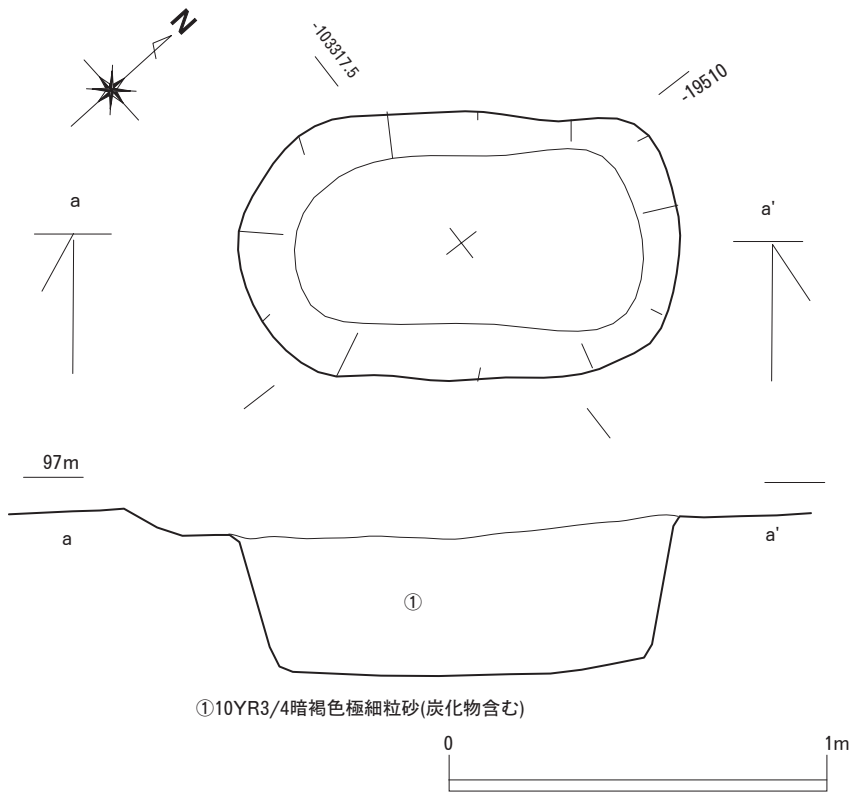


図５.20　土坑墓46土層平・断面図

体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十cmあったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR3/4暗褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。検出深長が40cm近くあるにもかかわらず埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を水洗したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。また、近接して土坑墓79・80など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺には土坑墓群が形成されていたと考えられる。

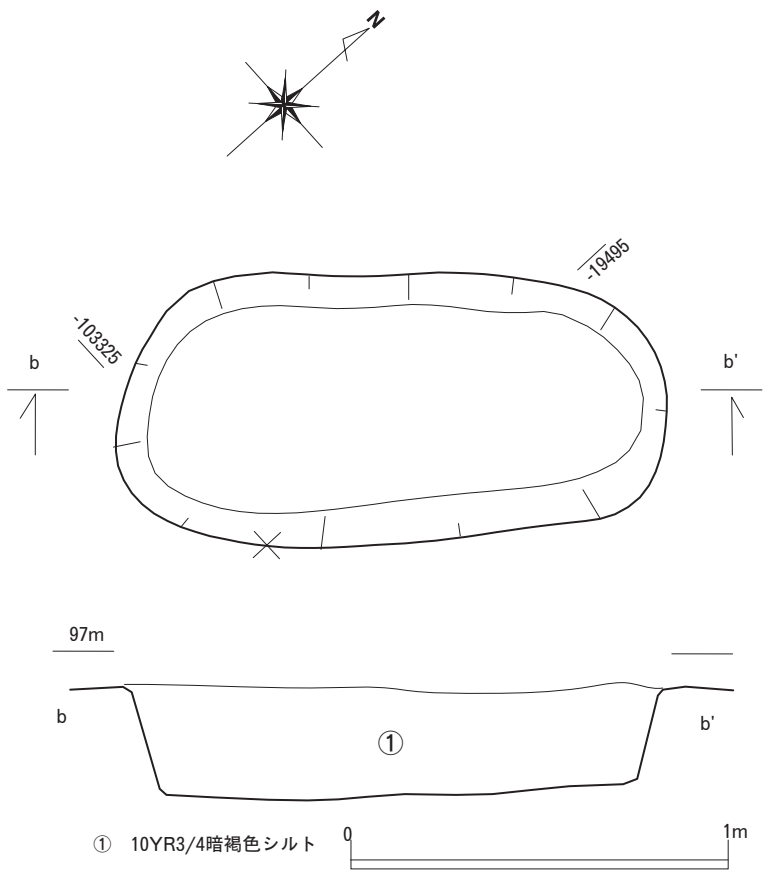


図5.21　土坑墓78平・断面図〔1/20〕

【土坑墓79】（図5.22）

当遺構は、調査区の北部中央、X= -103324～-103326m、Y=-19494～-19496m附近で検出された。長軸長約1.6m、

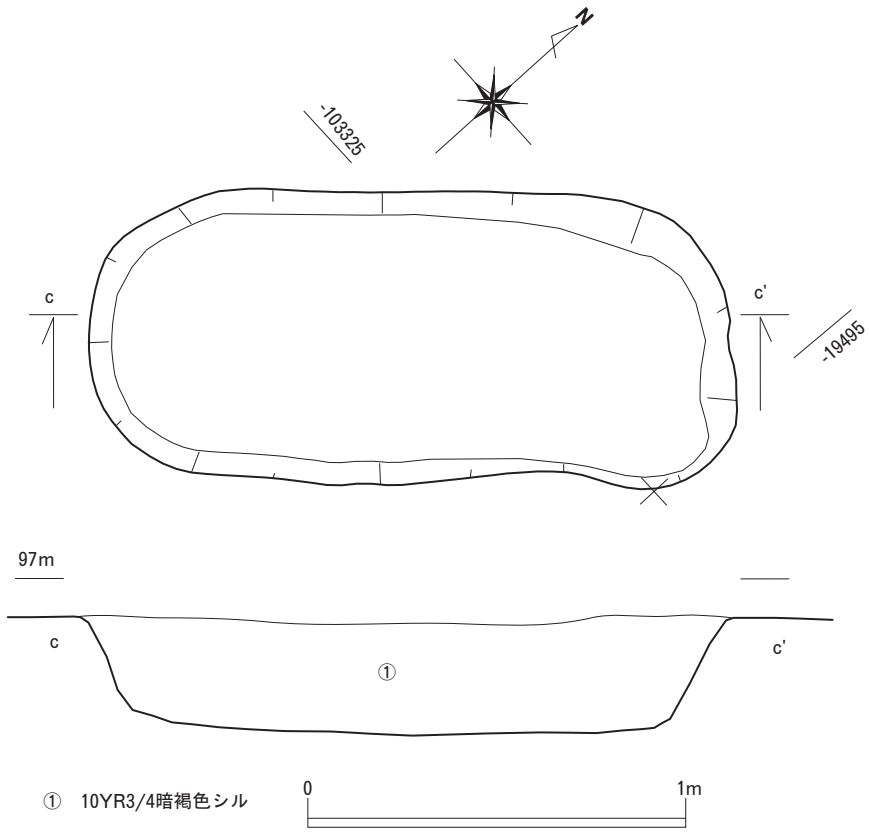


図5.22　土坑墓79平・断面図

短軸長約0.7m、深さ約0.35mの規模で、平面が長楕円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構深長はさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR3/4暗褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。検出深長が40cm 近くあるにもかかわらず埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を推薦したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。また、近接して土坑墓78・80など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺には土坑墓群が形成されていたと考えられる。

【土坑墓80】（図 5 . 23）

当遺構は、調査区の北部中央、X= -103326～-103327m、Y=-19494～-19496m 附近で検出された。長軸長約1.5m、短軸長約0.9m、深さ約0.35mの規模で、平面が長楕円形を呈する遺構である。調査区全

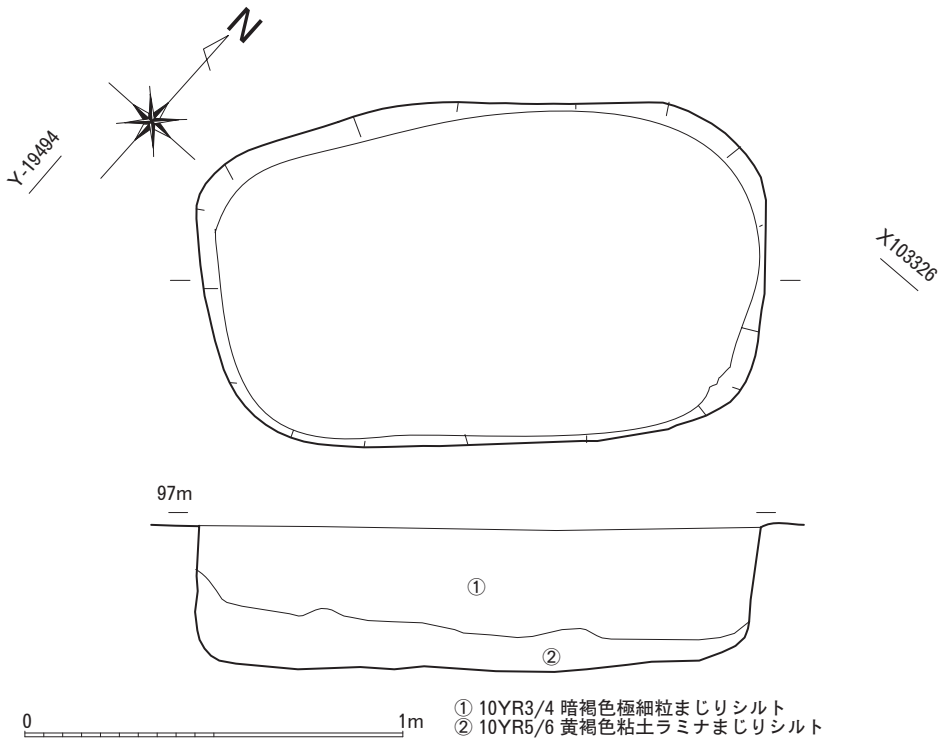


図 5 . 23　土坑墓80平・断面図〔1/20〕

体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構深長はさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。埋土は、上層が10YR3/4暗褐色極細粒砂、下層が白色シルト葉理を含む10YR5/6黄褐色粘土で、両層とも炭化物の細片も含んでいる。厚さ10cm 程度の下層については、掘り込み後に周囲からの流れ込みによって埋積した層とも考えられる。しかし上層については、厚さ約30～40cm にも及ぶ範囲で埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、上層堆積物の形成は掘削後人為的に埋められた結果と考えられる。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を水洗したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。また、近接して土坑墓78・79・130など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺には土坑墓群が形成されていたと考えられる。

【土坑墓130】（図 5 . 24）

当遺構は、調査区の北半部中央、X= -103327～-103329m、Y=-19492～-19494m 附近で検出された。長軸長約1.9m、短軸長約1.1m、深さ約0.15mの規模で、平面が不整長楕円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR3/4暗褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を水洗したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。また、近接して土坑墓78・79・130など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺には土坑墓群が形成されていたと考えられる。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。

【土坑墓175】（図 5 . 25）

当遺構は、調査区の北西部中央、X= -103320～-103322m、Y=-19506～-19508m 附近で検出された。長軸長約1.3m、短軸長約0.8m、深さ約0.40mの規模で、平面が不整長楕円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR3/4暗褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を水洗したが、人骨や副葬品に相当する遺物は

確認できなかった。また、近接して土坑墓46など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺にも土坑墓群が形成されていたと考えられる。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。

【土坑墓209】（図５.26）

当遺構は、調査区の北西部、X= -103326～-103328m、Y=-19499～-19501m 附近で検出された。長軸長約1.6m、短軸長約0.7m、深さ約0.2mの規模で、平面が不整長楕円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR3/4暗褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土

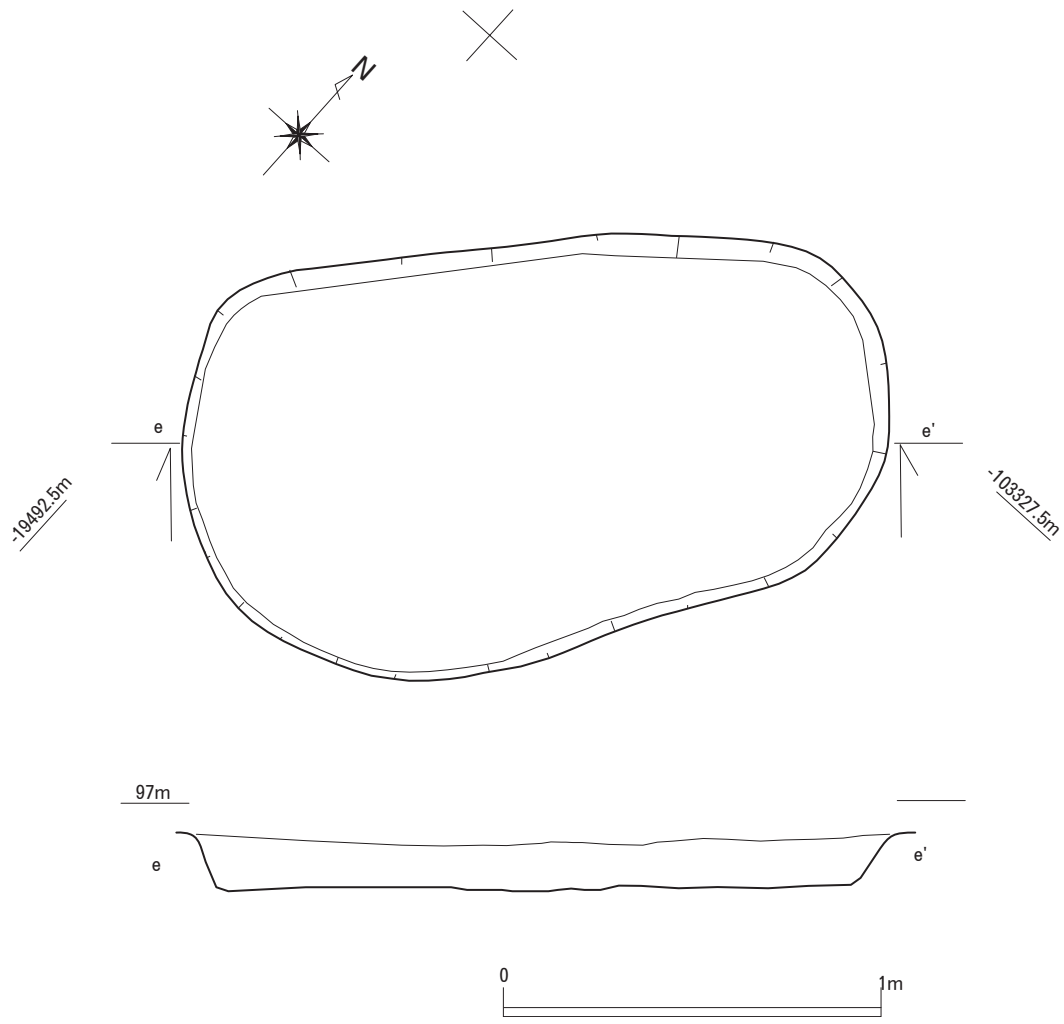


図５.24　土抗墓130平・断面図〔1/20〕

坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を水洗したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。また、近接して土坑墓46•175など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺にも土坑墓群が形成されていたと考えられる。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。

【土坑墓221】（図５.27）

当遺構は、調査区の北西部、X=-103325～-103327m、Y=-19497～-19500m附近で検出された。長軸長約1.8m以上、短軸長約0.8m以上、深さ約0.40mの規模で、平面が不整長楕円形を呈すると考えられる遺構である。西半部が現代の撹乱によって破壊されていて、正確な全体形態は不明である。また、調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十cmあったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR3/4暗褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は

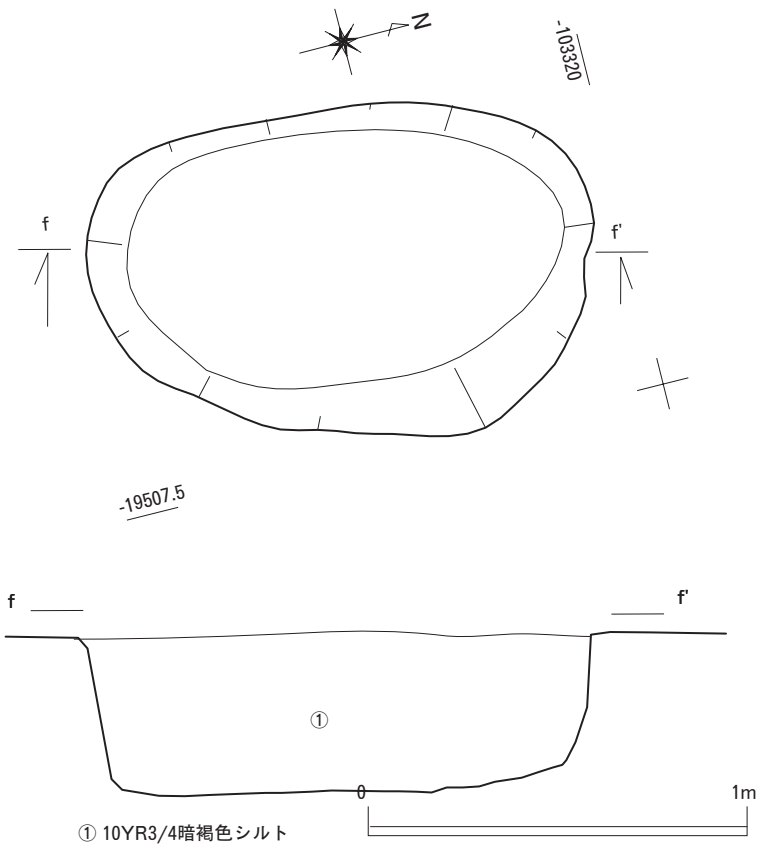


図５.25　土坑墓175土層断面図

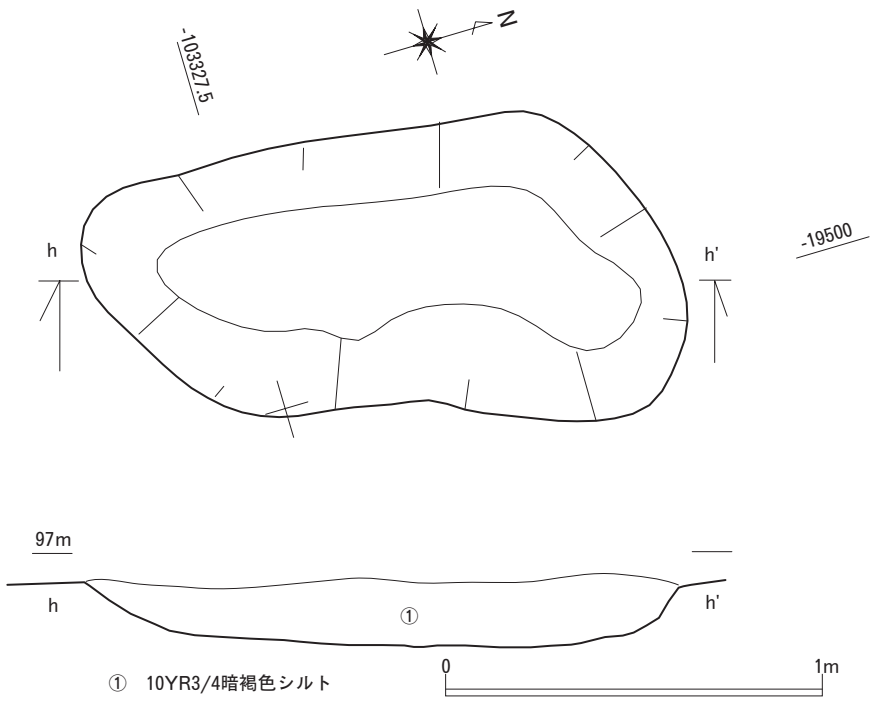


図５.26　土坑墓209平・断面図

一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を水洗したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。また、近接して土坑墓78・79・80など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺にも土坑墓群が形成されていたと考えられる。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。

【土坑墓283】（図５.28）

当遺構は、調査区の北西部、X= -103319～-103320m、Y=-19502～-19504m 附近で検出された。長軸長約1.6m、短軸長約1.1m、深さ約0.38mの規模で、平面が不整長楕円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR3/4暗褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を水洗したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。また、近接して土坑墓46・175など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺にも土坑墓群が形成されていたと考えられる。

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。

【土坑墓341】（図５.29）

当遺構は、調査区の中央、X=-103341～-103343m、Y=-19501～-19503m 附近で検出された。長軸長約1.4m、短軸長約0.75m、深さ約0.45mの規模

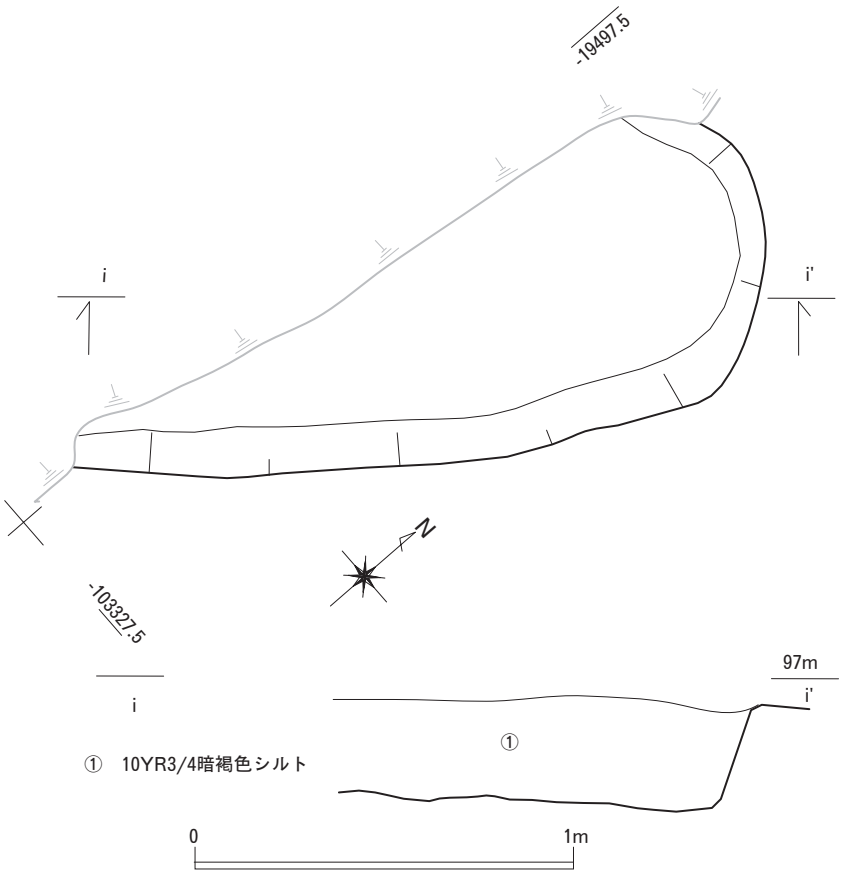


図５.27　土坑墓221平・断面図〔1/20〕

で、平面が不整長楕円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十cmあったと考えるべきであろう。断面形態は、側壁がやや開きながら上方へと直線的に立ち上がり底面は水平となる、逆台形を呈していた。

埋土は10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂で炭化物の細片を含んでいる。埋土質は単一で、流れ込みなど自然堆積の痕跡は一切看取できない。このことから、当遺構は掘削後人為的に埋められた可能性が高い。埋土中からは微細な弥生土器片あるいは土師質土器片しか出土していない。形態・規模・埋積状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。最下層を中心に埋土を水洗したが、人骨や副葬品に相当する遺物は確認できなかった。また、近接して土坑墓の可能性のある土坑342など酷似した形態の遺構が主軸方向をそろえて検出されていることから、当遺構周辺にも土坑墓群が形成されていた可能性がある。ただし、土坑342はやや不整形であるため土坑墓という性格を確定することは難しい。

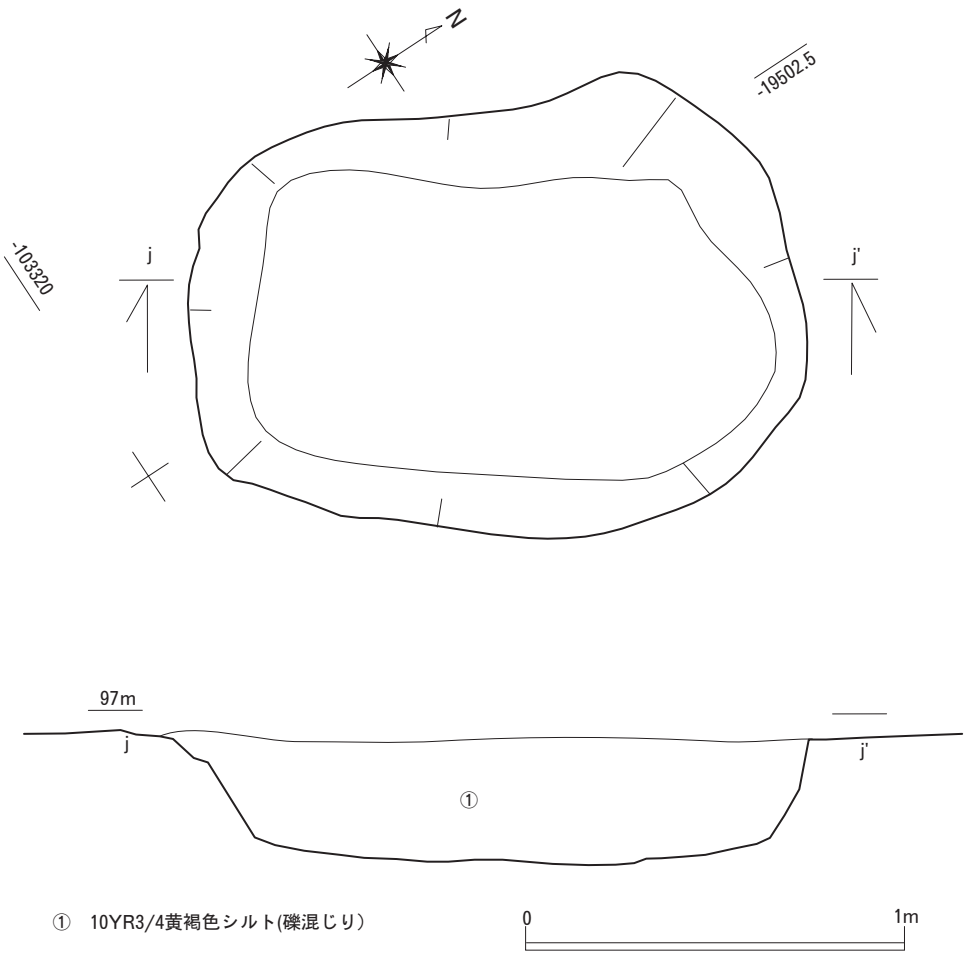


図5.28 土坑墓283平・断面図〔1/20〕

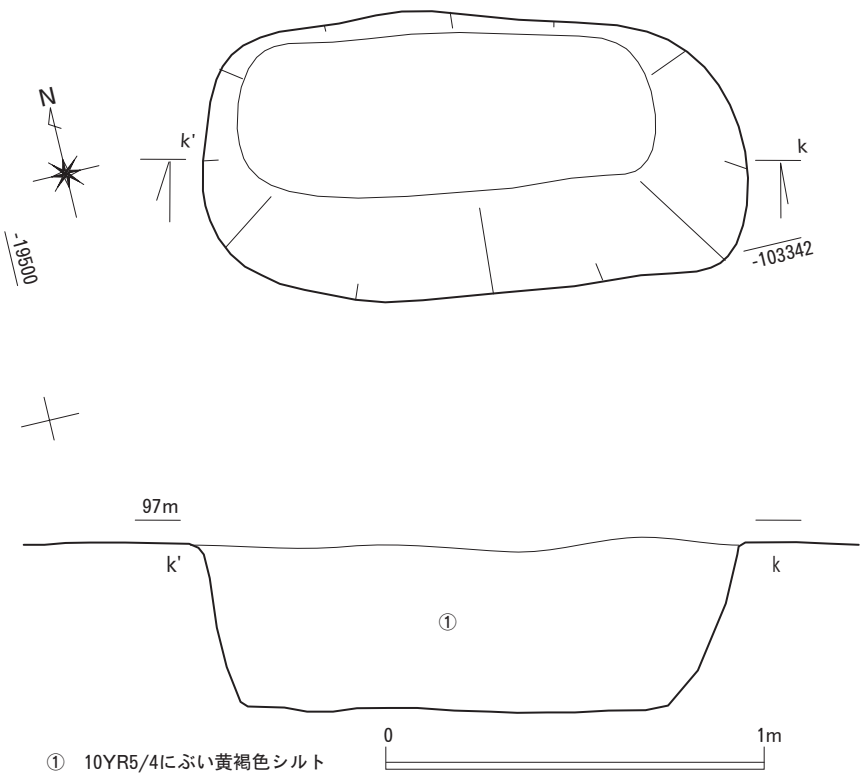


図5.29 土坑墓341平・断面図〔1/20〕

出土土器片が微量なため、詳細な時期の特定は難しい。ただ、周囲に検出された古墳時代初頭遺構群とほぼ同じ埋土質であり微細な炭化物を含むというという特徴も共通することから、当遺構も同一時期に形成されたと考えるのが妥当であろう。

その他の遺構

【溝460】（図５.30）

調査区東辺部で、南北方向に展開する不整形な溝状の落込みが検出された。最大幅は3.9ｍ程度、深さは0.2～0.3ｍの規模である。南端部では、二股に分かれる形状となっている。埋土中には上層部（図5.30の①）では多量の炭化物と土器片が含まれていた。多量に出土した土器片は著しく細片化していた。土器片接合作業を行ったがほとんど接合するものがなく、結果として図化可能な土器片は僅少となり後章では少数の遺物しか掲載できなかった。このことから、当遺構出土土器片は、細かく破砕した状態で炭化物とともに当遺構に廃棄されたと考えられる。

当遺構の西側には竪穴住居250・230・501が、南側には竪穴住居367が近接して検出されている。さらに、竪穴住居の形状は検出できなかったものの、当遺構東側には無数の柱穴が検出されている。これらは竪穴住居などを構成する柱の痕跡と考えられ、当遺構近辺は居住遺構の密集領域であったと類推できる。また、出土土器は細片が多く詳細な時期認定は難しいものの、おおむね弥生時代終末～古墳時代初頭の土器片と考えることが可能である。上記のような遺構形状・埋土状況・遺物出土状況などから考えると、当遺構は居住域内部の生活残滓の廃棄施設として機能したと考えられる。

【谷16】（図５.31・５.32）

調査区南辺部で検出された大規模な落込みである。北端を頂点とした平面三角形の範囲にわたり、その中央の調査区南辺附近に向かって、傾斜して大きな凹地を形成している。検出面で東西方向の幅約30ｍ、深さ約1.8ｍの規模であった。

その形状から、調査区より南方向に向かって形成された開析谷の上部に相当すると考えられる。既往の調査では、当調査区南方約100ｍの地点では、沼状の地形が広がっていることから、当遺構からその湿地領域に向かう谷状地形が形成されていた可能性が高い。検出面から人為的に掘削したと思われる痕跡はなく、自然地形と考えられる。

堆積土層は、図5.32にみられるように①～⑧層に細別できる。大別すれば、①～②層の上層、③～⑥層の中層、⑦・⑧層の下層に類別することが可能であった。出土遺物の取り上げもその大別層位に基づいて行った。このうち、中・下層からは周囲の居住関連遺構群同様に、弥生時代末～古墳時代主体の土

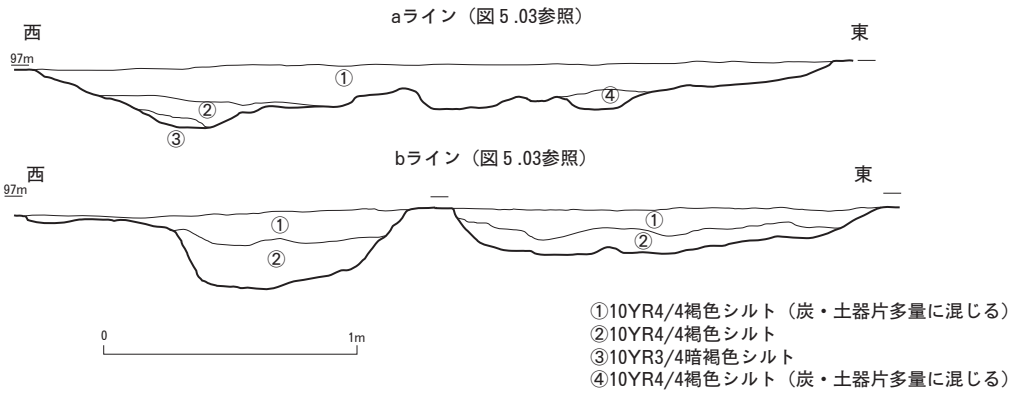


図５.30　溝460土層断面図〔1/30〕

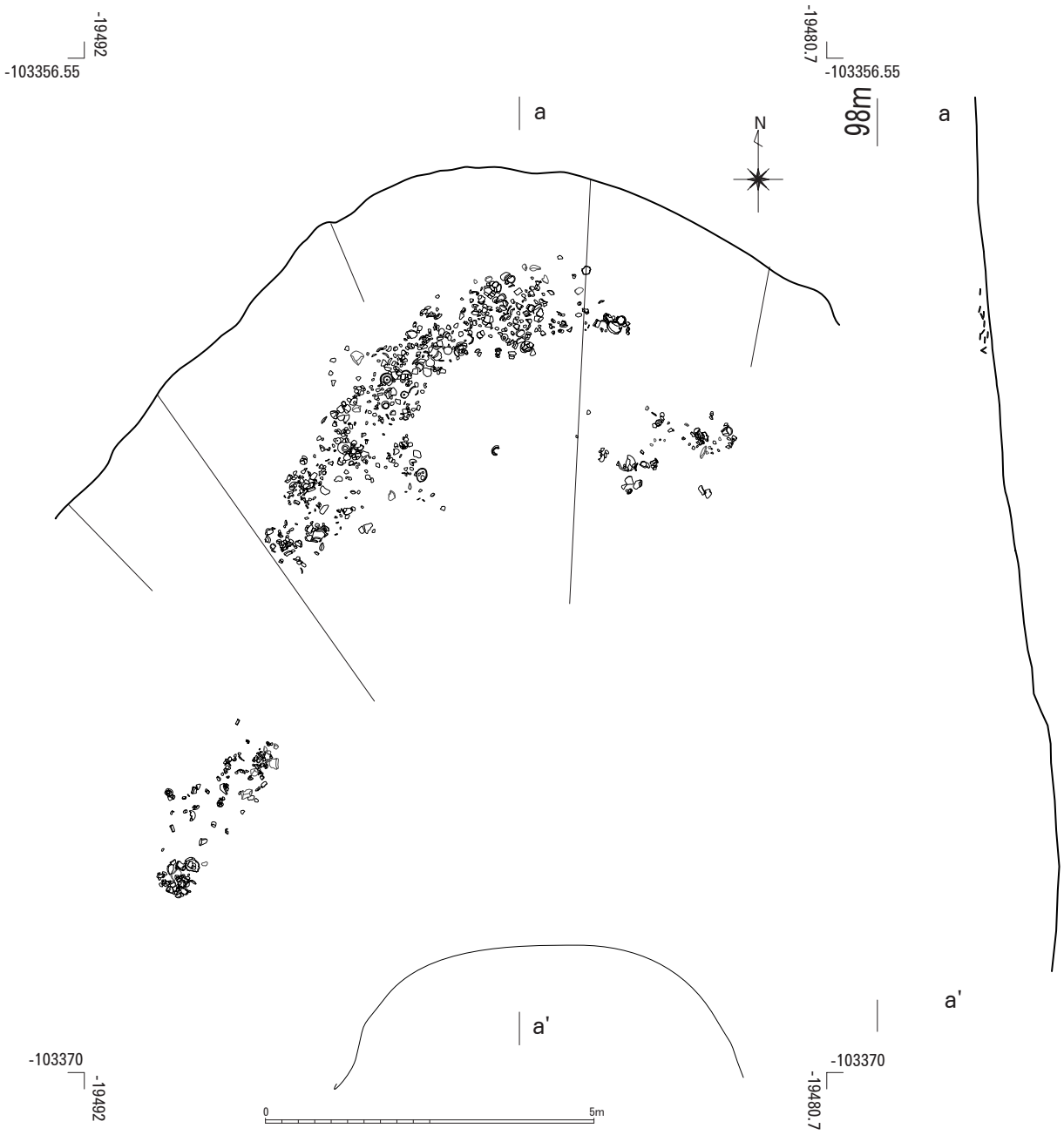
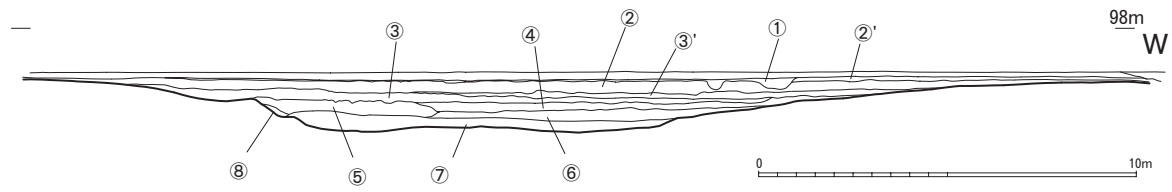


図５.31　落込み16土器出土状況図〔1/100〕



① 2.5Y5/4 黄褐色礫まじりシルト
②'10YR6/6 明黄褐色粗粒砂まじりシルト
② 10YR6/6 明黄褐色礫まじりシルト
③'10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂まじりシルト
③ 10YR4/3 にぶい黄褐色礫まじりシルト
④ 7.5YR4/2 灰褐色礫まじりシルト
⑤ 7.5YR3/3 暗褐色シルトまじり極細粒砂
⑥ 7.5YR4/2 灰褐色礫まじりシルト（鉄分・マンガン斑多く含む）
⑦ 10YR4/4 褐色極細粒砂まじり礫
⑧ 10YR4/4 褐色礫まじりシルト

図５.32　谷16土層断面図〔1/200〕

器が出土している。上層からは、奈良時代末～平安時代のものと考えられる須恵器・陶器・瓦片が出土している。このことから、当遺構は古墳時代初頭の集落形成時から開口していた谷部が、遺跡形成の同時期に一定程度埋積が進み、その後浅い窪地状態として残っていたものが古代に至って最終埋没したものと考えられる。

近辺での発掘調査では、東約100ｍの岩倉大鷺町内で、古代の条理地割遺構が検出されている。古代後半の平安時代には当該地域の微地形上の凹み部がおおむね埋積して、広い範囲にわたって条理制にもとづく畦畔・水路などが完備されたとも考えられる。

当遺構の中～下層からは、多量の土器が出土している。特に北～西部の谷上部付近からは、完形に近い状態の土器群が積み重なるように出土した。この土器出土範囲では、中・下層の各堆積単位は著しく薄くなり、分離か不可能な状態であった。

遺物群の中には、土器だけでなく径15～30cm の礫が複数みられた。遺物群の出土位置は、上述のように谷上部が中心で、肩部から投棄されたものが集積されたものと考えられる。検出時には土器・礫などが多量にみられたが、実際にはそれ以外の生活残滓なども一緒に廃棄されていたものと類推できる。集落内の廃棄施設として、この谷状地形が利用されていたものと考えられる。

出土した土器群の中には小型器台などが多数みられ、いわゆる庄内式の範疇で捉えうるものであった。出土土器については後章に詳述するが、型式学的特長からは、帰属時期に大きな時期差は見受けられない。遺物の堆積状況からも、遺物集中部において各土器はほとんど隙間なく折れ重なるように堆積しており、自然堆積による間層を挟み、長期間にわたって廃棄され続けた結果とは考えにくい状態であった。短期間の廃棄行為によって形成された可能性の高い出土状況といえる。集落機能時の廃棄物と考えると、この土器群の時期幅内に、当調査区で検出された古墳時代初頭の居住遺構群が形成されたとも考えられる。後述するように、各住居跡・柱穴から出土した土器の型式学的特長は、いずれも当遺構出土土器群の帰属時期の諸特徴から矛盾しないものである。

他の時期の遺構

【土坑165】（図 5 . 33）

当遺構は、調査区の北東部、X= -103329～-103331m、Y=-19457～-19458m 附近で検出された。長軸長約1.1m、短軸長約0.8m、深さ約0.25ｍの規模で、平面が不整長楕円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、底面がやや不整形で、北壁部が直立し、それ以外は緩やかに立ち上がる形態である。

当遺構の底面～埋土中位にかけて

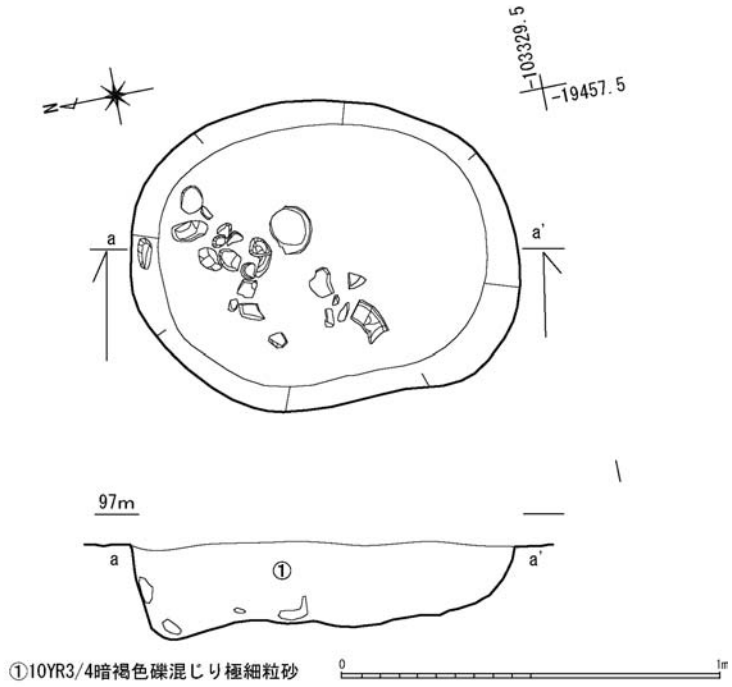


図 5 . 33　土坑165土器出土状況図〔1/20〕

は、須恵器・土師器・製塩土器片などが多数出土した。出土遺物の詳細は後章に詳述するが、その型式学的特長から、須恵器は古墳時代後期前葉に帰属すると考えられる。その他の遺物もこれに矛盾しない。そのため、当遺構の帰属年代も同一時期に比定出来よう。

製塩土器片などが複数個体分出土していることは注目されるが、それ以外に特殊な遺物の廃棄は看取できなかった。生活残滓などの廃棄遺構と考えられるが、詳細な遺構の性格は不明である。ただし、後述するように、近接して検出された土坑159も古墳時代中～後期に帰属する可能性がある。これらの状態は、当遺構とその近辺に古墳時代後期を中心とした生活遺構が形成されていたことを示唆している。

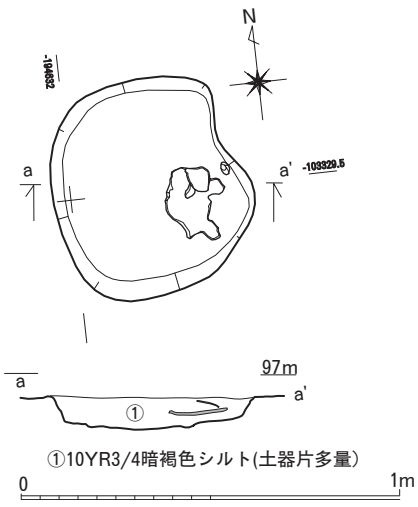


図5.34　土坑159土器出土状況平・断面図〔1/20〕

【土坑159】（図5.34）

当遺構は、調査区の北東部、X= -103328～-103330m、Y=-19463～-19464m 附近で検出された。長軸長約0.5m、短軸長約0.4m、深さ約0.15mの規模で、平面が不整円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、浅い逆台形であった。

埋土質は、10YR3/4暗褐色シルトで土器細片が多く含まれていた。遺構の東半部には大型土師器片が検出された。生活残滓などの廃棄遺構と考えられるが、詳細な遺構の性格は不明である。出土土器片中には、古墳時代のものと思われる須恵器片が含まれているが、すべて細片のため詳細な時期比定は困難である。ただし、古墳時代中～後期に埋積した遺構であったことは確実である。先述のように、近接して検出された土坑165も古墳時代後期の遺構であり、当遺構とその近辺に古墳時代後期を中心とした生活遺構が形成されていたと考えられる。

【炉跡385】（図5.35）

当遺構は、調査区の南東部、X= -103363～-103364m、Y=-19472～-19473m 附近で検出された。長軸長約0.68m、短軸長約0.58m、深さ約0.1mの規模で、平面が不整円形を呈する遺構である。調査区全体が削平を受けていることを考慮すれば、遺構の深長さはさらに数十 cm あったと考えるべきであろう。断面形態は、南半部が深くなる形態であった。この南半部の底面には、縄文土器深鉢片が貼り付いた状態で出土しており、その上面に環状に焼土を含む層が形成されていた。

焼土が環状にめぐることから、当遺構は炉跡の可能性が高い。土器片の上に焼土を含む土層が形成されていることから、土坑の底面に土器を置いた後、その上で焚火を行い、炎の周囲に焼土層が形成されたものと考えられる。

当遺構の形成時期は、底面に置かれていた縄文中期末土器と同一時期と考えられる。このことから、縄文時代中期末に、当調査区内で遺構形成があり、その後耕作などによる削平により遺構下部だけが残存したものと考えられる。当遺構が炉跡と考えられることから、屋外炉であったとも考えられるが、竪穴住居などが形成されていた可能性も大いにある。

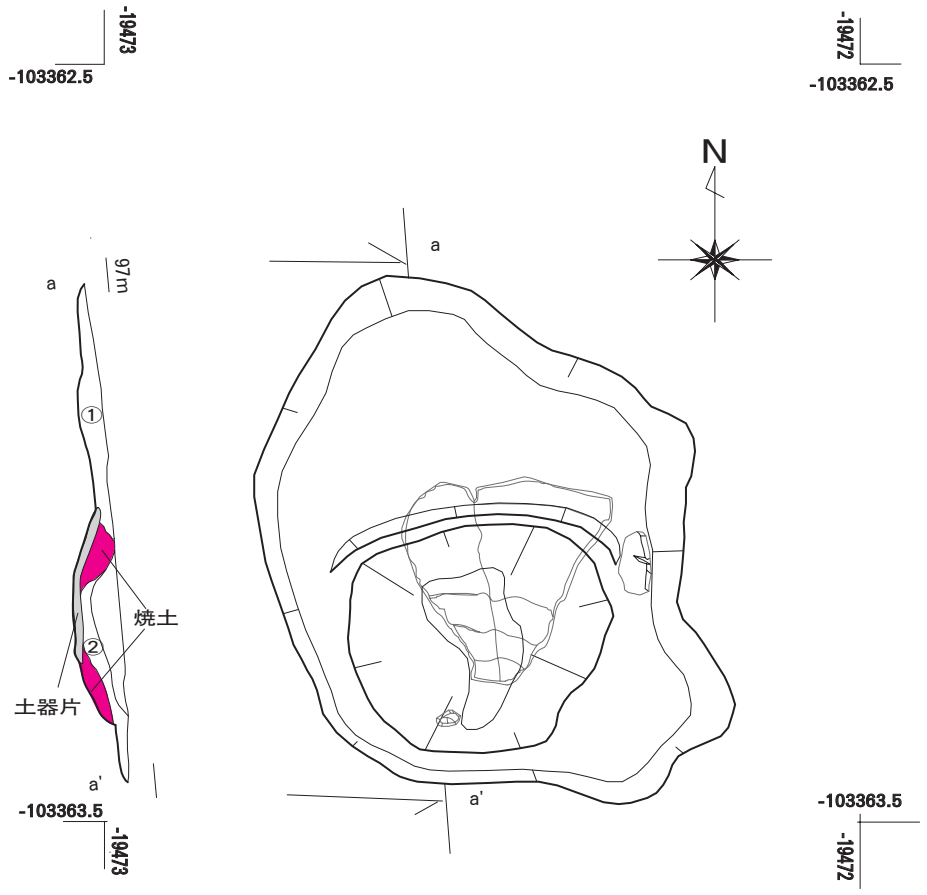


図５.35　炉跡385平・断面図〔1/10〕

ちなみに、調査区北東部の基盤層の深堀部では、基盤層内から縄文時代後期の土器片が出土している。当調査区内で縄文時代の生活遺構形成が行われていたことが想定される。

第 6 章　出土した遺物

調査区全体から出土した遺物は、コンテナ約60箱程度であった。先述のように遺物包含層が削平らされているため、遺物が出土するのは遺構内埋土からのみであった。しかも竪穴住居などの規模の大きな遺構の深度は浅く、柱穴などの小規模遺構が多数を占めたため、出土した遺物量は多くない。ただ、谷16において多数の土器片などが出土している。土器片は総数約1500片程度と推定され、石器や人為的に集落に持ち込まれたと考えられる礫類が約130点程度、鉄器が2点あった。

本章では、土器・石器・鉄器について、それぞれ記述を行い、出土遺物の状況について説明する。

第 1 節　土器

先述のように、土器が多量に出土した遺構は、谷16のみであった。その他の遺構からは、土器片は少量ずつしか出土していない。また、完形土器の出土は僅少で、写真図版に掲載した21点だけが完形に近い復元が可能であった。これ以外には、総数約1500片となる土器片のうち約220点の土器が実測可能な状態であった。遺物整理作業では、これらの下記の基準を満たす土器片のほぼすべてを実測して、本書に掲載した。

実測資料への採否の基準は、基本的に土器片がその個体のいずれかの部分の径の約1/5を上回る残存率を示すか否かにおいた。1/5以上残存している個体はすべて抽出し、各遺構の時期を知る上で重要な個体や搬入品など特徴的なものに関しては、それを下回る破片でも図化を行った。1/5未満の残存率の個体は、径を推定することが難しいため、展開図にはせずに破片形態と断面形態を示す作図を行った。このような、作図・掲載方針をとったことから、今回掲載した土器の各器種の組成には、実測への採否による任意性はまったくない。もちろん本書での掲載品の比率が真の器種組成比率を示すわけでないが、同じ基準で抽出されたものとして器種・型式の組み合わせを推し量る最低条件だけは確保している。

詳細は後述するが、出土土器の大半は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の所産と考えられる。先章に述べたように、ごく一部に縄文時代後期および古墳時代後期の遺構が検出されたことと、谷16の上層の埋没が古代におよぶ可能性がある。よって少量ながらこれらの時期の遺物が出土しており、これらも図化掲載した。以下は、時期別に出土土器の説明を行う。

(1) 弥生時代末～古墳時代初頭の土器群

【住居跡などから出土した土器群】

竪穴住居および、住居プランは確認できなかったものの住居を支える柱穴から出土した土器を図6.01に掲載した。

図 6 .01の 1 ～ 9 は竪穴住居 1 から出土した土器群である。いずれも、床面直上層から住居上屋焼失による炭火材・焼土などとともに検出されている。1は、受口形態の口縁部で鉢もしくは手焙形土器の破片と考えられる。文様はみられず、口縁部直下外面に粗いハケ調整痕がうかがえる。内外面とも橙色を呈する。 2 ・ 3 は底部片であるが、壺・甕・鉢いずれのものかは判断できない。 2 は底面中央が凹み高台様の形態となり、内面にはハケ調整痕が見える。外面橙色、内面褐色を呈する。 3 は著しく底部径が小さく、尖底に近い形状である。内外面とも灰色を呈する。 4 は、広口壺である。胴部下半が欠失しているが、住居内で胴上～口縁部破片と折れ重なるように出土していた。胎土や色調からみて同一個体の可能性が高い。また、胴下半部に相当する土器細片も集積した状態で多数出土したが、明確に上下部と

の接合関係が確認できなかった。おそらく完形状態で埋積したものと考えられる。内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられ、色調は浅黄橙色を呈する。5 ～ 9 は高杯もしくは小型器台の脚部である。6・9 は外面がヘラミガキ調整、内面がハケ後ナデ調整で仕上げられている。色調は 5 ～9いずれも橙色～褐色を呈する。

尖底を志向する底部形態や小型器台の存在などは、これら竪穴住居 1 出土土器群が庄内式期の型式学的特長を備えていることがわかる。先述のように、いずれも上屋材とともに床面直上に眞移籍していることから、住居焼失時に建物内部にあった土器群と考えるのが自然であろう。このことから、竪穴住居

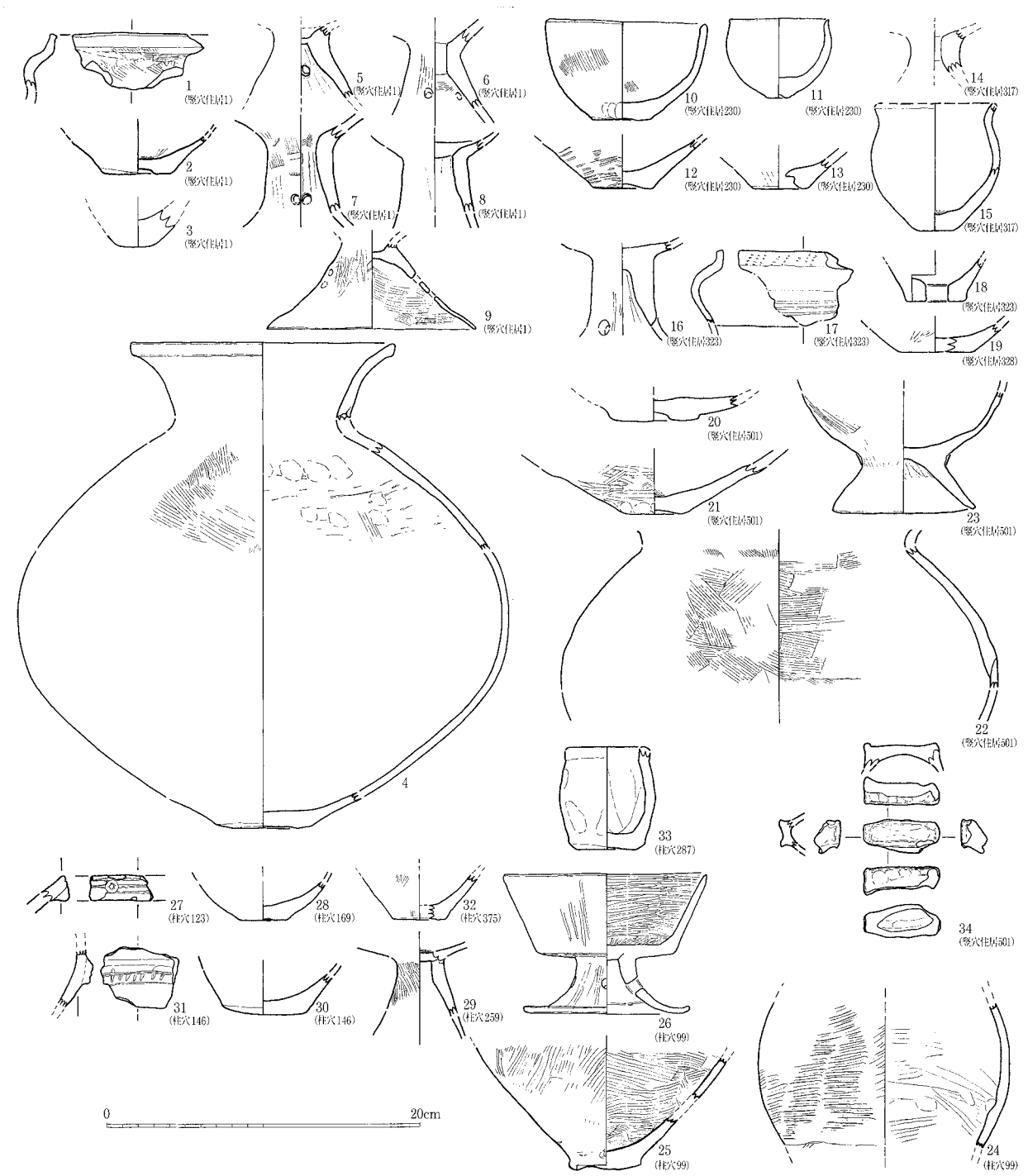


図 6.01　住居などから出土した土器

1は庄内式期に焼失・埋没したと思われる。

図6.01の10～13は、竪穴住居230出土土器である。これらも床面直上層あるいは炉跡内埋土から出土した。10・11は小型の鉢であり、いずれも内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられている。色調はいずれも橙色～黄褐色を呈する。12は甕あるいは鉢の底部と考えられるが外面にタタキメが看取できる。褐色を呈する。13は、住居中央の炉跡埋土から出土しているが、底面中央が凹む形状の甕あるいは鉢底部である。11が尖底気味の形態であることから、当住居址出土土器群も庄内式期に相当する可能性が高い。住居埋没も同時期であろう。

14は、竪穴住居317床面直上層出土の高杯あるいは器台脚部片である。灰白色を呈する。形態から弥生時代後期後葉～庄内式期のものと考えられる。15は、竪穴住居367床面直上層出土の小型鉢である。黄褐色を呈し、底部内面にハケ調整痕がうかがえる。著しく底部径が小さいた形態から弥生時代後期後葉～庄内式期のものと考えられる。

20～23・34は、竪穴住居501出土土器である。これらも床面直上層あるいは炉跡内埋土から出土した。20・21は底部片であるが、大きく開く胴部形態から壺と考えられる。いずれも外底面中央が凹む形態である。21は外面がヘラミガキ調整で仕上げられている。色調はいずれもにぶい橙色～褐色を呈する。22は壺胴部片で内外面ともハケ調整で仕上げられる。23は台付鉢もしくは台付壺と考えられる。内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられ、浅黄橙色を呈する。脚部は直線的開く「ハ」の断面形態である。34は不整方形の突出部をもつ土製品である。これら竪穴住居501出土土器群は底部径の小さな壺がみられることから、弥生後期末～庄内式期の所産と考えることができる。住居埋没時期も同様であろう。

24～26は、柱穴99出土土器群である。先述のように小柱穴状の遺構に大型土器片が集積している出土状態であった。24・25は、外面にタタキ成形が行われ、内面がハケ後ナデ調整で仕上げられた甕である。24が灰褐色、25がにぶい褐色を呈する。26は小型の高杯で、杯部の1/3が欠失している以外はほぼ完形であった。内外面とも密なヘラミガキ調整で仕上げられた精製品で、褐色を呈する。脚の円孔は4方向に穿たれている。逆台形を呈する深い杯部形態は庄内式～布留式初頭にみられるものである。この高杯の形態と弥生後期系統のタタキ甕が共存していることから、この土器群も庄内式期の所産と考えられる。

27～33はその他の柱穴状遺構から出土した土器である。柱穴123から出土した27は、壺あるいは器台口縁部で端面に円形浮文が貼付されている。柱穴169から出土した28は、鉢底部と考えられ、尖底上の形態である。柱穴259から出土した29は、甕底部で外面がハケ後ナデ調整で仕上げられている。30・31は柱穴146から出土している。31は鉢もしくは手焙形土器下位の屈曲部、30は壺あるいは甕の底部と考えられる。32・33は、柱穴287から出土した。これら27～33はいずれも弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の所産と考えられる。

【土坑・溝などから出土した土器】

図6.02に掲載したのは、土坑・溝などから出土した土器である。1～3は土坑390から出土した。1は高杯あるいは器台の脚部で浅黄橙色をする。2・3は壺・鉢・甕いずれかの底部片で、いずれも橙色～浅黄橙色を呈する。4～7は土坑471から出土している。4・5は壺・鉢・甕いずれかの底部片で、いずれも橙色～浅黄橙色を呈する。6は、受口状口縁の破片で手焙形土器もしくは鉢と考えられ、浅黄橙色～橙色を呈する。7は短頸でやや広がる口縁形態の大型壺で、図5.17にみえるように白色粘土塊とともに遺構底面に接した状態で出土した。胴部上半外面と底部内面がハケ調整、胴下部外面がヘラケズリ調整で仕上げられている。浅黄橙色～橙色を呈する。底径が著しく小さく、尖底に近い形状となる。

7 の壺の底部形態などから土坑471出土土器は庄内式期の所産と考えられ、当遺構の埋没時期も同時期と推定される。

8〜10は、土坑555から出土している。8・9は、壺・鉢・甕いずれかの底部片で、いずれも橙色〜浅黄橙色を呈する。8の外底面には木葉圧痕が見受けられる。10は、受口状口縁の破片で手焙形土器もしくは鉢と考えられ、浅黄橙色〜橙色を呈する。

11は、土坑389から出土した壺・鉢・甕いずれかの底部片で、橙色〜褐色を呈する。12は、土坑413出土した壺・鉢・甕いずれかの底部片で、橙色〜浅黄橙色を呈する。13は、土坑462出土した壺・鉢・甕いずれかの底部片で、橙色〜浅黄橙色を呈する。胴下部外面がハケ調整で仕上げられている。14は、土坑503出土した壺・鉢・甕いずれかの底部片で、褐色〜浅黄橙色を呈する。15〜20は、溝460出土土器片である。15・16・17・18は壺・鉢・甕いずれかの底部片で、いずれも底部内面がハケ後ナデ調整で仕上げられ、褐色〜浅黄橙色を呈する。19・20は、高杯あるいは器台の脚部で浅黄橙色をする。20は外面がヘラミガキ調整で仕上げられる。

21〜23は、溝19出土土器である。21は、口縁端部が垂下する形状の広口壺口縁部片で、口縁端面にヘラ描直線文4条と円形浮文が施されている。口縁部形態から、弥生時代後期前葉の所産の可能性がある。22・23は壺・鉢・甕いずれかの底部片で、褐色〜浅黄橙色を呈する。どちらも底径が著しく小さく、尖底に近い形状となる。この2点は弥生後期末〜庄内式期に特徴的な形態であり、21の形態特徴から推定される帰属時期とは差異がある。当遺構の形成時期は定かではないが、埋没時期は弥生後期末〜庄内式期と考えておくべきであろう。

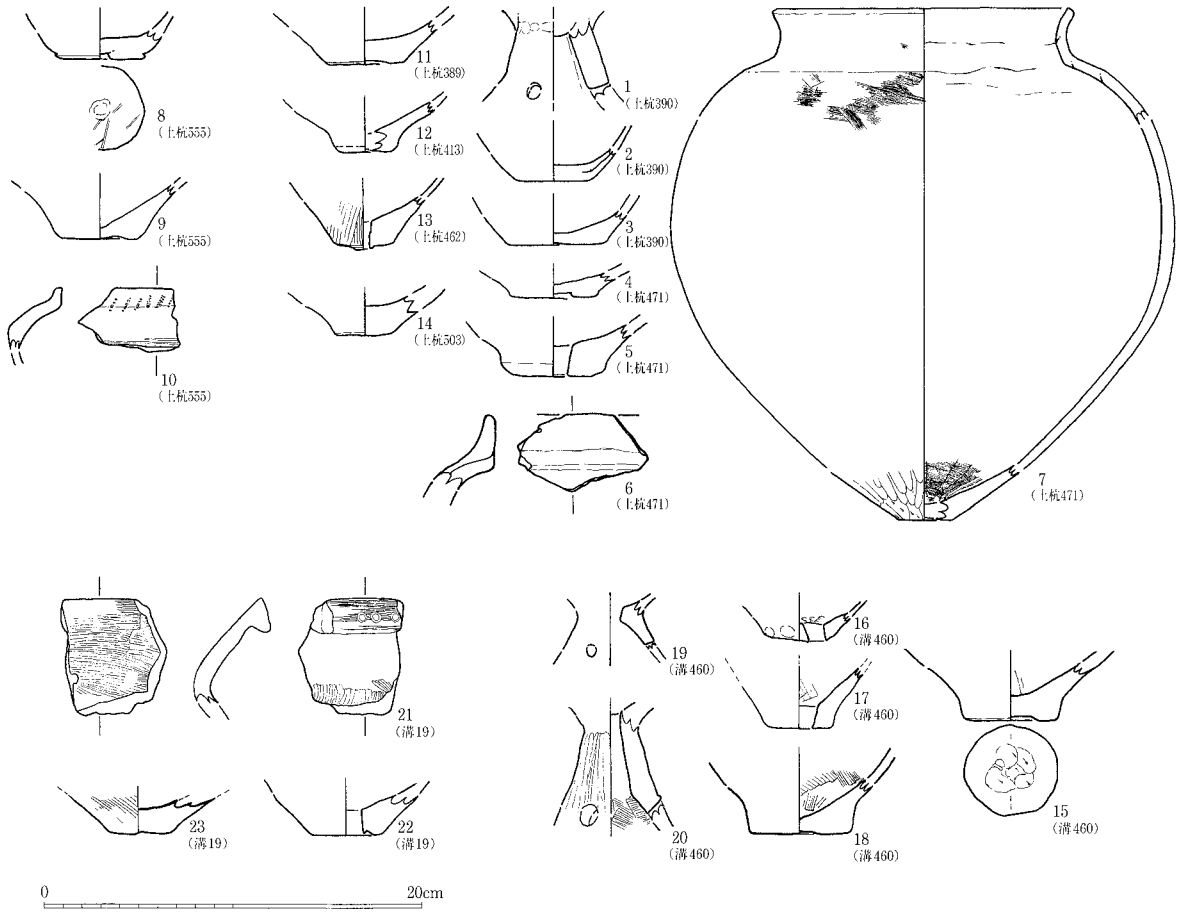


図 6.02　土坑・溝から出土した土器

【谷16から出土した土器】

図6.03～6.07に掲載したのは、谷16から出土した土器群である。先述のように、谷16からは約1000片を越える多量の土器片が出土した。その大半は、弥生時代末～古墳時代初頭の土器群と考えられる。そのうち約150点が図化可能であった。そのうち、図6.07の47～50だけが上層出土資料で、その他は中～下層出土土器である。

図6.03の1～18は壷類である。1～4は広口壷の破片である。1・2は端面が肥厚した無文の口縁部片である。褐色～浅黄橙色を呈する。3は、垂下する口縁形態の広口壷片で、端面に円形浮文を施されている。形態から弥生後期前葉の所産の可能性がある。4は頸～口縁部が直線的に立ち上がる形態の広口壷である。内・外面ともヘラミガキ調整で仕上げられる。5は、頸・口縁部は欠損しているが、おそらく4と同様の形態をとる広口壷と考えられる。内・外面ともヘラミガキ調整で仕上げられ、胴上部外面に櫛描列点文と波状文が施されている。6も直線的に口縁部が広がる形態の広口壷で、外面がヘラミガキ調整で仕上げられる。

7・8は、ほぼ完形の直口壷である。いずれも内面がハケ後ナデ調整で仕上げられている。4～8まではいずれも淡赤褐色～褐色を呈し、全体に赤みを帯びた色調である。9～11は短頸壷で、10はほぼ完形品である。いずれも器面の磨耗が顕著で調整痕跡が不明であるが、内面はハケ後ナデ調整で仕上げられている。色調は、褐色～淡黄褐色を呈する。12～15は、胴上半部の破片であるが、いずれも櫛描文が施されている。12は列点文の下に波状文、13は直線文の下に列点文、14は直線文2条の間に波状文、15は直線文間にヘラ状工具の先端による列点文が施されている。いずれも直口壷あるいは広口壷の胴部片と考えられる。12については、1帯内の櫛描文列点文が明確な列状を呈さず不揃いな状態で、波状文も不規則に波打っている。各条線の断面形態も、それ以外は断面半円形を呈し草本類の茎を原体としているのに、12だけは断面Ｖ字形を呈しており原体が異なっている。琵琶湖沿岸に通有な櫛描文工具を用いた個体と考えられ、搬入品の可能性がある。

16は、広口壷と甕あるいは鉢との中間的な形態の土器である。内外面ともハケ調整で仕上げられている。橙色～灰褐色を呈する。17～19は、台付の無頸壷と考えられる。脚部の断面形態は、直線的に開く「ハ」字形である。17はほぼ完形品であるが、片口があり、液体の貯蔵などに用いられた可能性がある。いずれも内・外面ともにハケ後ナデ調整で仕上げられており、橙色～褐色を呈する。

図6.04の1～15に掲載したものは甕である。1～8・15は、いずれも外面にタタキメがうかがわれるが、タタキ成形の後にハケ調整により器面が仕上げられている点でも共通している。タタキメの各条線の幅が3　以上となる粗いものであることも共通している。このうち大半の個体が、内面はハケ後ナデ調整で仕上げられているが、1・6・8・15は胴上部内面にヘラケズリ調整が行われている。後者の手法は、いわゆる庄内式甕に通有なものである。このことから、当遺構出土のタタキ甕は、どの個体も外面は弥生後期以来の成形・器面調整手法を用いるものの、内面調整には一部に庄内式の技法を用いていることがわかる。また、内面にヘラケズリ調整を行うものだけでなくハケ後ナデ調整で仕上げるものでも、内面における胴・口縁部境界に明確な稜線が形成された個体が散見される。この点も庄内式甕と類似する形態属性といえる。また、15に関しては、外面タタキメの上からのハケ調整が密で、口縁部がやや内彎する形態であることから、布留式傾向甕などと呼ばれるタイプと考えることも可能である。色調は、いずれも淡黄褐色～淡赤褐色を呈する。

9～14は、同じく甕であるが、外面がハケ調整だけで仕上げられ、口縁端部やや受口状の形態をとる

個体である。このうち9・13は、明確な受口状口縁土器である。2点とも胴部上位に横方向のハケ調整を行う点も共通している。こういった特徴は、琵琶湖沿岸地域に弥生時代中期以来伝統的にみられる特徴であり、彼地からの搬入品もしくは模倣品の可能性が高い。また、9は口縁外面屈曲部に列点を施すがこれも、琵琶湖沿岸地域に通有な手法である。13は、2 cm大の粗い砂粒を多く含む胎土で、暗灰褐色を呈する点でも、琵琶湖沿岸部の土器群と酷似している。

図6.05の1～13は、鉢である。1～3は丸底に近い底部形態の小型品で、1は直口し、2・3は口縁部が小さく外反する形態である。いずれも内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられている。庄内式期～布留式初頭の小型丸底土器などに近い形態といえよう。いずれも橙色～淡黄褐色を呈する。4～7は、

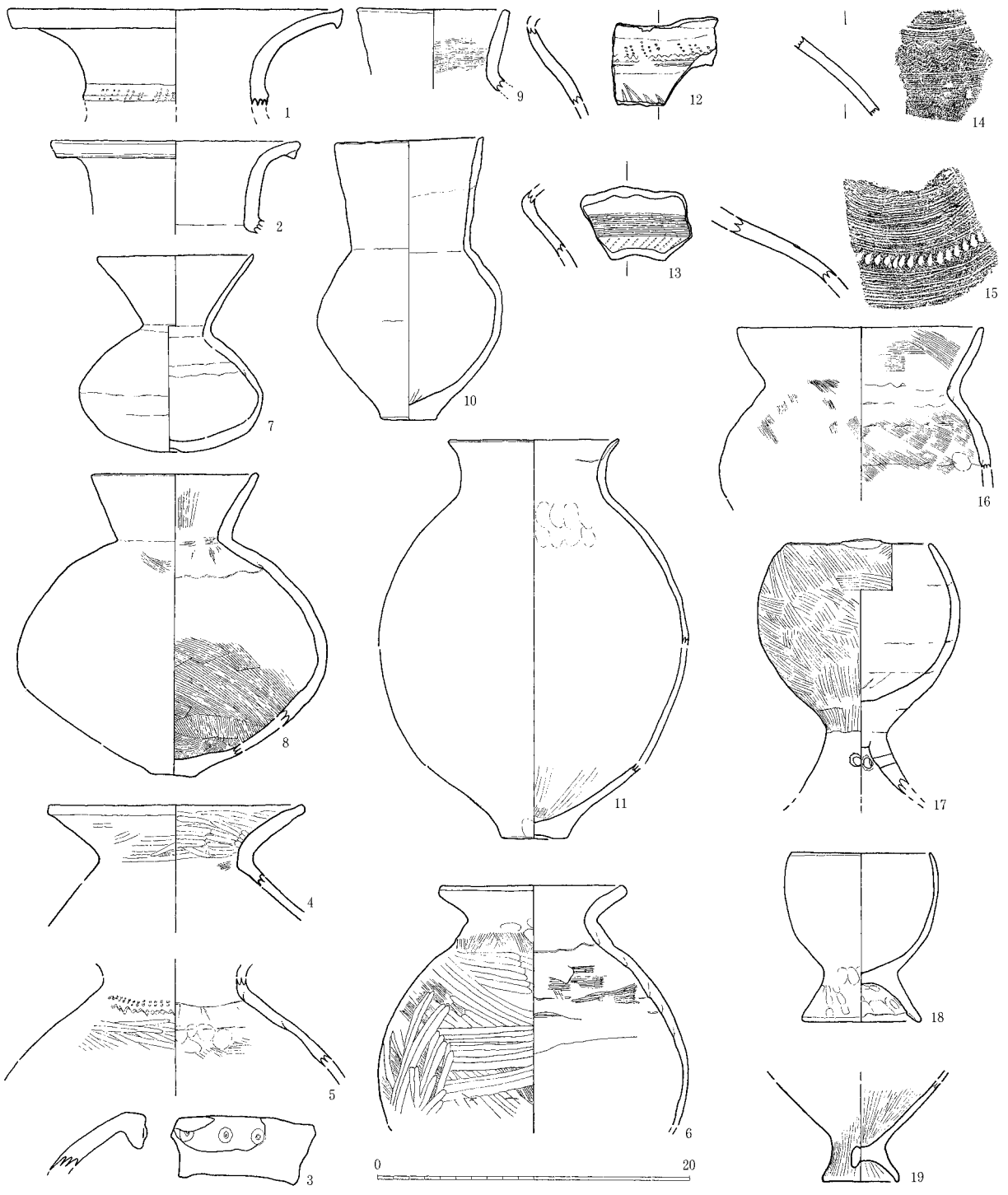


図6.03　谷16から出土した土器（1）

口縁部が直線的に開く形態である。4は外面にタタキメがうかがわれ、6・7は内外面ともハケ調整で仕上げられる。4・5は底部が大きな明確な平底形態であるが、6・7は底部径が小さく尖底に近い形状で円孔が設けられている。8・9は、口縁部が外反する形態の鉢で、いずれもハケ後ナデ調整で仕上げられている。10～13は受口状口縁形態の土器だが、鉢もしくは手焙形土器と考えられる。いずれも内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられる。10は無文だが、11・12・13には口縁部に、それぞれ斜格子文・列点文などが施されている。

図6.05の14は、通常の土器ではなくいわゆる杓子形土製品と考えられる。手づくねで球形に近い体部を作り出し、一方に伸びる把手部が形成されていたと思われるが後者は欠損していている。黄橙色を

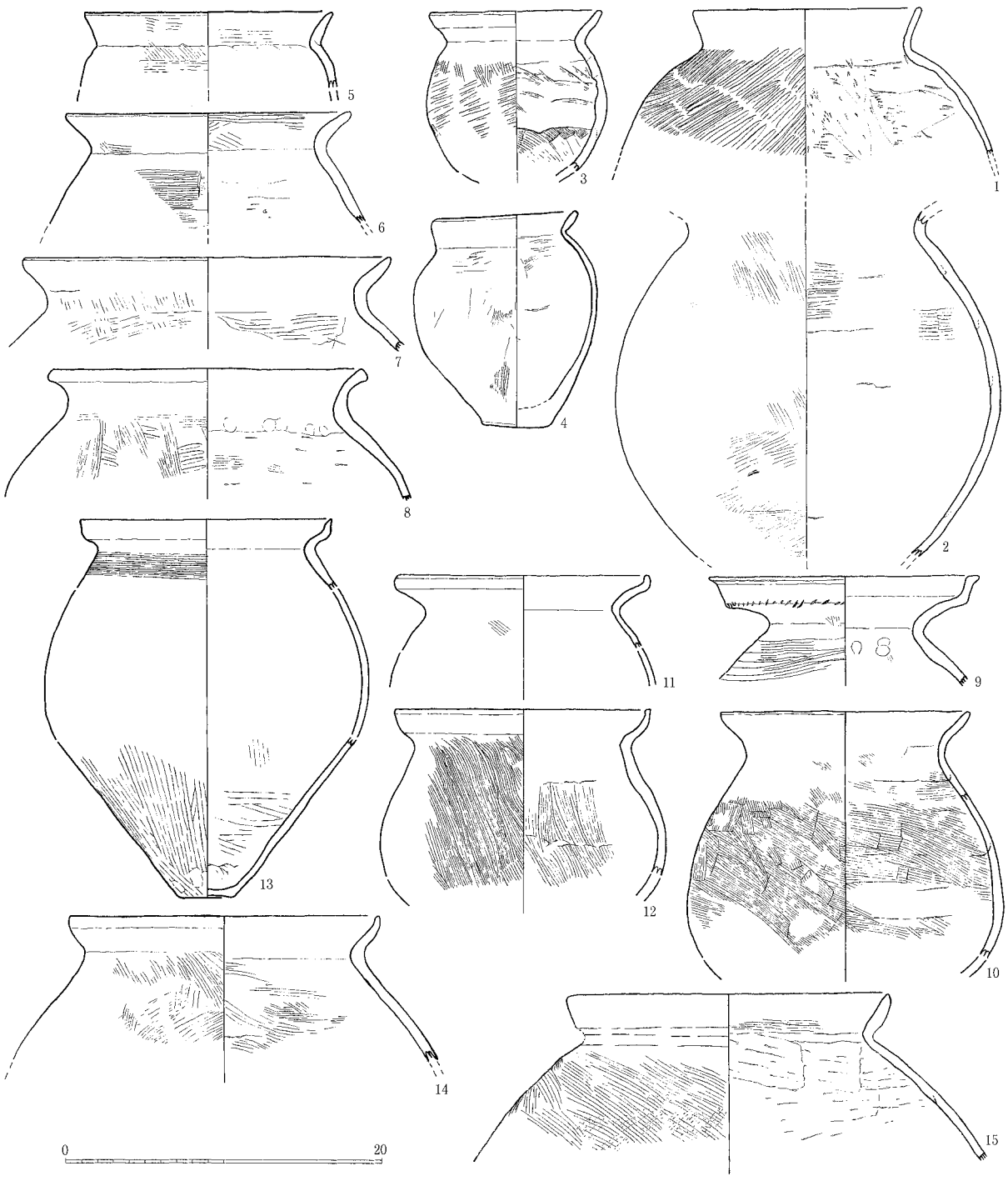


図6.04　谷16から出土した土器（2）

呈する。

図6.05の15～53は、壺・鉢・甕いずれかの底部片と考えられる。いずれも内面はハケ後ナデ調整で仕上げられている。外面については、ハケ調整で仕上げる17・39、ヘラミガキ調整で仕上げる18・23、粗いタタキメがうかがわれる40～52などの3種類がある。ヘラミガキ調整で仕上げられる個体は、壺・鉢のいずれかであろう。また形態では、33～39・43～52は底部径が非常に小さく、丸底もしくは尖底に近い形状となっている。53は、高台状に底部縁が突出した形態で、鉢の可能性が高い。

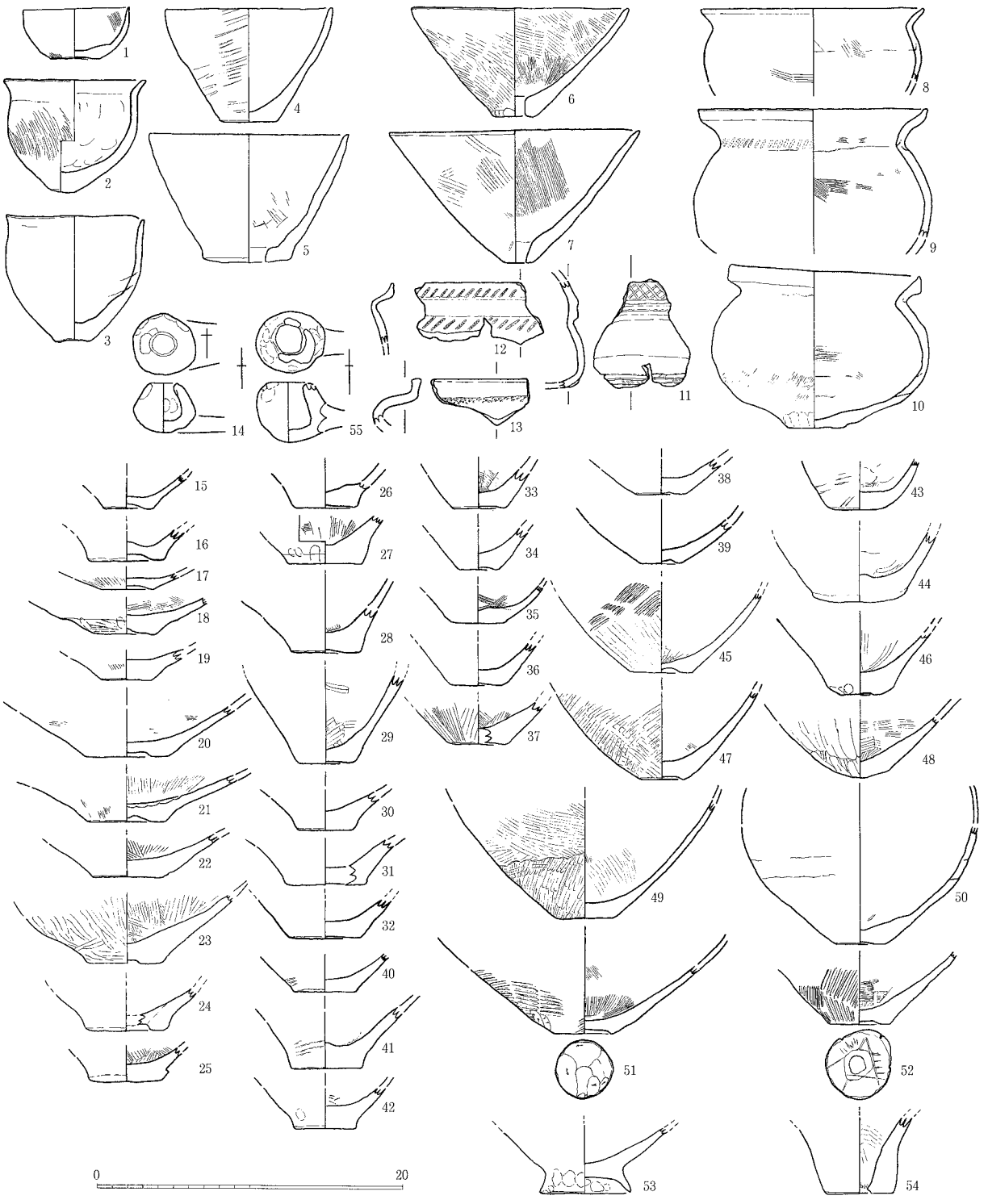


図6.05　谷16から出土した土器（3）

こういった底部形態の特徴は、当土器群が庄内式期に特徴的な土器形態をとる個体を多く含んでいることを示している。

図6.06の1～5は高杯である。1は、口縁が垂下する形態で、杯部外面・口縁部端面・口縁部内面に櫛描波状文が施されている。波状文は細かなピッチで山型に施されている。口縁部内・外面に2帯づつと、杯部の上部2帯施されている波状文はいずれも上下動が連動していることから、これらは2つの櫛描文原体を同時に持って施文した複合櫛描文の可能性がある。内外面ともヘラミガキ調整で仕上げられ、色調は赤褐色を呈する。2～5は杯部が逆台形を呈するいわゆる有稜高杯である。いずれも器面荒れが顕著で調整痕が見えにくいが、3・5のように杯部は内外面ともヘラミガキ調整で仕上げられていたと考えられる。脚部に関しても4・5ともに外面が放射状のヘラミガキ調整、内面がハケ後ナデ調整で仕上げられる。

図6.06の6・7は器台である。6は無文である。7は口縁端面にヘラ描直線文3条と円形浮文が、脚部上位に5条が1単位となった直線文が2帯施されている。円孔は3方向に2段に穿たれている。内外面ともハケ後ナデで仕上げられている。脚部と受け部の境界が明確に屈曲して外反する形態である。色調は淡黄褐色を呈する。

図6.06の8～16は、小型器台である。いずれも受け部底面に孔があり、中空の形態である。8・11・13のように受け部がやや内彎するものと9・10・12・14・15・16のように直線的あるいはやや外反する形態のものと2種類がみられる。脚部に関しては、形態のわかるものはすべてなだらかに裾部が外反する形態である。器面の残存状態が良いものについては、すべて、内外面ともにヘラミガキ調整で仕上げ

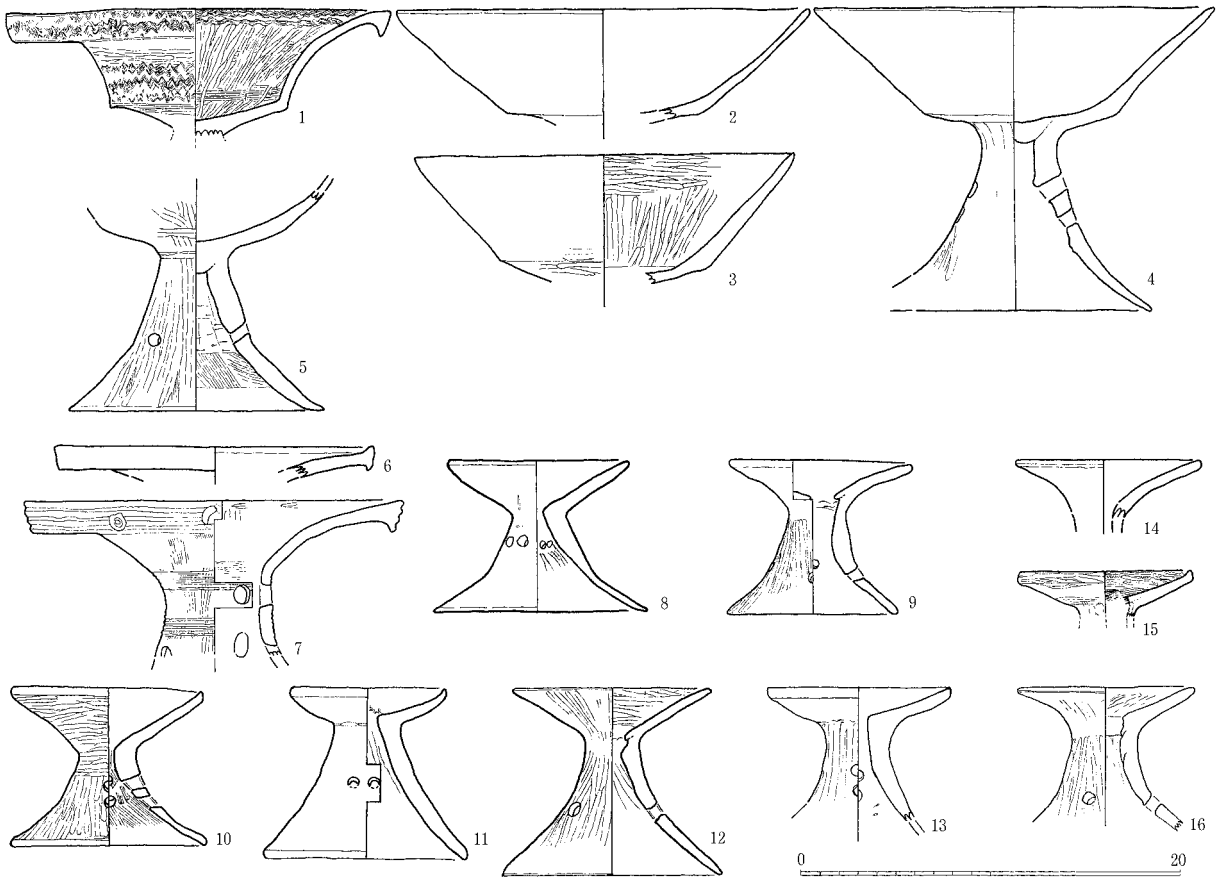


図6.06　谷16から出土した土器（4）

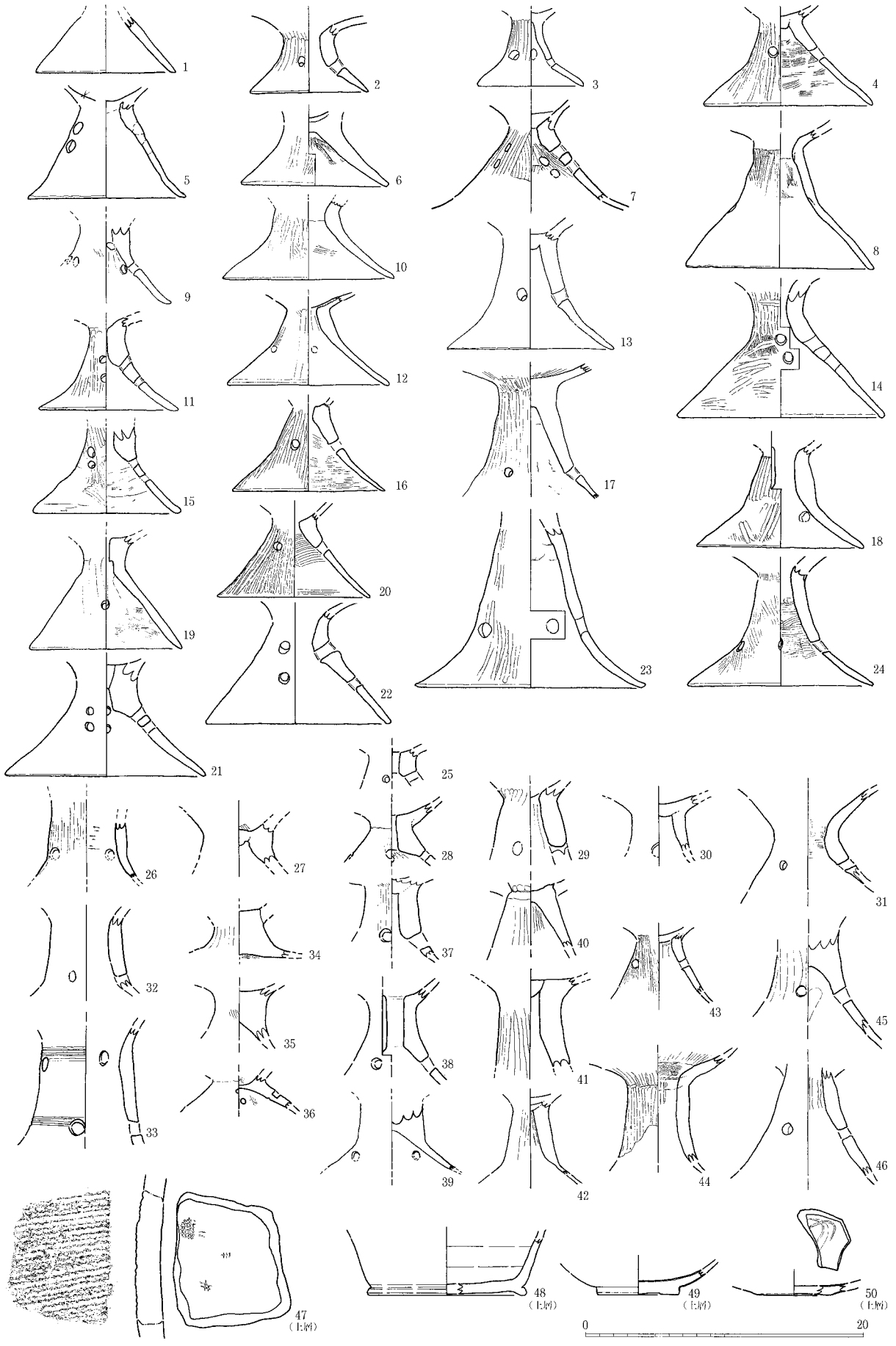


図6.07　谷16から出土した土器（5）

られている。脚部のヘラミガキ調整はすべて放射状である。円孔については4方向のものと3方向のものの2種類がみられる。8・10・13のように2個一対の円孔を設けるものもある。

図6.07の1～46は、高杯・器台・小型器台いずれかの脚部である。この3種類は、図6.06に掲げた本遺構で出土している図上完形の土器をみるかぎり、脚部の形態・器面調整などにほとんど差異がない。小型品でも高杯脚部と小型器台脚部の差異は識別不可能である。そこで、この3種の脚部片については強引な器程判断を避け、図6.07に一同に掲載した。おおまかにみれば、緩やかに裾部にかけて外反していくものが主体を占めるが、14・19・22などのように直線的に「ハ」字形に開く形態もみられる。また、円孔については3方向と4方向との2種類がみられるものの前者の比率のほうが高い。5・11・21・22のように2個一対の円孔を設けるものも散見される。器面の残存状態が良いものについては、すべて、内外面ともにヘラミガキ調整で仕上げられている。外面は放射状のヘラミガキ調整である。

このように、当遺構出土の脚台つき土器類は、脚部形態・製作手法に差がなく、大きさと上部形態のバリエーションをつけるだけで、高杯・器台・小型器台の3種を作り分けていることになる。中空の小型器台が多量に含まれることは、当土器群が確実に庄内式期の所産であることを示している。無文の高杯にも、弥生後期通有の外反する杯部形態のものが確認できず、有稜高杯の形態だけが確認できる。これも、当土器群が確実に庄内式期の所産であることを示し、形態の統一性から型式学的に想定される時期幅も大きくないと考えたい。これについては、後章の考察に詳述したい。

図6.07の47～50は、谷16の上層から出土した遺物である。47は、古代の平瓦片で、縄叩き痕がうかがわれ奈良時代～平安時代の所産と考えられる。48は須恵器杯身であるが、高台が底部外縁に貼りつく形態から、奈良時代末～平安時代初頭の所産と考えられる。49も須恵器椀底部で、平安時代の所産と考えられる。50は中国大陸産の青磁と考えられる。細片であるが、底部形態から越州窯系の。類に相当する可能性があり、9－10世紀の所産と考えられる。このように、谷16の上層から出土した土器・瓦は、既往の遺物編年上では、いずれも平安時代前半に接点もつものばかりである。このことから、当遺構の上層の埋没年代は、平安時代前半期と考えることが出来る。

【その他の時代の遺構・層位から出土した遺物】

図6.08の1・2は縄文時代の土器である。1は、調査区北東隅の下層確認深掘部から出土した。先章の遺構群の検出された基盤層となる礫層から出土している。波状口縁の深鉢口縁部であり、口縁端部が小さく外反して面を持つ形態である。口縁端部は無紋であるが、その直下から胴上位にかけて縦方向に弧状の隆帯文が貼付されている。口縁部と隆帯の結節部には円形の刺突が行われている。形態・文様から、縄文時代後期の縁帯文土器と考えられるが、詳細な時期認定は難しい。2は、炉跡385から出土した縄文土器片である。こちらも有文の深鉢の胴上位片と考えられる。縦位に2条の沈線、その脇に縦位の縄文が施されている。おそらく北白川下層C式に相当すると考えられ、縄文時代中期末の所産と考えられる。この土器片は、炉跡385の底面の底面に置かれていたため、当遺構の形成時期は縄文時代中期末と考えられる。

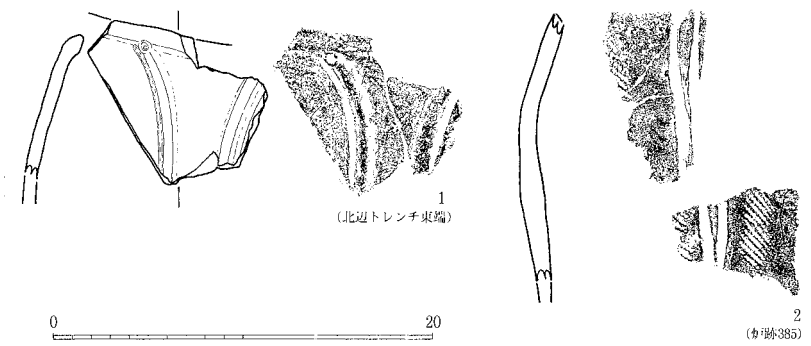


図6.08　出土した縄文土器

【古墳時代後期の遺構から出土した遺物】

図 6 . 09の1～8及び写真6.01～04は土坑165から出土している。 1 は甕、 2 ・ 3 は杯身のセットである。 1 は口頸部が大きく外上方へ湾曲しながら開き、端部は外傾する凹面をなす。灰色を呈する。 2 は天井部がなだらかな平らで、口縁部は真下に伸び、端部は内傾する凹面をなす。稜は鈍く、外下方へ伸び、端部は丸くおさまる。青灰色を呈する。 3 は底部を欠く。立ち上がりは内上方へ伸び、端部は丸くおさまる。受部は短く、外上方へ伸び、端部は丸くおさまる。内外面とも回転ヘラ削りを施す。焼成は不良で、浅黄色を呈する。 4 ～ 8 及び写真6.01～04は製塩土器である。これら形態が類推できるものはすべて、裁頭卵形を呈する。調整にはタタキはみられず、ナデである。色調はにぶい橙～明赤褐色を呈し、一部 4 では内外面で灰白色を呈する。

図 6 . 09の 9 ～12は土坑225から出土している。 9 は杯蓋で、天井部が欠損している。稜は鈍く、口縁端部は内傾する段をもつ。灰色を呈する。10は壷・甕・鉢いずれかの底部である。外面はハケ調整、内面はハケ調整後ナデをおこなっている。11は受け口状を呈する口縁部で、頸部以下は欠損している。口縁部外面に列点文が施されている。12は高杯の脚部である。外面には櫛描文が施され、 3 方向にスカシが穿たれている。これらの土師器はにぶい黄灰～浅黄橙色を呈する。

図 6 . 09の13は土坑226から出土している。杯蓋で、天井部は欠損している。残存部に関しては、 9 と形態が類似している。灰色～灰褐色を呈する。

図 6 . 09の14～19は土坑231から出土している。14は杯蓋で、天井部が欠損。 9 ・13と形態が類似している。15・16は壷・甕・鉢いずれかの底部である。17は高杯もしくは器台の脚部である。これらの土師器はにぶい橙色～浅黄橙を呈する。

以上の須恵器はその形態的特徴からすべて MT15型式並行期と考えられる。そのため、土坑165・225・226・231は古墳時代後期のものと考えられる。土坑165に関しては、共伴している製塩土器の帰属時期も古墳時代後期と考えられ、矛盾はない。一方で、土坑225・231では須恵器とともに古式土師器が出土しており、遺構の形成時期が古墳時代初頭まで遡る可能性も考慮する必要があるだろう。

写真 6 . 01　土坑165出土製塩土器 1

写真 6 . 02　土坑165出土製塩土器 2

写真 6 . 03　土坑165出土製塩土器 3

写真 6 . 04　土坑165出土製塩土器 4

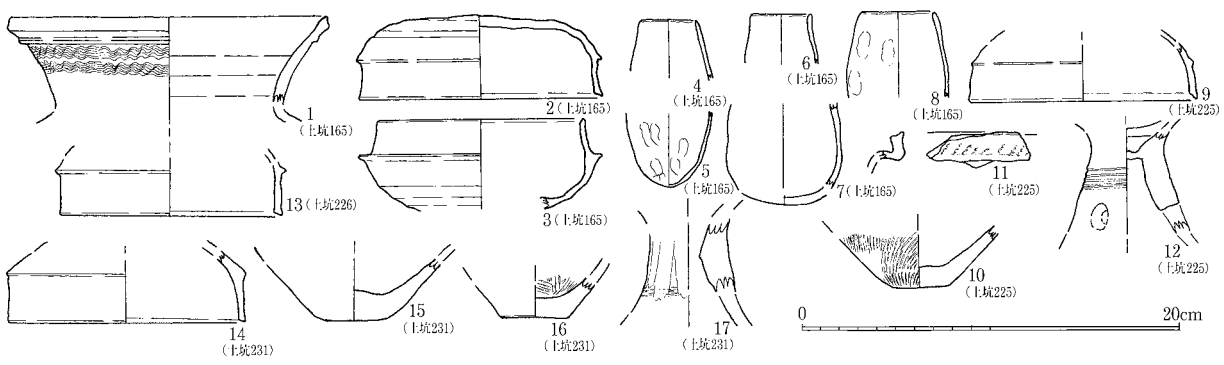


図 6 . 09　古墳時代後期の遺構から出土した土器

第 2 節　石器・礫

本遺跡では石器 8 点、礫120点出土している。すべて遺構に伴うものであり、礫はその大部分が谷16からの出土となっている。石器は二次的な加工がなされていると判断できるものを取り上げ図化し、本書に掲載した。礫については観察表と写真の掲載にのみにとどめている。以下は器種別に出土石器並びに出土礫の説明を行う。また調査区内から出土した石器・礫は全点石材鑑定を行った。なお石材鑑定は（株）パリノ•サーヴェイに委託して行っており、観察表中の石材名は肉眼観察による判定となっている。

石鏃（図 6 . 10）

（S-1）は石鏃である。最大長1.6cm、最大幅1.2cm、最大厚0.3cm、重さ1.0g 以下をはかる。凹基式の石鏃で、平面形態や大きさから縄文時代の石鏃と考えられる。石材は無斑晶質安山岩（サヌカイト）である。

楔形石器（図 6 . 10）

（S-2）は楔形石器である。最大長2.5cm、最大幅1.4cm、最大厚0.5cm、重さ1.0g をはかる。両縁辺からの剥離が確認できる。石材は無斑晶質安山岩（サヌカイト）である。

石庖丁（図 6 . 10）

（S-3, S-4）は石庖丁である。(S-3）は最大長7.3cm、最大幅8.7cm、最大厚8.5cm、重さ60.0g をはかる。片面は剥離している。表面は研磨を施しているが、凹凸を残した研磨となっている。また背部を平坦に研磨し、反対側の端部に研磨した刃部を作り出している。(S-4）は最大長4.7cm、最大幅9.2cm、最大厚1.0cm、重さ45.0g をはかる。一辺から微細な剥離があり、何らかの刃器であることが考えられるが、形態からみて打製石庖丁と思われる。(S-3, S-4）ともに石材は頁岩を使用している。

太形蛤刃石斧（図 6 . 10）

（S-5）は太形蛤刃石斧である。残存長9.3cm、最大幅5.4cm、最大厚2.7cm、重さ237.0g をはかる。基部は折損している。刃部は欠損しているが、一方向からの剥離が施されており、刃部再生の痕跡と考えられる。また全面に敲打が施されており、その上から一部研磨痕が確認できる。石材はホルンフェルスである。

砥石（図 6 . 11）

（S-6, S-7）は砥石である。(S-6）は最大長14.0cm、最大幅14.9cm、最大厚3.2cm、重さ1192.0g をはかる。片面のみが研磨面となっており、研磨部分がほぼ全面にわたる。また片面の縁辺に光沢を残している。石材は砂岩を使用している。(S-7）は最大長16.7cm、最大幅10.1cm、最大厚4.4cm、重さ995.0ｇをはかる。器面はほぼ平坦であり研磨痕が一部認められる。また（S-7）が出土した遺構は粘土塊を伴っている。石材は変質玄武岩を使用している。

礫

本遺跡からは礫が計120点出土している。最も多く出土しているのは谷16からであり、82点出土している。先述のように谷16は廃棄施設と考えられており、礫についても土器同様に廃棄したものと考えられる。そのほかに出土している礫についても竪穴式住居や土坑、柱穴など遺構出土のものがすべてである。また当遺跡の遺構形成面の土壌にはこぶし大以上の礫は含まれておらず、本遺跡で出土した礫がこの地に元来ある自然石であるとは考えにくい。このことから他の場所から遺跡内に持ち込んだ可能性が

高い。

本遺跡では出土した石器並びに遺構出土の礫について全点石材鑑定をおこなった。遺跡周辺は、地質系統の古い順に美濃―丹波帯の堆積岩類、酸性火成岩類、古琵琶湖層群・大阪層群、段丘堆積物及び沖積層が分布する。

遺跡周辺の地質は美濃―丹波帯に属し、緑色岩・層状チャート・混在岩・砂岩などからなる。

酸性火成岩類は、琵琶湖西部比叡山周辺を南北にわたり広く分布する。花崗岩類はいずれも丹波帯の堆積岩層に貫入し、熱変成作用を受けている。

古琵琶湖層群は、近江盆地に、大阪層群は京都盆地周辺に分布し、両層群とも更新世で、主に河成ないし湖成の礫・砂・シルト・粘土層からなる。

また沖積層は、琵琶湖西岸や、京都盆地において広く分布する。

本遺跡から出土した石器石材並びに礫種はチャート、砂岩及び頁岩が多く含まれているが、これは先述の遺跡周辺地域の地質を反映したものとなっている。また点数は少ないがドレライト、変質玄武岩などの緑色岩類、花崗岩類及びこれに付随するホルンフェルスは丹波帯の堆積岩中に混在する。これらのことから礫種の大部分は在地性の石材から構成されていると理解することができる。

しかしながら遺跡周辺地域から採取できない石材も含まれている。火山岩類及び凝灰質砂岩、砂岩（新期）及び軟質な頁岩がそれにあたる。火山岩類の中でも無斑晶安山岩としたものは一般的にサヌカイトと認識されるものであり、石鏃や楔形石器に使用されている。これらの石材は他地域からの搬入と考えられる。

【引用文献】

木村克己・吉岡敏和・井本伸広・田中里志・武蔵野実・高橋裕平，1998．京都東北部地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），地質研究所．89ｐ．

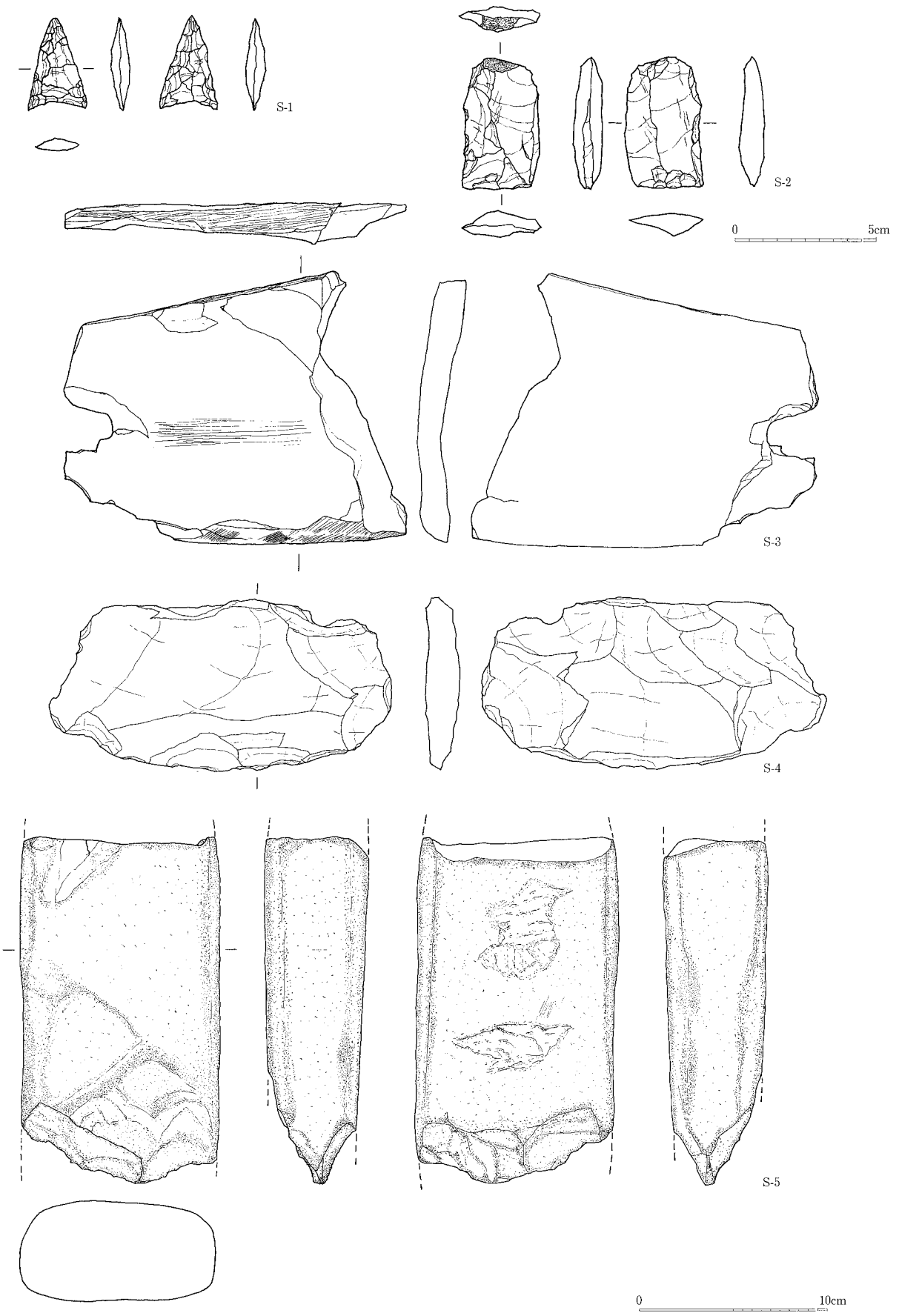


図 6.10　出土した石器（1）

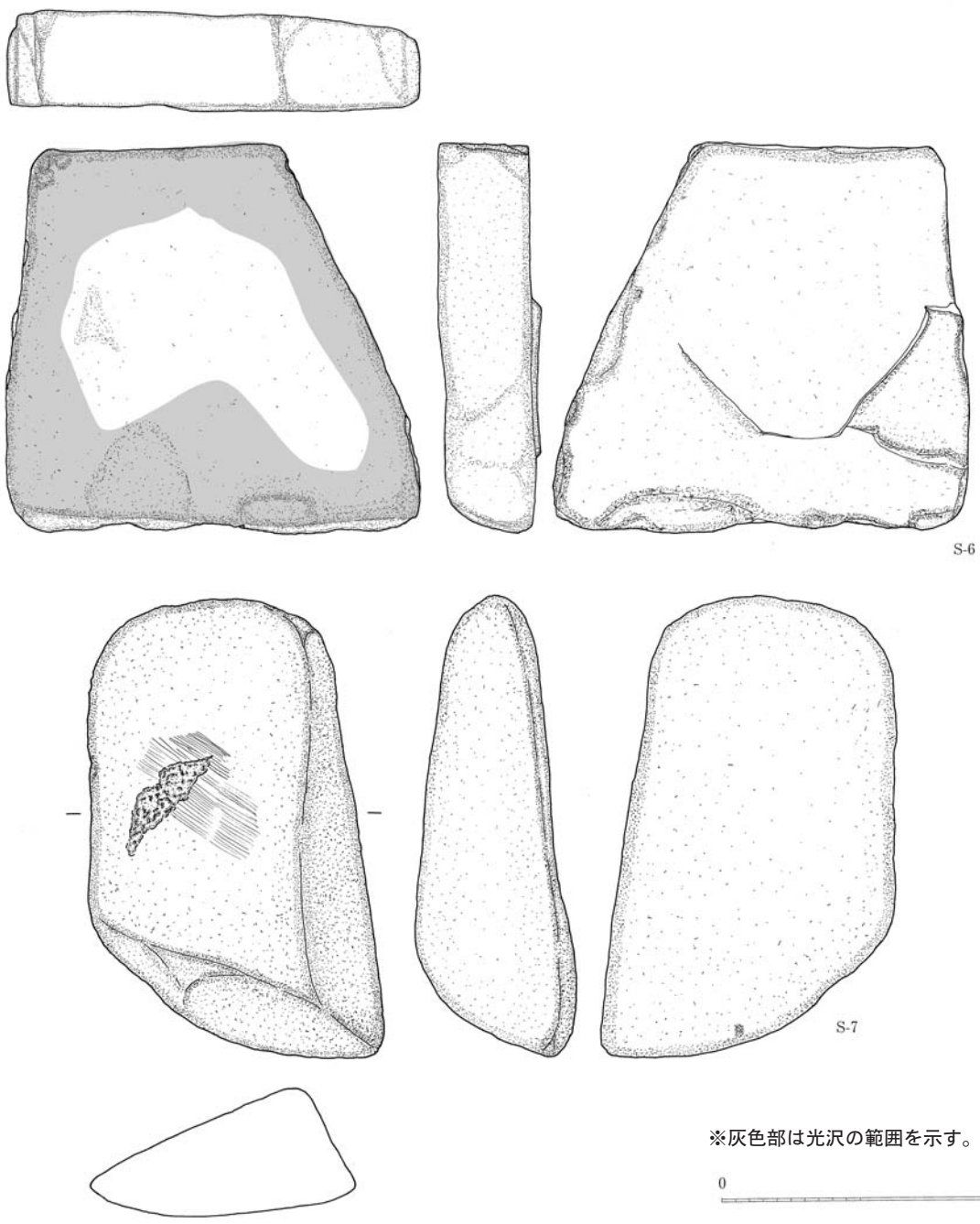


図 6 . 11　出土した石器（2）

表 6 . 01　出土石器観察表

遺物番号	地区名	層位名	遺構名	器種	法量				石材
					最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	
S-1	B-5	1面	溝460	石鏃	1.6	1.2	0.3	1.0g 以下	無斑晶質安山岩
S-2	B-5	1面	溝460	楔形石器	2.5	1.4	0.5	1.0	無斑晶質安山岩
S-3	B-4	1面	溝225　北中	石庖丁	7.3	8.7	8.5	60.0	頁岩
S-4	G-7	1面	竪穴住居1　アゼ中央付近	石庖丁	4.7	9.2	1.0	45.0	頁岩
S-5			谷16	太形蛤刃石斧	9.3	5.4	2.7	237.0	ホルンフェルス
S-6	D-7・E-7	1面	谷16	砥石	14.0	14.9	3.2	1192.0	砂岩
S-7	C-6	1面	土坑471　石3	砥石	16.7	10.1	4.4	995.0	変質玄武岩

表６．02　出土礫観察表（１）

遺物番号	地区名	遺構名	重量（kg）	石材
S-8	F・G-5•6	竪穴住居323　石4	0.3	砂岩
S-9	F・G-5•6	竪穴住居323　石4	0.1	頁岩
S-10	C-6	土坑471　石1	5.7	変質玄武岩
S-11	F-6	土坑314	0.2	花崗閃緑岩
S-12	C-5	竪穴住居501	1.2	チャート
S-13	C-5	竪穴住居501	0.9	ドレライト
S-14	C-5・D-5	竪穴住居501	0.4	チャート
S-15	C-5	竪穴住居501	0.3	砂岩
S-16	C-6	土坑471　石2	0.1	変質玄武岩
S-17	C-5・D-5	竪穴住居501	0.8	デイサイト
S-18	C-5	竪穴住居501	1.0	チャート
S-19	C-5	竪穴住居230	1.9	砂岩
S-20	A7・B7	溝19	0.2	砂岩（新期）
S-21	B-4	竪穴住居230	0.6	頁岩
S-22	G-7・F-7	土坑336　周辺	0.2	砂岩（新期）
S-23	G-7	竪穴住居1　西辺　アゼハズシ	0.1未満	砂岩（新期）
S-24	G-7	竪穴住居1　西辺　アゼハズシ	0.1	砂岩
S-25	B-4	撹乱243	0.1未満	多孔質安山岩
S-26	B-4	撹乱243	0.1未満	多孔質安山岩
S-27		谷16	1.0	変質玄武岩
S-28		谷16　北辺	0.5	ホルンフェルス
S-29		谷16　北辺	0.1	チャート
S-30		谷16　北辺	2.2	チャート
S-31		谷16　北辺	2.2	チャート
S-32		谷16	2.0	頁岩
S-33		谷16　北辺	1.4	頁岩
S-34		谷16　北辺	1.8	チャート
S-35		谷16　北辺	1.6	チャート
S-36		谷16　北辺	1.8	チャート
S-37		谷16　北辺	0.7	チャート
S-38		谷16　北辺	0.5	チャート
S-39		谷16　北辺	1.0	ドレライト
S-40		谷16　北辺	6.9	チャート
S-41		谷16	0.1未満	砂岩
S-42		谷16	0.1未満	チャート
S-43		谷16	0.1未満	チャート
S-44		谷16	0.1未満	砂岩
S-45		谷16	0.1未満	頁岩
S-46	D-7	谷16　中層	0.4	砂岩
S-47		谷16	0.1未満	チャート
S-48		谷16	0.1未満	砂岩
S-49		谷16	0.1未満	チャート
S-50		谷16	0.1未満	頁岩
S-51		谷16　北辺	1.9	変質玄武岩
S-52		谷16　北辺	0.1未満	チャート
S-53		谷16　北辺	0.3	頁岩
S-54	D-8	谷16　南端	0.2	砂岩
S-55		谷16	0.4	チャート
S-56		谷16	0.1未満	チャート
S-57		谷16	0.3	チャート
S-58		谷16	0.1未満	チャート
S-59		谷16	0.1	チャート
S-60		谷16　西辺	2.6	チャート
S-61		谷16　西辺	0.2	チャート
S-62		谷16　北辺	0.3	チャート
S-63		谷16　西辺	0.4	チャート
S-64		谷16　西辺	0.2	チャート
S-65		谷16　西辺	0.2	チャート
S-66		谷16　西辺	1.0	凝灰質砂岩
S-67		谷16　北辺	0.2	変質玄武岩
S-68		谷16　西辺	0.2	チャート

表 6．03　出土礫観察表（2）

遺物番号	地区名	遺構名	重量（kg）	石材
S-69		谷16　西辺	0.2	チャート
S-70		谷16　西辺	3.2	チャート
S-71		谷16　中層	0.1未満	頁岩
S-72		谷16　中層	0.1未満	砂岩
S-73		谷16　西辺	1.9	砂岩
S-74		谷16　西辺	0.3	チャート
S-75		谷16　西辺	0.1	チャート
S-76		谷16　西辺	0.2	チャート
S-77		谷16　西辺	0.1	チャート
S-78		谷16　西辺	0.2	チャート
S-79		谷16　西辺	0.1	チャート
S-80		谷16　西辺	3.0	チャート
S-81		谷16　西辺	0.8	チャート
S-82		谷16　西辺	0.3	チャート
S-83	南辺トレ	溝12	0.2	砂岩
S-84		谷16　北辺	0.1未満	頁岩
S-85		谷16　北辺	0.5	デイサイト
S-86		谷16　西辺	1.9	チャート
S-87		谷16　北辺	0.9	チャート
S-88		谷16　北辺	0.8	頁岩
S-89		谷16　北辺	0.3	砂岩
S-90		谷16　北辺	1.5	チャート
S-91		谷16	0.2	頁岩
S-92		谷16　北辺	0.6	チャート
S-93		谷16　北辺	0.8	砂岩
S-94		谷16	0.1未満	頁岩
S-95		谷16　北辺	0.5	チャート
S-96		谷16　北辺	1.0	砂岩
S-97		谷16　北辺	0.4	チャート
S-98		谷16　北辺	1.7	チャート
S-99		谷16　北辺	2.1	チャート
S-100		谷16　北辺	1.1	チャート
S-101		谷16　北辺	0.1	頁岩
S-102		谷16　北辺	1.2	砂岩
S-103		谷16　西辺	0.2	頁岩
S-104		谷16　西辺	1.3	チャート
S-105		谷16　西辺	0.1	頁岩
S-106		谷16　西辺	2.9	変質玄武岩
S-107	F-G-5-6	竪穴住居323　石6	0.2	チャート
S-108	F-G-5-6	竪穴住居323　石2	0.8	チャート
S-109	F-G-5-6	竪穴住居323　石1	0.3	砂岩
S-110	F-G-5-6	竪穴住居323　石1	0.1	チャート
S-111	B-3・4・5	溝225　C 区	0.2	チャート
S-112	F-G-5-6	竪穴住居323　石5	0.1	チャート
S-113	F-G-5-6	竪穴住居323　石5	0.1	チャート
S-114	F-G-5-6	竪穴住居323　石5	0.1未満	チャート
S-115	E-4	柱穴143	0.4	チャート
S-116	E-4	柱穴143	0.2	チャート
S-117	E-4	柱穴143	0.9	砂岩
S-118	E-8・D-8	谷16　下層	0.4	花崗閃緑岩
S-119	E-8・D-8	谷16　下層	0.3	変質玄武岩
S-120	D-4	柱穴287	0.5	変質玄武岩
S-121		谷16	0.1	砂岩
S-122	C-7	土坑358	0.4	変質玄武岩
S-123	G-7	竪穴住居1　西辺　アゼハズシ	0.2	砂岩（新期）
S-124	F-G-5-6	竪穴住居323　石7	0.2	チャート
S-125	F-G-5-6	竪穴住居323　石3	0.7	チャート
S-126	F-G-5-6	竪穴住居323　石3	0.3	チャート
S-127	F-2	土坑101　石2	3.1	頁岩
S-128	F-2	土坑101　石1	8.7	チャート

S-8

S-9

S-10

S-11

S-12

S-13

S-14

S-15

S-16

S-17

S-18

S-19

S-20

S-21

S-22

S-23

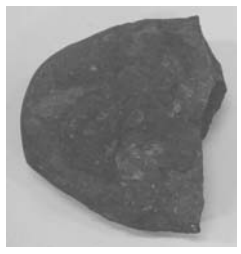
写真 6.05　出土した礫（1）

S-24

S-25

S-26

S-27


S-28

S-29

S-30

S-31

S-32

S-33

S-34

S-35

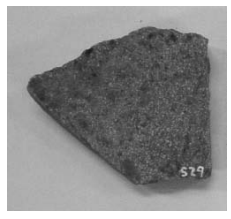
S-36

S-37

S-38

S-39

S-40


S-41

S-42

写真 6.06　出土した礫（2）

S-43

S-44

S-45

S-46

S-47

S-48

S-49

S-50

S-51

S-52

S-53

S-54

S-55

S-56

S-57

S-58

S-59

S-60

写真 6.07　出土した礫（3）

S-61

S-62

S-63

S-64

S-65

S-66

S-67

S-68

S-69

S-70

S-71

S-72

S-73

S-74

S-75

S-76

S-77

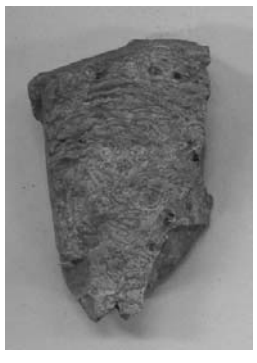

S-78

写真 6.08　出土した礫（4）

S-79

S-80

S-81

S-82

S-83

S-84

S-85

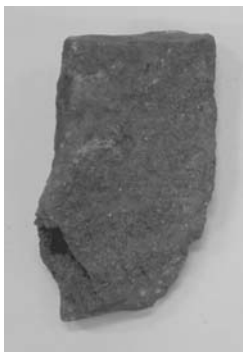
S-86

S-87

S-88

S-89

S-90



S-91

S-92

S-93

S-94

S-95

写真 6.09　出土した礫（5）

S-96

S-97

S-98

S-99

S-100

S-101

S-102

S-103

S-104

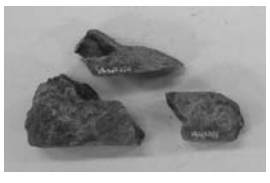
S-105

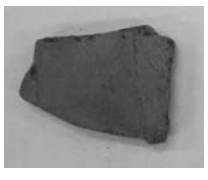
S-106

S-107

S-108

S-109


S-110


S-111

S-112

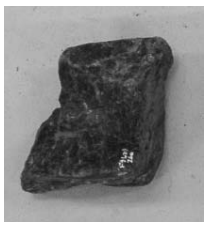

S-113

写真 6.10　出土した礫（6）

S-114

S-115

S-116

S-117

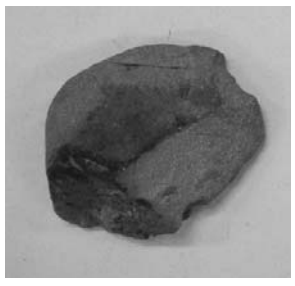
S-118

S-119

S-120

S-121

S-122



S-123

S-124

S-125

S-126

S-127

S-128

写真 6.11　出土した礫（7）

第 3 節　鉄器

本遺跡では、鉄器は2点しか出土していない。いずれも鉄鏃で、谷16から土器に伴って出土している。以下では、その概略を記す。

図 6 . 12－1は、完形の圭頭斧箭式鉄鏃である。全長4.5cm、刃部厚0.5cm、身部厚0.35cm、茎部厚0.4cm を測り、小型ではあるがやや厚手のものとなっている。刃部範囲は身部最大幅付近でおわっている。それより茎部側は、錆化により判然としない部分もあるが、側面の面取りがなされている。関部は明瞭ではなく、茎部断面は不整形な角柱状を呈する。

図 6 . 12－2は、茎部を欠損する圭頭斧箭式鉄鏃である。残存長3.35cm、刃部厚0.27cm、身部厚0.25cm を測り、図6.12－1よりやや小型品である。図 6 . 12－1と同じく、刃部範囲は身部最大幅付近でおわっている。それより茎部側は、側面の面取りがなされている。茎部は欠損により形状を把握できないが、身部はやや扁平な形状を呈している。

以上の諸特徴から、これらの帰属時期は弥生時代末～古墳時代初頭に相当すると考えられる。これは、共伴した土器の時期幅とも矛盾していない。

（佐藤）

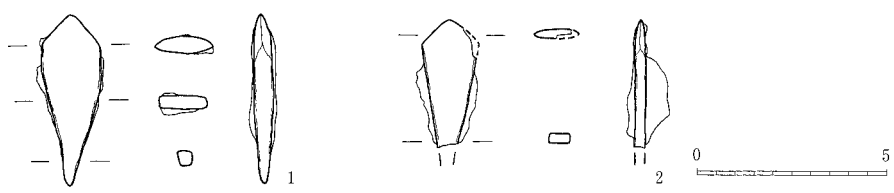


図 6 . 12　出土した鉄器

第 7 章　分析・考察

第 1 節　岩倉忠在地遺跡出土土器群と古式土師器編年

若林邦彦

はじめに

本節では、当遺跡から出土した土器群の主要な時期について論じたい。第 5 ・ 6 章に示したように、今回の調査で出土した土器のうち、谷16中～下層から出土した土器群は、主に弥生後期末から古墳時代初頭の土器群と想定され、その個体数の豊富さと出土状況から当遺跡の集落形成の主要な時期を示していると考えられる。これら土器群は、谷の中層から集中的に出土し、完形もしくは大型の破片が集積した状態であった。また、谷の肩部に沿うように遺物出土集中域が確認できることから、谷周囲から廃棄され大きく移動していない状態の遺物群と考えられる。廃棄の状況としては比較的短期間に形成された可能性が高い。また、谷16の上層は古代の遺物しか出土せず、近接した時期の遺物の混在の可能性は低い。さらに、谷16下層からは類似した形態の土器片が多く出土することから、先行する時期の遺物堆積も認められない。つまり、前後の近い時期の遺物の混在は想定しにくく、当遺構出土土器群は京都盆地の弥生時代末～古墳時代初頭の基準資料のひとつとなり得る。この土器群の時期比定を現状の編年案に照らして考察し、京都盆地における弥生後期～古墳前期の土器変化の基準の1点を示すことが本節の目的である。

谷16中・下層出土土器群の帰属時期を整理しておくべき理由には、更に 2 つの点が挙げられる。一つは、集落経営時期の問題である。谷16は、住居群の中央に位置し、多量の遺物が出土したことから、集落内の廃棄施設と考えられる。裏返せば、この土器群の時期が建物群の時期を概ね反映しているとも考えられる。伊藤淳史の京都盆地の集落研究（伊藤2005）では、当遺跡は弥生後期に集落として成立したとされているが、集落動態分析のレベルは上げるためには詳細な時期比定が必要であろう。2つめの焦点は、後章で述べるように未焼成粘土塊が出土していることに関連する。本書の成果としては、本遺跡出土の未焼成粘土塊は土器製作素材の可能性が高いと考えられるが、こういった土器製作素材がどういった時期に遺跡から出土するようになるかを考えることは重要であろう。そのためには、当遺跡出土土器の主要な時期を詳細に判別する必要がある。

１．京都盆地の弥生後期～古墳前期の土器編年

では、近年における京都盆地とその周辺の当該期土器編年はどうなっているのだろうか。これについては高野陽子（高野2003）・吹田直子（吹田2006）・田中元浩（田中2005）が論考を発表している。それぞれの論者の型式変遷の基本は共通していて、それぞれの小様式ステージの設定は類似する。しかし、各器種の成立時期などに若干の差異がみられる。

高野は、弥生後期中葉～布留式期の佐山遺跡出土土器群を細分編年し、佐山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式を設定した（高野2003)。概ね佐山Ⅱ式が庄内式期に相当する見解を出している。佐山Ⅱ-1.2式が寺沢薫の庄内0・1・2 式期、佐山Ⅱ-3.4式が庄内式期後半との所見である。

同じ時期の土器変遷について、吹田は、Ⅵ期（庄内式前半前葉）を庄内甕搬入少量＋器台残存という組成として、Ⅶ期（庄内式前半後葉）を庄内甕安定搬入＋小型器台への変換という様式内容として、Ⅷ期（庄内式末葉）を在地庄内甕成立の時期として説明した（吹田2006)。吹田と高野の編年案は類似し

ているようにも見えるが、基準資料の細部の評価は異なっている。特に、小型器台の出現に関しては、吹田は庄内式期初頭に比定したⅥ期には小型器台が明確に出現していないように記述しているのに対し、高野は庄内甕に先行してこの地域に小型器台が成立している段階を想定して庄内式初頭の状況を説明している。

田中の編年案（田中2005）は、庄内式～布留式初頭期をⅠ～Ⅲ期に区分する点では吹田の編年に近いように見えるが、Ⅲ期はさらに古・新相に細分されているので実際には４期区分ともとれる。また、当地域における小型器台の成立を庄内甕確立に先行させる点では、高野の編年案に近いものといえよう。また、３者の基準資料の位置づけは微妙に異なっている。また、高野の佐山Ⅱ－1式は吹田のⅥ期や田中の庄内Ⅰ期に対応するのだろうが、佐山Ⅱ－2式については吹田Ⅶ期あるいは田中のⅡ期に対応するのかそれともその前後のステージに対応するのか難しい。

本稿は京都盆地の編年全体を提示するのではなくあくまで当遺跡出土土器群の帰属時期を論じるため細論はしないものの、庄内式の成立期の状況については、谷16出土土器群をもとに私見を述べたい。

２．谷16出土土器群の特徴

問題となる谷16出土土器群の特徴はどうなっているのだろうか。図６.05をみると形態上は、壷・甕・鉢の底部には小さな底部をもつものが多く見られる。弥生後期以来の底部形態の個体も、胴部が底部直上から急速に広がるものが多く。器形が球胴化したものがほとんどと考えられる。同器種の図上完形土器もすべて球胴化した器形である。このことから、弥生後期末から古式派時期成立期の土器群であることには疑念がない。それに加え、含まれる土器の組成・形態上の特徴を挙げれば以下の５点が指摘できる。

①内面ヘラケズリ甕が僅少ながら存在
②庄内甕搬入品そのものは出土せず
③大型器台も僅少ながらあり
④小型器台多し
⑤小型器台と高杯の脚部形態が酷似している。

⑤については、谷16中・下層出土土器群については、小型器台と高杯の製作体系が未分化な状態が看取される。これについては、小型器台成立の初期段階ではないかとの推測も可能だが、それについては後で検討する。

また、搬入品と考えられる個体は図６.04－9・13などの受け口状口縁形態で櫛描文を施した甕などが挙げられる。おそらく琵琶湖沿岸地域からの搬入品であろう。しかし、こういったものは僅少であり、谷16出土土器群は基本的に当遺跡を含む岩倉盆地～京都盆地内で生産されたものと考えられる。後節の胎土分析の成果では、含有鉱物組成の異同は小さく、この仮説を支持する内容となっている。

３．帰属時期の評価

上述の諸特徴から、既往の編年案に照らして当資料の帰属時期を考えてみる。

①の要素からは、在地産の庄内甕と呼べるものが成立している状況ととらえることができる。この点からすると、高野編年では佐山Ⅱ-2式以後、吹田編年ではⅦ期、田中編年ではⅡ期と考えられる。つまり、奈良盆地や河内平野で庄内甕が確立した後に相当する段階である。

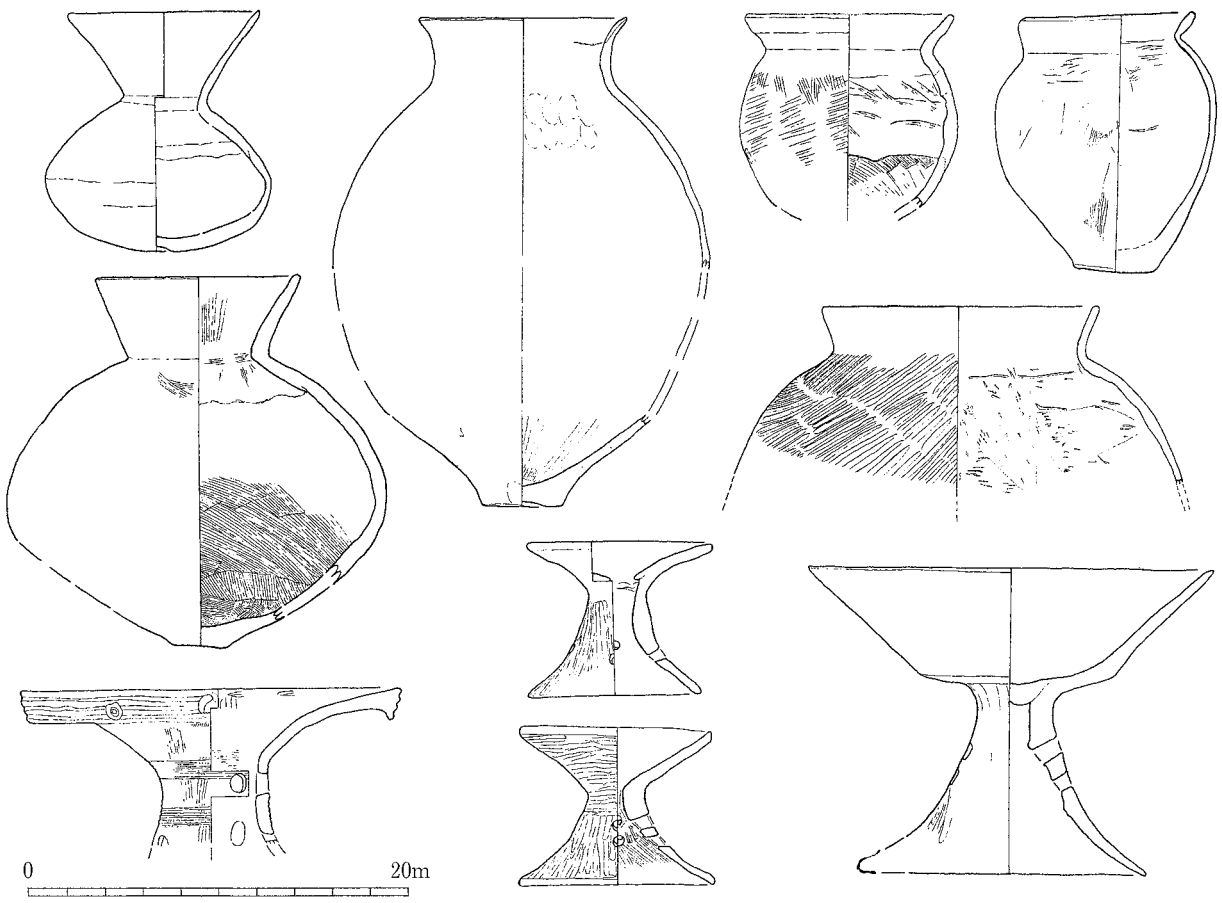


図１　谷16中～下層出土器の基本組成（1/4）

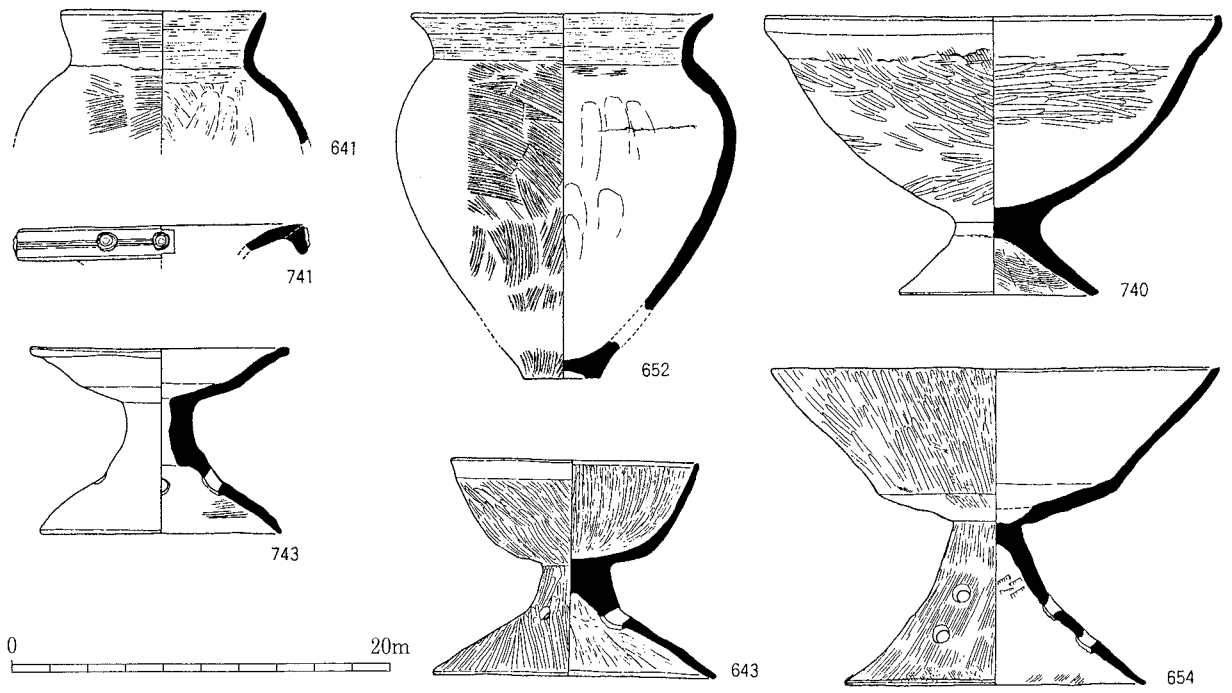


図２　佐山Ⅱ-1式の土器群（1/4）

②の要素からは、高野編年の佐山Ⅱ-1・2式、吹田編年Ⅵ期、田中編年Ⅱ期ともとれる。しかし、搬入品のあり方に関しては、田中が指摘するように地域の中心となる集落とそれ以外では導入状況が異なっている可能性がある。京都盆地北端部や岩倉地域において当遺跡はどのような位置づけの集落であったのかはまだ判然としない。これについては、集落の性格による搬入量の地域差を考慮し、必ずしも時期比定の材料とすべきではないかもしれない。

③の要素は、弥生後期土器の形式が見られることを示しており、帰属時期を遡らせるか、もしくは混在を示す可能性ともいえる。時期が古くなると仮定すれば、高野編年の佐山Ⅱ-1式、吹田編年Ⅵ期、田中編年Ⅰ期に類似する要素であろう。

④の要素は、その発生についての高野・田中の考え方と吹田の案の相違点に関係する事柄である。前者の考え方であれば庄内式の最古段階に比定することも可能であるが、後者の考え方ではそれは難しい。もちろん、③の要素がしめすように、既往編年に照らすと時間幅があるやや混在気味の土器群と考えることも可能となり、既往の編年案のどこにも取り込めないセット関係との評価も生まれよう。

しかし、⑤の要素は注目される。当資料での高杯脚部形態は、すべて曲線的に外反している。つまり、庄内式後半～布留式初頭期に通有の屈曲して開く形状とは異なっている。小型器台の脚部形態もまったく同一であり、庄内期～布留式初頭の直線的に開く形状のものは一点も含まれていない。田中が小型器台Ａとした形態の中でも最古相を示す形態のみで占められ型式上の差異は小さい。また、両器種ともに脚部円孔が２個一対で穿たれた個体が複数みられる点でも酷似している。

こういった脚部形態を含む資料は、佐山遺跡SH266や植物園北遺跡16次SK14出土資料などの庄内式期の初頭部分に比定されてきた土器群の特徴と一致する。つまり、谷16出土土器群中に若干の時間幅を想定するとしても、高野の佐山Ⅱ-1式、田中の庄内式～布留式期のⅠ期を主体とする土器群であると考えることが可能であろう。もちろん、在地産庄内甕が断片的にみられることはやや後出要素であるが、庄内式前半期のさらに古相に帰属する土器群を考えることができる。

４．古式土師器編年と遺跡形成

このように、谷16中～下層出土土器群の主体となる時期を庄内式前半期古相と考えることができるなら、当資料から京都盆地における小型器台と在地庄内甕の成立の状況を類推することが可能である。当資料では前者は多量に確認され、製作技術体系上も高杯との類似性から安定的存在となっていたことがわかる。しかし、後者は僅少で型式学的特長も安定していない。既往編年のうち、高野・田中によって当地域において小型器台の成立が在地産庄内甕の成立に先行するとされたことを首肯する状況を、当資料は提供している。

また、近畿地方全体での古式土師器様式の成立経緯を考えるとき、庄内式期の早い段階において京都盆地で小型精製器種の一部が定型的に存在していることは注目される。もちろん小型器台Ａ類と呼ばれるものがその主体で、布留式初頭の小型器台Ｂ類にはつながらないとの評価もあろう。しかし、古式土師器様式の体系について、奈良盆地・河内平野で完成したセットがそのまま周辺領域に拡散するという単純な経緯により広域の布留式が成立するという説明の不十分さを、当遺跡出土土器群は示している。小型精製器種の製作技術については、吉備地方の精製土器の手法をその起源とする次山淳の説（次山1993）は有力だが、布留式成立に到る器種組成そのものの構造変化の図式はまだ明確ではない。高野・田中が指摘し、当遺跡出土土器群が支持する京都盆地における小型器台を含む土器組成の早期成立現象

は、古墳時代前期の土器組成確立の経緯やその時期の地域間関係を知る上で重要であろう。

また、論点を、当遺跡の集落遺構群の評価へと移してみよう。集落全体、特に竪穴住居や柱穴埋土からの出土土器については、谷16土器群を逸脱する時期の遺物は出土していないように思われる。もちろん、個々の遺構から出土する土器量は僅少で組成を判断するレベルにはない。しかし、確実に布留式期の所産と考えられる土器片は皆無である。土坑165などの一部に古墳時代遺物を含む遺構はあるものの、それは古墳中～後期に属し、主体となる竪穴住居群とは別に後世に再形成された遺構であろう。

また、同志社小学校北側の京都市運動場地点からは、1970年代に同志社敷地であった際の発掘調査で完形の器台が出土している。この器台の脚部には、先述の2個一対となった円孔透かしが穿たれており、今回検出した遺構群と同一時期の所産の可能性が高い。ということは、岩倉忠在地遺跡の集落形成時期はいまのところ明確に確認できる土器資料に基づけば、弥生時代後期ではなく、古墳時代初頭と呼び変えたほうが良いように思われる。むろん、庄内式を古墳時代とするか否かには諸説あるため、時代区分名称だけの問題とのいうこともできよう。しかし、すくなくとも弥生後期中葉・後葉ではなく、終末期という位置づけで評価することが現状に適している。集落形成を岩倉盆地での集落形成を古墳時代の開始と連動させたほうが良いのではないだろうか。

そのような認識に基づけば、岩倉盆地における遺跡形成は弥生時代には明確には確認できないことになる。伊藤淳史（伊藤2005）が述べたように京都府南部域については弥生時代の遺跡形成の連続が確認できない領域が複数確認できるという指摘を、ますます明確な主張として受け入れることができよう。

また、今回出土した白色粘土塊についても同様の時期と考え、他遺跡との比較をするべきであろう。次節に指摘するように、近畿地方における未焼成粘土塊の出土例が土器製作体制の変化と一定の連動を見せているという筆者の所見と、当遺跡での例が古式土師器成立期に入るということは相関する可能性がある。あくまで古墳時代への移行期の現象として、当遺跡での考古学的情報を理解する必要性を、谷16出土土器群の帰属時期の検討によって認識することができることを強調して結びとしたい。

参考文献

伊藤淳史2005「国家形成前夜の遺跡動態－京都府南部（山城）地域の事例から」『国家形成の比較研究』岩波書店

吹田直子2006「山城地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

高野陽子2003「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡 京都府遺跡調査報告第33集』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

田中元浩2005「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号　日本考古学協会

次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第 2 号

第 2 節　弥生・古墳時代集落出土の未焼成粘土塊をめぐって－近畿の事例から－

小森牧人・若林邦彦

はじめに

すでに、第 5 章に述べたように、今回の発掘調査では未焼成の白色粘土塊が出土している。それらはすべて古墳時代初頭の土器群とともに遺構内から出土していることも明確であった。粘土断片ではなく数 cm 以上の大きさとなる白色粘土塊が複数出土し、中には遺構底面から出土したものと、埋土中に土器片と混在して出土したものとがある。この出土状況の傾向については下記に詳述する。また、良好な状態で出土した粘土塊に関しては、後節に理化学的分析の結果を掲載している。そこでは、土器製作素材の可能性が高いという結果が得られている。

本節ではその前提として、本遺跡での出土状況および他の類似例について紹介し、遺跡から出土する未焼成粘土塊の考古学的脈略を概観したい。ただ、この分野での既往の分析論文は僅少である。代表的なものは、北部九州弥生集落における土器焼成遺構・遺物と連動した記述があるのみである（柏原1997・田崎2002）。ここでは、本遺跡での事例の実態をまとめ、比較資料として近畿での類例を提示し、集落出土未焼成粘土塊についての分析視角を提示したい。

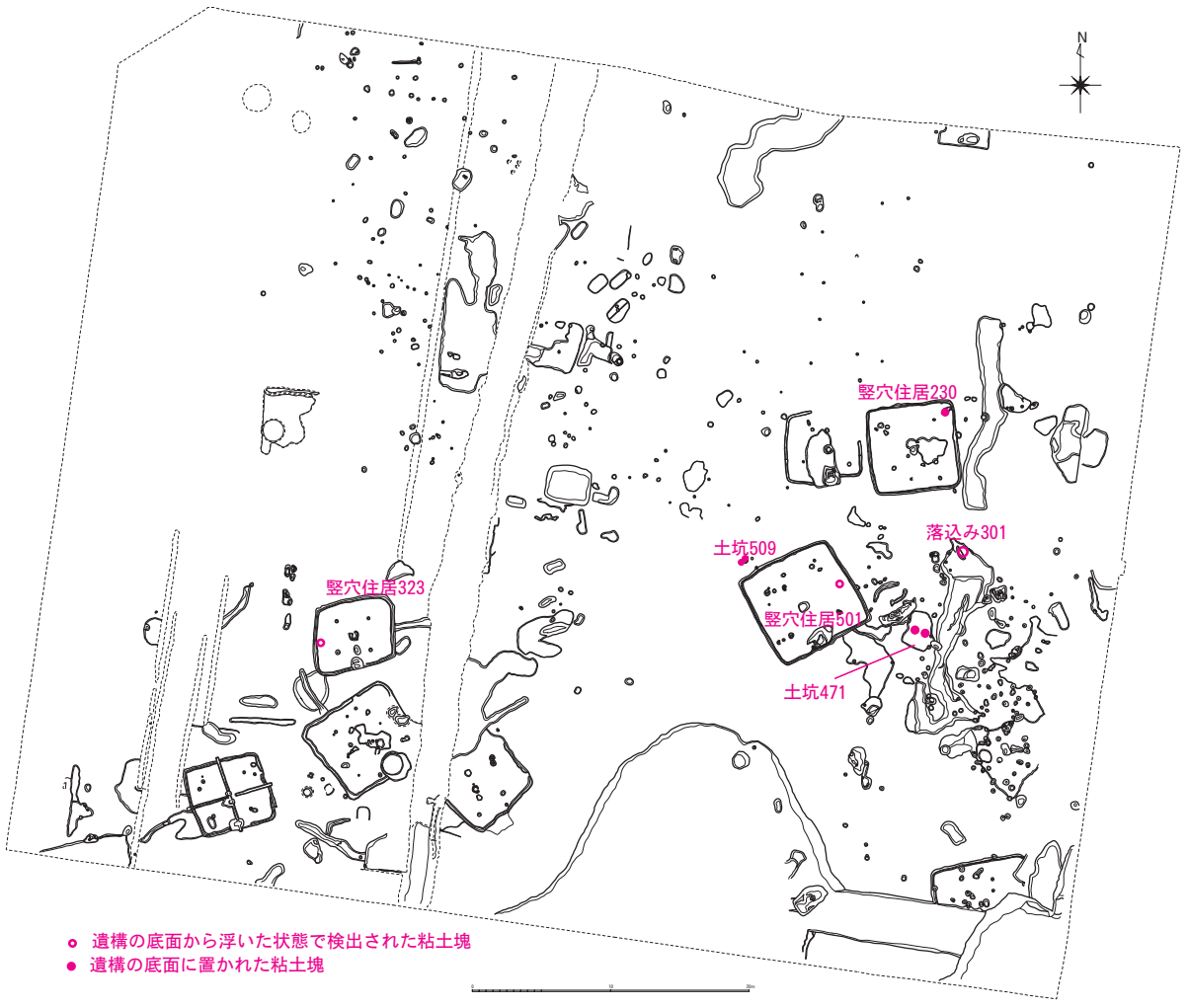


図 1　調査区内での未焼成粘土塊の分布

１．本遺跡での出土状況の概観

今回の調査で出土した未焼成粘土塊が合計 8 点である。出土　位置については、図 1 に示した。ここでは、先述のように、遺構底面に据え置かれたように出土したものと、遺構埋土中に土器片などとと混在して出土したものとがある。このうち遺構床面から出土した例については、第 5 章にその出土状況図を掲載している。各粘土塊の大きさは定型的ではない。また、出土状況の差異はみられるものの、共伴する土器群はすべて古墳時代初頭の所産と考えられ、廃棄時期に大きな違いはみられない。図 1 にみるように、分布は調査区東半部に集中していることがわかる。 1 点だけ西半部で出土している個体は、竪穴住居323の床面から浮いた上体で出土しており、遺構機能時というよりは廃棄遺物群の一部と考えるべきであろう。調査区東半部では、同様の廃棄遺物としての出土例が落込み301や竪穴住居501で確認できるものの、それ以外は遺構底面からの出土例である。このことから、未焼成粘土塊の利用・貯蔵などの行為は調査区東半部で主に行われていたと考えるべきであろう。しかも、その範囲は径10m の範囲内ときわめて限定されている。

これら粘土塊の成分については、第3節・第4節に細論を行っている。その考察では、粘土塊は、その成分が出土している土器の胎土と酷似していることから、土器もしくは土製品の素材であった可能性が極めて高いことが報告されている。未焼成粘土塊を土器・土製品素材と考えると、当遺跡で確認された分布範囲、特に遺構床面出土例の範囲は、その製作活動もしくは貯蔵行為の主要範囲をしめしている可能性を考えねばならない。

その観点から、実際の出土状況の傾向を見てみよう。出土遺構の種類は、竪穴住居と土坑・落ち込みである。いずれも、 1 遺構から多数・多量出土したわけではない。竪穴住居230からは1点出土であるが、土坑471・509からはそれぞれ2点が出土している。ここの粘土塊の大きさは30～40cm 大以下であり、土坑509から出土している2点はどちらも片手で持てるサイズである。いずれの個体も、土器製作用だとすると多量の蓄積ではなく、実際に土器1～ 2 個体制作するための作業量にあわせて切り分けられた単位別に置かれたようにみえる。また、第5章に述べたように、実際に竪穴住居230住居内には、床面の別地点から 2 cm 大程度の粘土砕片が出土していた。これは、同建物内で粘土を用いた作業が行われていることを示している。このことから、今回出土した未焼成粘土塊の多くは、土器・土製品製作用に多量に備蓄されていたと考えるよりも、製作行為に関連して一時的に置かれたものがそのまま残存したと考えることも可能と考えられる。ただし、これに関しては、未焼成粘土塊出土諸例との比較検討が必要である。次に、近畿地方における類似例を挙げ、その傾向を論じたい。

２．近畿地方での類例

当遺跡出土例との比較を行うために近畿地方での古墳時代以前での未焼成粘土塊出土例を集成した。その集成成果は、表 1 に示している。出土例の抽出基準は以下のとおりである。

○法量は各報告の記載をもとにしている。

○粘土塊の個数が判別できないときはその広がる範囲を法量とした。(表※印)

○胎土の状況については各報告をもとにしている。しかし水気を含んだものも多いと思われ、実際の胎土分析とは異なり参考までの情報となる。色調についても同様である。

○粘土 (焼土) が、住居壁際で馬蹄状にめぐるもの、またその可能性があるものについては竈と判断し集成に加えていない。

上記の基準にもとづくと、計38遺跡から出土例が確認できた。そのうち１遺跡で複数例の出土が一定程度みられる。出土した遺構数は合計45箇所、また1遺構で複数の粘土塊が出土した例もあることから、合計117点の粘土塊か出土している。

出土遺構の時期別の傾向をみてみよう。弥生前期は確認できず、弥生中期が4例、弥生後期が14例、古墳前期が14例、古墳中期が7例、古墳後期が6例となっている。弥生前期には類例が確認できず、近畿地方の未焼成粘土塊の出土例は弥生中期以後にみられる現象と言える。また、古墳中期は高槻市新池遺跡例などのように、埴輪工房などの特殊施設から出土が含まれてしまう。これは通常集落からというより、明確な土製品製作址からの出土例と考えなければならない。また、上記のように住居壁際の粘土に関しては竈の可能性の高いものは排除したが、それでもなお、その残片の出土例を抽出してしまっている可能性は否定できない。このような例は、住居への据付竈の普及した古墳中～後期に多く見られると考えられる。このように考えると、古墳時代中・後期での特殊な土製品生産遺跡でない出土例は、僅少と考えたほうが良いのかもしれない。

このような前提に立つと、出土遺構数から見たとき、これまでの研究で土器・土製品専業性が指摘されていない遺跡からの出土例では弥生後期と古墳前期の例が圧倒的に多いこといえる。この時期は、須恵器などといった専業的生産の明確な土器が出現する以前の段階と考えることができる。また、一方では近畿地方においては古墳時代前期の布留式では土器製作の地域性が著しく薄れ、壷・甕といった器種ごとの製作手法・形態に共通性が著しく高まる時期である。また、弥生後期にも壷・甕・鉢がタタキ成形で作られ、なおかつ同形の鉢をベースに胴部上位以上の形態バリエーションで作りわけが行われるなどの現象が見られる。これは古墳前期にみられる器種ごとの製作手法・形態に共通性が高まる傾向の先駆けとも受け取れる。つまり、土器製作に関しては、両時期は明確な集団間の専業的生産／消費関係は確認できないものの、土器製作手法の中に画一化・システム化の進行が見られる段階と評価することができる。今回集成した粘土塊がすべて土器生産用の素材だとは言い切れない。しかし、当遺跡で検証した粘土塊と土器胎土の類似性を一般化できると仮定して論を進めるならば、弥生後期・古墳前期に粘土塊出土例の比率の高いことは、明確な専業化以前の生産システム化段階の状況に連動した現象と考えることもできよう。

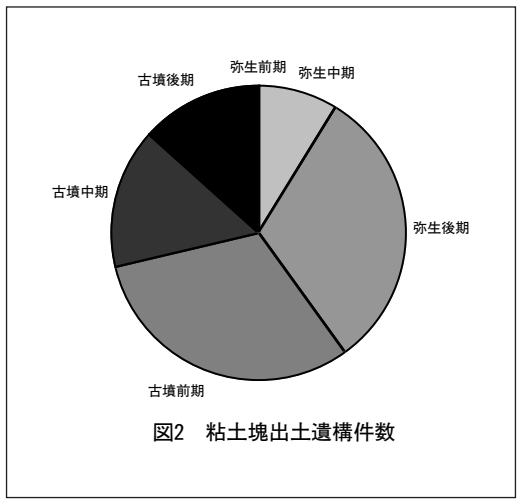


図2　粘土塊出土遺構件数

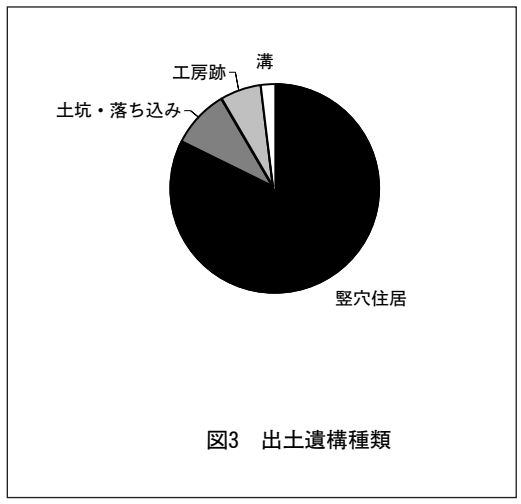


図3　出土遺構種類

表1　近畿地方における未焼成粘土塊の出土例

番号	遺跡名	所在地	遺跡の立地	粘土出土遺構	遺構概要	遺構時期	出土位置	粘土状態	長辺(cm)	短辺(cm)	厚さ(cm)	粘土色調	胎土	台石出土	備考	文献
1	中ノ郷・深谷古墳群	兵庫県豊岡市	丘陵	竪穴住居	径6.5～8mの円形住居	弥生中期	住居中心北側の長円形のピット内	塊？	50	10	—	—	—	—	非常に薄い。	『中ノ郷・深谷古墳群』 但馬考古学研究会 1985
							住居中心北側の長円形のピット内	塊？	40	10	—	—	—		非常に薄い。	
2	鍛冶屋・下川遺跡	兵庫県多可町(旧多可郡中町)	沖積地(盆地)	竪穴住居2	径10mほどの円形住居	弥生後期	西部床面上	塊	40	25	—	—	精製	○		『鍛冶屋・下川遺跡』 兵庫県多可郡中町教育委員会 1994
							西部床面上	塊	25	15	—	—	精製			
							西部床面上	塊	25	15	—	—	精製			
							西部床面上	塊	15	12	—	—	精製		指痕。	
							南西部周壁沿い床面上	塊	20	15	—	—	精製			
							南西部周壁沿い床面上	塊	16	16	—	—	精製			
							南西部周壁沿い床面上	塊	16	16	—	—	精製			
							南西部周壁沿い床面上	塊	10	10	—	—	精製			
3	川除・藤ノ木遺跡	兵庫県三田市	沖積地(盆地)	竪穴住居SH11	直径9.5mほどの円形住居	弥生後期	北部ベッド状遺構沿いの床面上	塊	30	30	10	白色	精製	—		『川除・藤ノ木遺跡－第1分冊－』 兵庫県教育委員会 1992
4	六角遺跡	兵庫県姫路市	自然堤防	竪穴住居SH11	一辺6.5mほどの方形住居	弥生後期	北隅の周壁が途切れる部分の床面上	塊	20	20	—	灰白色	精製	—		『六角遺跡』 兵庫県教育委員会 1994
							北隅の周壁が途切れる部分の床面上	塊	20	20	—	灰白色	精製			
							北隅の周壁が途切れる部分の床面上	塊	20	20	—	灰白色	精製			
							北隅の周壁が途切れる部分の床面上	塊	20	20	—	灰白色	精製			
							北隅の周壁が途切れる部分の床面上	塊	20	20	—	灰白色	精製			
							北隅の周壁が途切れる部分の床面上	塊	20	20	—	灰白色	精製			
5	大中遺跡	兵庫県加古郡播磨町	台地	竪穴住居SH1902b	一辺7mほどの方形住居	弥生後期	北西隅の周溝上？	塊	40	25	—	—	—	—		『大中遺跡』19次・20次 兵庫県教育委員会 2004
							北西隅の周溝上？	塊	40	20	—	—	—			
							北西隅の周溝上？	塊	25	25	—	—	—			
6	日輪寺遺跡	兵庫県神戸市西区	高位段丘	竪穴住居SH21	一辺4mほどの多角形住居？	弥生後期	北東辺中央部周壁溝上	塊	—	—	—	—	精製	—	人頭大の礫を伴う。	『日輪寺遺跡発掘調査報告書』第4次～7次 神戸市教育委員会 2002
7	玉津田中遺跡	兵庫県神戸市西区	沖積地	竪穴住居SH55001	一辺3mほどの方形住居	弥生後期	北東隅の床面上	塊	40	30	—	—	精製	—		『玉津田中遺跡－第4分冊－』 兵庫県教育委員会 1995
							北東隅の床面上	塊	20	10	—	—	精製			
8	熊内遺跡	兵庫県神戸市中央区	扇状地	竪穴住居SA2	一辺6.5mほどの方形住居	弥生後期	南西隅ベッド状遺構上	塊(被熱)	17	15	12	赤褐色	～5mmの砂粒混	○	何かで縛られたような痕跡と指痕。	『熊内遺跡』第2次調査 六甲山麓遺跡調査会 1996
							南西隅ベッド状遺構上	塊(被熱)	20	15	14	赤褐色	—		何かで縛られたような痕跡と指痕。口縁欠損鉢をあてがう。	
							北西部床面上	塊(被熱)	20	13	9	黄褐色	—		何かで縛られたような痕跡と指痕。	
							南東隅貯蔵穴内	塊	25	20	7	黄白色	精製		口縁欠損鉢をあてがう。	
9	豊部井杉遺跡	兵庫県多可町(旧多可郡加美町)	沖積地	竪穴住居SB04	一辺5.6mほどの方形住居	古墳前期	住居南辺ベッド状遺構構成土内に多数	塊	10	10	—	乳白色	～5mmの砂粒混	○	細かく砕かれている。表面に工具痕。	『豊部井杉遺跡Ⅱ』 多可郡加美町教育委員会 2003
10	日暮遺跡	兵庫県神戸市中央区	沖積地	竪穴住居SB01	一辺4mの方形住居	古墳中期	南辺中央部床面上	塊	50	25	—	—	—	—		『日暮遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 1989
11	鬼神谷窯跡	兵庫県豊岡市(旧城崎郡竹野町)	丘陵	竪穴住居SB1	一辺6mの方形住居	古墳後期	南西辺中央やや住居の中心よりのピットP2内	土坑充填	20	20	—	—	—	○	ピット内板石と共に充填。	『鬼神谷窯跡発掘調査報告書』 兵庫県城崎郡竹野町教育委員会 1990
12	長尾谷遺跡	兵庫県たつの市(旧龍野市)	谷	溝341	竪穴住居付近の4mほどの溝	古墳後期	溝の底面上	塊	50	50	10	灰白色	—	—		『長尾小畑遺跡群』 龍野市教育委員会 1999
13	寺田遺跡	兵庫県芦屋市	扇状地	竪穴住居SH12	一辺5mほどの方形住居	古墳後期	住居中心東側床面上	塊	80	80	—	—	精製	—	近くの住居内土坑からも同質の粘土検出。	『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書』 芦屋市教育委員会 1999
14	川端遺跡(AN91)	兵庫県三田市	丘陵	竪穴住居	一辺3.6mほどの方形住居	古墳終末期	北西隅床面上	塊	35	25	—	—	—	—		『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報』 兵庫県教育委員会 1978
							北東隅床面上	塊	25	25	—	—	—			
							東部床面上	塊	40	40	—	—	—			
							南東部床面上	塊	25	20	—	—	—			
15	今林遺跡	京都府船井郡園部町	丘陵	竪穴住居SH01	一辺5～6mほどの方形住居	弥生後期	南東部ピット内	塊	20	20	—	—	—	○		『京都府遺跡調査概報』第97冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001
16	諸畑遺跡	京都府船井郡八木町	扇状地	竪穴住居SH03	一辺5.5～6mほどの方形住居	弥生後期	西部周壁溝内	塊	20	20	—	—	—	—		『京都府遺跡調査概報』第115冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2005
							東部床面上	塊	—	—	—	—	—			
17	中臣遺跡	京都府京都市山科区	沖積地	竪穴住居4号	一辺7mほどの円形住居	弥生後期	北東側土器群中	塊	20	20	—	白色	—	—	半裁した壺をあてがう。	『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1995
				落込み301	長さ15m程度の溝状のおちこみ	古墳初	埋土中に混在	塊	15	15	5	白色				
18	岩倉忠在地遺跡	京都府京都市左京区	扇状地	竪穴住居230	一辺6.5mほどの方形住居	古墳初	北東部床面	塊	75	40	4	白色	—	—	床面をわずかに掘りくぼめて置かれている。	本書
				竪穴住居323	一辺5～6mほどの方形住居	古墳初	住居西辺中央埋土中に混在	塊	15	15	7	白色	—	—		
				土坑471	2.7×1.8mほどの不整方形土坑	古墳初	土坑中央凹部東	塊	40	40	10	白色	—	○	周囲に炭焼積層	
							土坑中央凹部西	塊	70	50	10	白色	—		周囲に炭焼積層	
				土坑509	0.5×0.3mほどの不整方形土坑	古墳初	南側凹部	塊	20	15	5	白色	—		粘土内部一部赤色	
							北側凹部	塊	25	17	5	白色	—		粘土内部一部赤色	
19	植物園北遺跡	京都府京都市北区	扇状地	竪穴住居3(SH03)	一辺7mほどの方形住居	弥生末～古墳初	西部柱穴P1付近	塊	55	40	—	白色	—	—		『京都府遺跡調査概報』第70冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996
							南辺中央床面上	塊	60	30	—	白色	—			
20	木津川河床遺跡	京都府八幡市	沖積地	竪穴住居SH47	一辺5.5～6mほどの方形住居	弥生末～古墳初	中央床面	塊	70※	50※	—	白色	—	—		『京都府遺跡調査概報』第30冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
21	内里八丁遺跡	京都府八幡市	沖積地	竪穴住居SH94008	一辺5mほどの方形住居	弥生末～古墳初	北東隅床面上	塊	100※	100※	—	白色	—	—		『内里八丁遺跡Ⅱ』京都府遺跡調査報告書第30冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001
22	和泉式部町遺跡	京都府京都市右京区	低位段丘	竪穴住居2号	一辺6mほどの六角形住居	古墳前期	北西隅の床面上	塊	—	—	—	白色	—	—		『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1991
				竪穴住居3号	一辺3.6mほどの方形住居	古墳中期	床面上	塊	—	—	—	白色	—	○		
23	池上遺跡	京都府船井郡八木町	沖積地	竪穴住居SHD05	一辺4mほどの方形住居	古墳中期	北東隅床面上	塊	50	30	—	白色	—	—		『池上遺跡発掘調査報告書－第3次・第4次調査－』 八木町教育委員会 2000
							北東隅床面上	塊	40	40	—	白色	—			
							北東隅床面上	塊	50	25	—	白色	—			
							北東隅床面上	塊	40	25	—	白色	—			
							北東隅床面上	塊	25	20	—	白色	—			
							北東隅床面上	塊	30	20	—	白色	—			
							北東隅床面上	塊	20	15	—	白色	—			
							北東隅床面上	塊	10	10	—	白色	—			
24	天徳古墳群	京都府中郡大宮町	丘陵	竪穴住居2	一辺4mほどの方形住居	古墳終末期	北西隅床面上	塊	100※	60※	—	青淡灰色	—	—	粘土直上から須恵器杯が出土。	『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1997
25	山之内遺跡	大阪府大阪市住吉区	中位段丘	方形周溝墓7号墓	11×8.5mの長方形周溝墓	弥生中期	周溝内	塊？	—	—	—	—	—	—		『山之内遺跡発掘調査報告』 大阪市文化財協会 1998
26	八雲遺跡	大阪府守口市	沖積地	竪穴住居	長径7m短径5.5mの円形住居	弥生中期	北西部柱穴P2遺存の柱根上	塊	25	25	—	—	—	—		『八雲遺跡発掘調査概要Ⅰ』 大阪府教育委員会 1987
27	男里遺跡	大阪府泉南市	低位段丘	落ち込み(91-15区)	幅0.8m長さ1.5m以上の落ち込み	弥生中期	落ち込み内	塊？	—	—	—	—	—	—		『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』 泉南市教育委員会 1993
28	向山遺跡	大阪府阪南市	河岸段丘(台地)	竪穴住居1-2	径9mほどの円形住居	弥生後期	西部柱穴P15内	塊	40	40	15	橙色	精製	—		『向山遺跡発掘調査報告書』 大阪府文化財調査研究センター 2002
29	鬼塚遺跡	大阪府東大阪市	扇状地	竪穴住居	6×4.5mほどの方形住居	弥生後期	南西辺中央よりの床面上	塊(被熱)	30	30	—	赤褐色	角閃石、金雲母混じり	○	表面に籠目のような痕跡。火災により焼けている。	『鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡』 東大阪市遺跡保護調査会 1979
							南西辺中央よりの床面上	塊(被熱)	30	30	—	赤褐色	角閃石、金雲母混じり		表面に籠目のような痕跡。火災により焼けている。	
							南西辺中央よりの床面上	塊(被熱)	30	30	—	赤褐色	角閃石、金雲母混じり		表面に籠目のような痕跡。火災により焼けている。	
							南西辺中央よりの床面上	塊(被熱)	30	30	—	赤褐色	角閃石、金雲母混じり		表面に籠目のような痕跡。火災により焼けている。	
							南西辺中央よりの床面上	塊(被熱)	30	30	—	赤褐色	角閃石、金雲母混じり		表面に籠目のような痕跡。火災により焼けている。	
							中央部南よりの床面上	塊(被熱)	30	30	—	赤褐色	角閃石、金雲母混じり		表面に籠目のような痕跡。上記のものより焼けが著しい。	
30	上フジ遺跡	大阪府岸和田市	低位段丘	竪穴住居2-OD	一辺3mほどの八角形住居	弥生後期	南部壁溝内床面より5cmほど浮いた状態	塊(被熱)	20	20	20	淡褐色	精製	—	表面にしわ状の筋、幅1cmほどの網目？火災により焼けている。	『上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳』 大阪府埋蔵文化財協会 1993
31	駒ヶ谷遺跡	大阪府羽曳野市	丘陵	竪穴住居41	一辺6mほどの方形住居	弥生末～古墳初	南部壁溝内	塊	—	—	—	—	—	—		『駒ヶ谷遺跡Ⅱ』 大阪府文化財調査研究センター 2002
32	小阪遺跡	大阪府堺市	氾濫原	竪穴住居6	一辺4.5mほどの方形住居	古墳中期	西辺中央床面上	塊	10	4	4	—	—	—		『小阪遺跡』 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1992
							南西部柱穴P4付近床面上	塊	10	4	4	—	—			
33	新池遺跡	大阪府高槻市	中位段丘	埴輪工房1	一辺10～11mほどの方形工房	古墳中期	北隅土坑SK1	土坑充填	75	75	12	—	—	—		『新池』 高槻市教育委員会 1993
							北隅土坑SK2	土坑充填	50	37	5	—	—			
							西部土坑SK3	土坑充填	25	25	12	—	—		円筒埴輪を粘土容器に転用。	
							西部土坑SK4	土坑充填？	50	50	—	—	—			
							北部土坑SK6	土坑充填	50	37	8	—	—			
							北東部土坑SK8	土坑充填	50	37	18	—	—			
							南部土坑SK10	土坑充填	50	50	12	—	—			
							北東部土坑SK12	土坑充填	87	75	12	—	—			
							東部土坑SK14	土坑充填	50	50	10	—	—			
							北東隅土坑SK15	土坑充填	87	62	5	—	—			
							東部土坑SK17	土坑充填？	37	12	5	—	—		円筒埴輪を粘土容器に転用。	
							周壁溝に接する土坑SK18	塊	75	50	30	灰白色	—		炭粒含む。	
							周壁溝に接する土坑SK19	土坑充填	150	100	12	灰白色	—		炭粒含む。	
							東部柱穴9	塊(被熱)	3.6	2.4	2	淡褐色	埴質		表面に布跡。火を受けている。	
							西部床面上	塊	600※	150※	—	—	—			
							周壁溝内各所	塊	—	—	—	—	—			
				埴輪工房2	一辺10～11mほどの方形工房	古墳中期	北西部土坑SK1	土坑充填？	37	37	5	—	—	—		
							西部土坑SK2	土坑充填	50	50	5	—	—			
							北西部土坑SK5	土坑充填	62	50	12	—	—			
							東部土坑SK9	土坑充填	87	87	15	—	—			
							北部床面上	塊	550※	100※	—	—	—			
				埴輪工房3	一辺10～13mほどの方形工房	古墳中期	北西部土坑SK2	土坑充填	37	37	7	—	—	—		
							西部土坑SK3	土坑充填	50	50	5	—	—			
							西部土坑SK4	土坑充填	37	37	12	—	—			
							西部土坑SK5	土坑充填	37	37	12	—	—			
							西部土坑SK7	土坑充填	50	50	12	—	—			
							北部土坑SK10	土坑充填	50	50	12	—	—			
							北部土坑SK11	土坑充填	50	50	12	—	—			
							中央部土坑SK14	土坑充填	25	25	5	—	—			
							北東部土坑SK19	土坑充填	25	25	25	—	—		円筒埴輪を粘土容器に転用。	
							周溝壁に接する土坑SK29	土坑充填	100	50	12	灰白色	—			
							周壁溝に接する土坑SK30	土坑充填	80	60	5	灰白色	—			
							周壁溝に接する土坑SK31	土坑充填	130	50	12	灰白色	—			
							北部周壁溝内	塊(被熱)	6.4	3.8	1.8	茶褐色	—		表面に指跡。火を受けている。	
34	慈恩寺遺跡	滋賀県安土町	台地	竪穴住居4号	一辺5mほどの方形住居	弥生末～古墳初	南部床面上	塊	80	40	20	黄白色	—	—		『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-5-1』 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1982
35	高野・辻遺跡	滋賀県栗太郡栗東町	自然堤防	竪穴住居21	一辺2～4.5mほどの方形住居	古墳前期	中央部南よりの床面上	塊	—	—	—	—	—	—	甕の上半部をあてがう。	『高野・辻遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 滋賀県教育委員会 1990
36	植遺跡	滋賀県甲賀市(旧水口町)	低位段丘	竪穴住居SH086	一辺5.5～6mほどの方形住居	古墳後期	南辺西よりの長方形土坑P1052内	塊	—	—	—	白色	—	○		『植遺跡』 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2005
							南東隅床面上	塊	30	25	—	白色	—			
37	箸尾遺跡	奈良県北葛城郡広陵町・河合町	沖積地	竪穴住居SB2003	一辺3mほどの方形住居	古墳前期	東隅貯蔵穴内	塊？	—	—	—	明黄灰色	—	—		『箸尾遺跡第16・17・20次発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報1994年度 奈良県立橿原考古学研究所 1994
38	船岡山遺跡	和歌山県伊都郡かつらぎ町	低位段丘(島状)	溝SD6	竪穴住居SB10にとりつく幅1mほどの溝	弥生後期	溝の竪穴住居にとりつく部分	塊	40	20	—	—	—	○		『船岡山遺跡発掘調査報告書』 和歌山県教育委員会 1986

このことを論じるためには、出土遺構の性格にも言及する必要があろう。出土遺構の種類としては、竪穴住居が圧倒的に高い比率を示す。また、１竪穴から複数出る例が一定程度みられる。粘土塊出土遺構が土器・土製品の製作に関わる施設であると仮定するならば、集落遺跡内で生産・備蓄行為がある集団に偏っている傾向は看取できる。弥生時代前期の北部九州では、集落内の特定の領域の竪穴住居から未焼成粘土塊が出土している例が報告されている（柏原1997）。また、これらに伴って土器焼成にかかわる焼粘土塊も出土している（田崎2002・2004）。このような例は、集落遺跡内で特定の領域が土器生産に主に関わっていた可能性を示唆しているとされている（田崎2002•2004）。このような例を考慮すると、特定の竪穴住居から複数の未焼成粘土塊が出土することは、特定の施設で土器作りに関わる作業もしくはその素材の備蓄が行われていたと考えることも可能である。

また、出土した未焼成粘土塊のサイズを一覧すると、30〜40cm 大程度のものが多数を占める。これは、一人が持って作業できるということができよう。また、1遺構からは3点以内の出土例が多数を占める。粘土塊のサイズの傾向と合わせて類推すると、粘土を用いた作業の場で出土している例が多いと考えるべきであろう。先述のように、本遺跡の竪穴住居230からは住居床面に粘土塊がおかれ、床面の他の場所では粘土小片が見つかり、住居内での粘土を用いた作業の痕跡と考えられる。こういった例を参照するなら、床面で粘土塊が出土する竪穴住居は土器・土製品の製作址の可能性が高いことになる。

また例外として、東大阪市鬼塚遺跡出土例では、一つの竪穴住居内から、植物を編んだ袋状のものにくるまれた粘土塊が多数出土している。このような例は、まさに作業の前段階における「備蓄」といった状況を示していると考えられる。

３．まとめ

以上、不十分ではありながら、岩倉忠在地遺跡での出土例と近畿地方の未焼成粘土塊のありかたを検討してみた。後章での理化学的検討から当遺跡出土粘土塊を土器作り用と考え、類似した性格が他遺跡にもみれると考えた場合、サイズ・出土遺構などから作業にかかわる実態を示す出土例と考えるのが自然と思われる。また、出土時期・遺跡の性格からみて多数を占める弥生後期・古墳前期例は、集落・遺跡群内分業の証左の可能性がある。しかし、これには各遺跡で土器製作用と言えるか否かについて分析する必要あり、また、岩倉例のように集落内で特定のゾーンから出土するなどの例が増えなければならない。課題は山積しているが、今回の集成作業によって、思いのほか未焼成粘土塊の出土例は多いことがわかった。一方では、それらについて詳細な検討が行われた例は僅少である。本稿が、そういった分析への足がかりとなれば、望外の喜びである。

参考文献

柏原孝俊1997「弥生前期の土器づくり」『みずほ』第23号
田崎博之2002「焼成失敗品からみた弥生土器の生産と供給」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会
田崎博之2004『土器焼成・石器製作残滓からみた弥生時代の分業と集団間交流システムの実証的研究』

第 3 節　岩倉忠在地遺跡出土土器の胎土分析

矢作　健二（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

京都市北方の岩倉盆地内に位置する岩倉忠在地遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭とされる集落が確認された。発掘調査では、竪穴住居跡、柱穴群、土坑群などの遺構が検出され、それらの遺構に伴う庄内式期前半と考えられる土器などの遺物も多数出土している。遺物の中には、竪穴住居跡の覆土中または床面に置かれた状態で出土した粘土塊が 3 点、その周囲の土坑および落ち込みから出土した粘土塊が 6 点認められており、その出土状況から、土器製作に使用された粘土であるとの発掘調査所見が示されている。

本報告では、これらの粘土塊が土器製作のための素材である可能性について、粘土塊および土器の双方を対象とした自然科学分析を行うことにより検討する。

1．試料

試料は、岩倉忠在地遺跡より出土した粘土塊8点と同遺跡より出土した土器片 9 点である。試料には No.1～17までの番号が付されており、このうち No.1～8が粘土であり、No.9～17が土器片である。

粘土試料は、いずれも灰白色を呈し、竪穴住居跡230および土坑509の各遺構出土粘土塊から、それぞれ 2 点ずつ、さらに土坑471出土粘土塊から4点が選択されている。また、土器試料は、いずれも溝16から出土したものであり、鉢や高坏、甕などの器種が含まれている。各試料のサンプル No. とその内容については、一覧にして表 1 に示す。

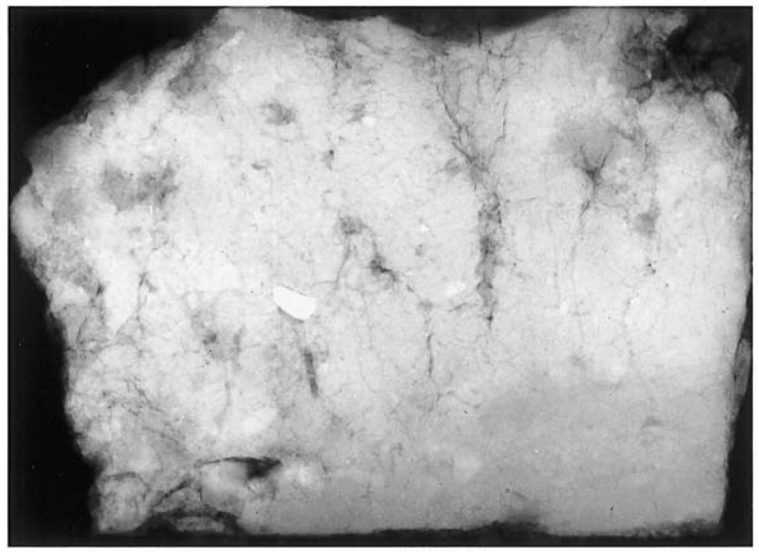
表 1　分析試料一覧および胎土分類

サンプル No.	出土遺構	内容	掲載図番号	胎土分類						
				Ⅰ			Ⅱ			
				a	b	c	a	b	c	d
1	竪穴住居230	粘土1	図5.06・5.07	■						
2	竪穴住居230	粘土1	図5.06・5.07				■			
3	土坑509	粘土2	図5.18	■						
4	土坑509	粘土2	図5.18		■					
5	土坑471	粘土1	図5.17	■						
6	土坑471	粘土1	図5.17	■						
7	土坑471	粘土2	図5.17	■						
8	土坑471	粘土2	図5.17	■						
9	溝16	鉢（口縁部）	図6.05-3		■					
10	溝16	鉢（口縁部）	図6.05-2	■						
11	溝16	小型器台（脚裾部）	図6.06-8		■					
12	溝16	高坏（脚裾部）	図6.07-8					■		
13	溝16	甕（口縁部）	図6.04-15			■				
14	溝16	甕（口縁部）	図6.04-3						■	
15	溝16	広口壺（口縁部）	図6.03-2	■						
16	溝16	直口壺（口縁部）	図6.03-7					■		
17	溝16	台付無頸壺（口縁部）	図6.03-17							■

胎土分類の説明

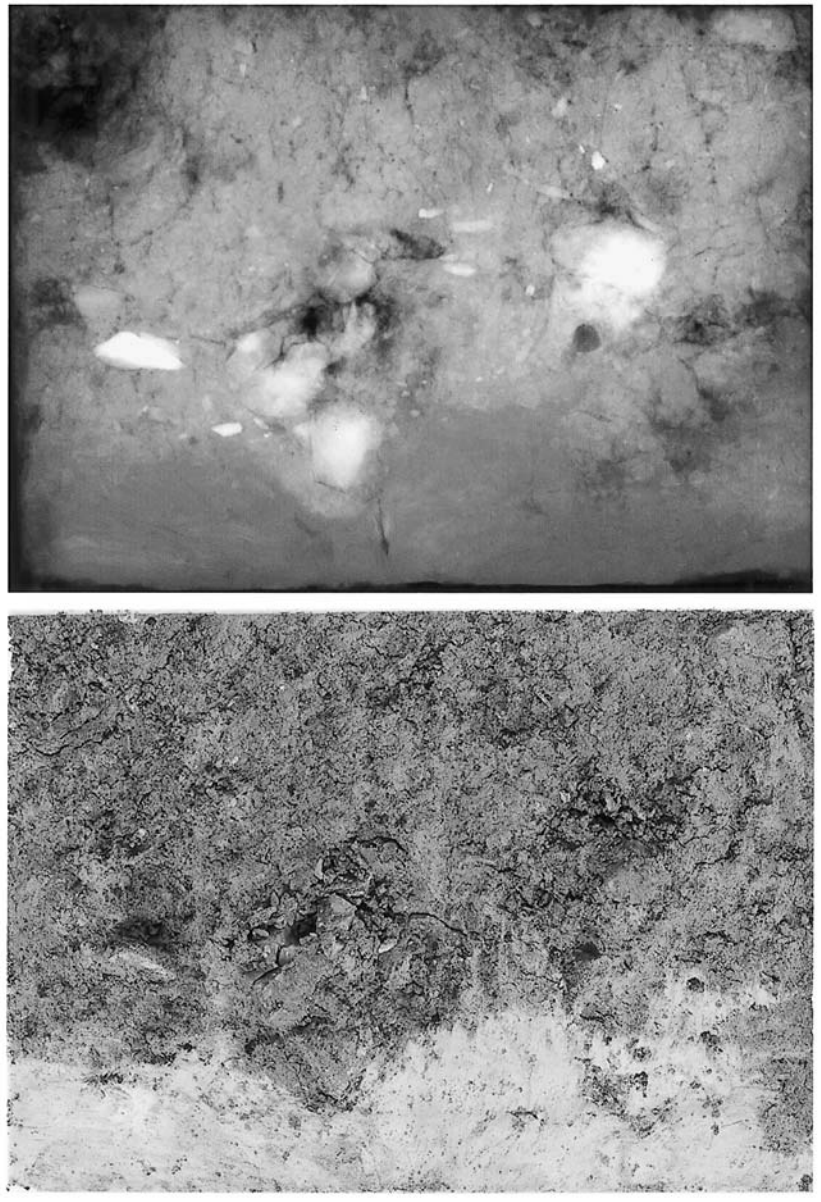
Ⅰ：砂分の粒径組織ヒストグラムが単独峰形
　Ⅰａ：モードが極細粒砂～細粒砂にある
　Ⅰｂ：モードが細粒砂～中粒砂にある
　Ⅰｃ：モードが中粒砂～粗粒砂にある

Ⅱ：砂分の粒径組成ヒストグラムが双峰形
　Ⅱａ：粗粒側のピークは多結晶石英
　Ⅱｂ：粗粒側のピークはチャート
　Ⅱｃ：粗粒側のピークはカリ長石
　Ⅱｄ：粗粒側のピークは石英



2 cm

写真7.01　土坑471　粘土2　上：試料写真　下：軟X線写真



2 cm

竪穴住居跡　粘土1（登録番号566）　上：試料写真　下：軟X線写真

２．分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の場合、前者の方法においては、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えることのできる情報が得られるなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

ａ）薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mm の厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか（1999）が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。

一般に、薄片にした砂質堆積物の粒度分析では、ポイント法により抽出した粒子の頻度は、直径の三乗の重みのかかった頻度すなわち容積頻度として表される（公文・立石編，1998）。なお、移動間隔を0.5mm としたのは、限られた土器断面からなるべく多くの砂粒を計数するためであるが、この場合、粒径が0.5mm を超える粗粒砂以上の砂粒については、同一粒子の中に複数のポイントが落ちることがある。ここでは、同一粒子を重複して計数することはせず、その場合はノーカウントとする。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。上述したように、得られた結果は試料中における砂粒の容積頻度に近似するといえるが、粗粒砂以上の扱いにおいて若干歪んでいるといえる。その補正方法については未解決である。

ｂ）粘土塊の焼成

ここでは、粘土の焼成により推定される砂粒と基質の量比の変化が、上述の薄片観察法により捉えられるものであるかを確認するために、粘土試料を実際に焼成し、その薄片を作製して砂粒の粒径組成と基質•孔隙の計数を行った。焼成は、電気炉を用いて、通気した状態（すなわち酸化状態）により700℃、２時間で行った。対象とした試料は、No.3と No.5の粘土2点である。

ｃ）植物珪酸体の概査

後述するように、薄片観察により、粘土および土器試料の中には植物珪酸体の含まれるものが認められた。これらについて薄片下で判別できる範囲での種類の特定を行うと同時に、出土粘土の処理を行い、植物珪酸体の産状を確認した。選択した試料は、粘土では No.5、6、8の3点、土器では No.12と15の2点であり、このほか竪穴住居230の粘土直下堆積物1点である。また、堆積物の処理方法は、以下の通りである。

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水•塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希

釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定する。

３．結果

ａ）薄片観察結果

薄片結果を表２、図１～３に示す。鉱物片および岩石片の種類構成は、粘土試料も土器試料もいずれもほぼ同様であり、特に大きく異なる試料はない。各試料とも、鉱物片では石英が多く、少量のカリ長石と斜長石を伴い、少量または微量の角閃石と黒雲母を含み、岩石片では少量または微量のチャート、頁岩、多結晶石英、花崗岩類を含み、試料によっては少量または微量のホルンフェルスや火山ガラスを含む。なお、微化石の植物珪酸体を微量含む試料も認められた。

図２に示す砂粒・基質・孔隙の割合は、前述したようにポイント法の抽出条件が通常とは異なっているため、砂の容積比を正しく表しているとは言えない。しかし、いずれの試料も、抽出条件に問題のある粗粒砂以上の砂粒の割合が比較的少ないことから、歪みの程度は小さいとし、少なくとも、試料間の相対的な比較は可能と考える。図２では、土器のNo.9と10が砂粒の割合40% を超えて、他の試料に比べて砂の割合が多い傾向を示すが、他の試料では、粘土も土器も概ね砂の割合30% 前後を示し、砂の割合での分類は難しい。ただし、傾向として、土器に比べて粘土の方が砂の割合がやや多いことが指摘できる。

一方、砂粒の粒径組成では、粘土試料と土器試料との間に差異が認められる。粘土試料では、No.2を除き、粒径組成のヒストグラムは単独峰の山形を呈し、No.2のみが２つのピークを示す双峰形の山形である。これに対して土器試料では、単独峰山形のものが５点、双峰形のものが４点とほぼ２分される。また、各試料のピークを構成する粒径も試料によって異なっている。さらに、ピークを構成する砕屑物の主体は、単独峰形の試料では全て石英であるが、双峰形の試料では、粗粒側のピークを構成する砕屑物に違いが認められる。以上の状況から、粒径組成の違いによる分類を設定することができる。

Ⅰａ類：単独峰形を呈する。モードとそれに次ぐ割合を占める粒径の２階級の組み合わせは、細粒砂と極細粒砂である。これに分類される試料は、粘土ではNo.１、３、５～８、土器ではNo.10、15である。

Ⅰｂ類：単独峰形を呈する。モードとそれに次ぐ割合を占める粒径の２階級の組み合わせは、中粒砂と細粒砂である。これに分類される試料は、粘土ではNo.4のみ、土器ではNo.9、11である。

Ⅰｃ類：単独峰形を呈する。モードとそれに次ぐ割合を占める粒径の2階級の組み合わせは、粗粒砂と中粒砂である。これに分類される試料は、土器ではNo.13のみである。

Ⅱａ類：双峰形を呈し、粗粒側のピークの主体は多結晶石英である。これに分類される試料は、粘土のNo.2のみである。

Ⅱｂ類：双峰形を呈し、粗粒側のピークの主体はチャートである。これに分類される試料は、土器のNo.12、16である。

Ⅱｃ類：双峰形を呈し、粗粒側のピークの主体はカリ長石である。これに分類される試料は、土器のNo.14のみである。

Ⅱｄ類：双峰形を呈し、粗粒側のピークの主体も石英である。これに分類される試料は、土器のNo.17

のみである。

ｂ）焼成実験

焼成後の粘土 No.3および No.5の砂の粒径組成および基質•孔隙の計数結果を表 3 に示し、その結果を図 2 、図 3 に併記する。図 2 における砂粒・基質・孔隙の割合では、No.3にほとんど変化はないが、No.5では焼成後の方が、砂の割合がわずかに低くなっている。また、粒径組成では、No.3、No.5ともに焼成後も焼成前と同じⅠａ類に分類されるが、ヒストグラムの形に若干の変化が認められる。

ｃ）植物珪酸体の概査

植物珪酸体の概査結果を表4に示す。竪穴住居230粘土直下の床面構成堆積物試料および薄片の粘土試料 No.5、6の各試料では、タケ亜科に由来する植物珪酸体が認められ、土器 No.15にはウシクサ族機動細胞珪酸体が認められた。なお、粘土から処理を行った竪穴住居230の試料においても、検出された植物珪酸体は微量であった。

４．考察

(1) 粘土および土器胎土の地質学的背景

今回の試料は、鉱物・岩石の種類構成においては、粘土も土器も全て同様としてよい。このことは、粘土も土器も同一の地質学的背景を有する地域に由来する可能性の高いことを示唆している。ここで、試料に認められた鉱物・岩石の種類から推定される地質と遺跡周辺の地質とを比較してみたい。

背景となる地質を直接示唆するものは、試料中に認められた岩石片である。粘土および土器胎土に認められた岩石片のうち、チャートや頁岩、砂岩からは、これらの堆積岩を主体とする中・古生代の地質が推定され、多結晶石英と花崗岩類およびホルンフェルスと結晶片岩からは、白亜紀頃に貫入した花崗岩類とその周縁部に局所的に形成された変成岩の地質が推定され、さらに、火山ガラスからは、未固結のテフラ層が狭在する第四紀の地質も推定される。なお、緑色岩は、変質した塩基性火山岩類であるが、一般的には堆積岩を主とする中・古生代の地質内に局所的に分布することが多い。

一方、試料中に認められた鉱物片は、岩石片に由来するものである。このうち最も多く含まれる石英は、風化に対する抵抗性が高い鉱物であることから、岩石の風化によって生産された砕屑物中では大抵最も高い割合を占めており、今回の試料の場合でも、上述した岩石片から推定された様々な地質に由来するものが集積したと考えられる。カリ長石および斜長石の長石類と角閃石および黒雲母は、その多くは花崗岩類の地質に由来すると考えられる。

微化石の植物珪酸体は、それを含んでいた粘土の堆積環境を反映するものであるが、いずれの試料においても微量であることから、環境を推定するには至らない。ただし、低湿地に繁茂するイネ科植物であるヨシの植物珪酸体が認められなかったことやススキに代表されるウシクサ族の植物珪酸体が認められたことなどを考慮すると、低湿地に堆積したような粘土には由来しない可能性がある。

木村ほか（1998）や日本の地質「近畿地方」編集委員会（1987）などの地質資料によれば、遺跡周辺地域を含む京都市東北部には、地質系統の古い順に美濃- 丹波帯のジュラ紀堆積岩類コンプレックス、白亜紀後期の酸性火成岩類、第四紀の古琵琶湖層群・大阪層群、段丘堆積物および沖積層が分布する。美濃- 丹波帯は、西南日本内帯に位置し、東方の八溝足尾山地から、美濃•丹波山地を経て中国地方にまで分布する。丹波地域においては単に丹波帯と一般に呼ばれている。本地域の丹波帯は、海洋性岩石類と陸源砕屑物とがさまざまな様式で混合し、複雑な層相を示す堆積岩コンプレックスからなる。堆積岩

表２　薄片観察結果（１）

資料番号 遺構名 器種・部位など	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計
			鉱物片									岩石片									その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	白雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	多結晶石英	花崗岩類	破砕状花崗岩	ホルンフェルス	結晶片岩	緑色岩	酸化鉄結核	火山ガラス	植物珪酸体	
1 竪穴住居230 粘土1	砂	細礫														1							1
		極粗粒砂	2									2				2	1							7
		粗粒砂	7	3								6			4	2	3							25
		中粒砂	26	4	1							4			9	2								46
		細粒砂	35	6	3	1						1			2							1		49
		極細粒砂	33	7	11	1						1			1									54
		粗粒シルト	23	5	13																			41
		中粒シルト	12	4	10						1													27
	基質																							693
	孔隙																							33
2 竪穴住居230 粘土1	砂	細礫																						0
		極粗粒砂														1								1
		粗粒砂	3	1								1	3		5					1				14
		中粒砂	8	1	4							1	2		10	1								27
		細粒砂	7	4	5							3			1									20
		極細粒砂	13	3	5		1																	22
		粗粒シルト	15	2	9																		1	27
		中粒シルト	10	2	6						1													19
	基質																							394
	孔隙																							15
3 土坑509 粘土2	砂	細礫																						0
		極粗粒砂	5												1									6
		粗粒砂	4									3	1		5	4								17
		中粒砂	17	6	5	1						1	4		17	1								52
		細粒砂	30	6	8	1						3	1		6							1		56
		極細粒砂	40	7	10	3						1			2									63
		粗粒シルト	24	6	11						1													42
		中粒シルト	7	2	5																			14
	基質																							519
	孔隙																							15
4 土坑509 粘土2	砂	細礫																						0
		極粗粒砂														1								1
		粗粒砂	1	1	2							4			5	1	1							15
		中粒砂	16	4	9	3						2			14									48
		細粒砂	36	3	8	2						6			3									58
		極細粒砂	22	5	11																			38
		粗粒シルト	17	5	13							1											1	37
		中粒シルト	4	2	5																			11
	基質																							388
	孔隙																							15
5 土坑471 粘土1	砂	細礫																						0
		極粗粒砂													1									1
		粗粒砂	1		1								1		1		1			1				6
		中粒砂	14	5	4	1							1		11									36
		細粒砂	31	7	12	3					1		1		7	1						1		64
		極細粒砂	36	6	21						1				3								1	68
		粗粒シルト	26	7	17	1																	3	54
		中粒シルト	11	4	5																		1	21
	基質																							516
	孔隙																							24
6 土坑471 粘土1	砂	細礫										1												1
		極粗粒砂																						0
		粗粒砂			1							1	4		4	1								11
		中粒砂	12	3	12				1			3	3		5	1								40
		細粒砂	39	5	17							5			4							1		71
		極細粒砂	32	8	14	1																1		56
		粗粒シルト	23	6	13						1												2	45
		中粒シルト	12	3	9																		3	27
	基質																							532
	孔隙																							13

表２　薄片観察結果（２）

資料番号 遺構名 器種・部位など	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計
			鉱物片										岩石片										その他			
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	黒雲母	白雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	多結晶石英	花崗岩類	破砕状花崗岩	ホルンフェルス	結晶片岩	緑色岩	酸化鉄結核	火山ガラス	植物珪酸体	
7 土坑471 粘土2	砂	細礫																						0
		極粗粒砂											1		1									2
		粗粒砂	2		1	1						2	1		3	3	1							14
		中粒砂	15	4	10				1			3	2		9	3	1							48
		細粒砂	23	7	13	1				1		4	1		8							2		60
		極細粒砂	33	5	16	2		1			1	3			2									63
		粗粒シルト	22	6	16						2												1	47
		中粒シルト	9	2	5																			16
	基質																							601
	孔隙																							23
8 土坑471 粘土2	砂	細礫														1								1
		極粗粒砂																						0
		粗粒砂	5	2	2							2	4		3									18
		中粒砂	13	1	7							3	2		8	4								38
		細粒砂	36	7	15	1						2			4									65
		極細粒砂	33	6	16	2						1			4								1	63
		粗粒シルト	11	3	19	1					1												7	42
		中粒シルト	9	4	9																		1	23
	基質																							637
	孔隙																							21
9 溝16 鉢　口縁部	砂	細礫																						0
		極粗粒砂	1	1								2			1									5
		粗粒砂	5						1			1			1							1		9
		中粒砂	10	2	5				1						1							3		22
		細粒砂	9	3	3				1													2		18
		極細粒砂	5	1	3	1			1															11
		粗粒シルト	7	1	2																			10
		中粒シルト	5	1	3																			9
	基質																							104
	孔隙																							8
10 溝16 鉢　口縁部	砂	細礫																						0
		極粗粒砂										1	1			1								3
		粗粒砂											1											1
		中粒砂	1		1							1	1		1	2	1							8
		細粒砂	18	1	4										3									26
		極細粒砂	11	2	5			1																19
		粗粒シルト	7	1	2																		1	11
		中粒シルト	7		3																			10
	基質																							79
	孔隙																							3
11 溝16 小型器台　脚裾部	砂	細礫																						0
		極粗粒砂											1											1
		粗粒砂										2				1								3
		中粒砂	4		1																			5
		細粒砂	2		1	1						1												5
		極細粒砂	1		2																	1		4
		粗粒シルト	2	1																				3
		中粒シルト																						0
	基質																							69
	孔隙																							8
12 溝16 高坏　脚裾部	砂	細礫																						0
		極粗粒砂										2	1								1			4
		粗粒砂	2		1							5			2	5								15
		中粒砂	3									1			2						1	1		8
		細粒砂	12		1							2			1							1		17
		極細粒砂	13	1	5										1									20
		粗粒シルト	11		6																		2	19
		中粒シルト	8		3																			11
	基質																							274
	孔隙																							15

表2　薄片観察結果（3）

資料番号 遺構名 器種・部位など	砂粒区分		砂粒の種類構成																							合計
			鉱物片									岩石片										その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	白雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	多結晶石英	花崗岩類	破砕状花崗岩	ホルンフェルス	結晶片岩	緑色岩	酸化鉄結核	火山ガラス	植物珪酸体	
13 溝16 甕　口縁部	砂	細礫																						0
		極粗粒砂										2		1		5								8
		粗粒砂	10		3							7	2		2	7		2						33
		中粒砂	21	3	2	1			1			2			8	1		3						42
		細粒砂	22	4	2	1									2			1						32
		極細粒砂	15	2	9							1												27
		粗粒シルト	10	3	8																			21
		中粒シルト	4	1	4																			9
	基質																							405
	孔隙																							17
14 溝16 甕　口縁部	砂	細礫												1					1					2
		極粗粒砂										3				2								5
		粗粒砂	2	1								1			1	1								6
		中粒砂	3	4											1									8
		細粒砂	5	1											1									7
		極細粒砂	5		1							1												7
		粗粒シルト	3	2	4																			9
		中粒シルト	8	2	3																			13
	基質																							147
	孔隙																							4
15 溝16 広口壺　口縁部	砂	細礫																						0
		極粗粒砂	1									1				1								3
		粗粒砂	1		3								1		1	3		1						10
		中粒砂	2	1	2				1						3	1						5		15
		細粒砂	9	1	3							1			1	2						3		20
		極細粒砂	7		5										2							2		16
		粗粒シルト	9	1	2						1												1	14
		中粒シルト	7		2																			9
	基質																							256
	孔隙																							21
16 溝16 直口壺　口縁部	砂	細礫																						0
		極粗粒砂											1						1					2
		粗粒砂										3			2									5
		中粒砂			1							2	1			1				1				6
		細粒砂													2							2		4
		極細粒砂	1				1																	2
		粗粒シルト	4		1																			5
		中粒シルト	3		1																			4
	基質																							59
	孔隙																							3
17 溝16 台付無頸壺　口縁部	砂	細礫																						0
		極粗粒砂	1																					1
		粗粒砂	4	1	1							1	1		1									9
		中粒砂	12	1	1							5			3			1	1					24
		細粒砂	4	1								1			1									7
		極細粒砂	5	1	2							2			1									11
		粗粒シルト	9	2	2																			13
		中粒シルト	6		3																			9
	基質																							128
	孔隙																							11

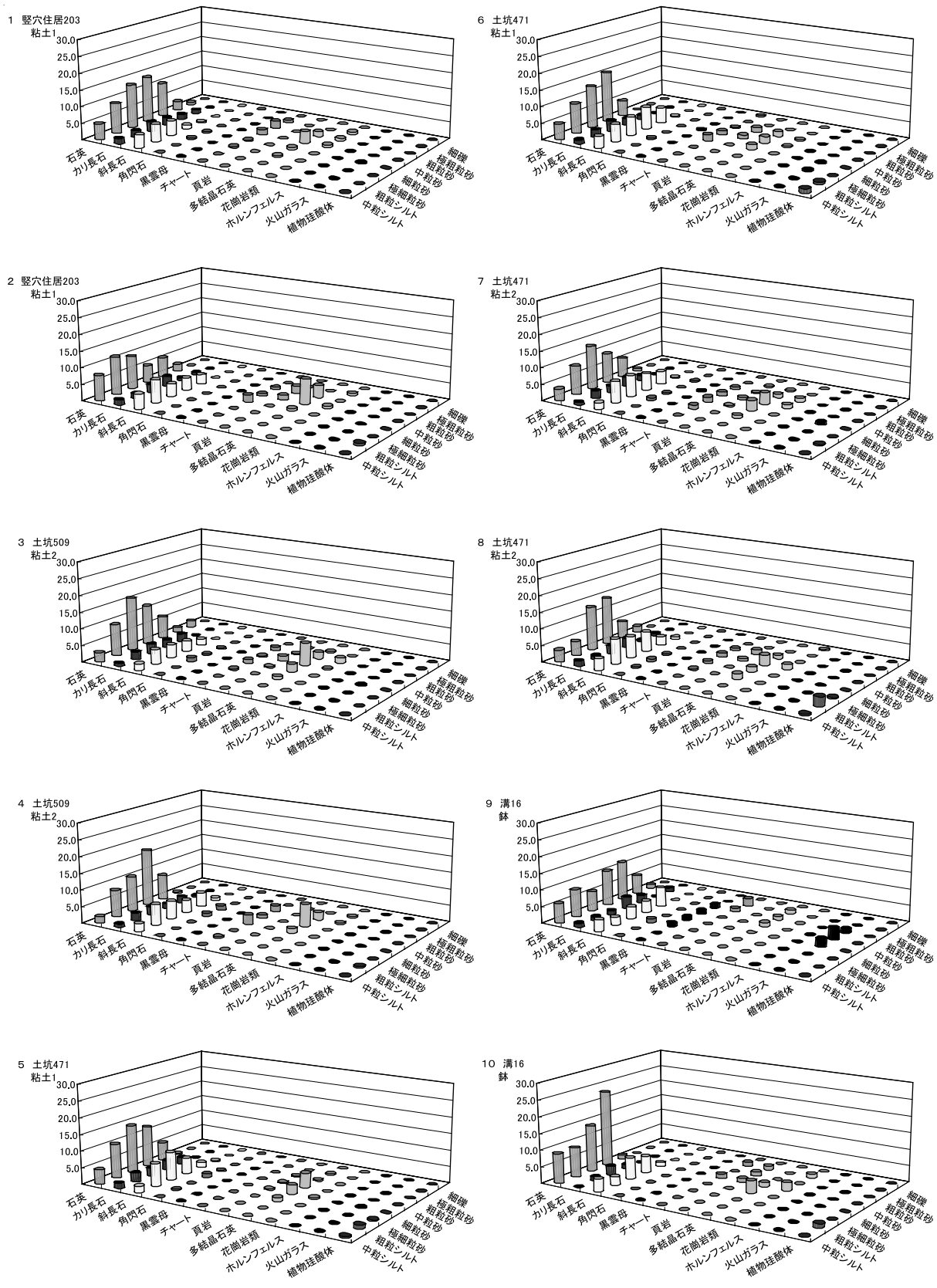


図１　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）

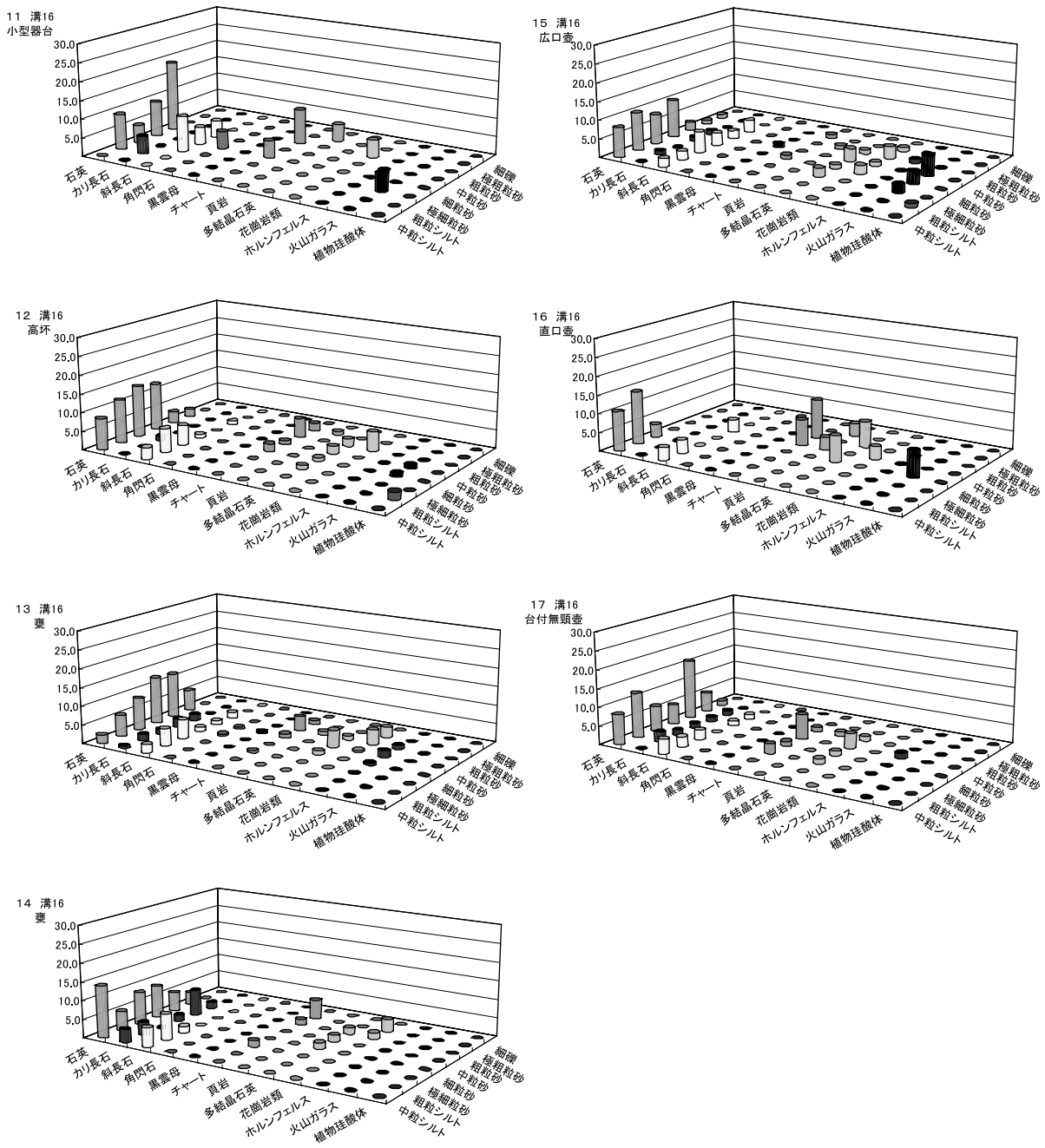


図２　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2）

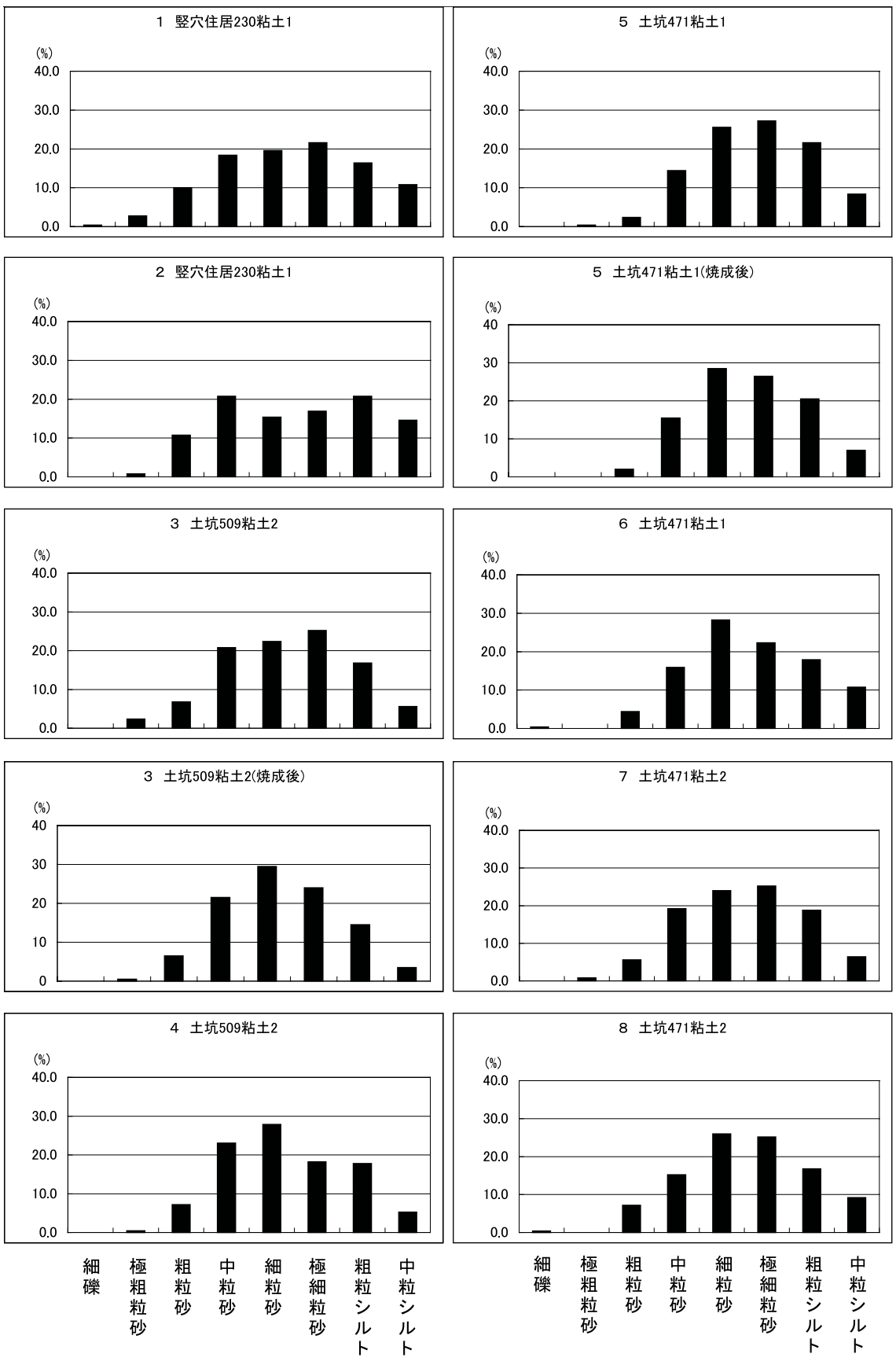


図３　胎土中の砂の粒径組成（1）

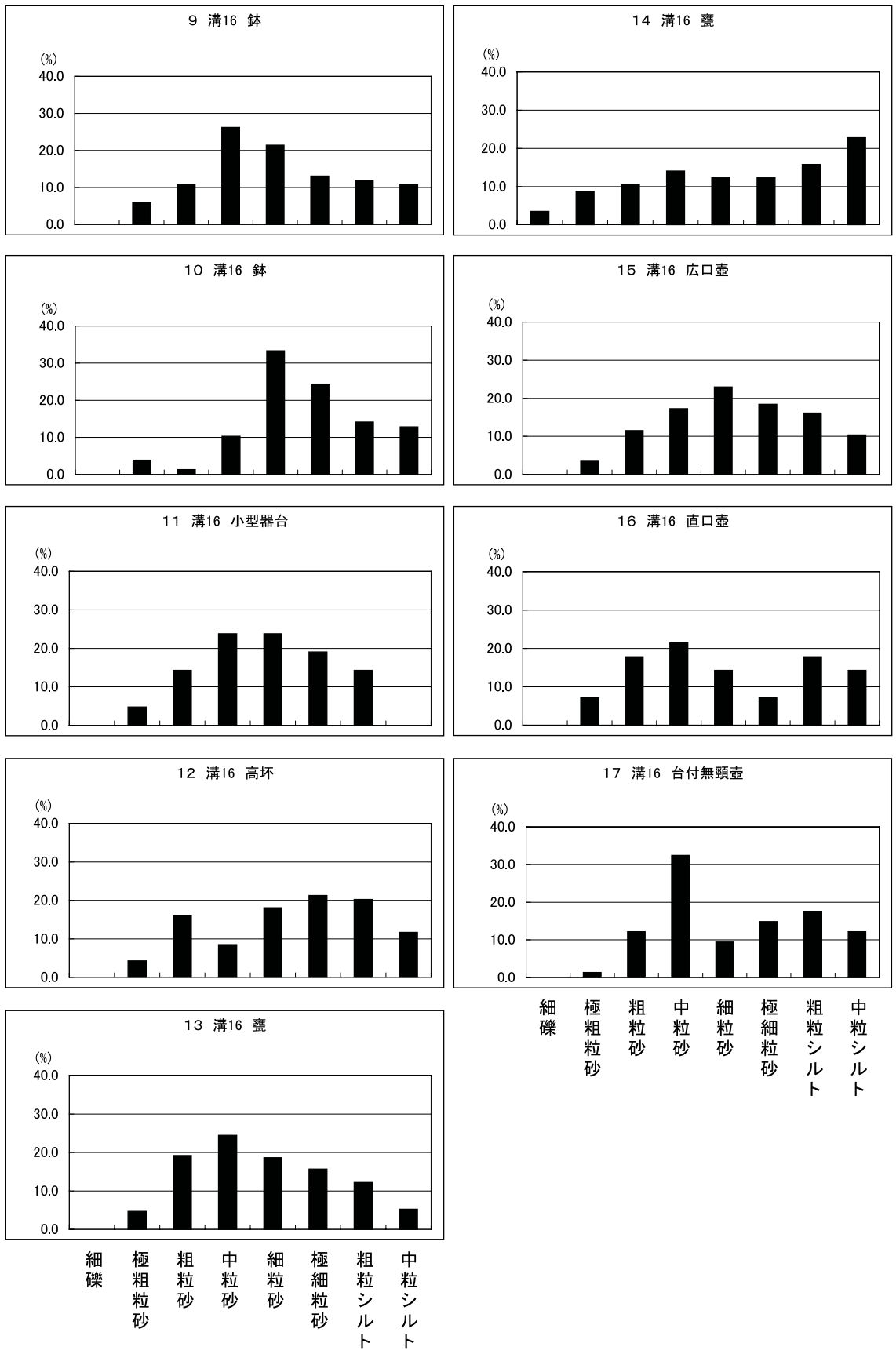


図４　胎土中の砂の粒径組成（2）

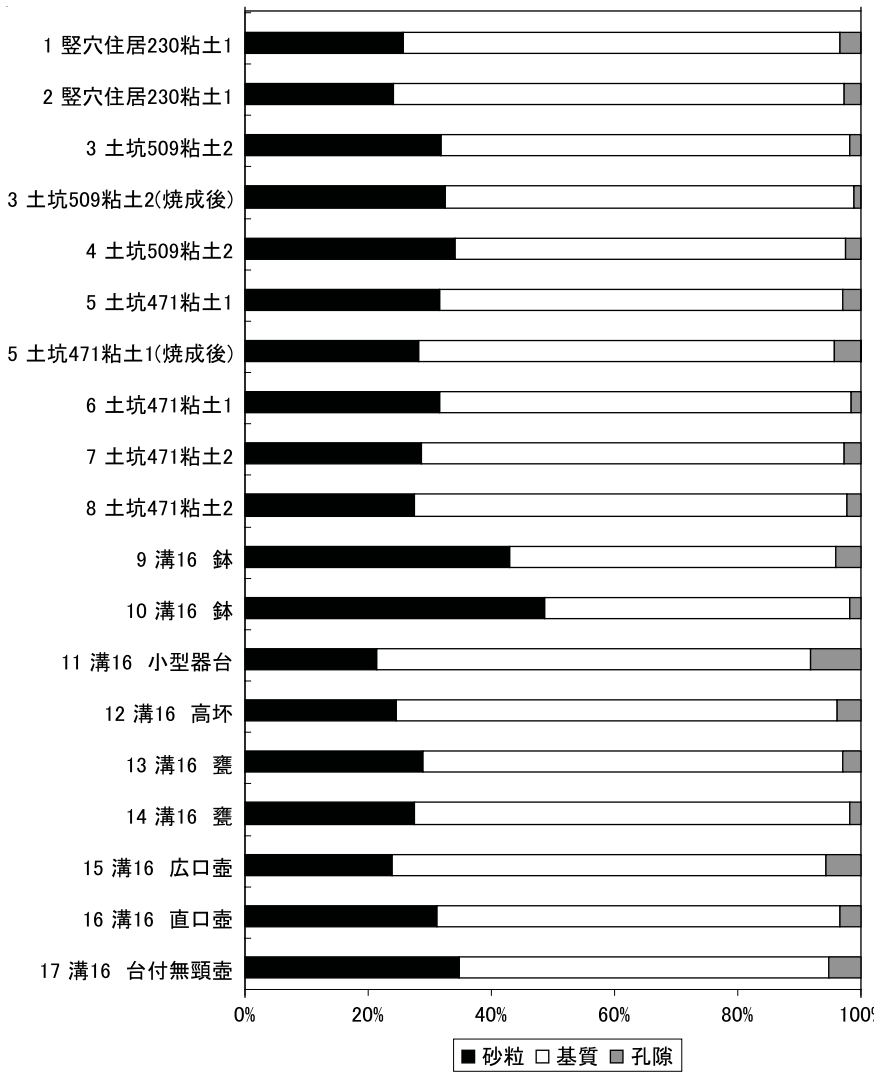


図5　砂粒・基質・孔隙の割合

表3　焼成後の粘土中の砂粒粒径組成

砂粒区分		資料番号（遺構名・資料名）	
		3（土坑509粘土2）	5（土坑471粘土1）
砂	細礫	0	0
	極粗粒砂	1	0
	粗粒砂	13	4
	中粒砂	43	31
	細粒砂	59	57
	極細粒砂	48	53
	粗粒シルト	29	41
	中粒シルト	7	14
基質		408	480
孔隙		7	31

表 4　植物珪酸体概査結果

種　　類	資料状態・試料名					
	床面土	粘土			土器	
	竪穴住居230	5	6	8	12	15
タケ亜科短細胞珪酸体	−	＋	＋	−	−	−
タケ亜科機動細胞珪酸体	＋	＋	−	−	＋	−
ウシクサ族機動細胞珪酸体	−	＋	−	−	−	＋
不明キビ型（短細胞珪酸体）	＋	−	−	−	−	−
不明ダンチク型（短細胞珪酸体）	＋	＋	−	−	−	−
不明（機動細胞珪酸体）	＋	＋	＋	＋	−	−

＋：検出，−：非検出

コンプレックスは、岩相・年代の違いから雲ヶ畑コンプレックス、灰屋コンプレックス、大原コンプレックスおよび比叡山コンプレックスに分けられている。遺跡周辺地域には、灰屋コンプレックスが広く分布する。灰屋コンプレックスは、緑色岩、層状チャート、混在岩、砂岩などからなる。

酸性火成岩類としては、仰木トーナル岩、花脊石英閃緑岩、小規模トーナル岩、霊仙花崗閃緑岩、比叡花崗岩などが琵琶湖西部において広く分布するが、さらにその西側地域においては、小規模に分布する。花崗岩類はいずれも丹波帯の堆積岩コンプレックスに貫入し、熱変成作用を与えている。

古琵琶湖層群は、近江盆地に、大阪層群は京都盆地周辺に分布し、両層群とも更新統で主に河成ないし湖成の礫・砂・シルト・粘土層からなる。また、多数のテフラ層を狭在する。

琵琶湖西岸の堅田丘陵および主要な河川には、河川成の段丘が広く分布する。段丘は、高位段丘（更新世中期）、中位段丘（更新世後期）、および、低位段丘（最終氷期以降）の 3 つに大きく分けられている。沖積層は、琵琶湖西岸や、京都盆地において広く分布する。

以上に述べた地質には、今回の試料から推定された地質の全てが揃っている。したがって、今回の試料である粘土および土器胎土は、いずれも、岩倉盆地内またはその周辺地域の堆積物に由来する可能性が高い。より詳細な地域性については、実際に岩倉盆地内や周辺における各地から、自然堆積の粘土や砂などを採取し、その鉱物組成や岩石片の組成を確認する必要がある。ただし、現時点で言えることとして、岩倉忠在地遺跡の位置する盆地北部の堆積物中には、その地形と背後の地質分布から、花崗岩類の岩石片が含まれていないことがあげられる。すなわち、岩倉盆地に最も近い花崗岩類は、比叡山に分布する比叡花崗岩であるが、その砕屑物が堆積する場は、岩倉盆地の南東端を流れる高野川周辺であると考えられる。現在の地形図からは、岩倉忠在地遺跡付近に高野川の堆積物が及んでいるとは考えられない。したがって、岩倉忠在地遺跡から出土した粘土も土器も、遺跡の位置する岩倉盆地北部の堆積物に由来するものではなく、最も至近な場所としても、上高野付近の岩倉盆地南東端から下流域の地域が想定される。

(2) 粘土と土器の関係について

岩倉忠在地遺跡の住居跡および土坑から出土した粘土塊と土器との間では、含まれる鉱物片と岩石片

の種類構成がほぼ同様であることが明らかにされた。このことから、両者は非常に密接な関係にあるとしてよい。次に、含有される砂の割合や粒径組成により、粘土と土器を比較すると、結果の項で示した分類により、粘土と同一の分類に入る土器試料は、Ⅰa類のNo.10と15、Ⅰb類のNo.9と11の4点であり、残り5点の土器試料は、粘土試料とは粒径組成において明瞭に区別される。さらに、上記の粘土試料と同一分類とされた4点の土器試料のうち、No.9、11、15の3点については、鉱物片・岩石片組成をより詳細にみれば、共通して火山ガラスの量比が比較的高く、火山ガラスを極めて微量またはほとんど含まない粘土試料との差異が指摘される。

そして、No.10については、詳細な鉱物片・岩石片組成も粘土試料とほぼ一致するが、砂の割合が粘土試料に比べるとやや高い。ここで、粘土試料の焼成実験からは、基質の収縮による砂の割合の増加は検出されず、むしろNo.5では、焼成後の方が砂の割合が若干減少した。焼成後の試料において粒径組成のヒストグラムの形が変化したことも考慮すれば、No.5の砂の割合の変化は、焼成に起因するというよりも、粘土塊における砂の偏在性による可能性がある。すなわち、粘土塊の中に全く均質に砂が分布して含まれているわけではなく、薄片にした部分の違いにより、砂の分布が異なり、それが、今回の焼成実験における数値として表されたと考えられるのである。No.10の砂の割合が高いことに話を戻すと、その割合が高いことは、焼成前の素地土の特性でもあったと考えられる。しかし、今回の粘土試料の中には、No.10の素地土に相当するような砂の割合の高い試料は認められない。なお、結果の項で述べたように、No.10とNo.9を除けば、土器試料の砂の割合よりも粘土試料の砂の割合の方が全体的に高い傾向が窺える。これは、粘土試料の方が砂の含まれる量は少ないとする発掘調査者の所見と異なる結果のように見える。しかし、粒径組成まで考慮すれば、粘土試料の砂の主体は細粒砂以下にあることがわかる。おそらく、砂として認識しやすい中粒砂以上の砂が粘土試料中には少ないことが、砂全体が少ない印象を与えていると考えられる。

以上のことから、今回の土器試料の中には、薄片観察による胎土分析法において、粘土試料と完全に一致する特性を有する試料は見出せなかった。したがって、現時点では、出土した粘土塊が、そのまま土器の素地土となった可能性は低いと考えられる。しかし、鉱物・岩石片の種類構成から指摘したように密接な関係があることは確かである。具体的には、粘土塊が材料の一部として使用された可能性はあると考えられる。例えば、粘土塊に砂を混ぜたり、複数の粘土塊を混ぜたりした結果が、今回の分析で認められたような粘土と土器間の粒径組成の違いとして現れたとも考えられるのである。今後も、岩倉忠在地遺跡および周辺の遺跡において、同時期の土器および自然堆積物の分析例を蓄積し、比較検討を行うことができれば、より確かな推定が可能になることが期待される。

引用文献

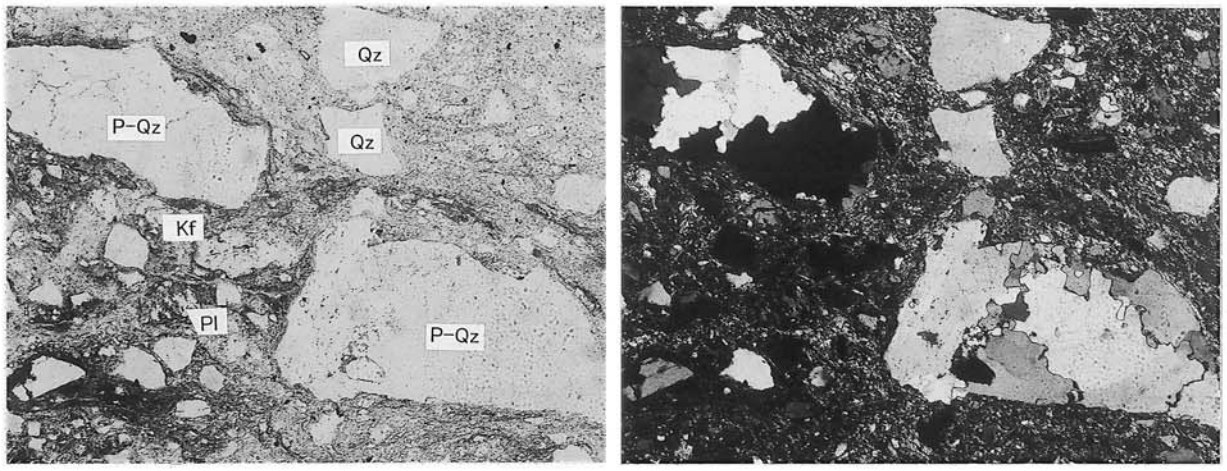
木村克己・吉岡敏和・井本伸広・田中里志・武蔵野　実・高橋裕平，1998，京都東北部地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）地質調査所，89p.

近藤　錬三，2004，植物ケイ酸体研究．ペドロジスト，48，46-64.

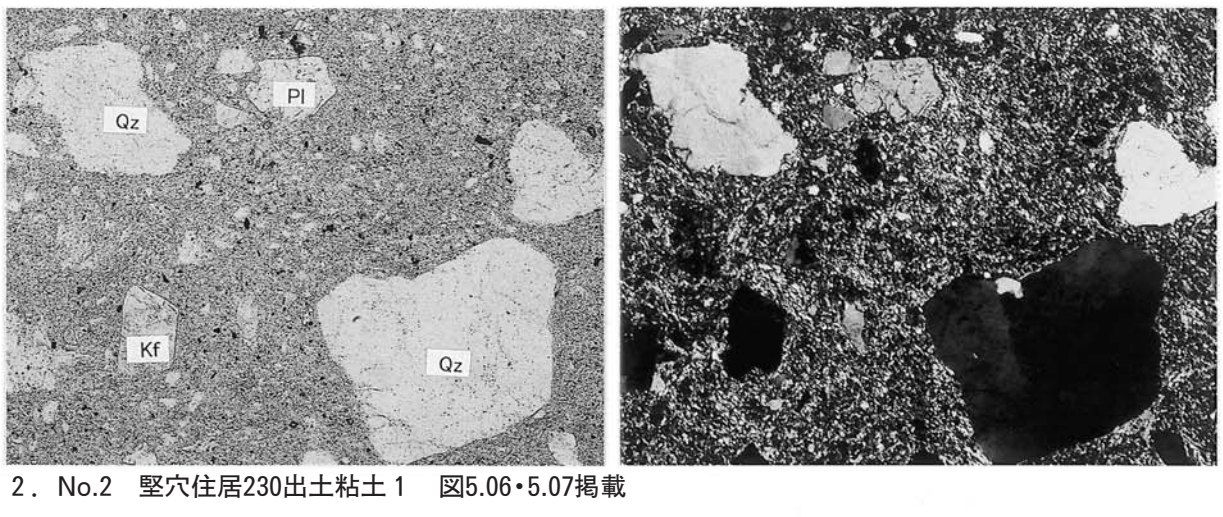
公文富士夫・立石雅昭編，1998，地学双書29新版砕屑物の研究法．地学団体研究会，399p.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高，1999，瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－．日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120-121.

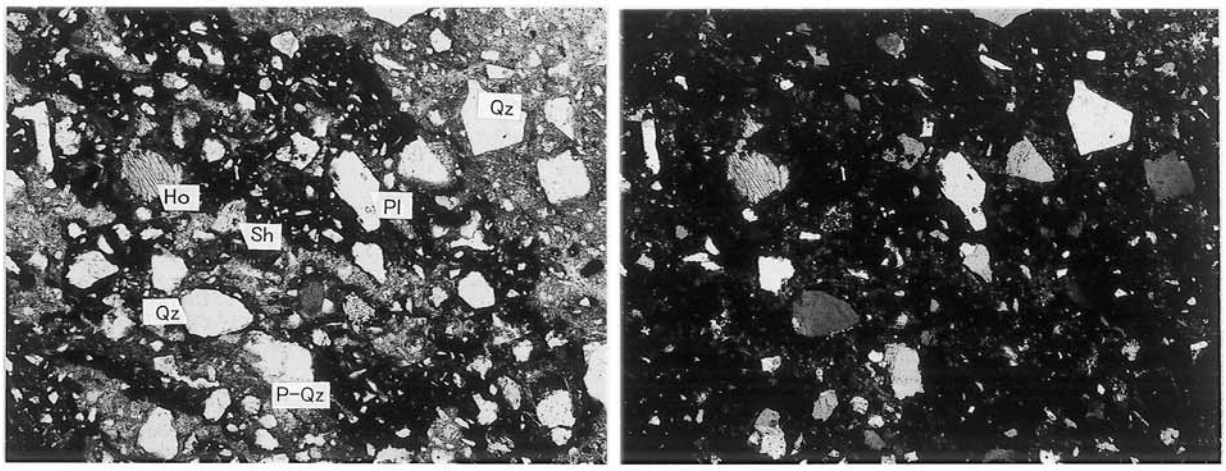
日本の地質「近畿地方」編集委員会，1987，日本の地質6　近畿地方．共立出版，297p.



１．No.1　竪穴住居230出土粘土１　図5.06・5.07掲載



２．No.2　竪穴住居230出土粘土１　図5.06・5.07掲載



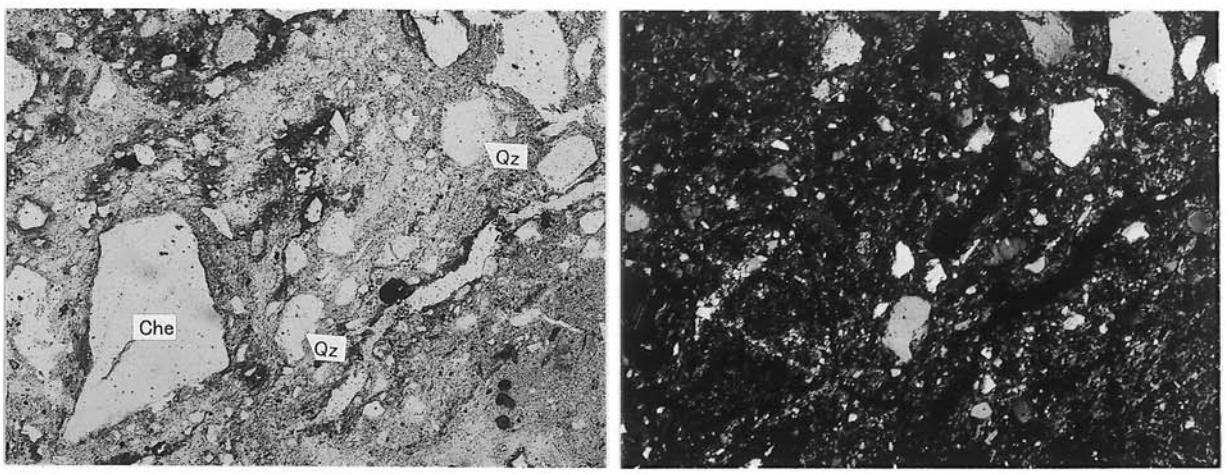
３．No.3　土坑509出土粘土２　図5.18掲載

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Ho：角閃石　Sh：頁岩　P-Qz：多結晶石英

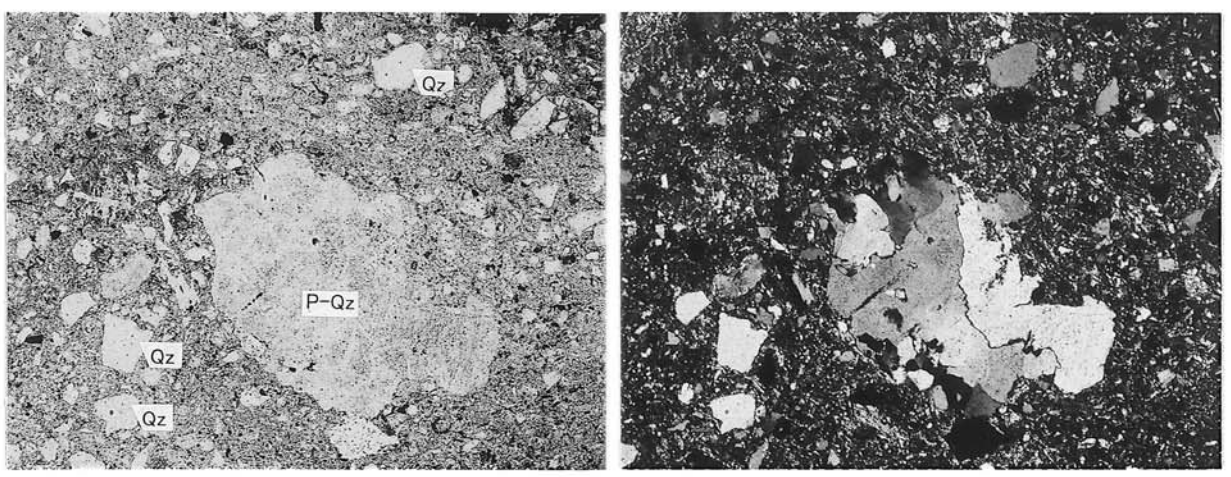
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5 mm

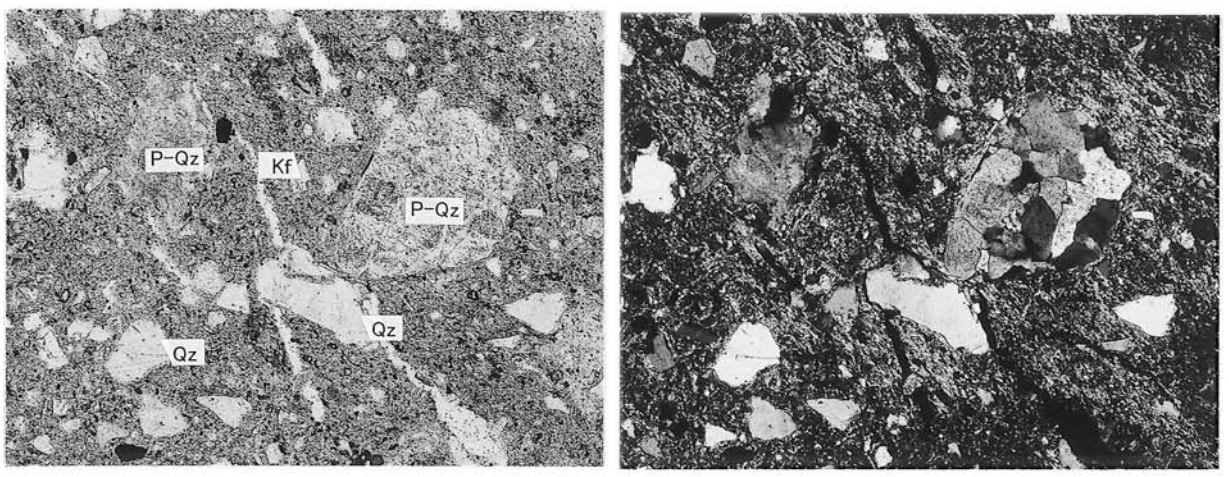
写真7.02　胎土薄片（1）



4．No.4　土坑509出土粘土２　図5.18掲載



5．No.5　土坑471出土粘土１　図5.17掲載



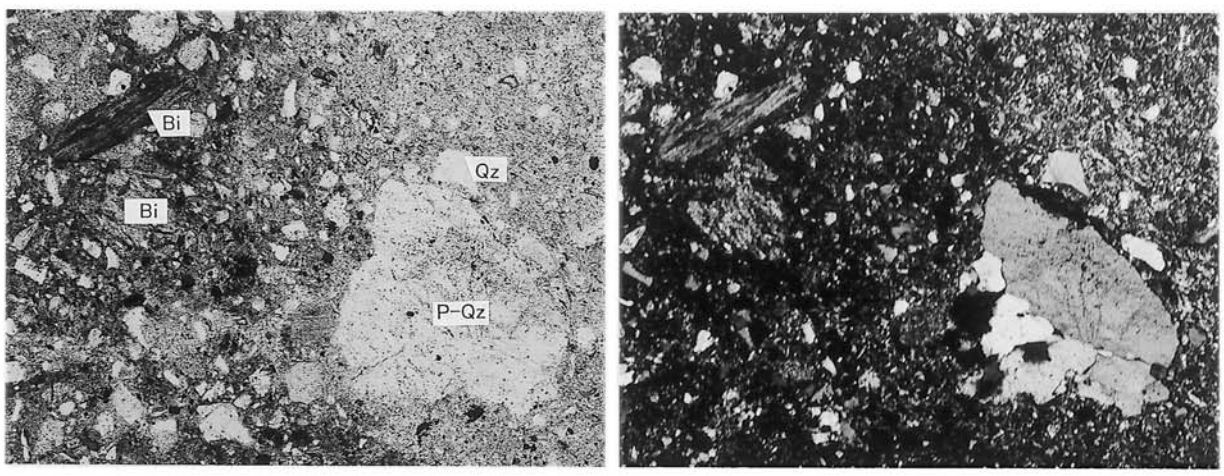
6．No.6　土坑471出土粘土１　図5.17掲載

Qz：石英　Kf：カリ長石　Che：チャート　P-Qz：多結晶石英

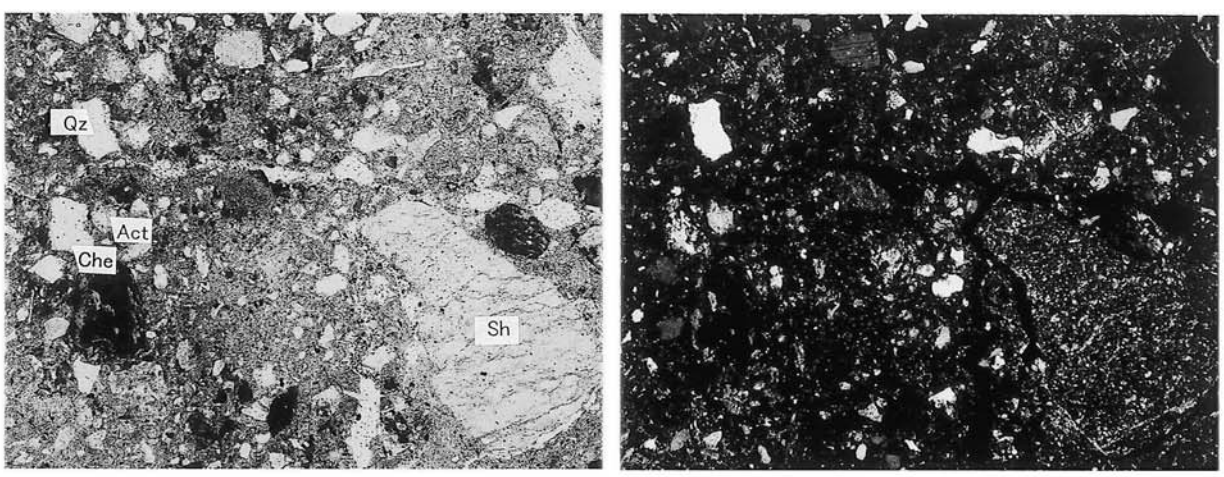
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5 mm

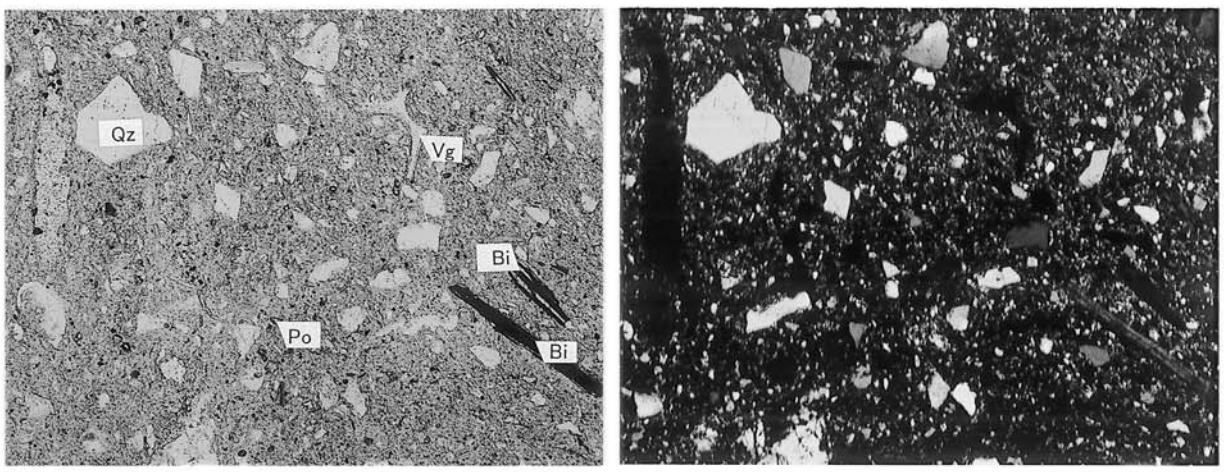
写真7.03　胎土薄片（2）



７．No.7　土坑471出土粘土２　図5.17掲載



８．No.8　土坑471出土粘土２　図5.17掲載



９．No.9　溝16出土　鉢（口縁部）　図6.05-3

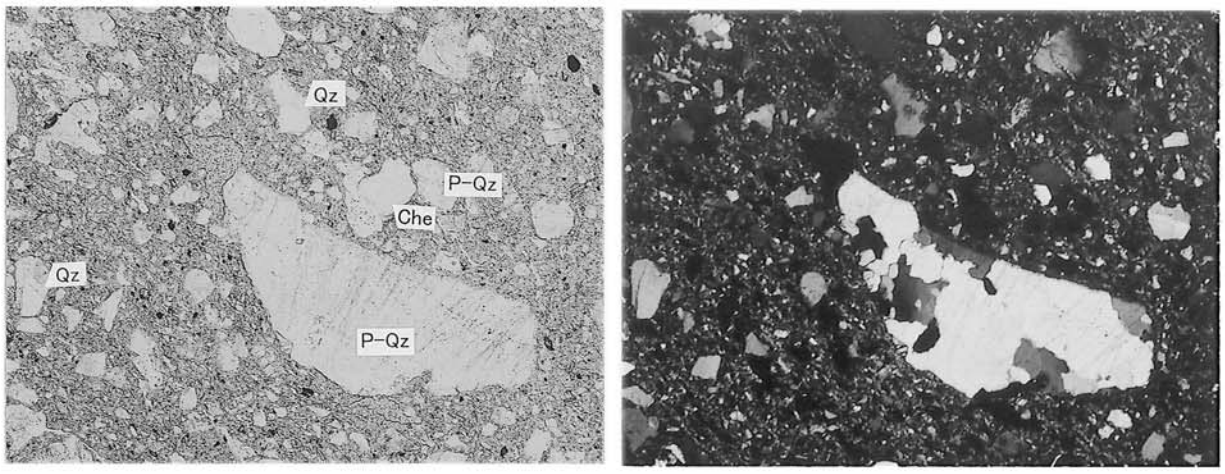
Qz：石英　Bi：黒雲母　Act：アクチノ閃石　Sh：頁岩　Che：チャート

P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス　Po：植物珪酸体

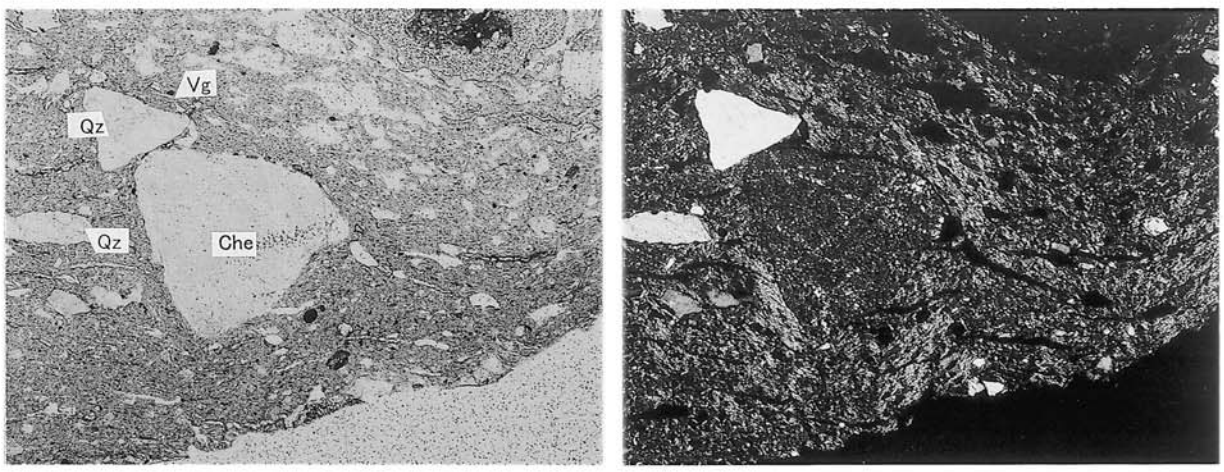
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5 mm

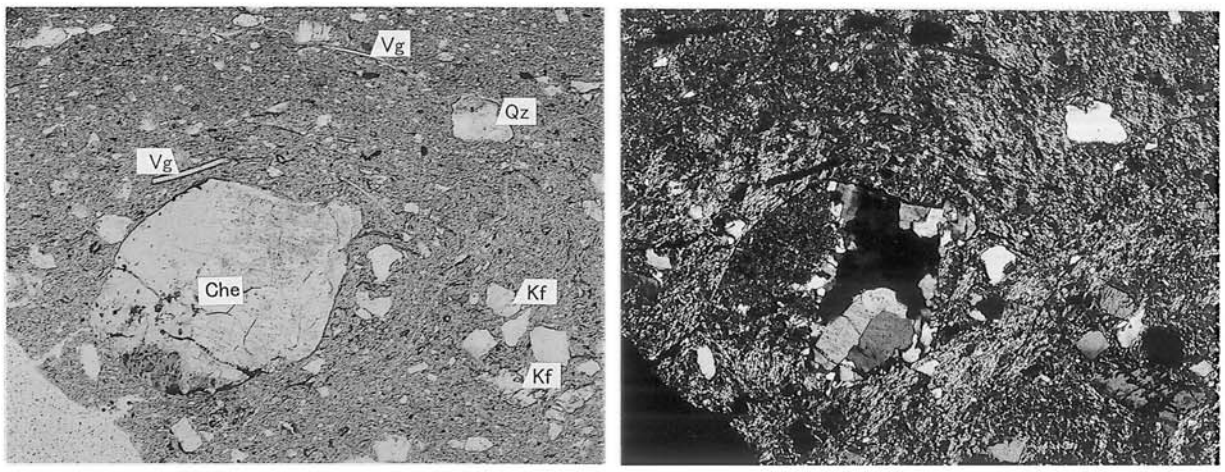
写真7.04　胎土薄片（3）



10. No.10　溝16出土　鉢（口縁部）　図6.05-2



11. No.11　溝16出土　小型器台（脚裾部）　図6.06-8



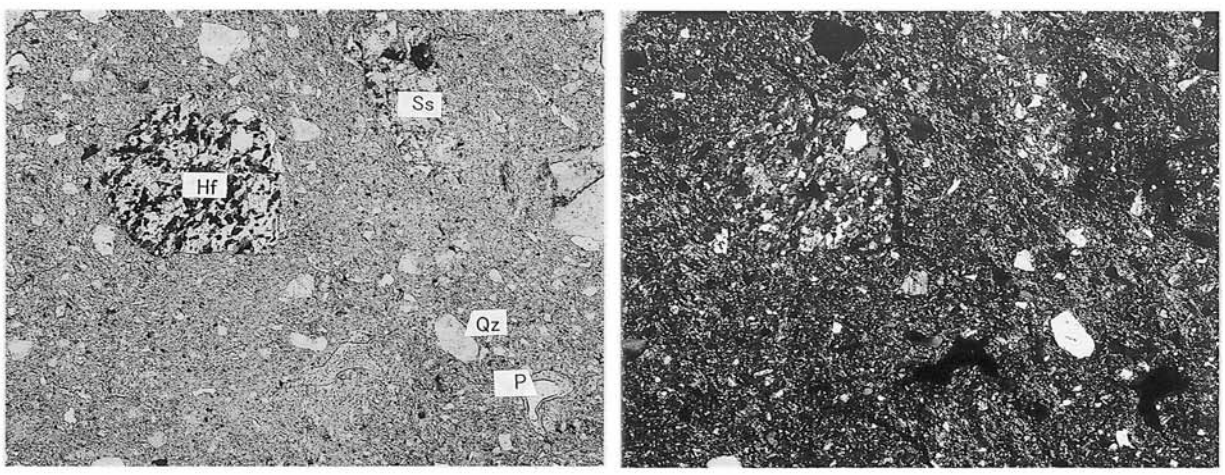
12. No.12　溝16出土　高杯（脚裾部）　図6.07-8

Qz：石英　Kf：カリ長石　Che：チャート　P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス

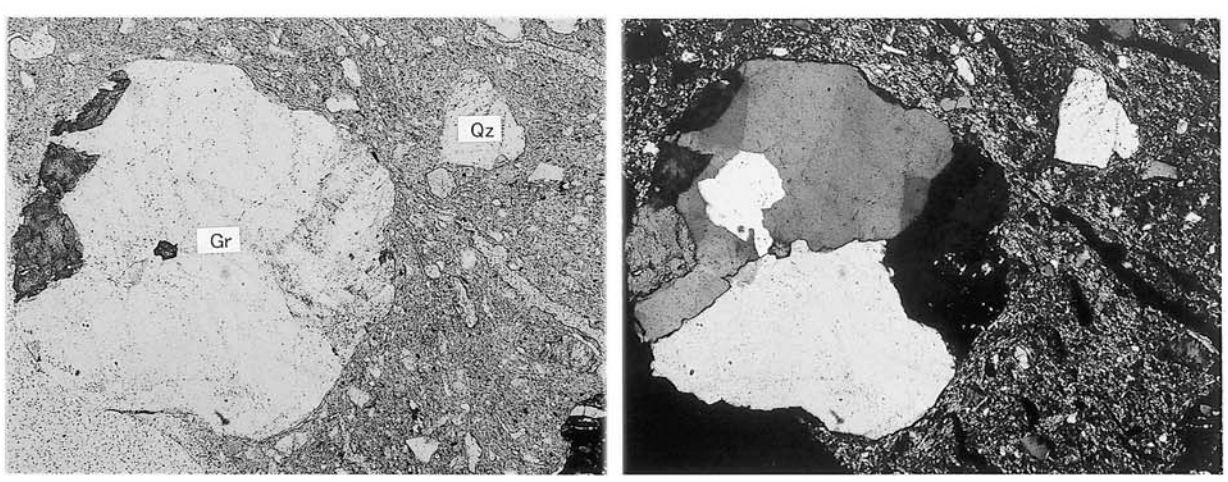
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5 mm

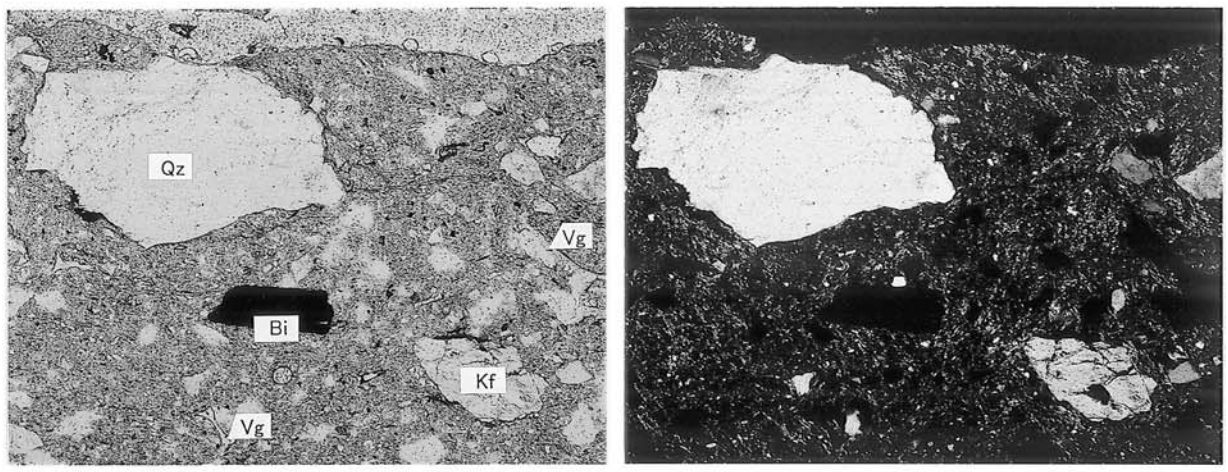
写真7.05　胎土薄片（4）



13. No.13　溝16出土　甕（口縁部）　図6.04-15



14. No.14　溝16出土　甕（口縁部）　図6.04-3



15. No.15　溝16出土　広口壺（口縁部）　図6.03-2

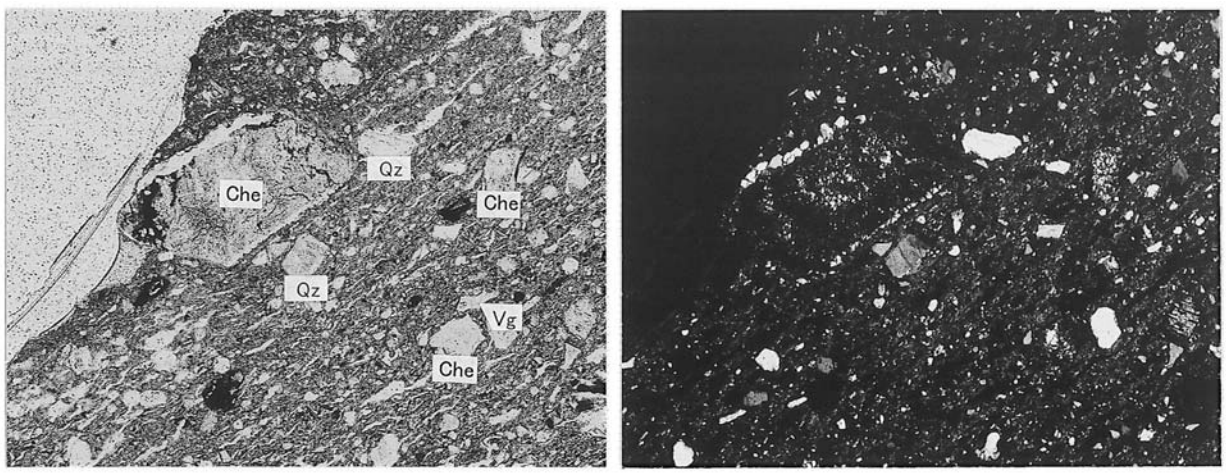
Qz：石英　Kf：カリ長石　Bi：黒雲母　GR：花崗岩　Ss：砂岩　Hr：ホルンフェルス

Vg：火山ガラス　P：孔隙

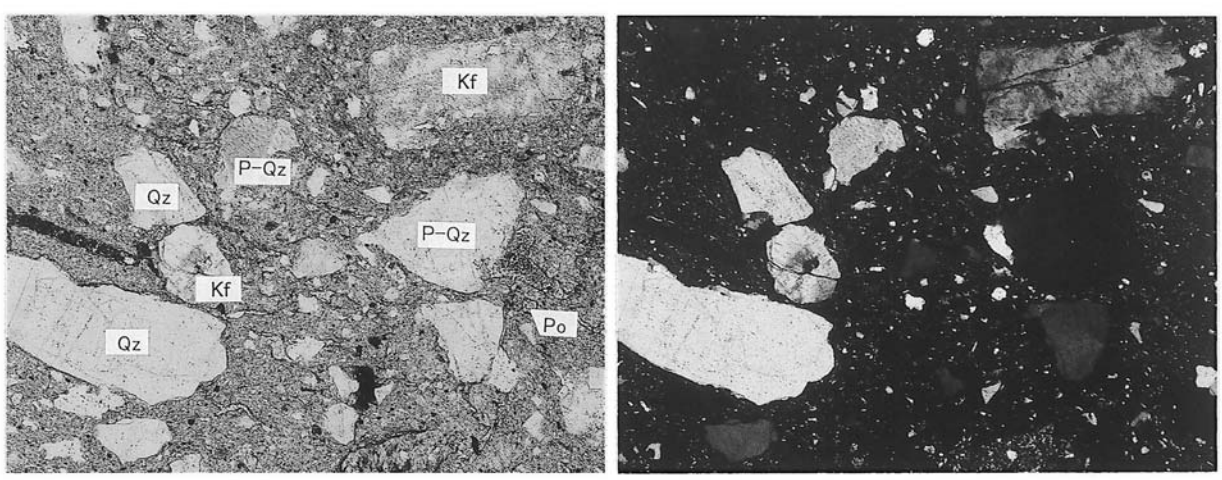
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

写真7.06　胎土薄片（5）



16. No.16　溝16出土　直径壺（口縁部） 図6.03-7



17. No.17　溝16出土　台付無頸壺（口縁部） 図6.03-17

Qz：石英　Kf：カリ長石　Che：チャート　P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス

Po：植物珪酸体

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5 mm

写真7.07　胎土薄片（7）

第 4 節　岩倉忠在地遺跡出土粘土塊および土器の理化学分析

高林弘実　（東京文化財研究所客員研究員）

1　はじめに

土器製作技術の復原を目的とした理化学的手法による出土土器の調査研究は、考古学および文化財科学分野において広く行なわれてきた。しかし、土器の原材料となった可能性のある出土粘土と土器の理化学的手法による比較調査例は極めて少ない。出土粘土と土器の理化学データの比較から土器の製作過程を考察することは、土器製作技術を復原する上で有効な手法のひとつであろう。

本分析の目的は、岩倉忠在地遺跡より出土した粘土塊および土器の化学的特性を明らかにし、出土粘土塊と土器の比較を行なうことである。

2　実験

岩倉忠在地遺跡より出土した粘土塊および土器資料の化学的特性を明らかにするために、(1) エネルギー分散型蛍光 X 線分析による元素組成の定量分析、(2) X 線回折分析による鉱物組成の同定、(3) 熱重量- 示査熱分析（TG-DTA) をおこなった。尚、分析に先立ち実体顕微鏡観察、走査型電子顕微鏡による試料粒子の形態観察を適宜おこなった。

2.1　分析試料

粘土塊および土器より採取した小片（採取試料）から各分析手法に適した分析試料を調製した。粘土塊からはひとつの遺物につき 2 箇所ずつ、土器では1箇所の採取を行なった。表 1 に採取試料一覧を示した。採取試料 No.1-8は粘土塊、No.9-17は土器より採取した試料である。

2.2 エネルギー分散型蛍光 X 線分析

エネルギー分散型蛍光 X 線分析では、分析試料の平均的な元素組成を定量することができる[1)]。粘土および土器試料の主成分元素組成を明らかにするために、エネルギー分散型蛍光 X 線分光装置による分析をおこなった。測定面の凹凸が測定値に与える影響を減じるため、粘土試料では採取試料の比較的平らな側面を測定した。土器試料では、採取試料を超音波洗浄したのち鉱物カッターにより切断し、平滑な切断面を測定した。試料の不均一性を考慮し、測定箇所を変えて複数回の測定を行った。測定回数は試料の大きさに応じて 2 ～ 7 回である。分析に使用した装置は、セイコー電子工業製卓上型蛍光 X 線分光装置 SEA-2001である。測定雰囲気は真空とし、照射 X 線は Rh 管球、加速電圧50kV、照射径10mm ϕ とした。定量分析は標準岩石 JR-1を標準試料とし、ファンダメンタルパラメータ法によって行なった。定量をおこなった主成分元素は、ケイ素 Si、チタン Ti、アルミニウム Al、鉄 Fe、マンガン Mn、マグネシウム Mg、カルシウム Ca、ナトリウム Na、カリウム K である。

2.3　X 線回折分析

X 線回折分析は、分析試料に含まれる結晶性物質の同定に利用される分析手法である[2)]。粘土および土器試料に含まれる鉱物に関する知見を得るために、粉末 X 線回折法による分析を行なった。粘土試料の分析では、採取試料から埋蔵後の変質によると考えられる黄色あるいは赤色に変色した部位を除去し

表 1　分析試料一覧

試料 No.	掲載図・番号	出土遺構	内容
1	図 5.06・5.07	竪穴住居 230	粘土 1
2	図 5.06・5.07	竪穴住居 230	粘土 1
3	図 5.18	土坑 509	粘土 2
4	図 5.18	土坑 509	粘土 2
5	図 5.17	土坑 471	粘土 1
6	図 5.17	土坑 471	粘土 1
7	図 5.17	土坑 471	粘土 2
8	図 5.17	土坑 471	粘土 2
9	図 6.05-3	溝 16	鉢（口縁部）
10	図 6.05-2	溝 16	鉢（口縁部）
11	図 6.06-8	溝 16	小型器台（脚裾部）
12	図 6.07-8	溝 16	高坏（脚裾部）
13	図 6.04-15	溝 16	甕（口縁部）
14	図 6.04-3	溝 16	甕（口縁部）
15	図 6.03-2	溝 16	広口壺（口縁部）
16	図 6.03-7	溝 16	直口壺（口縁部）
17	図 6.03-17	溝 16	台付無頸壺（口縁部）

て分析に供した。土器試料の分析では、採取試料をメノウ鉢で粉砕したものを分析に供した。分析試料には、不定方位試料と定方位試料の 2 種類の試料を調製した。不定方位試料は、粉末 X 線回折法の最も一般的な分析試料であり、メノウ鉢で粉砕した試料粉末をガラス試料板に充填して調製した。定方位試料は、採取試料を超音波によって水に分散させた懸濁液を無反射板に広げ、自然乾燥させて調製した。このような操作により試料粒子の方位が揃えられた定方位試料では、層状珪酸塩である粘土鉱物の層面による回折（底面反射）が強く観測される。このため、定方位試料による X 線回折分析は、粘土鉱物の積層方向の周期構造を明らかにするのに適しており、粘土鉱物の同定をおこなう際に広く利用されている[3)]。測定は、集中光学系による粉末 X 線回折計で行なった。照射 X 線は、回転対陰極型 X 線発生装置による CuK α 線で、加速電圧45kV、加速電流400mA である。

2.4　熱重量－示差熱分析（TG-DTA)

熱重量－示差熱分析は、分析試料を加熱した際に起こる化学反応や状態変化に伴う重量の変化および熱の吸収・放出を測定する分析である。測定で得られる熱重量曲線（TG 曲線）および示差熱曲線（DTA 曲線）からは、試料の熱化学的性質を知ることができる[4)]。粘土および土器試料の熱化学的な特性を検討するために、TG-DTA を測定した。粘土試料の分析では、採取試料から黄色あるいは赤色に変色した部位を除去した後にメノウ鉢で粉砕した試料を分析に供した。土器試料の分析では、採取試料を

表 2 粘土塊および土器試料の主成分元素組成

試料 No.	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O
1	65.0 (1.3)	3.1 (0.3)	20.6 (0.4)	6.4 (1.3)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.7 (0.0)	1.2 (0.5)	3.0 (0.1)
2	66.4 (0.4)	2.8 (0.0)	21.7 (0.5)	4.8 (0.4)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.8 (0.1)	0.5 (0.3)	2.9 (0.0)
3	61.3 (0.8)	3.8 (0.2)	19.3 (2.2)	11.0 (2.3)	0.1 (0.1)	0.0 (0.0)	1.0 (0.3)	0.6 (0.3)	2.9 (0.4)
4	62.1 (1.5)	3.9 (0.3)	21.2 (2.0)	9.4 (0.0)	0.1 (0.1)	0.0 (0.0)	1.0 (0.3)	0.4 (0.5)	2.8 (0.3)
5	65.1 (0.9)	2.9 (0.0)	22.1 (0.7)	5.5 (0.5)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.8 (0.0)	1.6 (0.3)	2.7 (0.1)
6	68.4 (1.0)	2.6 (0.2)	19.1 (1.8)	5.4 (0.6)	0.1 (0.1)	0.0 (0.0)	0.6 (0.1)	1.0 (0.4)	2.6 (0.1)
7	65.1 (0.6)	2.6 (0.2)	22.2 (0.6)	5.3 (0.3)	0.3 (0.2)	0.0 (0.0)	0.8 (0.1)	1.4 (0.0)	2.3 (0.0)
8	67.7 (0.8)	3.0 (0.3)	20.8 (1.0)	4.6 (0.7)	0.1 (0.1)	0.0 (0.0)	0.8 (0.0)	0.7 (0.3)	2.0 (0.1)
9	70.0 (1.3)	3.1 (0.0)	20.2 (0.8)	3.8 (0.2)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.3 (0.1)	0.4 (0.2)	2.3 (0.1)
10	68.7 (0.9)	3.5 (0.1)	20.8 (0.5)	3.8 (0.2)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.4 (0.1)	0.7 (0.5)	1.9 (0.1)
11	62.1 (0.3)	3.4 (0.1)	23.4 (0.2)	7.8 (0.2)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.5 (0.1)	0.9 (0.0)	1.9 (0.0)
12	66.3 (0.7)	3.4 (0.1)	22.3 (0.6)	4.4 (0.2)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.3 (0.1)	1.0 (0.1)	2.3 (0.1)
13	64.5 (0.6)	2.5 (0.1)	22.0 (0.2)	7.6 (0.2)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.2 (0.0)	0.8 (0.3)	2.3 (0.1)
15	66.4 (0.7)	3.2 (0.1)	22.0 (0.2)	4.6 (0.1)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.3 (0.0)	1.3 (0.9)	2.2 (0.0)
17	63.1 (1.3)	4.0 (0.2)	21.5 (0.8)	8.9 (0.5)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.1 (0.1)	0.7 (0.3)	1.8 (0.1)

メノウ鉢で粉砕したものを分析に供した。分析試料への水の吸着や水和の条件を統一するために、試料は110℃の恒温槽で 2 - 3 時間乾燥した後、デシケーター内に保管した。

測定は、RIGAKU 社製の示差熱熱重量測定装置 Thermo Plus TG8120を用いて行なった。測定条件は、測定温度範囲；室温～950℃、昇温速度；10℃/min、測定雰囲気；N_2 50ml/min である。標準試料（Al_2O_3）および測定試料（12-14mg 程度）を白金製の試料皿に入れて密封せずに測定を行った。

3　結果および考察

3.1　蛍光 X 線分析による粘土塊および土器の元素組成

実体顕微鏡による観察では、粘土塊は微細な粘土粒子と共に多くの砂粒を含んでおり、その粒子構成は、粘土粒子が焼結した基質と砂粒からなる土器と類似している。このような資料の粒子構成からは、粘土塊が土器の直接的な原材料であった可能性も考えられる。したがって、粘土塊と土器製作プロセスの関連を検討するためには、粘土試料と土器試料の元素組成の比較は有意であろう。粘土試料と土器試料の分析結果を比較する上で留意するべきことに、焼成の問題がある。粘土塊は焼成されていないが、土器は原材料の素地を焼成して製作された遺物である。今回の蛍光 X 線分析では、粘土および土器試料に含まれる主成分 9 元素について元素組成比を求めた。焼成による素地の化学変化は、主に素地に含まれる有機物の焼失、鉱物の脱水反応や熱転移であり、主成分 9 元素の組成比は大きな影響を及ぼさないと考えられる。したがって、蛍光 X 線によって得られる土器試料の元素組成は原材料の素地の元素組成を反映した値と考えられる。

蛍光 X 線分析より求められた粘土および土器試料の主成分元素組成を各元素の酸化物の重量百分率（wt%）に換算したものを表 2 にまとめた。表 2 には、複数回の測定で得られた重量百分率（wt%）の平均値、（　）内に標準偏差を示した。尚、土器試料14および16は、他の試料と同一条件で分析をおこえなかったため、データの記載を割愛した。分析値の傾向を端的に捉えるために、組成比の比較的高い元素について、組成比の関係を散布図（図 1 、図 2 ）に示す。図 1 はケイ素 Si とアルミニウム Al、図 2 はケイ素 Si と鉄 Fe の組成比の関係を示す。図中では、粘土試料を○、土器試料を□でプロットした。粘土および土器試料の各元素の組成比は、ほぼ同じ範囲に分布している。粘土試料と土器試料の元素組成分布には大きな差異はないことが散布図より理解されるが、このような散布図による議論は定量的なものではない。そこで、以下では統計学的手法を用いて粘土試料と土器試料の元素組成の差を検討する。

粘土試料と土器試料の組成差の有無を統計学的に検討するために、蛍光 X 線分析で得られた測定データを粘土群と土器群に分け、多変量データの群間の変動を表現するウィルクスの Λ 統計量を用いて 2 群の母平均の差を有意水準 α =0.05で検定した。

仮説 H_0;　粘土試料群と土器試料群の元素組成の母平均には差がない

とすると、

$$F_0 = \frac{n - p - 1}{p} \cdot \frac{1 - \Lambda}{\Lambda} \geq F_{8,6}(0.05) = 4.1468$$

であれば、仮説 H_0は棄却され、 2 つの群の母平均には95%の信頼度で差があると統計学的に結論づけることができる。上式において、n は試料数、p は測定元素数、Λ はウィルクスの Λ 統計量である。今回の分析では、n =15、p =8（Mg は検出されなかったため、解析から省く）、Λ =6.14×10^{-2}となる。したがって、分析値より求められる F_0は

$$F_0 = 0.155 \leq 4.1468$$

であり、仮説 H_0は有意水準 α =0.05で棄却されない。したがって、粘土試料と土器試料の元素組成には有意な差はないと結論づけられる。

以上の考察より、粘土試料と土器試料の元素組成の分布には、有意な差がみられないことが蛍光 X 線分析より明らかになった。土器試料の原材料となった素地は、粘土試料に近い元素組成を持っていたと推察される。

3．2　X 線回折分析による鉱物の同定

一般的な粉末 X 線回折法である不定方位法による分析結果から述べる。粘土試料群および土器試料群の不定方位試料から得られた回折パターンは、同一群の試料同士では大きな違いはなかった。そこで、図 3 に各群の平均の X 線回折パターンを示す。図 3 に示した粘土および土器試料の回折パターンには、石英、粘土鉱物、カリ長石、斜長石に帰属できる回折ピークがみられ、これらの鉱物が粘土および土器試料に含まれていることがわかる。石英、カリ長石、斜長石はパリノ・サーヴェイ社による薄片観察でも見出されており、試料に含まれる砂粒を構成する鉱物である。粘土および土器試料では、検出された回折ピークやピーク強度比に顕著な違いはなく、X 線回折法では両者の鉱物組成に違いはみとめられなかった。だたし、一般的に回折強度は試料の結晶性に依存するため、X 線回折分析の定量性は高くない。各試料の鉱物組成に関する定量的データは、パリノ・サーヴェイ社の薄片観察による鉱物分析の結果を参照されたい。図 3 の土器試料の回折パターンにはムライトの回折ピークはみとめられなかった。したがって、土器の焼成温度はムライトの生成温度より低いと考えられる。

粘土試料から得られた定方位 X 線回折パターンを図 4 に示す。図 4 において矢印で示した回折ピークは、粘土鉱物の層面による回折（底面反射）であり、雲母、カオリン鉱物、14A 鉱物（緑泥岩、バーミキュライト、スメクタイトなど、底面間隔が約14A である鉱物の総称）に帰属できる。回折角2θ =8.82°および17.74°の比較的シャープなピークは、雲母の底面反射である[3)]。蛍光 X 線分析では粘土試料に含まれる $A_{l2}O_3$は20wt% 程度にあるのに対し、MgO はほとんど検出されなかったため、粘土塊は Al 質の粘土によると考えられる。したがって、試料に含まれる雲母は、Al 質の 2 八面体型雲母と考えられる。雲母による 2 つのピーク以外の底面反射はブロードであり、鉱物の結晶性は高くないことが示唆される。回折角2θ =12.3°および24.9°のピークはカオリン鉱物の底面反射と考えられる[3)]。回折角2θ =5.9°および6.9°のピークは14A 鉱物によると考えられるが、今回の X 線回折分析の結果から、これらの鉱物が緑泥岩、バーミキュライト、スメクタイトのいずれであるかを特定するのは難しい。定方位 X 線回折分析では、粘土試料の粘土粒子は複数の粘土鉱物から成ることが明らかになった。また、すべての粘土試料で同じ底面反射がみられるため、各試料に含まれる粘土鉱物は、ほぼ同じ鉱物と推察される。

粉砕した土器試料による定方位 X 線回折パターンを図 5 に示す。比較のため、粘土試料の平均パターンも図示した。土器試料の定方位 X 線回折パターンには粘土鉱物の底面反射がほとんどみられない。土器試料のパターンに底面反射がみられないのは、土器の原材料となった素地に含まれていた粘土鉱物が焼成で構造変化したためと考えられる。この結果より、土器は粘土鉱物の積層構造が大きく変化する温度より高温で焼成されていると考えられる。

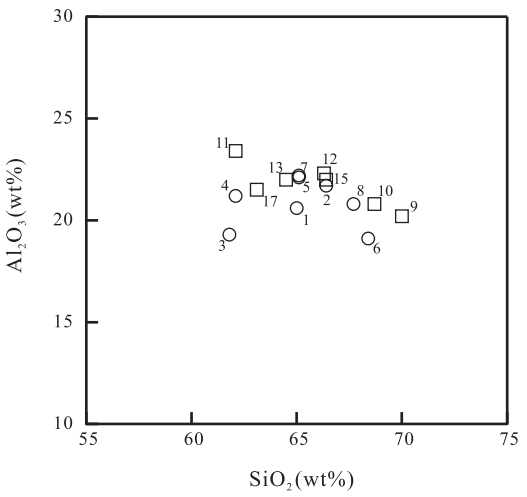


図１　粘土および土器試料に含まれるケイ素（Si）とアルミニウム（Al）の関係
○：粘土試料　□：土器試料

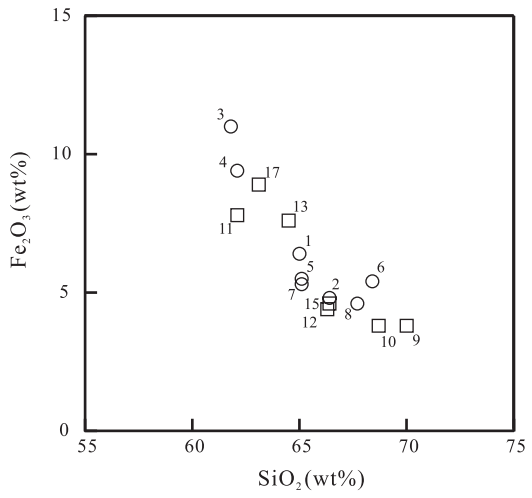


図２　粘土および土器試料に含まれるケイ素（Si）と鉄（Fe）の関係
○：粘土試料　□：土器試料

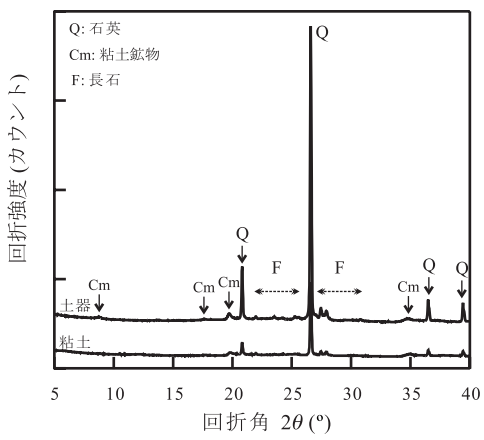


図３　粘土および土器試料の不定方位Ｘ線回析パターン
下：粘土試料の平均パターン
上：土器試料の平均パターン

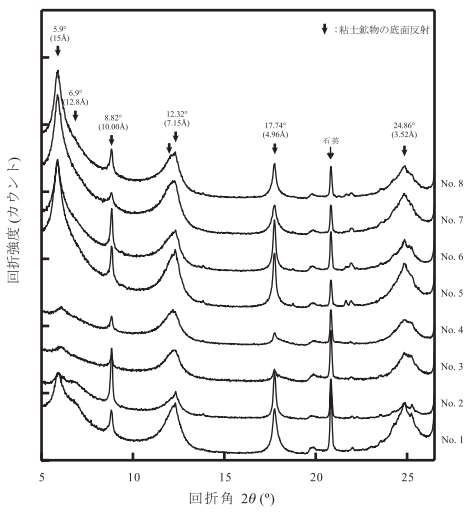


図４　粘土試料の定方位Ｘ線回析パターン
下は、粘土鉱物の底面反射を示す

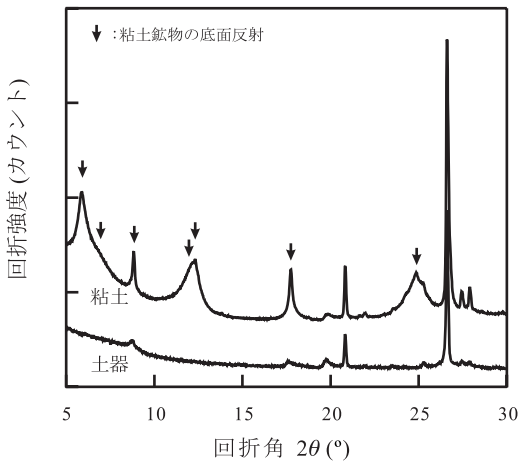


図５　粘土および土器試料の定方位Ｘ線回析パターン
下：土器試料　上：粘土試料の平均パターン

3. 3　熱重量－示差熱分析（TG-DTA）による資料の熱化学的特性

TG-DTA 測定によって得られた粘土の DTA 曲線を図 6 に、土器の DTA 曲線を図 7 にまとめて示した。尚、個々の試料の TG-DTA 曲線は図 8 -24に示した。

3. 3. 1　粘土試料の TG-DTA 曲線

粘土試料の DTA 曲線（図 6 ）からは、昇温による分析試料の化学反応や状態変化に伴う熱の出入りがわかる。分析試料に吸熱があると下に凸なピーク、発熱があると上に凸なピークが DTA 曲線にみられる。各試料の DTA 曲線には、①65℃ 付近に吸熱ピーク、②130℃ 付近に吸熱ピーク、③470℃ 付近に吸熱ピーク、④575℃ 付近に吸熱ピーク、⑤930℃ 以上で発熱ピークがみられる。分析試料の昇温に伴う重量減少率を示す TG 曲線は、DTA 曲線の①、②および③の吸熱ピークと共に段階的に減少し、600℃ 以上ではほぼ一定となる（図 8 -15）。①、②および③は試料から水が脱離することに伴う吸熱ピークと考えられる。①および②のピークがみられる温度範囲では、（1）試料に吸着した水の脱離、（2）粘土鉱物の珪酸塩層間の非配位水の脱水、（3）層間の 1 価陽イオン（Na^+ や K^+）への配位水の脱水による吸熱ピークがみられることが知られている[3),5)]。試料は測定前に110℃ に熱していることを考慮すると、①65℃ の吸熱ピークは、多孔質である試料に再吸着した水の脱水によると考えられる。②130℃ の吸熱ピークは粘土鉱物の（2）あるいは（3）の脱水反応によると考えられる。この吸熱ピークの検出により、粘土試料には珪酸塩層間に水を含む粘土鉱物が含まれていることがわかり、X 線回折分析で検出された 14A 鉱物であり、層間に水を含むバーミキュライトあるいはスメクタイトが含まれていると考えられる。③470℃ にみられる大きな吸熱ピークは粘土鉱物の珪酸塩層中の OH 基による脱水反応に伴う吸熱ピークである[3),5)]。④575℃ の重量減少を伴わない吸熱ピークは粘土鉱物によるものではなく、試料に含まれる石英の構造が低温型から高温型へ転移することによるものである[6)]。⑤930℃付近からみられる発熱ピークは、OH 脱水後に層状構造からやや変形した、あるいは乱れた構造を保っていた粘土鉱物の構造の崩壊と原子の再配列・再結晶化によるものである[3),5),6)]。

DTA 曲線は試料に含まれる粘土鉱物の種類やその結晶性によって敏感に変化するが[5)]、図 6 の DTA 曲線の形状は試料間で類似しており、DTA 曲線から各試料の粘土鉱物の種類や結晶性には顕著な違いはないと考えられる。これは、蛍光 X 線分析や X 線回折分析において各試料の元素組成あるいは鉱物組成に顕著な違いが見出されなかったこととも合致する。

測定前後における測定試料の重量減少率の平均は8.0%、標準偏差は0.7である。重量減少率のばらつきが生じる原因には、粘土鉱物の化学組成の違いのほかに、粘土鉱物と砂粒の割合の影響などがあげられる。

3．3．2　土器試料の TG-DTA 曲線

土器試料の DTA 曲線（図 7 ）には、①65℃ 付近に吸熱ピーク、②130℃ 付近に吸熱ピーク、④575℃ 付近に吸熱ピーク、⑤930℃以上で発熱ピークがみられる。いずれも粘土試料の DTA 曲線にもみられたピークである。土器試料の DTA 曲線に⑤粘土鉱物の構造の崩壊と原子の再配列・再結晶化による吸熱ピークが検出されたことから、土器の焼成温度の上限はこの反応温度以下と推察される。土器試料と粘土試料の DTA 曲線の相違点として、粘土試料にみられた③470℃の粘土鉱物の OH 脱水反応による吸熱

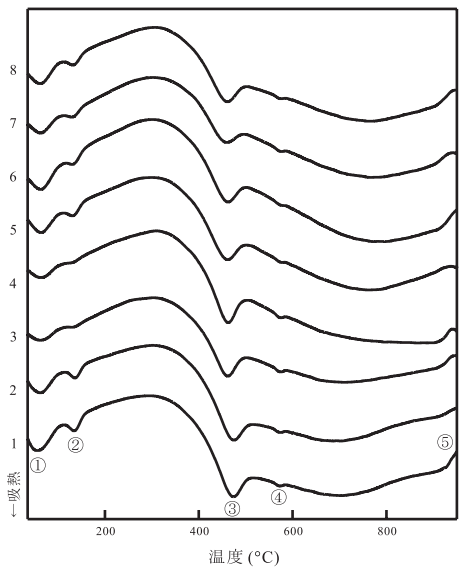


図 6　粘土試料の DTA 曲線

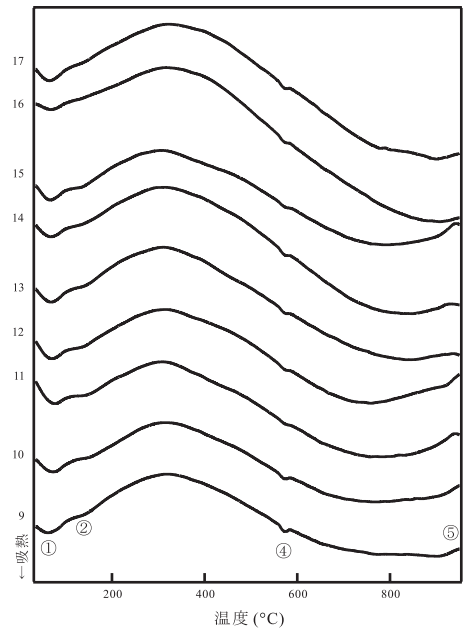


図 7　土器試料の DTA 曲線

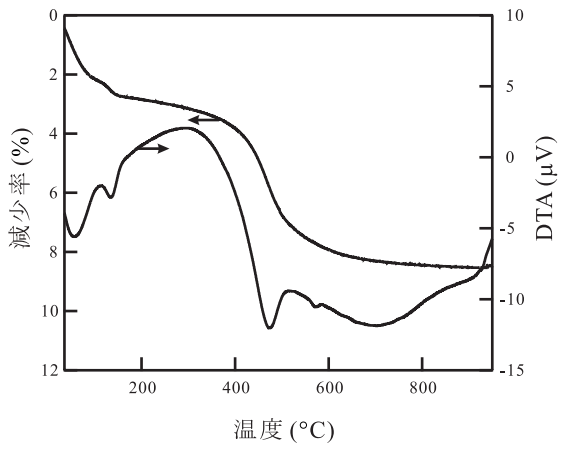


図 8　粘土試料の TG-DTA 曲線

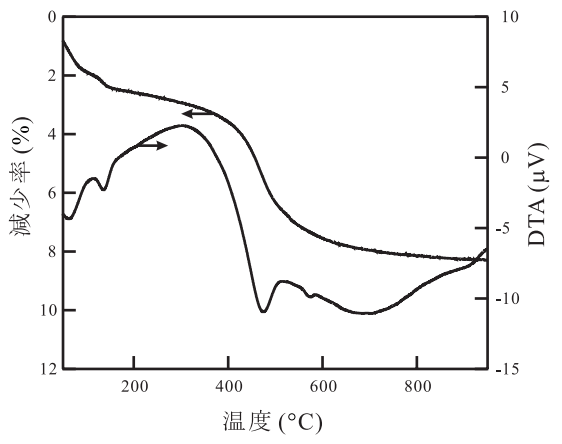


図 9　粘土試料 2 の TG-DTA 曲線

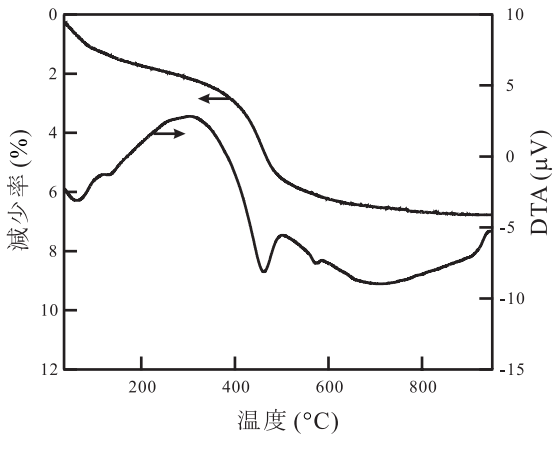


図10　粘土試料 3 の TG-DTA 曲線

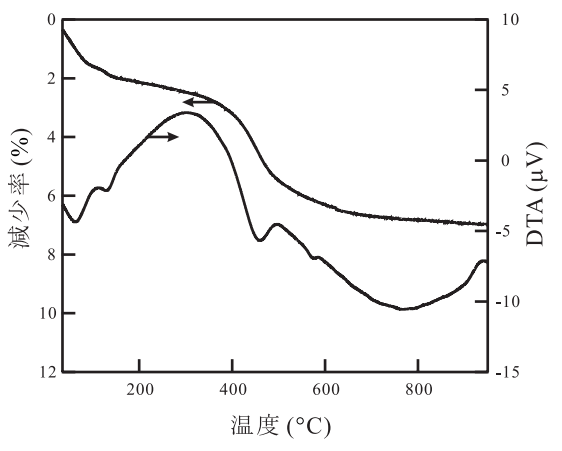


図11　粘土試料 4 の TG-DTA 曲線

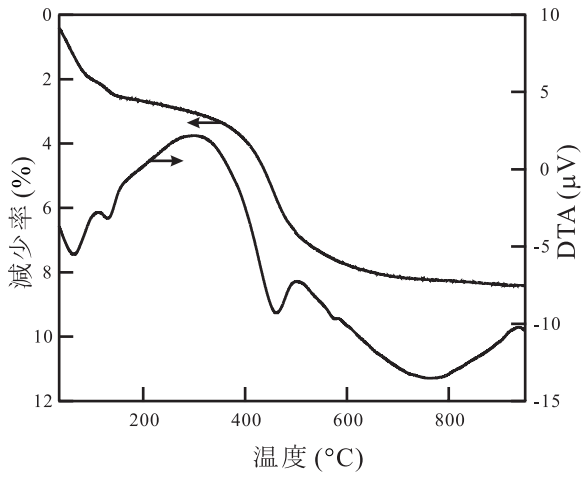


図12　粘土試料 5 の TG-DTA 曲線

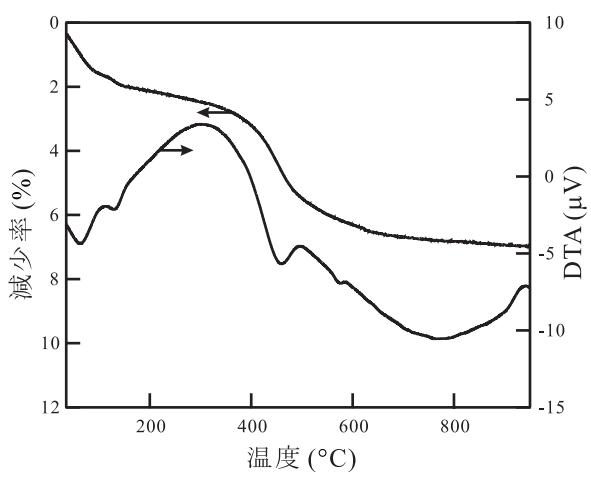


図13　粘土試料 6 の TG-DTA 曲線

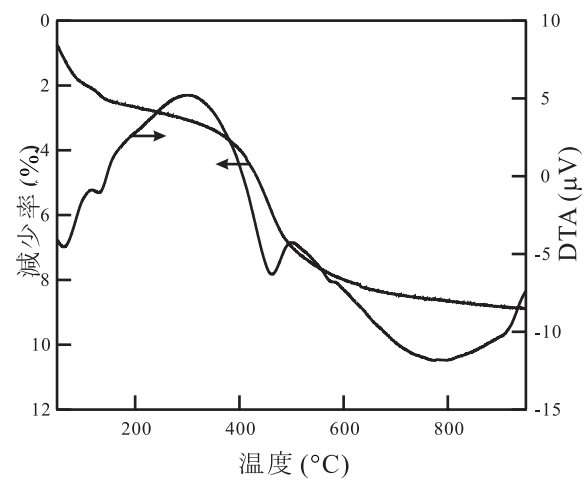


図14　粘土試料 7 の TG-DTA 曲線

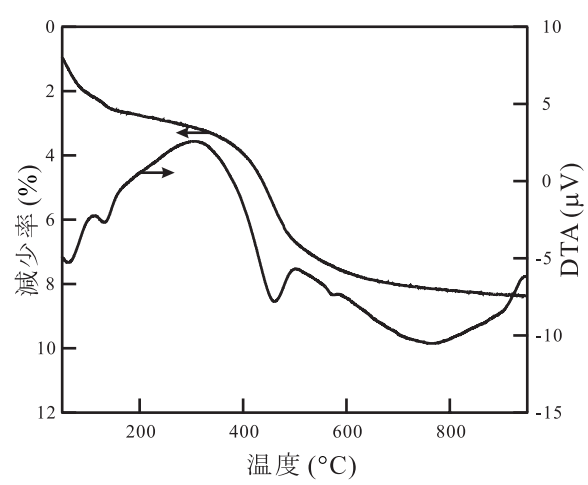


図15　粘土試料 8 の TG-DTA 曲線

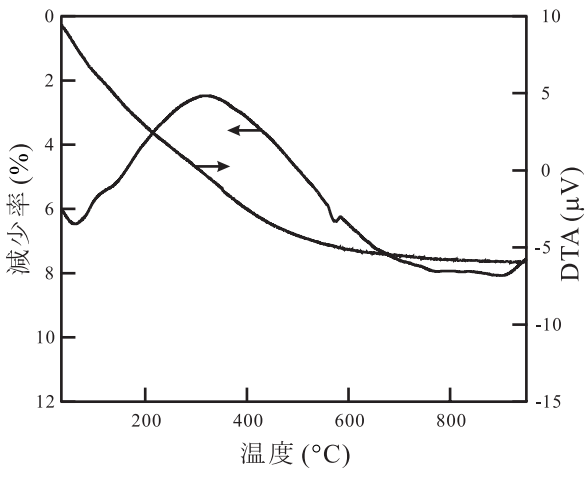


図16　粘土試料 9 の TG-DTA 曲線

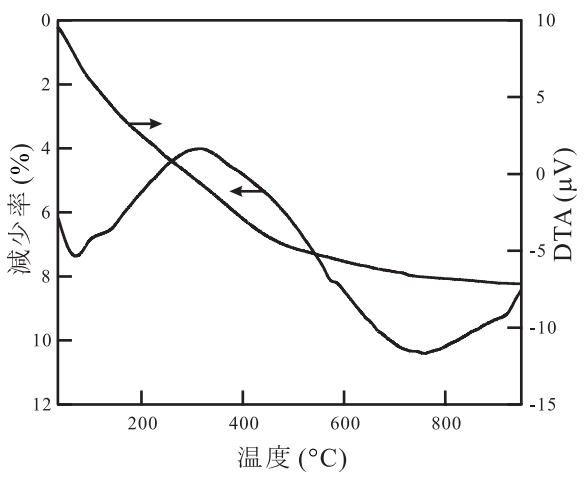


図17　粘土試料10の TG-DTA 曲線

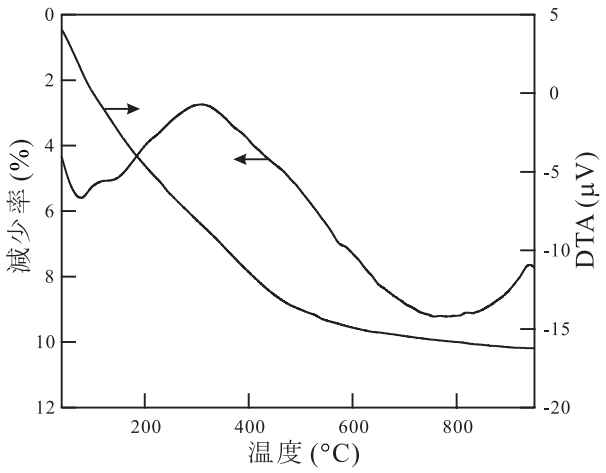


図18　土器試料11の TG-DTA 曲線

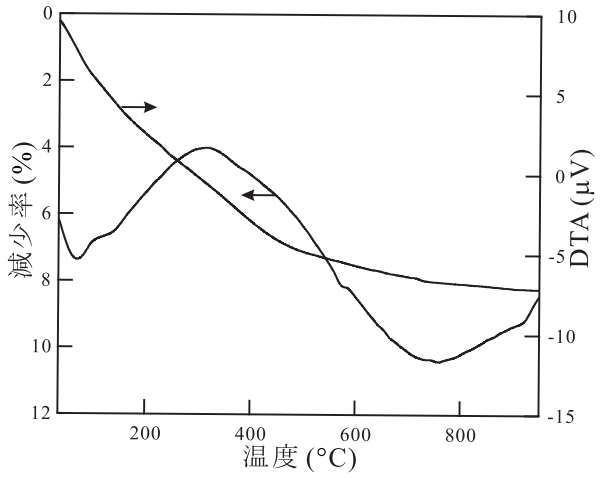


図19　土器試料12の TG-DTA 曲線

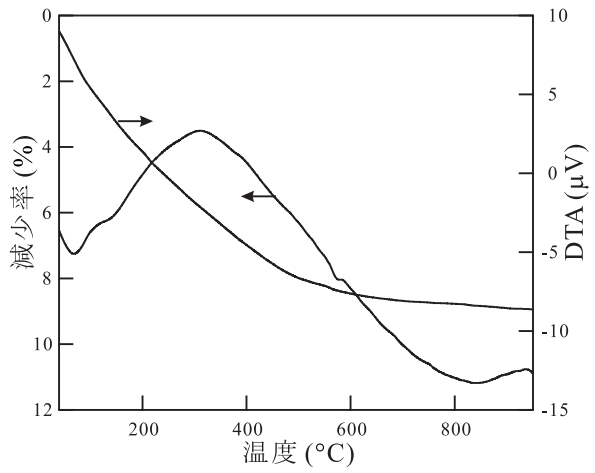


図20　土器試料13の TG-DTA 曲線

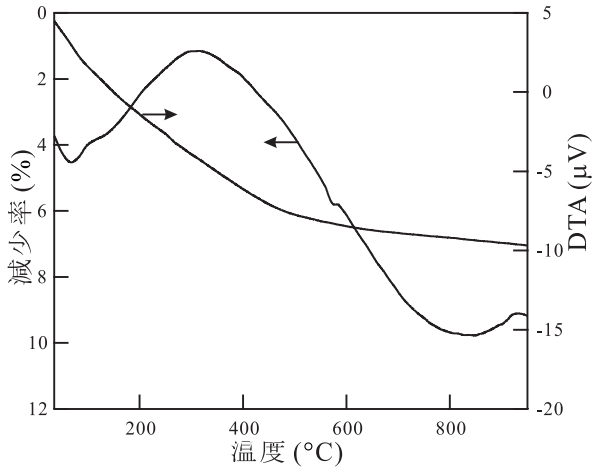


図21　土器試料14の TG-DTA 曲線

ピークが土器の DTA 曲線にはみられないことがあげられる。土器試料に吸熱ピーク③がみられないのは、土器が粘土鉱物の OH 脱水反応の進行する温度より高い温度で焼成され、粘土鉱物が構造変化しているためと解釈できる。

土器試料の TG 曲線は（図16-24)、測定開始後から600℃にかけて緩やかに減少しており、その形状は多段階的に減少する粘土試料の TG 曲線とは異なる。土器試料の重量減少を伴う吸熱反応には、粘土鉱物が深く関わっていると推察されるが、焼成されている土器の化学構造は不詳であるため、反応の詳細を考察することは難しい。おそらく、吸着水の脱離、基質の粘土鉱物に含まれる未反応の OH の脱水、埋蔵により再水和した水の脱水反応などが複合的に進行しているものと考えられる。

粘土および土器試料の DTA 曲線には、分析試料中の粘土鉱物の反応に由来すると考えられる②130℃付近の吸熱ピーク、⑤930℃ 以上で発熱ピークがみられる。これらのピークの開始温度および形状はほぼ同じである。土器試料の基質に含まれる粘土鉱物の熱化学的特性は粘土試料に含まれる粘土鉱物と類似していると推察される。

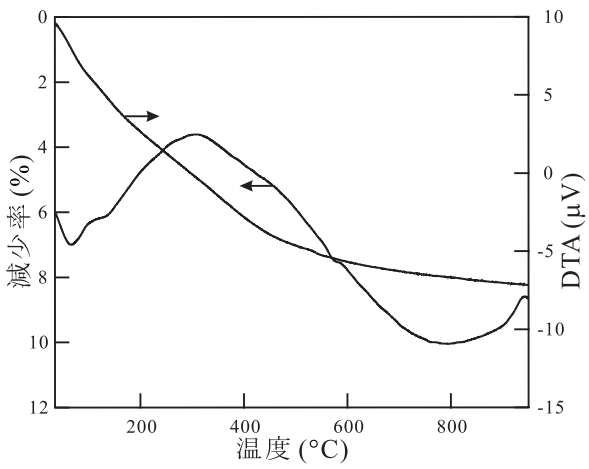


図22　土器試料15の TG-DTA 曲線

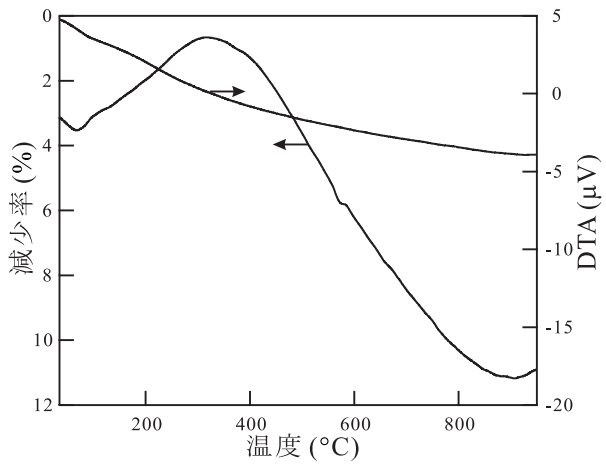


図23　土器試料16の TG-DTA 曲線

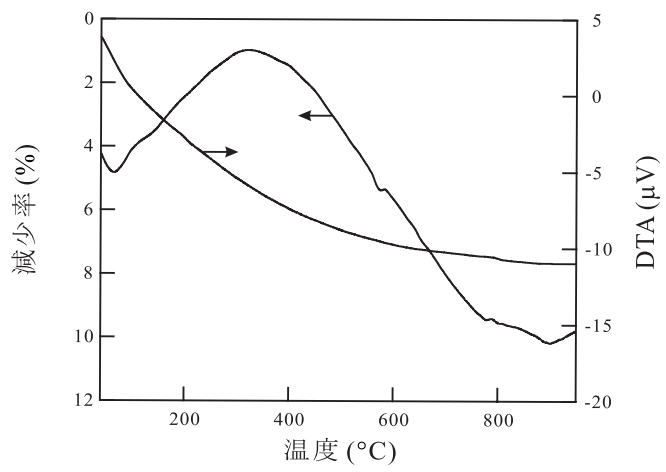


図24　土器試料17の TG-DTA 曲線

4 まとめ

岩倉忠在地遺跡より出土した粘土塊および土器の化学的特性を明らかにするために、理化学分析をおこない、以下の結果を得た。

(1)　エネルギー分散型蛍光 X 線分析では、粘土試料と土器試料の主成分元素の組成には、統計学的に有意な差がみられなかった。土器試料の原材料となった素地は、粘土試料に近い元素組成を持っていたと推察される。

(2)　不定方位法による X 線回折分析では、粘土および土器試料に含まれる砂粒の鉱物組成に顕著な違いはみとめられなかった。定方位法による X 線回折分析では、粘土試料には粘土鉱物として2八面体型雲母、カオリン鉱物、14A 鉱物が含まれる。また熱分析の結果より、14A 鉱物としては、バーミキュライトまたはスメクタイトが含まれると考えられる。

(3)　熱分析で得られた TG-DTA 曲線からは、各粘土試料に含まれる粘土鉱物の種類やその結晶性に顕

著な違いは見出されなかった。土器試料に含まれる粘土鉱物の熱化学的特性は粘土試料に含まれる粘土鉱物と類似していると推察される。

以上の結果から、焼成による化学構造の違いを除けば、粘土試料と土器試料の間に元素組成や鉱物組成の明瞭な違いは見出されなかった。粘土試料同士および土器試料同士の化学的特性は互いによく似ていることを指摘できる。したがって、本分析の対象となった土器資料の原材料となった素地の化学組成は、出土粘土塊のそれと近いものであったと推察される。

謝辞

本研究にあたり、分析に関するご教示を賜り、蛍光Ｘ線分析にご協力戴いた東京学芸大学　二宮修治教授に厚く御礼申し上げます。また、熱分析にご協力戴いた東京工業大学　植草秀裕助教授、Ｘ線回折分析にご協力戴いた理化学研究所　橋爪大輔研究員に深謝いたします。

参考文献

１）田口勇「蛍光Ｘ線分析法」『考古資料分析法』田口勇、齊藤努編　ニュー・サイエンス社　pp. 22-23（1994）

２）齊藤努「Ｘ線回折分析法」『考古資料分析法』田口勇、齊藤努編　ニュー・サイエンス社　pp. 38-39（1994）

３）白水晴雄「粘土鉱物の同定と分析」『粘土鉱物学　－粘土科学の基礎』朝倉書店　pp. 53-101（2003）

４）齊藤努「熱分析法」『考古資料分析法』田口勇、齊藤努編　ニュー・サイエンス社　pp. 50-51（1994）

５）下田右「示差熱分析」『粘土鉱物研究法』創造社　pp. 119-144（1985）

６）大沢真澄、二宮修治「胎土の組成と焼成温度」『縄文文化の研究』加藤晋平、小林達雄、藤本強編　雄山閣出版　pp. 20-46 （1983）

第 5 節　岩倉忠在地遺跡出土炭化物の^{14}C 年代測定

国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ

概要

京都府岩倉忠在地遺跡の火災住居出土炭化材について加速器を用いた年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料の採取は、2005年度に同志社大学若林邦彦氏が採取し、提供した 3 試料である。資料の出土層位や大凡の所属土器型式は、若林邦彦氏の見解によるものである。

試料の前処理は、年代測定研究グループが行い、測定は主に（株）パレオ・ラボ社によるものである。測定結果は計測値 (補正) とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。

今回の年代測定の考古学的目的は、この遺跡の年代を調べることであるが、同時に弥生時代後期末～古墳時代初頭の実年代を推定することが可能な測定結果を得ることができた。

1　採取試料と炭化物の処理

3 点の炭化材の^{14}C 年代測定を試みた。試料番号は KYDS-C1、C2、C3とした。いずれも焼失住居と考えられる竪穴住居 1 から出土した炭化材で、KYDS-C1はサンプル No.2、KYDS-C2はサンプル No.3、KYDS-C2はサンプル No.5である。

1　炭化物の処理

試料については、補注 1 に示す手順で試料処理を行った。(1) 前処理の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林謙一・新免歳靖、(2) 燃焼と (3) グラファイト化の作業は、パレオ・ラボ社に委託した。

2　測定結果と暦年較正

AMS による^{14}C 測定は、パレオ・ラボ社（機関番号 PLD）に委託した。測定結果は、補注 2 に示す方法で、同位体効果を補正し、暦年較正年代を算出した。

3　測定結果について

暦年較正年代についてみると、較正年代で、KYDS-C1は、紀元後20－125年に含まれる可能性が95%、KYDS-C2は、紀元後55－135年に含まれる可能性が92%、KYDS-C3はやや新しく、紀元後130－235年に含まれる可能性が95%である。

この分析は、平成17年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築―」（研究代表　西本豊弘）、および国立歴史民俗博物館　平成17年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（研究代表　今村峯雄）の成果を用いている。

本稿を草するにあたり、暦年較正については今村峯雄氏のご教示を得た。感謝します。本稿は、概要について西本豊弘、補注について坂本稔、新免歳靖が記した稿をもとに、小林謙一（以上、国立歴史民俗博物館）が執筆した。

＜補注１＞

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA 処理)。

AAA 処理は、自動処理装置（Sakamoto et al. 2002）を用いた。80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（２回）し、さらにアルカリ溶液（1N －NaOH）でフミン酸等を除去する工程を５回、さらに２回酸処理（1N-HCl　240分以上）を行いアルカリ分を除いた後、純水を使って洗浄した（５回)。

(2) 二酸化炭素化と精製:酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA 処理の済んだ乾燥試料を、500mg の酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃ で３時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mg の炭素量を目標にグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉でおよそ600℃ で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径１mm のアルミニウム製カソードに600N の圧力で充填した。

試料の炭素含有率を検討するために、二酸化炭素燃焼用の炭素重量と回収された二酸化炭素の炭素相当量を記しておく。KYDS-C1は1.80mg から1.03mg 相当が得られ、57.1%の含有率である。KYDS-C2は3.60mg から2.20mg 相当が得られ、61.1%の含有率である。KYDS-C3は5.30mg から3.00mg 相当が得られ、56.6%の含有率である。ともに良好な年代測定用試料である。

＜補注２＞

年代データの^{14}C BP という表示は、西暦1950年を基点にして計算した^{14}C 年代（モデル年代）であることを示す（BP または yr BP と記すことも多いが、本稿では^{14}C BP とする)。^{14}C 年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算する。誤差は測定における統計誤差（１標準偏差、68%信頼限界）である。

AMS では、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C 比により、^{14}C/^{12}C 比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C 比は、標準体（古生物 belemnite 化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C 比）に対する千分率偏差δ^{13}C（パーミル，‰）で示され、この値を－25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C 比によって補正する。補正した^{14}C/^{12}C 比から、^{14}C 年代値（モデル年代）が得られる。

δ^{13}C 値については、加速器による測定は同位体効果補正のためであり、必ずしも^{13}C/^{12}C 比を正確に反映しないこともあるため、本稿では参考値として（　）で記しておく。

測定値を較正曲線 IntCal04（^{14}C 年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版)（Reimer et al. 2004）と比較することによって暦年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴

史民俗博物館で作成したプログラム RHCal（OxCal Program に準じた方法）を用いている。統計誤差は 2 標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦　cal BC で示す。（ ）内は推定確率である。図は、試料の暦年較正の確率分布である。

＜参考文献＞

今村峯雄2004『課題番号13308009基盤研究（A・1）（一般）縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』（代表今村峯雄）

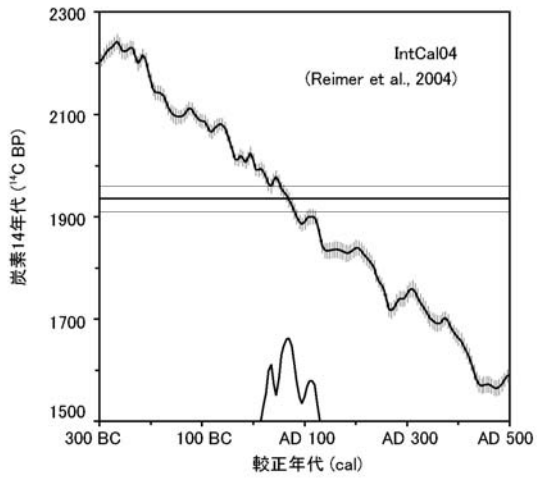
Reimer, Paula J. et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP *Radiocarbon* 46（3）, 1029-1058（30）.

M. Sakamoto et al. 2002 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon daging. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* 223-224: 298-301.

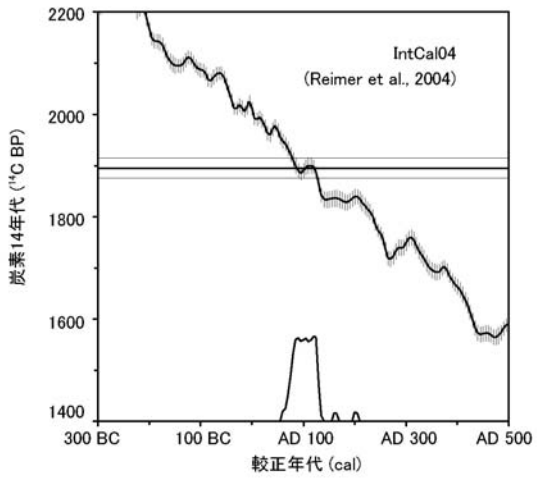
表 1　測定結果と暦年較正年代

試料番号	測定機関番号	炭素年代 $\delta^{13}C$‰	^{14}C BP（補正値）	暦年較正 cal BC	（%）は確率密度
KYDS-C1	PLD-4632	（−15.3±0.1）	1935±25	AD20-AD125	94.7
KYDS-C2	PLD-4504	（−11.6±0.1）	1895±20	AD55-AD135	92.0
				AD155-AD170	1.6
				AD195-AD210	1.6
KYDS-C3	PLD-4503	（−27.2±0.1）	1830±20	AD130-AD235	95.4

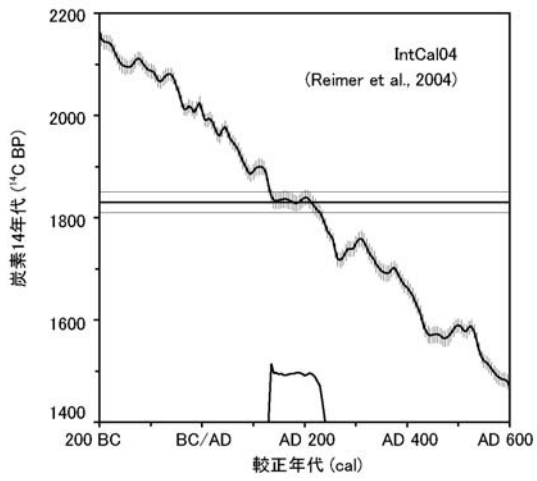
試料番号　KYDS-C1
機関番号　PLD-4632
炭素14年代　1935±25 ^{14}C BP



試料番号　KYDS-C2
機関番号　PLD-4504
炭素14年代　1895±20 ^{14}C BP



試料番号　KYDS-C3
機関番号　PLD-4503
炭素14年代　1830±20 ^{14}C BP



第 8 章　調査の成果のまとめ

【遺跡の範囲】

調査地点の北に隣接した左京区岩倉忠在地町では、1976年の発掘調査で弥生時代後期～古墳時代初頭の土器などが出土していて、「岩倉忠在地遺跡」と名づけられている。今回の調査地は、京都市による遺跡指定範囲の外部にあたるが、調査を進めると、古墳時代初頭の竪穴住居や柱穴・土坑・溝などが検出された。また、同志社高校理科館建設の際の発掘調査でも、断片的にではあるが古墳時代前期の土器片が出土している。このため、当遺跡の範囲は南へ約100m以上は広がるものと考えられる

【検出された遺構】

・住居関連の遺構

庄内式期・古墳時代初頭に形成されたと考えられる、方形の竪穴住居 8 棟および約300もの柱穴群が検出された。遺跡全体は江戸時代の耕作に伴う削平を受けていて、柱穴が多数検出されているものの竪穴住居の平面構造が残存しているものはわずかしかない。検出された竪穴住居も、深さ約10センチ程度しか残存しておらず、削平され残った床面近くの部分だけがわかる状態であった。ただ、住居を構成していた柱穴群が調査区の広い範囲から検出されているため、集落の範囲は今回の発掘調査区域の全域にわたり、さらにそれを超えて広がっていたと考えられる。

・未焼成粘土塊の出土

竪穴住居230床面の北東隅からは、白色粘土塊が検出された。粘土は住居床面を数 cm 程度浅く掘りくぼめた中に平たく固めておかれていた。また、床面では、ほかにも粘土の小片が検出されている。このことから、竪穴住居230では粘土を用いた作業が行われていたと考えられる。さらにこれに近い調査区東半部の複数の土坑・溝から同様の白色粘土塊が出土している。理化学的分析を行った結果、出土土器の胎土とこれら未焼成粘土塊の化学組成や含有砂粒種・構造は類似していることがわかった。土器作成用粘土の可能性は高い。このことから、竪穴住居230付近では盛んに土器・土製品の製作にかかわる作業が行われていたと推定される。また、竪穴住居323では床面上から土器片とともに、同様な粘土塊が出土しており、ここでも住居内で粘土を用いた作業が行われた可能性がある。土器・土製品用の素材粘土の貯蔵あるいはそれを用いた作業が行われていた範囲はこれにより今回の調査区全域にわたるとも考えられる。

・焼失住居の検出

検出された竪穴住居のうち１棟（竪穴住居１）の内側からは、炭化した建築部材や焼土が多数検出された。おそらく、火災にあったかあるいは廃絶後に焼き払われた竪穴住居と考えられる。炭化材は、住居の中央に向かって放射状に並んだ状態で検出されており、屋根を構成する建築材だったと考えられる。

また、その炭化材と焼土が重なって検出されている部分では、焼土が炭化材の上に貼りついた状態も観察できた。このことから、屋根材の上に粘土が塗りつけられていた可能性がある。ただし、壁材であった可能性も考えられる。前者だとすると、木材あるいは茅葺・草葺などの上に粘土をぬった構造の屋根だったとも推測される。このような「土葺屋根」をもつ竪穴住居の例は、群馬県中筋遺跡・黒井峯遺跡をはじめとする、火砕流や軽石降下により埋積した古墳時代集落跡で検出されているが、今回の例でも同様の構造をもつ住居の存在が示唆されている。茅葺・草葺として復元・表現されることの多い竪穴住居だが、実際には多様な上屋構造をもっていた可能性を示す調査例と言える。

また、複数の炭化材のサンプルを放射性炭素年代測定した結果、かなりばらつきのある数値が三亜出された。ただ、較正年代値の下限が3世紀前半にとどまることから、共伴する庄内式土器について近年3世紀前半・中葉という年代が予想されているが、そういった研究成果とは矛盾したものではなかった。

・土坑墓と思われる遺構

住居域の北部に、長軸1.2～1.5m・短軸0.7～0.8m 規模の平面長楕円形、深さ約0.4～0.6m の土坑が10基検出された。形態・埋積状況から土坑墓と考えられる。調査後に、持ち帰った遺構内部の土壌を詳細に調べたが、埋葬に関連する遺物（歯や装飾品の残片）は確認できなかった。

【出土遺物】

出土遺物のうち大半を占める土器は細片で詳細な時期決定が難しい。しかし、概ね弥生時代後期末～古墳時代初頭の所産の特徴はとどめている。また、集落内の廃棄施設として利用されたらしい谷16の中～下層からは多量の土器群が出土した。この土器群の時期は庄内式期前半と考えられる。これによって、今回検出された遺構群の形成時期の中心が庄内式期にあることは間違いないと思われる。

【調査成果の意義】

岩倉盆地では、これまで古墳時代以前の集落跡は検出されたことはない。今回の調査成果は、これまで古墳などしかわからなかった、古墳時代以前の当地域の歴史を考える上で重要である。各種の遺構群が検出された状況から、住居域・墓域を含めた集落遺跡の構造がわかる好例といえる。中でも土器製作に関係する住居施設が明確になったことも重要である。また、竪穴住居の屋根構造についても「土葺屋根」を示唆する資料が得られたことは注目される。これまで不明なことの多かった京都盆地の古墳時代開始の状況を考察する上で貴重なデータを残した調査といえる。

（若林）

English summary

The main fruit from this excavation at Iwakura-Chuzaichi site in Kyoto is below.

1. We found a settlement which seems to be formed in the beginning of Kofun period, 3rd century BC.
2. Eight pit dwellings have unearthed, and over 300 small pits for pillars were around them. These small pits sign that there were actuary many houses or huts with pit dwellings unearthed.
3. According to the range of such remains, the size of the settlement is estimated over 200m diameter circle.
4. Nearby such housing area, 10 small graves have found. They were formed in same age as pit dwellings.
5. We found several lumps of fresh clay on the floor of a pit dwelling and shallow storage pits. By the chemical analysis of them, their component is similar to that of potteries found in this site. So, we can think such unbaked clay was material for potteries.

So these results from this survey contribute to know the aspect of ancient settlement and craft system for their commodity in 3rd century Japan.

写 真 図 版

写真図版 1

北西部遠景

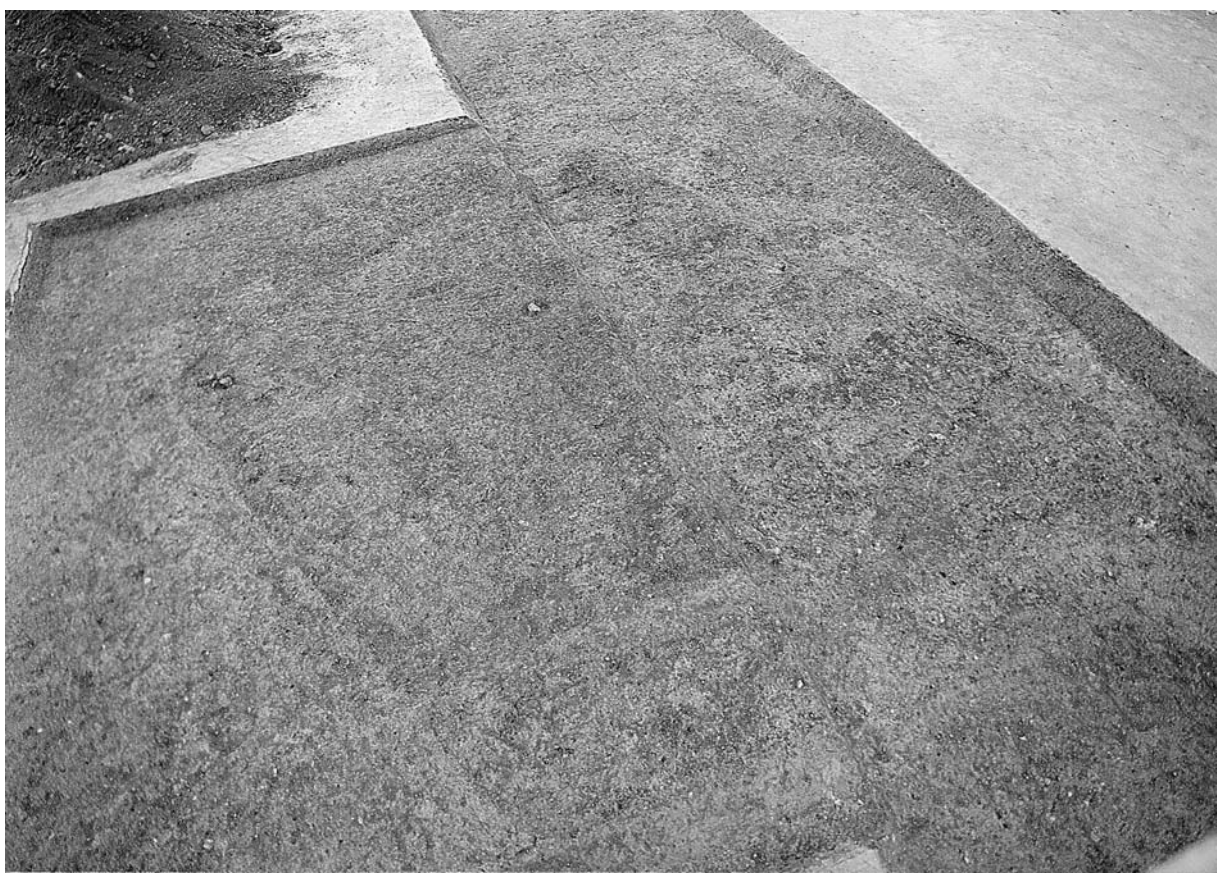
南東部遠景

写真図版 2

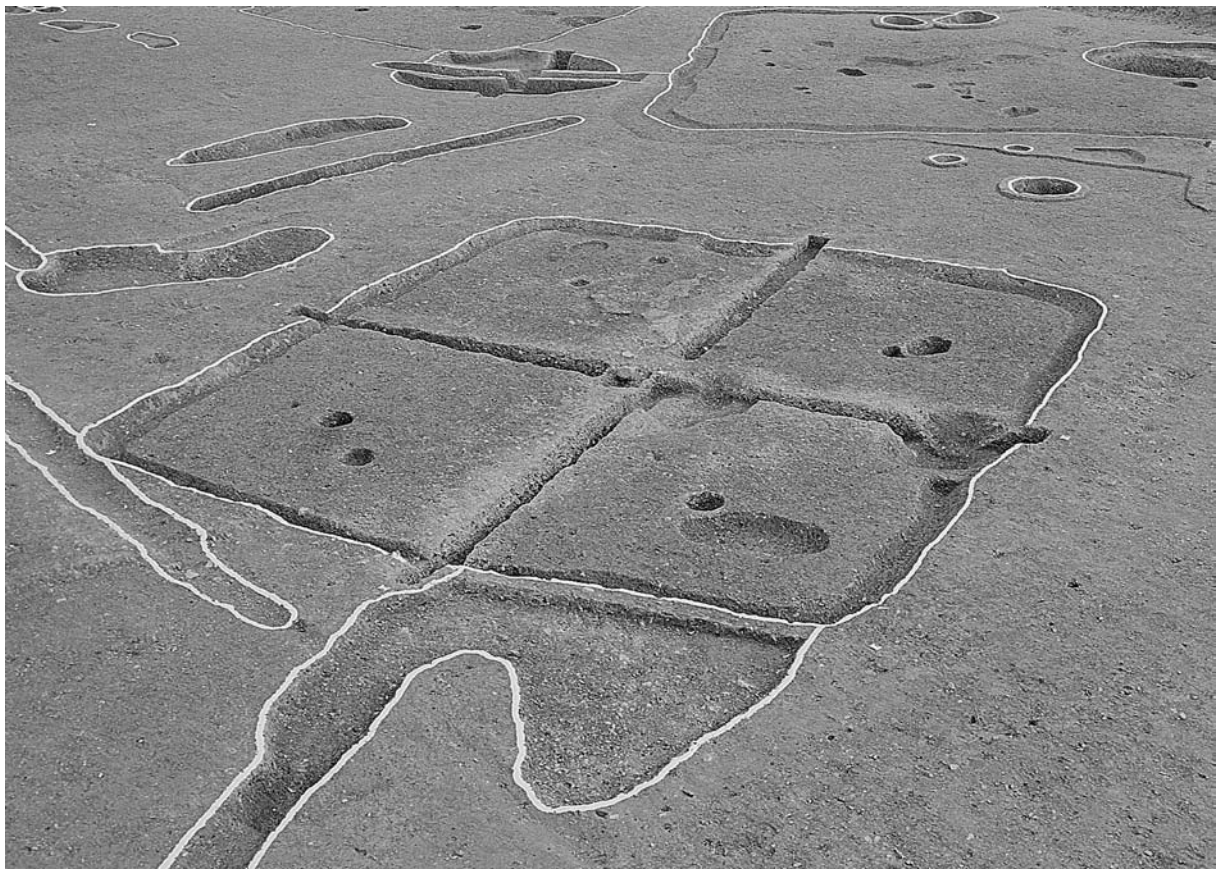
北東部遠景

南西部遠景

写真図版 3



竪穴住居 1 検出状況



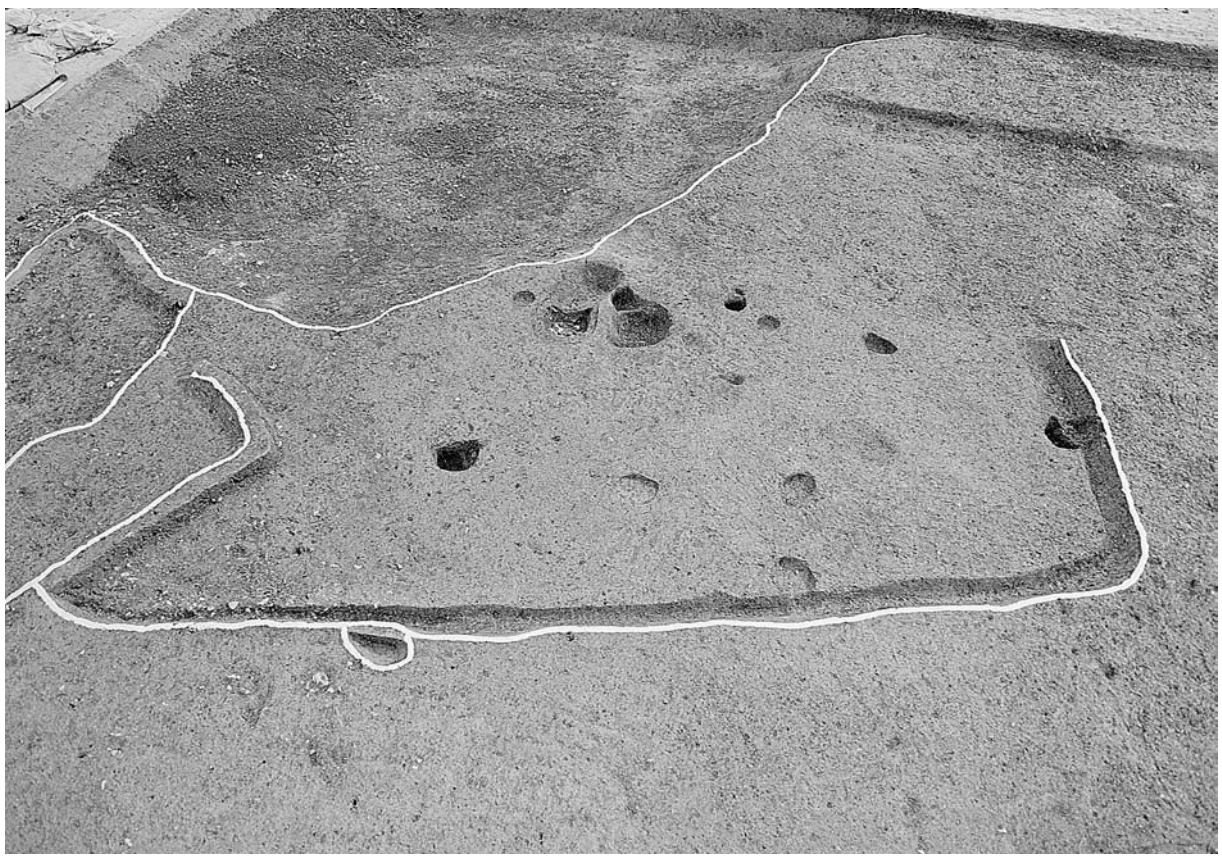
竪穴住居 1 完掘状況

写真図版 4

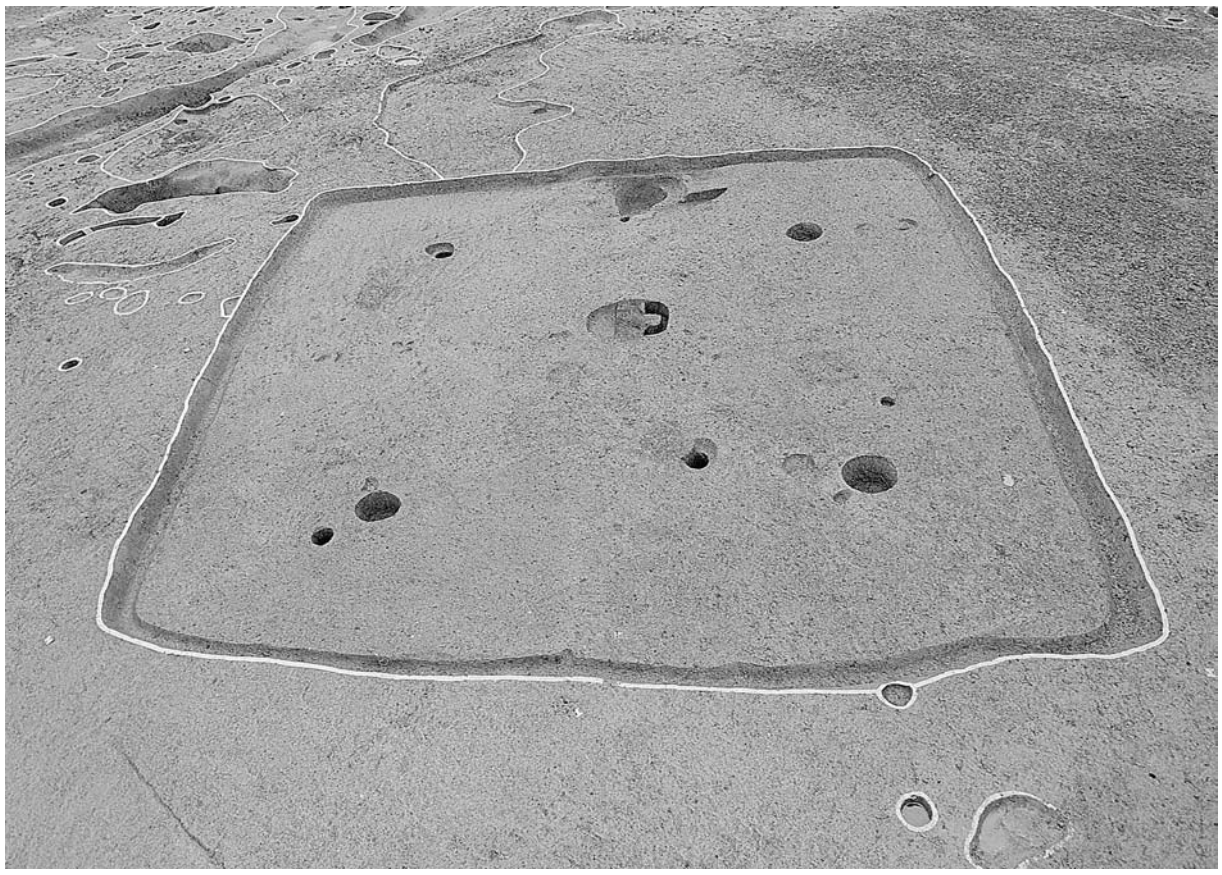
堅穴住居323遺物出土状況（床面直上層）

堅穴住居323完掘状況

写真図版 5



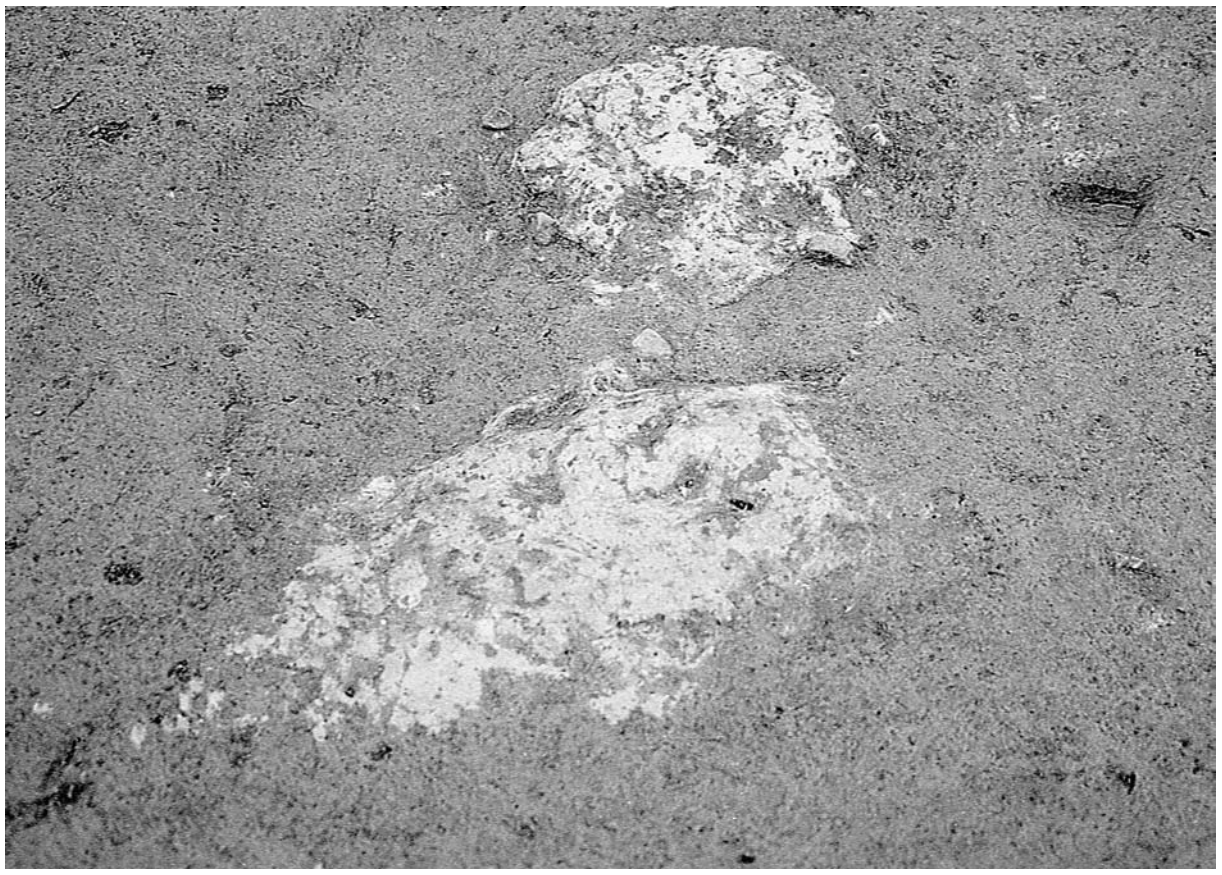
竪穴住居323完掘状況



竪穴住居501完掘状況

写真図版 6

土坑471粘土塊・土器検出状況



土坑471粘土塊出土状況

写真図版 7

土坑509粘土塊出土状況

谷16遺物出土状況

写真図版 8

図 6 . 03-7

図 6 . 03-8

図 6 . 03-10

図 6 . 03-17

図 6 . 05-10

図 6 . 06-1

図 6 . 05-5

図 6 . 05-6

写真図版10

図 6 . 06-8

図 6 . 01-26

図 6 . 06-40

図 6 . 06-5

図 6 . 06-10

図 6 . 06-11

図 6 . 06-13

図 6 . 06-16

図 6 . 06-9

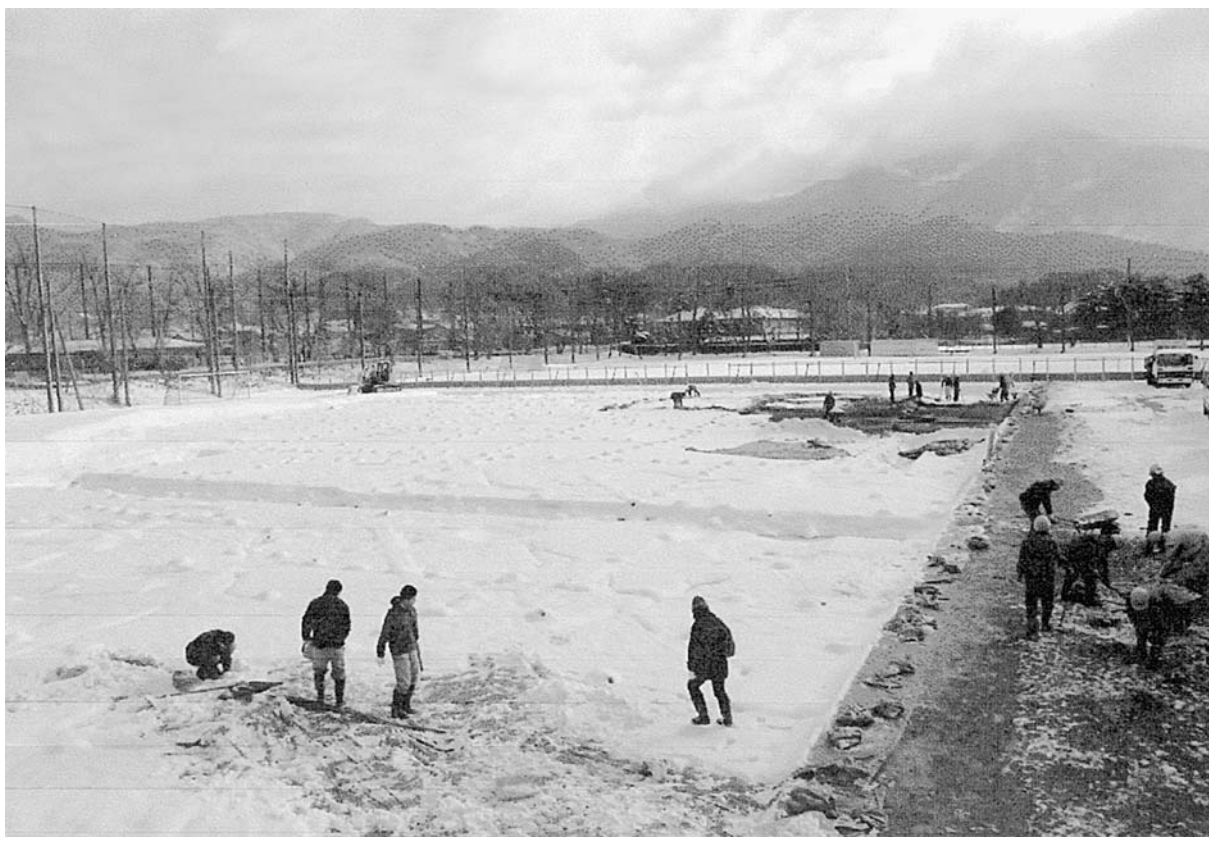
図 6 . 06-12

報告書抄録

ふりがな	いわくらちゅうざいちいせき
書名	岩倉忠在地遺跡
副書名	同志社小学校建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	同志社大学歴史資料館研究報告
シリーズ番号	第6集
編著者名	小林謙一・小森牧人・佐藤純一・清水邦彦・高林弘美・中川要之助・宮城一木・矢作健二・若林邦彦
編集機関	同志社大学歴史資料館
所在地	〒610-0394　京都府京田辺市多々羅都谷1-3　TEL0774-65-7255
発行年月日	西暦2006年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号				
いわくらちゅうざいち 岩倉忠在地遺跡	きょうとしさきょうく 京都市左京区 いわくらおおさぎちょう 岩倉大鷺町89	26100	364	北緯 35° 04′ 06″ 東経 135° 47′ 11″	2004. 9. 4 〜 22 2004. 12. 13〜 2005. 2. 22	4800m^2	同志社小学校建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩倉忠在地遺跡	集落	弥生時代末〜古墳時代初頭	竪穴住居・柱穴・土坑・土坑墓	古式土師器・弥生土器・未焼成粘土塊	



雪の岩倉忠在地遺跡（右上は比叡山）

岩倉忠在地遺跡

同志社小学校建設に伴う発掘調査

2006年 9 月30日

編集・発行　同志社大学歴史資料館

〒610-0394　京田辺市多々羅都谷1-3

Tel. 0774－65－7255

印刷　㈱服部印刷

Archaeological Report of Iwakura-chuzaichi Site in Kyoto, Japan

2006

Doshisha University
Historical Museum

表紙写真：竪穴住居１の炭化材・焼土検出状況
題　　字：中屋　啓太